

322  
319

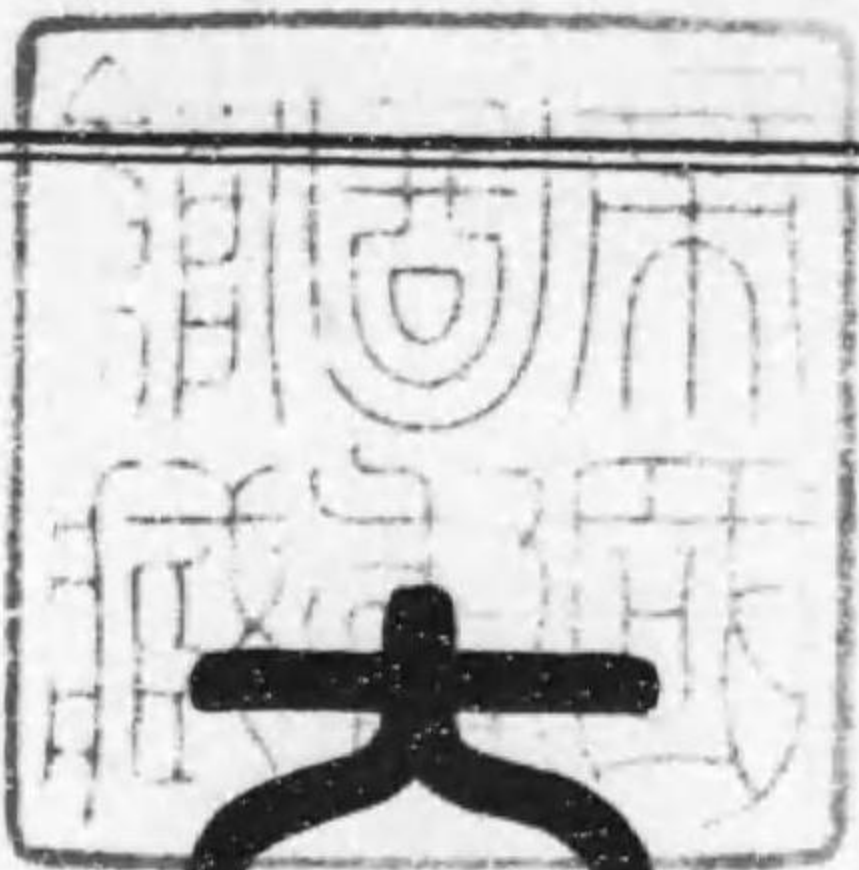


始



特217  
175

昭和五年度版



# 大日本人物史

發行所 帝國時事通信社



## 自序

輓近我が國世相の態様を按ずるに、政治に經濟に將た又學術に事々物々駁々乎として寔に異常なる進歩發達を遂げ、茲に世界近世史上に未曾有の驚異的光彩を添ふるに至る、實に僅々半世紀前の蕞爾たる極東の一島國は一躍世界列強國と其伴に伍し、今や國威は八紘に燦然たる現狀を展開す。

然りと雖も文化の東漸と共に獨り思想界の動搖混迷甚しきものありて、我が國民生活の實情に徹底せずして奇矯過激の外來思想を直譯的に盲信し遂に我が國體の基礎を危からしめんとするの徒輩を出し、若しくは似而非的國家觀念に依りて不純分子を助長する等或は右傾し或は左傾し混沌として歸一するところなし。

然して吾人の最も痛嘆措く能はざるは前途有爲の青年學徒にして往々新奇放縱の學說に眩感せられ不逞なる盲動を試むる者の漸く尠からざらんとするの狀是れなり、吾人は素より國家の權益を保持し社會の安寧福祉を招來するは須く合理合法的なるを要せざる可からざるを

識る、適正にして穩健なる社會改革を阻むるは國家の機構をして公正なる發達過程を辿らしむる所以に非ざるのみか反つて反抗鬭争の念を挑發し過激なる思想を醗酵せしむるの因を成すに至る。

惟ふに人類の行動作爲の淵源は實に思想を根本基調と爲して現實す、されば右顧し左聘して歩道を辿らんか其足跡歩調は必然的に亂れざるを得ざるが如く、一家一國の存亡は一に懸つて其組成分子の思想の健否如何に在りて、國家に對する中樞觀念の正誤は洵に夫れ自身興廢の分岐を成すものと謂はざる可からず、而して我が社會層に斯の如き思想上の暗流を見るは吾人の夙に危憂なき能はざるところなり。

凡そ我が大日本帝國に生を享けたる者は熟々翻つて建國の故を温めれば、毅然として宇内に冠絶する傳統日本主義精神の核心に蓬着せざるを得ざると共に、古往今來我が國家組成の中堅階級が如何に此の偉大なる精神の中核に觸れ、如何に此の國本的觀念を基調と爲し以て現代の赫灼たる國運を招來するに至りしかを識るに足るべし。

寔に我が建國の由來を稽へ古今を貫く國家の核心を体し、然して此の主觀念の下に行動し作爲せんか己が一舉手一投足の跡は歴然として神意に適ふ所以を會得すると共に、立脚の根本を異にせる外來の思想には敢て自ら動搖せらるゝの煩なかるべきを識らる。

茲に於て哉本書の刊行は現代日本の世相に鑑み機宜にして寔に意義ある出現と謂ふべく、即ち輯録するに昭和日本構成の中堅人物を可及的に網羅し、吾人の畏敬すべき其人と爲り及び業務の概要を如實に髣髴せしめ以て其立志を、其黽勉を、其厚德を顯現表頌し、如上傳統日本主義精神即ち我が大和民族独自の氣魄が渾然融和一團となりて炳呼たる現時の大日本帝國を生むに至りし所以を明かならしめ、斯くて昭和聖代を識るの資料と爲し引いては各個人互相認識の便に供し得ると共に更に又吾等に追隨し來らんとする第二國民に對し、好箇の精神的「糧」となりて彼等に搖ぎなき道標を示す等普ねく世を裨益せんことを庶幾して成れるもの是れ洵に本書を公にせる微衷に他ならざるなり。

不肖一社を率ひて茲に歳あり、菲才其任に非ずと雖も、苟も事業の進展と達成には一片耿

々の國家的理想を把持し以て之れが實現に邁進しつゝ在るは敢て吾が衷心の矜持と爲すに足る、されど道途徒らに荆棘多く時に起伏重疊の山岳あり、時に千仞の谿谷ありて徒歩の困憊其極に達し、苦楚を萬喫して浩嘆維れ久うせしこと一切ならず、寔に一事一業成就の得易からざるを自ら體驗し痛感し、然り而して顧みて本書に戴録せる多士濟々の過去現在を檢討するに、諸賢は實に中外に誇るべき我が國民精神の精華を發輝し、内憂に外患に嶮峻なる世路を辿りて敢て不撓不屈、刻苦以て身を挺し來れる其堅確不拔なる意志、其超凡なる忍耐、其特異の勤儉に對し轉々深甚の敬意と滿腔の情感の湧然として禁ぜざるものあり。

此の意味に於て本書は如上幾多の裨益あらしむると共に、外來の偏奇的思想に煩はさるゝ青年學徒に對し其迷夢を一蹴し以て我が國家の傳統的眞隨に觸れしむるを得ば、本書刊行の微衷は之れを以て究極せりと謂はざる可からざるなり。

幸ひ江湖諸彦の熱誠なる翼賛と編纂當事者の努力に依り茲に本書の上梓を見るに至る、吾人豈感激なくして止まんや、即ち本事業達成に方りいさゝか所懐を披瀝し各位の行傳を江湖に推奨すると共に、大方諸賢に衷心乃謝意を捧ぐるのみならず、本社理事並に多數社員の終始本事業の達成に粉骨碎身の努力を惜まざりしは齊しく感謝に堪えざる所なり、今や、本書を世に送らんとするに際し、敢へて一言以て自序となす。

昭和四年八月

帝國時事通信社

社長 新田宗盛

### 凡例

一、本書の發刊を企て一度是れに着手してより茲に上梓を見るまでに一年有半の日子を費し、又編纂上の經費も相當の金額に達しましたが、此種のものとしては比較的短期間に纏め得たことは畢竟より新しくして正鵠なる資料によつて編纂し得たと申さねばなりません。

一、輯録するに當り先づ最も意を傾けましたのは、登載人物の撰擇方法であります、理想としては現代日本の各社會に活躍して居らるゝ方々を遺憾なく網羅し盡すに在りますが、變轉常なき人事を一舉にして踏査することは到底小社微方の致すところではありません、故に一定の標準を樹て其人格と社會的地位の如何を査定し、小社の耐え得る可及的廣範圍に及びました。

一、登載せる方々は何れも一事一業に拙じ、而かも其の閱歴は吾々の模範的人物であることは敢て茲に喋々するまでもありませんが、世には尙ほ隠れたる逸材多く其名未だ普ねからざるも新進にして有爲の士は決して尠しと致しません、世間的に著名なる名士を推賞したる類似群書は所謂汗牛充棟も嘗ならざる有様ですから、寧ろ之れに代るに新人の紹介に意を須ひましたことは本書の意義あるところと存じます。

一、記事の長短區々として一定しませんのは、各個人の調査上從つて編輯上免れ難いことでありまして、登載人物の物質的援助の如何に依り本文長短の相違を設けるが如き新聞雜誌の廣告と往々混同視する向がありますが、本書は斷じて左様な弊に陥つて居りませんから一般讀者の誤解なきやう一言申上げて置きます。

一、茲に小社同人の痛嘆に堪えませんでしたことは、伯爵後藤新平閣下の逝去せられましたことで、閣下は終始小社の事業を翼賛せられ眞に「帝國之現勢」等の既刊著書に序文を賜り、而して又々書を寄せられ「予ハ前版ヲ江湖ニ推薦シタルト同ジ意味ニ於テ寧ロ聲ヲ大ニシテ更ニ本書ヲ獎ムルヲ辞セザル者ナリ」云々との絶大なる御聲援を賜りたるにも拘らず、編纂半ばにして溢焉として贅を易へられましたことは吾が新田社長は勿論全社員洵に衷悼に堪え

の次第であります。

一、編輯方法の一つとして中途にして他界せられたる方々は登載を中止致しました。従つて故後藤伯の御染筆に成る序文も之れを省略するの止むなきに至りましたことを御諒承願ひます、併し本文中象筈が間に合はず編輯上の体裁を害ふものは逝去せられた方でも印刷に附しましたから又御寛恕を乞ひます。

一、調査後異動を生ぜられたる方にして其旨御通告に接しましたものは直ちに之れを改訂いたしました。尚ほお知らせ無き向と雖これを要すべきものと認めたるものは、夫々適宜に増補訂正を行ひました、例へば政變に依る人事上の異動、經濟界の動向に依る趨異等の如きであります、乍併尚ほ萬全とは申されませんが大方の御叱正を願ひ申上げます。

一、本書を通観いたしますと、要するに掲載人物に逸すべからざるものを逸して居るのが多々ありますが、併し茲に本書の特色とすべきは各個調査に方り主義及び思想的方面に就き可及的に之を聴取し窺知し推考して本文中に附加せることであり、素より之れは本書企畫の根本を爲すものですが形而上的調査は至難中の至難と謂ふべきで、茲に一生涯を拓き得たことは以て本書の精彩ある所以と存じます。

一、勿論全体に於て所謂虎を描いて猫に墮した憾みがありまして各位の御期待に副はぬ点が多々ありませうが、向後大方の御垂示と御聲援に挨つて漸を追ひ改訂し、次第に完璧せんことを期して居りますからお赦しを願ひます。



今上天皇

御名 裕

仁

大正天皇第一皇子

御降誕 明治三十四年四月二十九日  
 御踐祚 大正十五年十一月二十五日  
 御即位 昭和三年十一月十日  
 大嘗祭 昭和三年十一月十四日—十五日

皇

后

御名 良

子

故久邇宮邦彥王第一王女

御誕生 明治三十六年三月六日  
 御結婚 大正十三年一月二十六日

皇

太后

御名 節

子

故從一位大勳位  
 公爵九條道孝第四女

御誕生 明治十七年六月二十五日

皇

女

御名 成

子

御稱號 照宮  
 第一皇女

御誕生 大正十四年十二月六日

皇

弟

御名 崇

仁

御稱號 澄宮  
 大正天皇第四皇子

御誕生 大正四年十二月二日



## 皇族

### 高松宮宣仁親王殿下

大勳位 海軍中尉

貴族院議員

殿下は大正天皇第三皇子に在りし、

明治三十八年一月三日を以つて御誕生遊ばさる。初め光宮と申し奉り、大正二年七月六日高松宮の稱號を賜はる。

大正十三年七月海軍兵學校を御卒業遊ばされ、同十四年十二月一日大勳位に叙せられ海軍少尉に御任官、尋いで昭和二年十二月一日海軍中尉に御陞進遊ばさる。

御殿は高輪御料地内に在らせらる。

### 秩父宮雍仁親王殿下

大勳位 陸軍歩兵大尉

貴族院議員

殿下は大正天皇第二皇子に在りし、

明治三十五年六月二十五日を以つて御誕生遊ばさる。初め淳宮と申し奉り、大正十一年六月二十五日秩父宮の稱號を賜はる。

大正十一年七月陸軍士官學校を御卒業遊ばされ、同年十月二十五日大勳位に叙せられ陸軍歩兵少尉に御任官、同十四年五月十日陸軍歩兵中尉に、尋いで陸軍歩兵大尉に御陞進遊ばさる。大正十四年五月二十四日英國に御留學遊ばされ昭和二年一月十七日御歸朝遊ばさる。

妃勢津子殿下は子爵松平保男氏の御令姪に當らせらる。

御殿は東京市赤坂區表町に在らせらる。

### 伏見宮博恭王殿下

大勳位功四級 海軍大將 軍事參議官

議定官 貴族院議員 財團法人理化學

研究所 帝國水難救濟會 日本海員救濟會

海防義會 水交社 密研究所大

日本水産會 日本産業協會各總裁

殿下は故貞愛親王殿下の第一王子に在

りし、明治八年十月十六日を以つて御誕生遊ばさる。曩に故三品華頂宮博經親王殿下の後を繼ぎ給ひしも、故ありて御復歸遊ばさる。

夙に海軍兵學校を御卒業後獨逸國海軍兵學校に御留學遊ばされ、明治二十六年業を卒へさせ給ひ海軍少尉候補生とならせられ、御歸朝の後嚴島分隊士松島御乗組、海軍砲術練習所學生、吳鎮守府水雷艇隊附、同艇隊長心得、富士分隊長等の御任務に就かせられ、同三十八年五月韓國に御差遣同年六月御歸朝遊ばされ、同年十一月大勳位菊花大綬章を賜はる。

斯くて明治三十九年五月浪速艦副長心得に御任輔同年九月海軍中佐に御陞進浪速、日進各艦副長の御任務を執らせ給ひ同三十九年十二月日露戰役の功により功四級金鷄勳章を賜はり、同四十年二月海軍大學校選科生とならせられ、同年十月英國駐在仰せ付けられ、大正二年八月海軍少將に御陞進横須賀鎮守府艦隊司令官に御轉輔、同五年十二月海軍中將に御

陸進、爾來海軍將官會議々員兼海軍々令部出仕、第二艦隊司令長官等を御歴補あらせられ、後ち海軍大將に御陸進佐世保鎮守府司令長官に御榮補遊ばされ、現に軍事參議官の顯職を帯びさせ給ふ外前掲諸職を兼ねさせ給ふ。御趣味として花卉の御培養に御堪能と漏れ承はる。

妃經子殿下は勳一等にあらせられ、故從一位勳一等公爵徳川慶喜卿の第九女に當らせらる。

御殿は東京市麴町區紀尾井町四番地に御別邸は東京府豊多摩郡中野町一八三番地及び東京市芝區白金今里町一五一番地に在らせらる。

### 山階宮武彦王殿下

勳一等 海軍大尉  
海軍々令部出仕兼參謀  
貴族院議員

殿下は故大勳位功四級海軍大佐山階宮菊麿王殿下第一子に在し、明治三十一年二月十三日を以つて御誕生遊ばさる。

夙に海軍兵學校を御卒業遊ばされ、大正七年海軍少尉候補生とならせられ、同八年海軍少尉に御任官遊ばされ、爾來、常磐、生駒、霧島等の諸艦御乗組に御歴補遊ばさる。

曩に海軍水雷學校普通科學生仰せ付けられ、後ち追濱海軍飛行隊に御入隊遊ばされ、後ち飛行術を御練習遊ばされ、大正十年七月御芽出度く御卒業と共に海軍大尉に御陸進、追濱海軍航空隊附に御任補あらせられ、大正十四年五月海軍々令部出仕兼參謀に御轉補遊ばされ、現に其の御傍ら貴族院議員として議政府に列し國政に御參與遊ばさる。

御殿は東京市麴町區富士見町五丁目一番地に在らせらる。

### 賀陽宮恒憲王殿下

勳一等 陸軍騎兵大尉  
騎兵第三聯隊中隊長  
貴族院議員

殿下は故大勳位神宮祭主邦憲王殿下の

第一王子に在し、明治三十三年一月二十七日を以つて御誕生遊ばさる。

夙に陸軍士官學校を御卒業遊ばされ、大正九年十二月陸軍騎兵少尉に御任官騎兵第十聯隊附とならせられ、同十二年八月陸軍騎兵中尉に御陸進騎兵第一聯隊附に御轉補あらせられ、後ち陸軍大學校に御入學遊ばされ、大正十五年七月二十八日陸軍騎兵大尉に御陸進、同年十二月七日優等の御成績を以つて陸軍大學校を御卒業遊ばされ、騎兵第三聯隊中隊長に御榮補遊ばされ、現に其の外貴族院議員を兼ねさせ給ふ。

妃敏子殿下は勳二等にあらせられ、故從二位勳二等公爵九條實美卿の第五女に當らせらる。

御殿は東京市麴町區一番町二番地に御別邸は東京市外淀橋町角筥三二八番地に在らせらる。

### 久邇宮朝融王殿下

勳一等 海軍大尉  
貴族院議員

殿下は故大勳位久邇宮邦彦王殿下の第一王子に在し、明治三十四年二月二日を以て御誕生あらせらる。

故邦彦王殿下は夙に學習院、成城學校等に御勉學遊ばされ、更に陸軍士官學校に御入學、明治三十年一月陸軍歩兵少尉に御任官勳一等に叙し旭日大綬章を賜はり、第三師團歩兵第六聯隊附とならせられ、同卅二年二月陸軍歩兵中尉に同卅四年三月同大尉に御陸進、明治卅七年二月參謀本部々員に御任補同年十一月大勳位に御陸叙菊花大綬章を賜はり、同月陸軍歩兵少佐に御陸進同卅九年十二月日露戰役の功により功四級金鷄勳章を賜はる。

斯くて明治四十年四月外國御駐在仰せ付けられ歐洲に御渡航遊ばされ、同四十四年四月陸軍歩兵中佐に同四十三年十一月同大佐に、更に大正二年八月軍陸少將に御陸進近衛歩兵第一旅團長とならせらる。

れ同六年八月陸軍中將に御陸進第十五師團長、近衛師團長等を御歴補遊ばされ、同十二年八月陸軍大將に御榮進、尙ほ軍事參議官、貴族院議員、皇典講究所、大日本武德會、聖德太子奉讀會、帝國飛行協會、同仁會、日獨協會、日本美術協會各總裁等の諸顯職を帯びさせられしが昭和四年御他界遊ばされ、朝融王殿下御後を繼がせ給へり。

妃知子殿下は勳二等にあらせられ、伏見宮博恭王第三王女に當らせらる。御殿は東京市外澁谷町下澁谷豊島御料地内に在らせらる。

### 梨本宮守正王殿下

大勳位功四級 陸軍大將 軍事參議官  
貴族院議員 大日本農會 大日本山林會  
忠勇顯彰會 伊學協會各總裁

殿下は故大勳位久邇宮朝彦親王殿下の第四王子に在し、明治七年三月九日を以つて御誕生遊ばされ、故三品梨本宮守修親王殿下の御後を繼がせ給ふ。

夙に陸軍中央幼年學校、陸軍士官學校等を御卒業遊ばされ、明治三十年一月陸軍歩兵少尉に御任官勳一等に叙し旭日大綬章を賜はり歩兵第十一聯隊附とならせられ、同三十二年二月陸軍歩兵中尉に御陸進陸軍士官學校教官に御任補、同三十七年十一月大勳位に御陸叙菊花大綬章を賜はり、同年陸軍歩兵少佐に御陸進遊ばさる。

斯くて明治三十九年五月歐洲に御渡航遊ばされ、同年十二月日露戰役の功に依り功四級金鷄勳章を賜はり、同四十年四月外國駐在仰せ付けられ、再び御渡歐同四十一年四月陸軍歩兵中佐に同四十三年十一月同大佐に御陸進歩兵第六聯隊長とならせられ、大正二年八月陸軍少將に御陸進歩兵第二十八旅團長に御榮補遊ばされ、同六年八月陸軍中將に御陸進第十六師團長に御親補同十三年八月陸軍大將に御榮進、現に軍事參議官の顯職を帯びさせ給ふ外前掲諸職を兼ねさせ給ふ。

妃伊都子殿下は勳一等にあらせられ故

從一位勳一等侯爵鍋島直大卿の第二女に當らせらる。  
御殿は東京市赤坂區青山北町七丁目二番地に在らせらる。

### 朝香宮鳩彦王殿下

大勳位 陸軍歩兵大佐  
陸軍大學校兵學教官  
貴族院議員

殿下は故大勳位久邇宮朝彦王殿下の第八王子に在し、明治二十年十月二日を以つて御誕生遊ばされ、同三十九年三月朝香宮の御稱號を賜はる。

明治三十九年六月陸軍中央幼年學校を御卒業遊ばさるゝや、同年十二月陸軍士官學校に御入學、同四十年十一月勳一等に叙し旭日桐花大綬章を賜はり、同四十一年十二月陸軍歩兵少尉に御任官近衛歩兵第二聯隊附とならせられ、同四十三年十二月陸軍歩兵中尉に大正二年八月同日大尉に御陸進遊ばされ、近衛歩兵第二聯隊中隊長、同三年十一月歩兵第六十一聯隊

中隊長等を御歴補遊ばさる。

尋いで近衛第三聯隊附、參謀本部附等を御歴補、同七年七月陸軍歩兵少佐に御陸進と同時に歩兵第一聯隊大隊長に御轉補遊ばされ、同十一年八月同中佐に御陸進陸軍大學校附に御任補、同十四年八月陸軍歩兵大佐に御陸進遊ばさる。

曩に佛國に御留學遊ばされ、大正十四年十二月御芽出度御歸朝、同十五年六月陸軍大學校兵學教官に御任補あらせられ、現に其の外貴族院議員を兼ねさせ給ふ。

妃充子内親王は勳一等にあらせられ、御稱號を富美子と申し上げ明治天皇第八皇女に當らせらる。

御殿は東京市芝區高輪南町十八番地に在らせらる。

### 東久邇宮稔彦王殿下

大勳位 陸軍歩兵大佐  
陸軍士官學校附  
貴族院議員

殿下は故大勳位久邇宮朝彦親王殿下の

第九王子に在し、明治二十年十二月三日を以つて御誕生遊ばされ、同三十九年十一月東久邇宮の御稱號を賜はる。

明治三十九年六月陸軍中央幼年學校を御卒業遊ばさるゝや、同年十二月陸軍士官學校に御入學、同四十一年四月勳一等に叙し旭日桐花大綬章を賜り、同年十二月陸軍歩兵少尉に御任官遊ばされ、近衛歩兵第三聯隊附とならせられ、同四十三年十二月陸軍歩兵中尉に大正二年八月同日大尉に御陸進近衛歩兵第三聯隊中隊長とならせられ、同三年十二月歩兵第二十九聯隊中隊長に御轉補、尋いで歩兵第三聯隊附を経て參謀本部附とならせられ、大正六年十月大勳位菊花大綬章を賜はる。

斯くて大正七年七月陸軍歩兵少佐に御陸進歩兵第七聯隊大隊長に御任補あらせられ、尋いで陸軍士官學校附に御轉補同十一年八月陸軍歩兵中尉に同十四年八月同大佐に御陸進遊ばさる。曩に佛國に御留學遊ばされ昭和二年一月御芽出度御歸朝、依然陸軍士官學校附として軍務に御

精勵あらせらる。

妃聰子殿下は勳一等にあらせられ、御稱號を泰宮と申し上げ 明治天皇第九皇女に當らせらる。  
御殿は東京市麻布區市兵衛町一ノ三番地に在らせらる。

### 北白川宮永久王殿下

殿下は大正十三年四月佛國パリ郊外に於て御奇禍の爲め薨去遊ばされし、故成久王殿下の第一王子に在し、明治四十三年二月十九日を以つて御誕生遊ばされ、現に東京陸軍幼年學校に御勉學あらせらる。

御殿は東京市芝區高輪南町一七番地に御別邸は東京市小石川區大塚仲町五〇番地に在らせらる。

### 竹田宮恒徳王殿下

殿下は故大勳位功五級陸軍少將竹田宮恒久王殿下の第一王子に在し、明治

四十二年三月四日を以つて御誕生遊ばさる。

曩に陸軍中央幼年學校を御卒業遊ばされ、現に陸軍士官學校に御勉學あらせらる。

御殿は東京市芝區高輪南町一七番地に在らせらる。

### 閑院宮載仁親王殿下

大勳位功二級 元帥陸軍大將  
軍事參議官 議定官 貴族院議員  
明治神宮造營局 帝國在郷軍人會各總裁

殿下は故一品伏見宮邦家親王殿下の第十六王子に在し、慶應元年乙丑九月二十二日陽曆十一月十日を以つて御誕生遊ばさる。易宮と稱し奉り明治五年正月閑院宮の御繼嗣とならせ給ひ、同十一年八月親王の御宣下あり御名を載仁と賜ひ三品に叙せらる。

明治十五年陸軍士官學校を御卒業遊ばされ、後佛國に御留學あらせられ陸軍兵術御研究に御專念、同十九年四月「サ

ンシール」士官學校試験の御成績にて騎兵伍長に任せられ、同校御卒業後明治二十年八月騎兵少尉に御任官大勳位に叙し菊花大綬章を賜はり、尋いで「ソノミュル」騎兵專門學校、佛國陸軍大學校等に御勉學遊ばされ、同二十三年十一月騎兵中尉に御陸進翌年七月御歸朝遊ばさる。

爾來、陸軍士官學校生徒隊附、同校教官心得、同校教官、騎兵第一大隊中隊長乘馬學校教官等を御歴補あらせ給ひ、日清の役には第一軍司令部附、第三師團參謀官として平壤の激戦より紅丸寨田庄臺等の戦闘に御參加あらせられ、後騎兵第一大隊附に補せられ功四級金鷄勳章を賜はる。

尋いで騎兵第一聯隊附、同聯隊長心得同聯隊長等に御轉補遊ばされ、同三十四年十一月陸軍少將に御陸進騎兵第二旅團長とならせられ、日露戦役に際し各地に御勇戦同三十九年二月第一師團長に御親補、同年十二月日露戦役の功により功二級金鷄勳章を賜はる。

東伏見宮周子殿下

斯くて明治四十四年九月近衛師團長に御榮補遊ばされ、大正元年十一月陸軍大將に御陞進同五年八月露國に御差遣、同十年三月 今上陛下尙ほ東宮に在しまし歐洲御巡遊に際し、隨伴仰せ付けられ、同十二年十二月元帥府に列せられ給ひ、昭和元年十二月大喪使總裁仰せ付けられ同年十二月左の勅語を賜はる。

勳一等 愛國婦人會 陸海軍將校婦人會 大日本婦人衛生會各總裁

殿下は故大勳位功三級元帥海軍大將依仁親王殿下の妃殿下に在しまし、故從一位勳一等公爵岩倉具定卿の第一女に當らせられ、明治九年八月二十九日を以つて御誕生あらせらる。現に前掲の諸職を帯びさせ給ふ。

御殿は東京市外下澁谷常盤松御料地内に在らせらる。

「朕新ニ大統ヲ承ケ先朝ノ宏謨ヲ繼述セントス頁荷甚タ重ク憂念殊ニ深シ卿宗室ノ懿親ヲ以テ兩朝ニ歴事シ勤勞是レ積ミ德望是レ隆シ其レ復朕カ躬ヲ匡輔シ朕ヲシテ皇祖考暨ヒ皇考ノ遺緒ヲ失墜スル無カラシメヨ」

現に軍事參議官の顯職を帯びさせ給ふ外前掲諸職を兼ねさせ給ふ。

妃智恵子殿下は勳一等にあらせられ故正一位大勳位三條實美卿の第二女に當らせらる。

御殿は東京市麴町區永田町二ノ二〇番地に在らせらる。

大日本人物史目次

第一章 いゐの部

伊藤 一郎……………五〇	伊藤 博 邦……………一五	伊東 太郎……………七八	井上伊三郎……………八二
伊藤 千三……………九九	伊藤長次郎……………七七	伊東米治郎……………四一	井上通泰……………七五
伊藤利三郎……………三七	伊藤 平 藏……………五一	伊東 祐 弘……………一一	井上憲一……………三二
伊藤 文 吉……………九	伊藤 幸次郎……………一五	伊丹 二 郎……………二一	井上保三郎……………六
伊藤治郎松……………九二	伊藤 平 三……………七八	伊丹彌太郎……………一一	井上五郎……………九一
伊藤忠兵衛……………六	伊藤竹之助……………三二	伊丹 松 雄……………六九	井上平左衛門……………三八
伊藤 勤 助……………七九	伊藤萬太郎……………六九	伊勢喜之助……………二四	井上武一……………一〇二
伊藤 庄 吉……………一一	伊藤欣二……………二二	伊勢本一郎……………七	井上 周……………二三
伊藤久米藏……………四三	伊藤東兵衛……………七八	伊勢久治郎……………八	井上嘉都治……………二六
伊藤 正 德……………一〇二	伊藤 富 藏……………七四	伊澤平左衛門……………一七	井上濟美……………七三
伊藤米治郎……………二九	伊原五郎兵衛……………九九	伊澤 真 立……………三八	井上治兵衛……………一〇二
伊藤 治 作……………四六	伊東二郎九……………一四	伊江朝助……………一〇	井上剛一……………三六
伊藤 吉 藏……………九九	伊東三郎……………一七	伊井熊次郎……………四〇	井上匡四郎……………八〇
伊藤末之助……………二二	伊東 深 水……………八四	伊吹平助……………九	井上正義……………七三
伊藤 佐 平……………一九	伊東三郎……………二二	伊東 要 藏……………三二	井上房太郎……………二六
伊藤金左衛門……………七九	伊東己代治……………五一	伊藤茂七郎……………四三	井上正夫……………三五
	伊東平兵衛……………三〇	伊藤由太郎……………一九	井上德三郎……………四八
		井上利助……………七三	井上虎治……………三三

索引

いゐの部

- 井上寅次郎……………二五
- 井上二郎……………一〇三
- 井上達二……………四〇
- 井上榮三郎……………一四
- 井上金作……………一〇〇
- 井上五助……………七四
- 井上勸二……………四七
- 井上七衛門……………二七
- 井伊直忠……………七〇
- 井上勝純……………一七
- 井上勝之助……………五
- 井上雅二……………二四
- 井上角五郎……………五三
- 井上正國……………二六
- 井上源之丞……………二二
- 井上達一……………三六
- 井上準之助……………五
- 井上十吉……………二〇
- 井上哲次郎……………四八
- 井上定吉……………七五
- 井上敬次郎……………五八
- 井上宜文……………六三
- 井上禮之助……………二五
- 井上文藏……………四五
- 井上牛之助……………七四
- 井上安五郎……………九九
- 井上仁吉……………二
- 井上篤太郎……………一五
- 井上孝哉……………一二
- 井口誠一……………三一
- 井口重次……………八五
- 井口昌藏……………五八
- 井田清三……………二三
- 井田耕治……………三九
- 井田亦吉……………一二
- 井内勇……………一〇
- 井内豊次……………六七
- 井原文吉……………四四
- 井手徳一……………五九
- 井手復次郎……………四〇
- 井坂孝……………五二
- 井本常作……………一九
- 井出郷助……………七四
- 今澤慈海……………八八
- 今泉定介……………一〇
- 今泉小源次……………八三
- 今泉嘉一郎……………四一
- 今田光信……………一〇九
- 今村繁三……………六一
- 今村太平次……………三七
- 今村宗太郎……………八五
- 今村信吉……………七一
- 今里情市……………一〇四
- 今北策之助……………六五
- 今井清吉……………四
- 今井眞平……………九二
- 今井貞次郎……………六二
- 今井秀吉……………二七
- 今井正太郎……………四九
- 今井茂次……………六〇
- 今井三吉……………七二
- 今井五介……………八九
- 今井環……………七
- 今園國貞……………一〇
- 今岡純一郎……………六一
- 今枝直規……………三三
- 巖谷秀雄……………八
- 巖崎俊彌……………五二
- 巖崎幸治郎……………七四
- 巖崎久彌……………八二
- 巖崎小彌太……………四四
- 巖崎恒二郎……………七二
- 巖崎彦彌太……………八五
- 巖崎清七……………四七
- 巖崎次郎吉……………五五
- 巖崎龜次郎……………三〇

- 岩佐祿郎……………一〇八
- 岩倉具光……………一八
- 岩倉道具……………四五
- 岩尾太平……………八四
- 岩茂隆徳……………一二
- 岩田隼三……………五一
- 岩田寅造……………五八
- 岩田謙三郎……………七一
- 岩田勇……………一〇六
- 岩田一……………四
- 岩岡兼次郎……………二七
- 岩岡武博……………三七
- 岩村八郎……………一〇九
- 岩波六郎……………六八
- 岩切重雄……………一〇
- 岩船峯次郎……………七五
- 石川敬藏……………一〇一
- 石川成秀……………三四
- 石川正七……………九七
- 石川岩吉……………六四
- 石川武美……………九〇
- 石川澤吉……………八三
- 石川信……………八六
- 石川一郎……………九八
- 石川等……………一〇一
- 石川誠一……………二二
- 石川徳右衛門……………五五
- 石川清右衛門……………九八
- 石川幹明……………五六
- 石川亮三……………一〇〇
- 石川貞次郎……………四四
- 石川元吉……………九一
- 石川貞吉……………五〇
- 石川吉郎……………九七
- 石川正作……………七二
- 石川浅……………八三
- 石川茂兵衛……………五一
- 石井泰助……………九四
- 石井權藏……………三一
- 石井光次郎……………八四
- 石井竹三郎……………五四
- 石井信太郎……………一〇七
- 石井柏亭……………六
- 石井孝三郎……………八四
- 石井真一……………六八
- 石井仙之助……………八三
- 石井轍……………四六
- 石井國次……………五〇
- 石井術太……………一〇一
- 石井健吾……………四三
- 石井孫治郎……………四八
- 石上林二郎……………一〇六
- 石黒源次郎……………二五
- 石黒忠篤……………一六
- 石綿金太郎……………二九
- 石山徹雄……………九〇
- 石原晋太郎……………一五
- 石原義一……………九四
- 石原健三……………八一
- 石原修……………六八
- 石原正甫……………九二
- 石原平左衛門……………四九
- 石田義雄……………九五
- 石田理七郎……………四二
- 石坂養平……………八六
- 石光眞臣……………六七
- 石橋泰一……………四五
- 石橋忠男……………九〇
- 石橋新次郎……………七一
- 石澤愛三……………一〇〇
- 石塚英藏……………五七
- 石塚彌太郎……………五五
- 石塚彦輔……………一三
- 石渡泰三郎……………四七
- 池田福治……………八七
- 池田五六……………六〇

池田 裕二	七二	五百木竹四郎	一三	飯田 邦彦	七七	市川 榮一	一一
池田 勝三郎	九六	五十嵐常次郎	七九	飯島 保作	八一	市川 準一	一〇七
池田 茂	二九	五十嵐哲太郎	三〇	飯高 達夫	八七	市川 繁彌	八九
池田 淨吾	九三	五十嵐慎一郎	二八	飯尾 一二	一八	市瀬 三五	八一
池田 嘉吉	七六	五十嵐直三	五三	飯野 巖雄	九七	市來 乙彦	五六
池田 永吉	六七	入江 貫一	三三	飯泉 金次郎	一六	市村 駒之助	九七
池田 静三	一〇四	入江 爲守	三二	磯村 豊太郎	二一	市島 龜三郎	一〇二
池田 萬藏	七六	入江 正太郎	七七	磯村 年	四一	糸原 武太郎	一六
池田 長康	九	入澤 達吉	二	磯 江 潤	二二	糸山 文吉	一
池田 茂幸	九六	入澤 重磨	五九	磯 江 泰雄	九八	一木 喜徳郎	一
池田 宏	六九	飯田 次郎	二八	磯 田 正朝	七〇	一色 忠雄	六四
池田 成彬	四〇	飯田 九州雄	九六	磯 野 正登	五八	一色 信一	五五
池田 伸博	一九	飯田 延太郎	五三	磯 部 尙	九五	一本 文藏	八八
池田 善四郎	五九	飯田 耕一	一〇四	磯 部 保次	六二	一力 健治郎	二
池邊 龍一	四二	飯田 新七	三六	磯 部 愉一郎	八二	一戸 兵衛	四
池松 敬次郎	三五	飯田 清三	八六	磯 崎 精一	三九	一戸 雄三	一〇八
池見 辰次郎	四〇	飯田 精太郎	一一	磯 野 七平	五七	一條 實孝	七
池島 三省	二二	飯島 徳次	一〇五	市川 純一	九三	板谷 宮吉	七五
池長 孟	五二	飯田 久恒	一三	市川 忠兵衛	六八	板井 碧	五七

犬塚 力	二三	猪野 幸吉	一一	濱口 吉兵衛	一一	林 頼三郎	三
犬塚 勝太郎	一	猪飼 九兵衛	一一	濱口 吉右衛門	四二	林 郁彦	六
犬丸 鐵太郎	五四	猪股 謙吉	二五	濱口 儀兵衛	一九	林 博太郎	一一
犬養 毅	三	猪俣 安造	一四	濱田 國太郎	五七	林 杉造	四七
泉 喜之介	六二	猪股 洪清	一一	濱口 新吉	四九	林 徳太郎	一八
泉 吉次郎	七六	鑄谷 正輔	八七	濱口 巖根	六五	林 市藏	二
泉 道雄	一〇三	稻田 三之助	八〇	濱田 長策	二三	林 鶴一	四九
泉 光藏	一九	稻茂 登三郎	三九	濱田 國松	一	林 武平	二九
泉 岡宗助	五九	稻山 彌三郎	三五	濱田 四郎	五三	林 芳太郎	一〇
生野 鼎	六二	稻垣 平太郎	一六	濱 田 彪	四	林 嘉陽	五二
生田 定之	一一	稻垣 庄三郎	三四	濱田 道之助	三七	林 幸平	五二
生田 潔	一一	稻畑 勝太郎	三四	濱田 勇三	四八	林 毅陸	二二
生島 五三郎	七五	稻葉 信吉	六八	濱田 八之助	二三	林 辰次郎	四六
生島 五郎兵衛	六一	稻葉 順通	三二	濱崎 照道	三	林 秀彦	五三
生島 藤藏	五五	第二章 はろ之部		濱崎 辨之助	三八	林 愛作	三五
乾 政彦	五六	濱口 雄幸	四四	濱崎 定吉	六二	林 幾太郎	二八
猪飼 宗逸	一〇六	濱口 擔	三六	濱 幸次郎	三〇	林 新助	四七
猪野 毛利榮	五七	はろ之部		濱 平右衛門	一五	林 平次郎	五六
				濱岡 源助	一九	林 清夫	四三

- 林 五作……………四七
- 林 梯助……………五九
- 林 治作……………四二
- 林 雅之助……………四
- 林 慶吉……………四八
- 林 秀直……………三三
- 林 平造……………三
- 林 田 操……………三五
- 馬場 愿治……………一五
- 馬場 辰二……………五七
- 馬場 顯一……………一一
- 馬場 崎治……………一四
- 馬場 鉄一……………一二
- 馬場 善兵衛……………二七
- 番 場 研……………一七
- 橋本 圭三郎……………三四
- 橋本 貞夫……………六六
- 橋本 梅太郎……………六
- 橋本 豊太郎……………五六
- 橋本 喜造……………八
- 橋本 寛一……………六三
- 橋本 辰次郎……………一五
- 橋本 庄藏……………五六
- 橋本 幸吉……………四八
- 橋本 捨次郎……………三
- 橋本 武四郎……………一六
- 橋本 辰吾……………五〇
- 橋本 長俊……………五
- 橋本 貞藏……………六四
- 橋本 萬右衛門……………九
- 橋本 節齋……………三五
- 橋村 正治……………二六
- 原田 治郎……………六〇
- 原田 鎮治……………二四
- 原田 乙吉……………六五
- 原田 駒之助……………二四
- 原田 虎次郎……………四七
- 原田 清一……………五四
- 原田 六郎……………二〇
- 原田 藤次郎……………一八
- 原田 熊雄……………四〇
- 原田 忠右衛門……………三七
- 原 口 要……………三二
- 原 猪之助……………五五
- 原 善一……………四七
- 原 澤 勇……………三七
- 原 島 彦七……………三六
- 原 邦 造……………五
- 原 義 孝……………五九
- 原 安三郎……………四六
- 原 次三郎……………五八
- 原 嘉 道……………二二
- 原 萬 吉……………六〇
- 原 夫次郎……………八
- 原 孝 次……………五四
- 原 錦 吾……………二五
- 原 亮 一郎……………四六
- 原 繁 造……………二三
- 原 子之松……………五一
- 原 眞 一……………一三
- 原 富 太郎……………一〇
- 原 太 三郎……………三六
- 服部 小十郎……………四六
- 服部 宇之吉……………二七
- 服部 竹次郎……………四三
- 服部 清 一……………二〇
- 服部 修 二……………三一
- 服部 孝太郎……………二二
- 島 山 敏行……………五一
- 畑 仙 齡……………九
- 畑 英太郎……………四五
- 畑 英三郎……………一〇
- 畑 俊 六……………四三
- 畑 茂……………三四
- 八馬 兼介……………六一
- 八田 宗吉……………七

- 八 田 稔……………六
- 八田 彦次郎……………二五
- 八 條 隆 正……………二五
- 花 井 卓 藏……………四
- 花 房 太 郎……………一一
- 花 城 永 渡……………六五
- 花 島 兼 吉……………二一
- 花 岡 敏 夫……………四九
- 花 本 福 次 郎……………三二
- 花 木 三 二 郎……………三二
- 芳 賀 喬 一……………三〇
- 華 岡 智 爾……………二九
- 華 園 眞 淳……………八
- 長谷川 吉次……………四五
- 長谷川 太郎吉……………四一
- 長谷川 象 藏……………五五
- 長谷川 誠也……………三五
- 長谷川 治郎兵衛……………六二
- 長谷川 鐵 太郎……………四一
- 長谷川 久四郎……………六四
- 長谷川 鏡次……………四一
- 長谷川 久一……………四四
- 長谷川 猪三郎……………一三
- 長谷川 龜 樂……………三九
- 早川 德 次……………五〇
- 早川 政 廣……………一三
- 早川 芳 太 郎……………三八
- 早川 久右衛門……………一七
- 早川 友 三……………四九
- 早川 憶 利……………三九
- 早瀬 義 正……………四〇
- 早瀬 太郎三郎……………九
- 初見 五 郎……………六二
- 伴 繁 藏……………五八
- 萩原 良 一……………一九
- 萩原 弘……………三七
- 萩原 鉄 三……………一八
- 萩原 拳 吉……………四二
- 長谷川 久四郎……………六四
- 長谷川 鏡次……………四一
- 長谷川 久一……………四四
- 長谷川 猪三郎……………一三
- 長谷川 龜 樂……………三九
- 早川 德 次……………五〇
- 早川 政 廣……………一三
- 早川 芳 太 郎……………三八
- 早川 久右衛門……………一七
- 早川 友 三……………四九
- 早川 憶 利……………三九
- 早瀬 義 正……………四〇
- 早瀬 太郎三郎……………九
- 初見 五 郎……………六二
- 伴 繁 藏……………五八
- 萩原 良 一……………一九
- 萩原 弘……………三七
- 萩原 鉄 三……………一八
- 萩原 拳 吉……………四二
- 鳩山 春 子……………六一
- 鳩山 一 郎……………二六
- 鳩山 秀 夫……………三三
- 土 生 彰……………二
- 追 間 一 男……………六一
- 春 名 高 義……………三一
- 蜂 須 賀 正 韶……………二七
- 針 重 敬 喜……………三四
- 針 生 又 太 郎……………二九
- 針 生 久 助……………三一
- 針 塚 長 太 郎……………二四
- 波 多 野 保 二……………六三
- 波 多 野 岩 次 郎……………三八
- 波 多 海 藏……………一六
- 灰 谷 興 助……………二八
- 蓮 見 義 隆……………五〇
- 葉 住 利 藏……………一
- 幡 谷 高 山……………五二
- 播 摩 由 太 郎……………三〇
- 秦 野 武 記……………五四
- 秦 豊 助……………二八
- 袴 田 喜 四 郎……………一四
- 羽 田 伊 之 助……………二八
- 羽 成 卯 兵 衛……………五六
- 六 車 修……………五八
- 六 鹿 清 治……………三八
- 六 郷 政 賢……………三九
- 蠟 山 政 次 郎……………一六
- 新 田 忠 純……………一
- 新 田 清 三 郎……………四七
- 新 田 定 五 郎……………二八
- 新 田 芳……………四三
- 新 田 長 次 郎……………一五
- 新 田 仲 太 郎……………七
- 新 美 喜 市……………二

第三章には之部

- 新保徳壽……………一三
- 新保寅次……………八
- 新渡戸稻造……………二
- 新島善直……………一一
- 新居金三郎……………四六
- 新野榮太郎……………二七
- 新實新十郎……………四〇
- 西川甚五郎……………一二
- 西川莊三……………一
- 西川健治……………四二
- 西川虎吉……………五
- 西川巖……………二八
- 西川庄六……………九
- 西川幸兵衛……………三三
- 西河龍治……………七
- 西岡英吉……………二七
- 西岡竹藏……………三八
- 西崎醇夫……………一六
- 西崎傳一郎……………三一
- 西野惠之助……………二七
- 西野市兵衛……………三四
- 西中勘次郎……………五二
- 西山哲治……………一四
- 西山龜太郎……………二八
- 西田爲次郎……………一二
- 西田羊四郎……………五二
- 西田英太郎……………三七
- 西田正俊……………一
- 西田博太郎……………二三
- 西内省吾……………一七
- 西内貞吉……………二九
- 西脇濟三郎……………三一
- 西脇吉久……………四三
- 西脇晋……………三四
- 西脇由兵衛……………一四
- 西脇健治……………三七
- 西脇吉右衛門……………四〇
- 西堀清兵衛……………三六
- 西尾忠方……………三三
- 西尾勘兵衛……………三七
- 西尾豊……………三二
- 西洞院信意……………三〇
- 西中勘次郎……………一三
- 西村多一郎……………一一
- 西村勝太郎……………五三
- 西村伊作……………二九
- 西村四郎……………二六
- 西牟田元三郎……………四六
- 西ヶ谷可吉……………二六
- 西久保弘道……………三五
- 西大條覺……………五三
- 西島順榮……………三三
- 西原種雄……………九
- 西原直方……………四
- 西澤喜太郎……………一〇
- 西森太郎……………四四
- 西濟……………一二
- 西英太郎……………五四
- 仁井田益太郎……………一五
- 仁科梅太郎……………三五
- 二條邦基……………五一
- 二階堂三郎左衛門……………三二
- 二宮喜市郎……………一〇
- 二宮健市……………四六
- 二宮傳右衛門……………三五
- 二宮貞……………五〇
- 錦戸右門……………二八
- 蜷川包……………四四
- 丹羽鋤彦……………三六
- 丹羽藤吉郎……………三〇
- 星島謙一郎……………一一
- 星島二郎……………二二
- 星野銀治……………二
- 星野太郎……………四一
- 星野伊三郎……………一九
- 星野米……………四二

- 星野正三郎……………三一
- 星野準一郎……………四一
- 星野鏡三郎……………四一
- 星野勇三……………一七
- 星川藤七……………四九
- 星川兼次郎……………二四
- 星孝治……………八
- 星廉平……………二五
- 星一……………一八
- 堀越壽助……………三四
- 堀越鐵藏……………九
- 堀越安太郎……………二四
- 堀越角次郎……………三二
- 堀越三郎……………二四
- 堀岡利一……………五一
- 堀内秀太郎……………二五
- 堀内良平……………五
- 堀内宗平……………四五
- 堀内彌二郎……………二〇
- 堀内明三郎……………一八
- 堀内三郎……………三八
- 堀内次兵衛……………四八
- 堀内謙吉……………二六
- 堀内貞造……………四〇
- 堀田正恒……………一六
- 堀田璋左右……………五四
- 堀田義次郎……………七
- 堀田正由……………四三
- 堀田貢……………三八
- 堀田稔……………四五
- 堀田元次郎……………二二
- 堀田金四郎……………三七
- 堀切善兵衛……………三
- 堀井新治郎……………五〇
- 堀井繁夫……………二〇
- 堀井松之助……………四九
- 堀江専一郎……………四
- 堀江半兵衛……………三七
- 堀野力藏……………三
- 堀谷左次郎……………二一
- 堀永完省……………四七
- 堀啓次郎……………三六
- 堀三之助……………五二
- 堀三太郎……………一九
- 細谷智之介……………二五
- 細川護立……………二
- 細井儀一郎……………一六
- 細山太七……………四九
- 穂積重遠……………三
- 程野彦太郎……………二一
- 北條謙吉……………六
- 保倉熊三郎……………五一
- 保坂京三郎……………三四
- 保坂潤治……………二四
- 保科正昭……………三九
- 帆足後作……………二二
- 本郷直……………三九
- 本郷房太郎……………二九
- 本阿彌光遜……………六
- 本田恒之……………三五
- 本間利雄……………四四
- 本間金之助……………四二
- 本田幸介……………五
- 本田岩次郎……………二二
- 本田光太郎……………三二
- 本多静六……………三九
- 本多虎之助……………四八
- 本多忠鋒……………四〇
- 本多德一……………一九
- 本多眞喜雄……………一八
- 本多忠昭……………三三
- 本堂平四郎……………一〇
- 坊城俊良……………三〇
- 本城郡治郎……………二一
- 本間忠……………一七
- 本庄忠治……………三三



第四章とちへ之部

索引

とちへ之部

東郷平八郎	一	德永榮吉	一六	戸水寛人	五	富安謙次	三三
床次竹二郎	五	德見常雄	二五	戸倉惣太郎	一一	富井政章	三
飛田周山	二四	德島清松	一	戸川益男	二五	豊岡圭資	三一
飛山昇治	三七	德田昂平	二〇	戸村理順	一八	豊田信三郎	三六
飛島文吉	一〇	德本良一	二六	戸羽要人	二四	豊田亮太郎	二二
飛島駒吉	二七	遠山元一	二八	富永義孝	三八	豊田佐吉	三〇
徳川義親	一九	遠山郁三	一六	戸羽一	二八	豊田旭穂	四〇
徳川頼貞	八	遠山市郎兵衛	二三	富永政喜	三六	豊泉政吉	二六
徳川家達	一七	戸田甫	一三	富永孝太郎	一四	豊島半七	二九
徳川達孝	九	戸田保	三二	富岡周藏	三六	朝永三十郎	二
徳川義恕	一三	戸田利兵衛	一三	富永茂吉	三二	友枝高彦	二
徳川圀順	二五	戸田榮藏	二四	富永効	三四	伴野乙彌	二一
徳川誠	一四	戸田康保	二六	富田慶之助	二七	外山勘一	二三
徳久次郎	六	戸田虎雄	一七	富田廣雄	四〇	外山捨造	一八
徳大寺則麿	一〇	戸室周而	三三	富田八郎	五	所喜之助	一九
徳大寺實厚	二一	戸澤芳樹	三	富田勇太郎	二九	栃倉正一	三五
徳永保	一八	戸澤民十郎	四	富田彦吉	二七	栃内曾次郎	一一
		戸尾善右衛門	一九	富田貞男	九	外村宇兵衛	二二
				富田重助	六	藤堂高寛	八

梅野明二郎

梅井唯三郎

時任一彦

鳥山武平

鳥海孝太郎

鳥瀉隆三

鳥居邦康

鳥居忠一

利光鶴松

利根川守三郎

土井猶楠

土井慶吉

土井八郎兵衛

土井清次郎

土井重吉

土居保太郎

土岐嘉平

土岐市太郎

土肥脩策

土肥章司

頼宮雄藏

殿岡幸治郎

東胤祿

十時允

長世吉

長義三郎

長藤太

千葉徳太郎

千葉三郎

千葉諒二

千浦友七郎

千葉真一

千野米作

千葉ヶ崎俊治郎

中馬興九

血脇守之助

近山雄尾

近重眞澄

別府總太郎

第五章おを之部

大橋常三郎

大橋新太郎

大橋興市

大橋喜久三

大橋進一

大橋銅造

大橋定文

大橋清吉

大山斐斐磨

大倉恒吉

大倉直介

大倉喜七郎

大倉桑馬

大倉發身

大倉保五郎

大倉邦彦

大倉喜三郎

大西一郎

大西源太郎

大西行禮

大西良輔

大島富士太郎

大島保利

大島要三

大島亨藏

大島義脩

大島小太郎

大島正徳

大城兼義

大林義雄

大林龜松

大林賢四郎

大崎喜八郎

大泉哲

索引

とちへ之部

大堀市治郎……………七七  
 大泉林之丞……………三八  
 大木舜雄……………六四  
 大木又右衛門……………八〇  
 大村信善……………五四  
 大村佳次……………六四  
 大隅清吉……………一〇  
 大隈信常……………二六  
 大隅行一……………九  
 大瀬甚太郎……………七四  
 大塚爲治……………五〇  
 大塚總一郎……………五  
 大塚雄二……………七六  
 大場多市……………八  
 大場武治郎……………六〇  
 大谷正男……………六五  
 大谷彬亮……………四二  
 大谷賢二……………六三  
 大谷仁兵衛……………四三  
 大谷登……………六三  
 大谷竹次郎……………五  
 大谷嘉兵衛……………六七  
 大森辰三郎……………四二  
 大森正吉……………七二  
 大森茂……………八一  
 大柴陸……………六二  
 大原萬壽雄……………四  
 大畑敏太郎……………五一  
 大畑達次郎……………七一  
 大藤高彦……………三  
 大里廣次郎……………二  
 大平陸四郎……………三  
 大久保潜龍……………四七  
 大貫公光……………一一  
 大内英次……………一七  
 大内暢三……………七七  
 大内信……………七四  
 大川平三郎……………六一  
 大川鐵雄……………八二  
 大河内又太郎……………四九  
 大河内輝耕……………四六  
 大河内千代太郎……………四八  
 大井靜雄……………五四  
 大井富太……………一四  
 大井上義近……………七五  
 大熊仁三郎……………四三  
 大熊喜郎……………四〇  
 大澤圭五郎……………六九  
 大澤善夫……………七八  
 大沼萬兵衛……………三六  
 大沼彦吉……………四〇  
 大出常三郎……………七八  
 大石大……………四三  
 大石都太郎……………四二  
 大石繁吉……………四五  
 大和田金之助……………四  
 太田收……………六四  
 太田峰尾……………五三  
 太田信治郎……………四四  
 太田貢……………七五  
 太田政弘……………二一  
 太田稔……………七五  
 太田正孝……………二四  
 太田雅市……………七二  
 太田梅太郎……………一九  
 太田嘉太郎……………二二  
 太中捨三……………六二  
 荻野元太郎……………四〇  
 荻野豊平……………一七  
 荻原勘助……………七九  
 荻野澄敏……………四四  
 尾澤福太郎……………五二  
 尾崎行雄……………一  
 尾崎忠孝……………八二  
 尾崎庄兵衛……………二八  
 尾崎泉之助……………二二

尾高豊作……………五四  
 尾形徳兵衛……………三三  
 尾上梅幸……………三五  
 尾上菊五郎……………三〇  
 緒方勝一……………四九  
 落合嘉五郎……………五六  
 織田信恒……………三三  
 沖島鎌三……………六七  
 及川銀太郎……………一三  
 乙骨半二……………六九  
 乙骨三郎……………三〇  
 乙部融……………三一  
 乙竹仲太……………三四  
 乙宗源次郎……………四二  
 奥田鑛次郎……………五九  
 奥田操……………六八  
 奥田象二……………八〇  
 奥山喜平……………五七  
 奥山春枝……………五〇  
 奥平昌恭……………六八  
 奥住源藏……………二一  
 奥住相次郎……………一七  
 奥谷小太郎……………五八  
 奥村久郎……………一八  
 奥村鹿太郎……………一  
 折井政之丞……………三三  
 折井莊左衛門……………二九  
 折田有彦……………三九  
 折原已一郎……………三五  
 岡谷惣助……………六〇  
 岡田伊太郎……………一九  
 岡田啓介……………六五  
 岡田信一郎……………二二  
 岡田眞平……………三二  
 岡田純次郎……………七九  
 岡田朝太郎……………三五  
 岡田忠彦……………二九  
 岡田昌吉……………二九  
 岡田儀一……………三七  
 岡田温……………三〇  
 岡野文三郎……………五一  
 岡崎久次郎……………三九  
 岡崎一治……………七〇  
 岡崎桂一郎……………七三  
 岡崎邦輔……………二八  
 岡崎國臣……………五一  
 岡崎貞伍……………二六  
 岡崎將次……………六六  
 岡本英太郎……………三八  
 岡本太右衛門……………六三  
 岡本清……………三二  
 岡本武尙……………五二  
 岡本櫻……………五九  
 岡本一平……………二五  
 岡村與助……………六〇  
 岡部吉辰……………五五  
 岡部三郎……………八一  
 岡部忠敏……………五四  
 岡實……………四八  
 岡澤慶三郎……………四五  
 岡信吉……………二三  
 小川璣五郎……………六  
 小川菊造……………六三  
 小川平吉……………一四  
 小川郷太郎……………一六  
 小川契式……………五三  
 小川長右衛門……………七〇  
 小川福二……………五三  
 小川邦孝……………一三  
 小川貞一……………四九  
 小川金治……………二八  
 小川政修……………二五  
 小倉和市……………五七  
 小栗清次郎……………七〇  
 小栗孝三郎……………二七  
 小久江美代吉……………六一

- 小野哲郎……………六五
- 小野義一……………三四
- 小野連三……………五一
- 小野美造……………七五
- 小野鑑正……………一三
- 小野美太郎……………九
- 小野賢次……………五八
- 小野三雄……………一二
- 小野重行……………七一
- 小野喜代吉……………七
- 小野虎助……………三四
- 小野修吉……………七二
- 小野仁三郎……………三五
- 小野彦左衛門……………一一
- 小野喜一郎……………八
- 小野新太郎……………三一
- 小野榮左衛門……………三三
- 小野田益三……………八
- 小野寺章……………六八
- 小野寺直助……………三一
- 小野塚喜平次……………九
- 小能五郎……………一〇
- 小寺謙吉……………三八
- 小熊幸一郎……………二〇
- 小熊正尙……………一九
- 小口融四郎……………二〇
- 小口友龜……………五二
- 小口卷太……………一八
- 小澤久助……………五
- 小澤爲作……………二一
- 小澤正誼……………五九
- 小澤宗平……………二三
- 小澤齋一……………二三
- 小笠原菊次郎……………七
- 小笠原長生……………一
- 小笠原長淳……………七四
- 小笠原長幹……………二三
- 小田高五郎……………二六
- 小田吉治……………二七
- 小田政美……………二八
- 小田久太郎……………六七
- 小田川全之……………二五
- 小田切萬壽之助……………六一
- 小田切磐太郎……………二五
- 小田切良太郎……………二七
- 小誇孝近……………七九
- 小幡鐵介……………二〇
- 小原達明……………二七
- 小曾根貞松……………九
- 小倉房藏……………四六
- 小倉卸太郎……………二九
- 小貫慶治……………四五
- 小瀬虎……………一六
- 小瀧無事郎……………一三
- 小津茂右衛門……………六
- 和田國次郎……………一
- 和田英作……………三
- 和田龜治……………八
- 和田信夫……………二五
- 和田傳太郎……………一五
- 和田忠治……………一四
- 和田嘉衛……………二五
- 和田德次郎……………二
- 和田直兵衛……………一七
- 和田豊種……………二三
- 和田高彦……………二二
- 和田秋之助……………二〇
- 和田歳夫……………七
- 和田喜左衛門……………二三
- 和田德兵衛……………一
- 和田惣八……………五
- 和光米房……………二五
- 和仁貞吉……………二三
- 和合英太郎……………二二

第六章 わ之部

- 渡邊孫一郎……………九
- 渡邊壽……………一〇
- 渡邊千冬……………二七
- 渡邊直次郎……………二三
- 渡邊嘉一……………二〇
- 渡邊鐵藏……………二七
- 渡邊幸造……………一一
- 渡邊又治郎……………二
- 渡邊幸平……………一〇
- 渡邊友次郎……………八
- 渡邊政一郎……………一二
- 渡邊仁三……………二五
- 渡邊雄男……………四
- 渡邊綱吉……………二七
- 渡邊襄……………一三
- 渡邊福三郎……………一二
- 渡邊熊四郎……………一〇
- 渡邊修……………一七
- 渡邊善十郎……………二四
- 渡邊錠太郎……………九
- 渡邊文七……………一〇
- 渡邊龍次郎……………二三
- 渡邊哲二……………二六
- 渡邊信……………四
- 渡邊滿太郎……………六
- 渡邊金之助……………二七
- 渡邊貞助……………五
- 渡邊滿太郎……………二
- 渡邊仁……………一九
- 渡邊篤……………二六
- 渡邊龍夫……………一八
- 渡邊利二郎……………一一
- 渡邊忠壽……………一六
- 渡邊爲藏……………一四
- 渡邊亮平……………六
- 渡邊行太郎……………二二
- 渡邊藤吉……………一七
- 渡邊章……………二二
- 渡邊伊太郎……………一三
- 渡邊俊雄……………二四
- 渡邊勝三郎……………七
- 渡邊勝三郎……………二
- 渡邊吉右衛門……………四
- 渡邊八三郎……………五
- 渡邊亨……………三
- 渡邊治右衛門……………一八
- 渡邊又次郎……………一八
- 若尾幾造……………一八
- 若尾璋八……………六
- 若尾幾太郎……………一六
- 若尾義角……………七
- 若尾謹之助……………二〇
- 若槻禮次郎……………一
- 若井源左衛門……………三
- 若麻積安治……………一五
- 若宮貞夫……………一五
- 若松吉二……………二一
- 若杉種三郎……………四
- 若山庄藏……………一一
- 若林與左衛門……………二一
- 若林彌一郎……………九
- 若旅喜一郎……………二五
- 若目田利助……………八
- 鷺尾德之助……………一四
- 鷺尾勇平……………七
- 鷺尾清太郎……………一六
- 鷺尾健治……………二〇
- 鷺野米太郎……………一九
- 脇野勇……………二四
- 綿貫助次郎……………一九
- 脇清五郎……………一五
- 脇本米司……………一七
- 川崎寛美……………五

第七章 か之部

川崎八右衛門……二八  
 川崎清男……八  
 川崎卓吉……二  
 川崎軍治……六  
 川崎克……二一  
 川崎肇……三七  
 川合芳三郎……二七  
 川合繁一……四一  
 川手忠義……三五  
 川上俊彦……二一  
 川上熊吉……二五  
 川上常郎……三三  
 川路俊徳……五五  
 川部利吉……五三  
 川部孫四郎……七  
 川部爽介……六  
 川勝富三郎……四七  
 川村貞次郎……二三  
 川村鐵太郎……二八  
 川村竹治……一  
 川村正平……九  
 川村桃吾……三二  
 川村免三……四七  
 川村數郎……三二  
 川口酉三……五一  
 川島幸十郎……二一  
 川島慎平……四九  
 川島一一郎……九  
 川島幸三郎……五〇  
 川井源八……一四  
 川田惣一郎……四四  
 川田敬三……二六  
 川田左門次……五三  
 川田仁一郎……一九  
 川野濱吉……五二  
 加藤豐太郎……三一  
 加藤英一……一六  
 加藤敬三郎……三  
 加藤宗太郎……一〇  
 加藤謹之助……一四  
 加藤徳雄……一三  
 加藤桑四郎……三五  
 加藤慶次郎……一四  
 加藤政之助……五  
 加藤八郎右衛門……七  
 加藤正治……二  
 加藤顯次郎……五三  
 加藤勝太郎……三三  
 加藤春熊……五六  
 加藤奎右衛門……九  
 加藤享……一二  
 加藤林藏……五一  
 加藤豊治郎……一一  
 加藤專藏……一九  
 加藤末雄……五〇  
 加藤仙太郎……九  
 加藤兼次郎……三四  
 加藤熊之助……四八  
 加藤鈴三……三六  
 加藤林三郎……三一  
 加藤定吉……四六  
 加藤由太郎……一六  
 加藤武雄……一九  
 加藤金之助……四〇  
 加藤與五郎……一六  
 加藤重正……五六  
 加藤惣松……一九  
 加茂貫一郎……三八  
 加納友之介……三〇  
 嘉納文治……五一  
 加瀬庄治郎……一三  
 加瀬俊一……四九  
 加瀬眞二……五四  
 加島安治郎……八  
 加賀正太郎……一五  
 加賀谷小太……四七

加賀覺次郎……三  
 加賀谷富太郎……五二  
 加地利夫……三四  
 加來惟義……三  
 河合忠次郎……二五  
 河合三郎……一〇  
 河合重三……四四  
 河合貞成……五一  
 河合甚三郎……三〇  
 河合左兵衛……三四  
 河合庄九郎……二七  
 河合彌八……二  
 河井浩……三三  
 河上邦彦……五一  
 河村清兵衛……二三  
 河野誠一……四七  
 河野正義……三一  
 河野光雄……四五  
 河西豊太郎……五五  
 河野二男……五四  
 河路寅三……三二  
 河田源三……三五  
 河津遼……一  
 河内卯兵衛……二四  
 河内守吉……四七  
 神谷卓男……一五  
 神谷健夫……二一  
 神谷雄松……二九  
 神谷福松……四五  
 神谷宇之松……二七  
 神谷太一郎……一八  
 神谷忠雄……一八  
 神足淺三郎……三五  
 神戶久誠……一七  
 神田鐳藏……二七  
 神山政良……三七  
 神山傳兵衛……一三  
 金井重雄……五二  
 金子與四郎……五〇  
 金子徳太郎……四三  
 金子喜代太……三〇  
 金子光利……四一  
 金子登……二二  
 金九二郎……五〇  
 金谷保太郎……三九  
 金谷範三……三一  
 金原信泰……五〇  
 金光庸夫……一六  
 金澤清吉……七九  
 金森徳次郎……二三  
 影島九二作……五三  
 甘庶義邦……三五  
 漢那憲和……三六  
 香山明……一一  
 香山剛毅……五  
 香川景之……二四  
 兼重暗香……四八  
 樫川甚藏……五〇  
 片山正夫……三  
 片山哲……五三  
 片山勝藏……一〇  
 片山謹一郎……二  
 片山正雄……五  
 片倉脩一……四〇  
 片倉武雄……四〇  
 片倉兼太郎……四一  
 片倉直人……四二  
 片倉勝衛……四二  
 片岡眞喜……六  
 片岡直輝……一  
 片岡直温……一九  
 上領直潮……三九  
 上村長……四五  
 勝田銀次郎……七  
 勝田孫彌……五二  
 勝本勘三郎……四

勝又春一……………二二  
 勝正憲……………三三  
 門田實……………四三  
 門野重九郎……………二九  
 門野幾之進……………五二  
 門野鍊八郎……………二二  
 風間八左衛門……………五四  
 樺山愛輔……………二九  
 龜山忠之助……………三五  
 龜割安藏……………三六  
 龜井茲常……………二〇  
 龜井寅雄……………四八  
 龜井正俊……………四九  
 龜井武夫……………二八  
 鎌田豊吉……………四二  
 鎌田榮吉……………二六  
 柏原語六……………四六  
 柏木勘八郎……………一三  
 柏倉榮助……………四三

第八章 たれ之部

柏佐一郎……………四六  
 笠井愛次郎……………二五  
 桂新七……………四八  
 各務謙吉……………二六  
 精谷謙三……………五一  
 各務幸一郎……………一八  
 海江田幸吉……………二九  
 海津一男……………三八  
 海東要造……………五一  
 狩野剛太郎……………四八  
 蛸澤備……………二〇  
 書上文左衛門……………一七  
 柿沼谷藏……………四五  
 柿原徳一……………一八  
 貝島太市……………四九  
 貝島榮四郎……………二〇

田中義一……………二七  
 田中文藏……………二  
 田中千代松……………一七  
 田中新之助……………三三  
 田中鐵三郎……………五一  
 田中良三……………九  
 田中謙……………三七  
 田中長太郎……………四  
 田中孝三郎……………五四  
 田中六藏……………六  
 田中幸吉……………三七  
 田中文七……………一七  
 田中早苗……………四六  
 田中新一郎……………三三  
 田中源兵衛……………三三  
 田中清文……………一  
 田中元七……………二二  
 田中清藏……………三三  
 田中國重……………四

田中傳太……………二九  
 田中次郎……………二六  
 田中岩吉……………四三  
 田中徳次郎……………一七  
 田中新之助……………四三  
 田中芳雄……………二四  
 田中千代松……………四二  
 田中一策……………二二  
 田中淺次郎……………三九  
 田中逸太郎……………一六  
 田中善三郎……………四八  
 田中要太郎……………二五  
 田中長次郎……………二六  
 田丸銀三郎……………四三  
 田丸市衛門……………七  
 田内三吉……………三  
 田内眞隆……………五一  
 田口忠藏……………四  
 田口鏡次郎……………八

田口重一……………一〇  
 田口晋吉……………五二  
 田口百三……………一八  
 田口源七郎……………一九  
 田村榮一……………二〇  
 田村憲造……………二五  
 田村次郎……………三五  
 田村瑞穂……………二八  
 田村英雄……………四五  
 田村久八……………二二  
 田村忠太郎……………二六  
 田村保……………四〇  
 田林喜三郎……………四九  
 田島庄太郎……………七  
 田島久作……………四四  
 田島勝太郎……………二九  
 田邊至……………七  
 田邊加多丸……………五一  
 田邊爲三郎……………一三

たれ之部

田邊武次……………三三  
 田附雄藏……………二七  
 田雜五郎……………四一  
 田附源兵衛……………一四  
 田附竹治郎……………一五  
 田崎周三郎……………三二  
 田崎慎治……………五〇  
 田崎留太……………三五  
 田崎武男……………三六  
 田崎忠恕……………四七  
 田宮嘉右衛門……………一七  
 田宮惣左衛門……………三七  
 田川武雄……………一六  
 高橋是清……………二三  
 高橋貞三郎……………四七  
 高橋是賢……………二二  
 高橋武雄……………四一  
 高橋徳衛……………一六  
 高橋保……………五三

高橋 倅……………四四  
 高橋隆一……………一一  
 高橋義次……………三二  
 高橋是福……………二二  
 高橋正衛……………三三  
 高橋鍊逸……………二二  
 高橋琢也……………四七  
 高木益太郎……………二二  
 高木武……………一一  
 高木庄次郎……………五二  
 高木重兵衛……………七  
 高木謙……………一  
 高木健……………四一  
 高木道之助……………一九  
 高木馨……………一四  
 高木陸郎……………一五  
 高久甚之助……………四二  
 高原照之……………三八  
 高松豊吉……………三三

高杉 晋……………一  
 高際敏彌……………三八  
 高山壽太郎……………二  
 高山繁治……………三八  
 高山永三郎……………五  
 高瀬周也……………四〇  
 高島徹……………五四  
 高島仲右衛門……………二  
 高島久雄……………四五  
 高島七郎右衛門……………六  
 高藤太一郎……………三六  
 高見榮治……………七  
 高川宅次……………三一  
 高田一郎……………二九  
 高田悦三……………一三  
 高田徳佐……………五五  
 高田直之助……………四八  
 團 琢 磨……………三〇  
 竹内兼吉……………一四

- 竹内啓祐……………三四
- 竹内維彦……………一二
- 竹内六藏……………五三
- 竹内友治郎……………五
- 竹内初治郎……………五五
- 竹内悌三郎……………六
- 竹尾治右衛門……………四九
- 竹友安治郎……………六
- 竹下延保……………三五
- 竹下文隆……………四五
- 竹村弟二……………二八
- 竹村利三郎……………一八
- 竹原友三郎……………四九
- 竹岡陽一……………一六
- 竹越與三郎……………二〇
- 武居哲太郎……………三一
- 武井茂……………一一
- 武井覺太郎……………四三
- 武井常助……………一五
- 瀧澤民……………四
- 瀧鼻慶吾……………一八
- 瀧脇宏光……………一四
- 瀧川儀作……………一二
- 瀧川勝二……………五〇
- 瀧村竹男……………一〇
- 瀧田清兵衛……………一四
- 瀧江義信……………四
- 立石信郎……………三四
- 立花小一郎……………二四
- 立花種忠……………三四
- 立原任……………二三
- 太道良太……………二五
- 太宰文藏……………八
- 太宰政夫……………二九
- 財部彪……………五四
- 多木象太郎……………二七
- 多勢正平……………四二
- 多木三真……………二九
- 玉木爲三郎……………三六
- 頼母木桂吉……………一八
- 巽孝之丞……………三
- 俵孫一……………五〇
- 俵精一……………五三
- 建部遜吾……………一
- 丹澤善利……………二五
- 谷村一太郎……………四八
- 谷口守雄……………一五
- 谷正之……………五五
- 谷林徳太郎……………一七
- 谷道耕太郎……………二〇
- 横田秀雄……………二一
- 横田郷助……………九
- 横田成年……………二四
- 横田保兵衛……………八
- 横溝治郎……………三五
- 横堀治三郎……………一七
- 横濱俊……………三七
- 横河民輔……………二九
- 横河大祐……………三九
- 横山金太郎……………一一

第九章よそつ之部

- 横山静術……………三五
- 横山芳松……………一四
- 横山俊二郎……………二二
- 横山勝太郎……………二一
- 横山義三……………三四
- 横山大観……………一
- 横山章……………一四
- 横山信毅……………四
- 横島直彌……………四二
- 横手千代之助……………二〇
- 横關幸三郎……………四二
- 吉田賢龍……………二五
- 吉田脇十郎……………二八
- 吉田義輝……………一九
- 吉田直太郎……………二七
- 吉田敬直……………四
- 吉田榮右……………一二
- 吉田久太郎……………一三
- 吉田茂猪……………三九
- 吉田豊彦……………二六
- 吉田善吉……………四一
- 吉田羊治郎……………二一
- 吉田潤平……………二六
- 吉田泰久……………四一
- 吉田奈良丸……………二三
- 吉村儀兵衛……………二五
- 吉村佐平……………二五
- 吉村萬治郎……………九
- 吉村伊助……………一七
- 吉村惠吉……………一七
- 吉村清尙……………一六
- 吉澤峻三……………一二
- 吉澤一鷹……………一四
- 吉澤絆三郎……………三八
- 吉井勇……………一〇
- 吉井桃磨呂……………一九
- 吉谷専吉……………二〇
- 吉見百藏……………三八
- 吉見静一……………四二
- 吉町太郎……………一三
- 吉野作造……………二三
- 吉野信次……………三四
- 吉野周太郎……………一四
- 吉武榮之進……………一五
- 吉武鶴次郎……………一九
- 吉川安平……………二八
- 吉富璣一……………二三
- 吉川豊助……………二九
- 吉川龜次郎……………二〇
- 吉岡壽男……………三六
- 吉岡郷甫……………一
- 吉植庄一郎……………二七
- 吉島重太郎……………三一
- 由谷義治……………四
- 米井信夫……………一
- 米澤清治……………五
- 米澤與三次……………九
- 米山梅吉……………一四
- 米津政賢……………二四
- 染谷關太郎……………四一
- 園部潜……………二八
- 園部保……………七
- 添田敬一郎……………二三
- 添田滋……………三二
- 副島千八……………二六
- 曾我廻家五一郎……………三二
- 曾我祐邦……………一三
- 曾我部直之進……………四〇
- 曾根安輔……………二一
- 相馬和雄……………三四
- 相馬半治……………三二
- 相馬喜作……………三三
- 坪谷善四郎……………二五
- 祖父江重兵衛……………二二
- 惣田太郎吉……………三二
- 五月女倉藏……………六

- 津山英吉……………三
- 津下紋太郎……………四〇
- 津村重舍……………三〇
- 津村英三郎……………六
- 津谷一治郎……………三三
- 津田今朝二……………五
- 津田毅一……………六
- 津島源右衛門……………五
- 津島徳三郎……………三
- 津端道彦……………一〇
- 堤友次郎……………二
- 堤定次郎……………一八
- 堤清六……………二
- 堤康次郎……………一八
- 堤正義……………一五
- 土屋倫啓……………七
- 土屋大吉……………三六
- 土屋啓造……………三一
- 土屋興……………一七
- 土屋清三郎……………七
- 土井林吉……………二
- 筒井正彦……………三七
- 常田治平……………七
- 椿宣次……………三九
- 辻川瀧之助……………三一
- 辻太郎……………三〇
- 辻湊……………一六
- 鶴森龜藏……………二八
- 鶴見勇……………四〇
- 鶴見左吉雄……………三五
- 都築甚之助……………四
- 次田大三郎……………二九
- 角田正喬……………八
- 角田邦松……………三二
- 對馬二郎……………一六
- 月田藤三郎……………二九
- 塚本靖……………二六
- 塚原政次……………三
- 中村信治……………一五
- 中村不折……………一四
- 中村啓次郎……………一七
- 中村巍……………三〇
- 中村芳治……………四六
- 中村梅太郎……………一九
- 中村峯吉……………三四
- 中村圓一郎……………一六
- 中村房次郎……………五二
- 中村精男……………三一
- 中村林盛……………三三
- 中村喜七……………四八
- 中村達太郎……………五一
- 中村幸之助……………四七
- 中村利三郎……………四九
- 中村雄次郎……………二八
- 中村庄吉……………八
- 中村三郎……………一五
- 中村庸一郎……………三六
- 中村忠三郎……………三〇
- 中村金太郎……………四三
- 中村芳三……………一七
- 中村貫之……………五三
- 中村貫一郎……………一三
- 中野正剛……………五〇
- 中野喜三郎……………二四
- 中野鐵平……………五〇
- 中野勇次郎……………二三
- 中野長吉……………五三
- 中野四郎太……………五三
- 中野金次郎……………二九
- 中野貫一……………四七
- 中野寅吉……………一七
- 中野寅次郎……………二一
- 中川末吉……………一九
- 中川清……………四四

第十章 なわ之部

- 中川久任……………一〇
- 中川正左……………二八
- 中川十一郎……………四〇
- 中川小十郎……………一九
- 中川登代吉……………四六
- 中川孝太郎……………二〇
- 中井永一……………一九
- 中井勵作……………二一
- 中井新右衛門……………七
- 中原市五郎……………二七
- 中内松次……………五三
- 中原岩三郎……………二七
- 中谷貞頼……………五二
- 中橋徳五郎……………二二
- 中山千太郎……………三八
- 中山源治……………一七
- 中山福太郎……………三三
- 中山平次郎……………五
- 中山政吉……………三七
- 中山說太郎……………一〇
- 中山岨三……………三四
- 中山輔親……………二七
- 中澤彦七……………五四
- 中島久萬吉……………二二
- 中島司……………五四
- 中島玉吉……………三
- 中島彌圓次……………五五
- 中島宇三郎……………七
- 中島集……………三一
- 中小路與兵治……………二
- 中江要助……………四〇
- 中江種造……………一四
- 中倉專一郎……………四五
- 中目覺……………一五
- 中西伸次……………三五
- 中西嘉三郎……………三七
- 中田清兵衛……………一三
- 中田登之……………三九
- 中塚榮次郎……………二六
- 中田熊次……………五二
- 仲萬次郎……………三一
- 鳴海文四郎……………四四
- 鳴海周次郎……………一三
- 長田幹彦……………二
- 長島新藏……………四一
- 長島鐵之助……………五五
- 長瀬鳳輔……………二二
- 長滿欽司……………四〇
- 長峰與一……………二二
- 長井長義……………四一
- 長與又郎……………二六
- 長井亞歷山……………四一
- 長岡外史……………一六
- 永井茂彌……………四九
- 長久伊勢吉……………一五
- 長野英造……………四三
- 長尾美知……………一八
- 那波齋治……………四
- 永尾文吉……………三二
- 永田秀次郎……………一一
- 永田良吉……………三六
- 永田吉衛……………三一
- 永田成美……………四三
- 永田善三郎……………二二
- 永田信一……………三二
- 永田兵三郎……………三三
- 永田新之允……………一一
- 永井直邦……………四八
- 永井當清……………八
- 永井就一……………四九
- 永井繁……………五五
- 永井柳太郎……………七
- 永原伸雄……………三三
- 永瀬庄吉……………七
- 永山武敏……………三五
- 奈良武次……………二五

第十一章むら之部

成富信夫	四二	名取和作	三	村上元紀	一四
成清信愛	五四	名取忠愛	五	村上敬次郎	七
成田倉吉	二二	今歸仁朝英	五〇	村井吉兵衛	七
成瀬	三四	直木倫太郎	一	村井四郎	二二
成瀬正恭	九	直木政之介	二	村井貞之助	五
成瀬正忠	五一	内藤義清	三九	村井禎造	一四
成瀬正行	五一	内藤勝藏	八	村井三治	四
南部常次郎	一八	内藤確介	五三	村井昌八	六
南部麒次郎	六	内藤政雄	五二	村尾重孝	一三
南日恒太郎	五一	夏秋十郎	九	村瀨九郎右衛門	七
南部修三	五	七海兵吉	二五	村松舜祐	一〇
南郷三郎	五〇	根津甚平	一〇	村松秀藏	二
南波禮吉	四	根津啓吉	三一	村松恒一郎	四
南條金雄	一	根岸鐵太郎	三八	村岡範爲馳	八
鍋島直映	四五	根岸耕一	二六	村岡藤太郎	二
鍋島直繩	二四	根岸吉之助	二三	村越藤三郎	一
鍋島直明	三〇	根尾宗四郎	五	村木政太郎	一三
七邊格太郎	四二	根本祐太郎	一一	村木正憲	一
名川侃市	六			村山龍平	五

第十二章う之部

村尾 榮	九	上野平一郎	三八	上田 實	二〇	梅垣 料	三〇
牟田易太郎	一五	上野午之助	一五	上田市治郎	二三	梅岡平七	二五
向山庄太郎	二	上野兵松	一四	上田兵吉	一九	潮 惠之輔	一六
向山軍二郎	一〇	上野金太郎	六	上田 晃	五	漆 昌 巖	二六
向井又吉	一〇	上野正雄	二〇	上田彌兵衛	二一	漆 原 正	二七
向井藤左衛門	五	上野初太郎	一一	上杉慎吉	四	卜部直輔	一四
武藤信義	一	上野山重太夫	一六	上松泰正	三	右近權左衛門	一八
武藤山治	三	上原勇作	三	植村克巳	二	右近和作	二二
武藤互三	一	上原才一郎	五	植村澄三郎	三	瓜生外吉	一九
武藤茂平	七	上原敬二	三四	植原悦二郎	二二	瓜生 通	二七
武藤三枝	一一	上原鹿造	一	植松良三	二三	瓜生 治	一五
武藤虎太	三	上原菊之助	八	植木萬里	二八	瓜生 正	二九
宗田哲夫	一一	上田貞次郎	五	植 場 平	一七	牛塚虎太郎	一七
室木彌次郎	三	上田萬年	一六	梅浦健吉	九	生方大吉	一四
		上田勘兵衛	二三	梅津周作	二九	白倉平十郎	三一
		上田 卓	九	梅澤惠三郎	二五	白田有信	一八
		上田 誠	三七	梅田重次郎	二九	有働良夫	八
		上田宗雄	一三	梅村惣之助	八	鵜飼照太	三六
		上田良武	三〇	梅村貞明	二一	鵜澤宇八	九



- 鶴澤總明……………一八
- 鳥賀陽然良……………二三
- 宇佐川一正……………二〇
- 宇佐美勝夫……………二
- 宇佐美薰次……………二五
- 宇井孝三……………四
- 宇木素絢……………三八
- 宇垣一成……………一〇
- 宇川雄太郎……………一三
- 宇川濟……………二六
- 宇野朗……………二二
- 宇野澤辰次……………三三
- 宇野要三郎……………二二
- 宇野友義……………三五
- 宇野三郎……………二八
- 宇野哲人……………二三
- 宇田友四郎……………一七
- 宇田尙……………二四
- 宇田川啓輔……………二二
- 宇田川清三良……………一五
- 宇津木喜一……………一〇
- 宇都宮綱久……………三〇
- 裏松友光……………一七
- 宇都野研……………二四
- 浦上次郎……………三七
- 浦口一太郎……………一七
- 浦口善爲……………六
- 浦田竹次郎……………三三
- 浦田清造……………二二
- 浦田久吉……………二〇
- 浦山助太郎……………三七
- 浦邊襄夫……………一〇
- 浦野謙朗……………七
- 浦野數馬……………三六
- 海野浩太郎……………三二
- 内田虎三郎……………七
- 内田政夫……………三四
- 内田嘉吉……………一
- 内田德郎……………二七
- 内田恒太郎……………九
- 内田康哉……………一
- 内田勇太郎……………一九
- 内田良平……………二四
- 内田清……………一六
- 内田隆……………二六
- 内田信也……………二二
- 内村達次郎……………三六
- 内ヶ崎作三郎……………七
- 内山丑太郎……………二二
- 内山道郎……………三一
- 内山英保……………二五
- 内山敬三郎……………三三
- 内山安兵衛……………三三
- 内山熊八郎……………三三
- 内山松世……………二
- 内山好十……………一〇
- 内野辰次郎……………四
- 内野五郎三……………一八
- 内海勝二……………一一
- 内海長太郎……………二三
- 内池廉吉……………一一
- 内池三十郎……………一五
- 内丸最一郎……………一四
- 久保健磨……………四
- 久保勇……………一三
- 久保信之……………一六
- 久保直吉……………二三
- 久保田鼎……………一六
- 久保正助……………三
- 久保素……………二六
- 久保猪之吉……………一四
- 久保田庄左衛門……………二
- 久保山武夫……………二〇

第十三章く之部

- 久原房之助……………八
- 久米寛三……………六
- 久米正雄……………一
- 久米作藏……………二一
- 久良知重治……………九
- 久良知重彦……………一
- 久野茂……………二〇
- 久野義磨……………二四
- 久我金三郎……………一
- 黒川新次郎……………一七
- 黒川健藏……………二四
- 黒川善一……………二一
- 黒川幹太郎……………一九
- 黒金泰義……………一五
- 黒田善太郎……………四
- 黒田長成……………一四
- 黒田長禮……………二二
- 黒田長和……………一五
- 黒田清秀……………一八
- 黒岩岩太郎……………一一
- 黒岩常平……………一〇
- 黒板勝美……………一三
- 黒板傳作……………二七
- 黒住成章……………一四
- 工藤善助……………一二
- 工藤十三雄……………一〇
- 工藤鐵男……………八
- 栗栖末人……………二六
- 栗田淳一……………二五
- 栗原廣太……………八
- 栗原幸藏……………二
- 栗原基……………四
- 栗原作太郎……………一六
- 栗原条吉……………一三
- 草間時光……………二五
- 草場九十九……………三
- 草野順平……………一八
- 九條道實……………七
- 九鬼千代治……………五
- 九鬼隆治……………一四
- 九鬼周造……………二六
- 九原莊吉……………一二
- 桑木盛雄……………六
- 桑木嚴翼……………一
- 桑田透一……………七
- 桑田熊藏……………六
- 群司佐十郎……………一一
- 葛谷貞之……………二一
- 倉富勇三郎……………二六
- 倉富鈞……………二二
- 倉知鐵吉……………九
- 倉本彦五郎……………二三
- 倉元要一……………二〇
- 倉田龜吉……………二七
- 吳秀三……………一〇
- 窪田源一郎……………二五
- 窪田駒吉……………二二
- 窪田四郎……………五
- 日下部金三郎……………一八
- 日下部辨二郎……………一七
- 熊本石造……………二三
- 熊野芳太郎……………二〇
- 熊谷五右衛門……………一七
- 熊谷直太……………一八
- 熊谷巖……………一九
- 國井磯吉……………二七
- 國枝謙……………九
- 國枝元治……………七
- 國重政亮……………九
- 朽木綱貞……………二〇
- 窪田四郎……………五
- 日下部金三郎……………一八
- 日下部辨二郎……………一七
- 熊本石造……………二三
- 熊野芳太郎……………二〇
- 熊谷五右衛門……………一七
- 熊谷直太……………一八
- 熊谷巖……………一九
- 國井磯吉……………二七
- 國枝謙……………九
- 國枝元治……………七
- 國重政亮……………九
- 朽木綱貞……………二〇
- 第十四章や之部
- 山田克吉……………一五
- 山田足穂……………四
- 山田三真……………二三

山田馬次郎……………四一  
 山田昌吉……………二六  
 山田三次郎……………二三  
 山田三郎……………二四  
 山田寅次郎……………一六  
 山田陸槌……………二  
 山田忍三……………五二  
 山田穆……………一四  
 山田彌八郎……………一一  
 山田鐵郎……………五〇  
 山田敏行……………二四  
 山田道兄……………二二  
 山田新之助……………五〇  
 山田藤次郎……………一四  
 山田浩堂……………二七  
 山田玄太郎……………一一  
 山田耕作……………追加  
 山田耕作……………三〇  
 山田惠一……………一〇

山田復之助……………五  
 山田一……………二  
 山田爲榮……………二六  
 山本惣治……………一〇  
 山本象吉……………五三  
 山本象太郎……………二一  
 山本庄吉……………四四  
 山本悌二郎……………二六  
 山本勘助……………四〇  
 山本達雄……………二七  
 山本吉太郎……………三五  
 山本利譽……………五二  
 山本厚三……………八  
 山本竹次郎……………三五  
 山本讓……………四七  
 山本敬藏……………二七  
 山谷德治郎……………四六  
 山谷太郎……………四八  
 山崎達之輔……………三一

山崎龜吉……………二二  
 山崎和三郎……………三六  
 山崎覺次郎……………二八  
 山崎四男六……………九  
 山口福則……………三七  
 山口政二……………二九  
 山口作之助……………三三  
 山口八左右……………二九  
 山口勇太郎……………三二  
 山口經治……………四六  
 山口喜三郎……………一六  
 山口久吉……………三七  
 山口宗義……………一一  
 山口篤三郎……………五〇  
 山口保三郎……………八  
 山口恒太郎……………四八  
 山內確三郎……………三  
 山內元平……………一二  
 山內恭治……………三八

山內豐景……………二四  
 山內多門……………四  
 山上曹源……………四三  
 山川端夫……………二〇  
 山川健次郎……………一一  
 山下谷次……………一五  
 山下恒雄……………四四  
 山下熊太郎……………六  
 山下龜三郎……………二〇  
 山越爲次郎……………四九  
 山縣伊三郎……………二五  
 山縣政尾……………四六  
 山縣猛彥……………三  
 山代泰……………五三  
 山星德太郎……………一八  
 山梨半造……………五  
 山脇雄三郎……………二  
 山脇房……………五四  
 山上利……………二六

山根成一……………三三  
 山添平作……………三〇  
 山岸慶之助……………一六  
 山岸巖……………二一  
 山地主佐太郎……………二五  
 山城高興……………四〇  
 山道襄一……………二九  
 山岡直記……………二二  
 山邊宗四郎……………一六  
 山中彦兵衛……………七  
 山中定次郎……………三七  
 山中紀三郎……………三  
 山中勇……………四〇  
 安田善次郎……………一  
 安田善四郎……………二  
 安田善五郎……………三  
 安田祿造……………四一  
 安田善助……………四  
 安田善三郎……………五

安田孝一……………三三  
 安田善兵衛……………六  
 安田昌昌……………一〇  
 安井誠一郎……………五三  
 安川隆治……………六  
 安川雄之助……………一三  
 安場末喜……………四三  
 安廣伴一郎……………七  
 安岡秀夫……………一〇  
 矢島信夫……………四二  
 矢木久太郎……………一七  
 矢島慧……………三四  
 矢板寛……………三二  
 矢作榮藏……………一  
 矢吹省三……………四九  
 矢吹貞夫……………五四  
 矢部吉貞……………二一  
 矢部六三郎……………二一  
 矢田續……………五四

矢村克……………二〇  
 矢野時二郎……………一八  
 矢野恒太……………二八  
 矢野晋也……………七  
 矢野目孫一……………一九  
 矢本平之助……………四八  
 矢橋賢吉……………二八  
 矢島榮助……………一七  
 矢吹友右衛門……………一  
 野牛道弘……………三五  
 梁田鐵太郎……………一八  
 八尾珪之助……………五一  
 梁田欽次郎……………一三  
 梁瀬長太郎……………二二  
 梁瀬泰藏……………二〇  
 敷内幸太郎……………一八  
 八尾新太郎……………四五  
 八木與三郎……………二七  
 八木太四郎……………三三

八木林作……………三〇  
 八木哲……………三四  
 八木宗十郎……………二三  
 八卷升次……………四五  
 八坂三治……………二五  
 八百谷順應……………三六  
 八並武治……………九  
 八代則彦……………二三  
 八幡恭助……………四七  
 八杉貞利……………三二  
 柳井松祐……………五一  
 柳原義光……………一三  
 柳澤德忠……………五二  
 柳澤保惠……………一九  
 柳澤德鄰……………四五  
 柳澤光治……………八  
 柳谷巳之助……………一二  
 柳谷酉三……………九  
 柳谷卯三郎……………一四

柳 廣藏……………一七  
 柳 生俊久……………一四  
 柳 田諒三……………一九  
 松浦寅三郎……………四二  
 松浦 厚……………一  
 松浦 勇……………一四  
 松村菊勇……………三四  
 松村義一……………五  
 松村光三……………二五  
 松村大進……………三六  
 松村孫兵衛……………二八  
 松村逸雄……………四一  
 松村 昇……………一七  
 松邑孫吉……………四三  
 松井兵三郎……………二二  
 松井萬錄……………一〇  
 松井康昭……………  
 松井清足……………三二  
 松井貴太郎……………三七  
 松井敏之……………一八  
 松井喜三郎……………一六  
 松井文太郎……………六  
 松井春生……………四三  
 松井元興……………一九  
 松井三治郎……………一  
 松永和一郎……………四一  
 松永安左衛門……………一一  
 松永天章……………三五  
 松永正雄……………一九  
 松長規一郎……………三六  
 松長善熙……………二六  
 松山陽太郎……………九  
 松山爲章……………三九  
 松山常次郎……………二三  
 松本重威……………一一  
 松本忠雄……………六  
 松本福松……………四一  
 松本繁吉……………一二  
 松本市左衛門……………四四  
 松本眞平……………二九  
 松本順吉……………二一  
 松本喜一……………三三  
 松本留吉……………一九  
 松崎了四郎……………四二  
 松崎半三郎……………四  
 松下保次郎……………三九  
 松下勝三郎……………一七  
 松戸左中……………三八  
 松江春次……………七  
 松林桂月……………二八  
 松代松之助……………三七  
 松代安太郎……………三一  
 松瀬勇雄……………四三  
 松前定五郎……………二  
 松坂政治郎……………二〇  
 松 尾 光……………四四  
 松尾喜七……………二七  
 松尾吉士……………一五  
 松尾小三郎……………六

第十五章 まけ之部

松方幸次郎……………二〇  
 松方五郎……………二九  
 松方正雄……………二〇  
 松方正熊……………一四  
 松方義輔……………三一  
 松平齋光……………四二  
 松平康昌……………四〇  
 松平慶民……………二六  
 松平忠諒……………四四  
 松平直徳……………二  
 松平康莊……………二五  
 松浦鎮次郎……………一〇  
 松浦 積……………二  
 松方幸次郎……………二〇  
 松方五郎……………二九  
 松方正雄……………二〇  
 松方正熊……………一四  
 松方義輔……………三一  
 松平齋光……………四二  
 松平康昌……………四〇  
 松平慶民……………二六  
 松平忠諒……………四四  
 松平直徳……………二  
 松平康莊……………二五  
 松浦鎮次郎……………一〇  
 松浦 積……………二  
 松井文太郎……………六  
 松井春生……………四三  
 松井元興……………一九  
 松井三治郎……………一  
 松永和一郎……………四一  
 松永安左衛門……………一一  
 松永天章……………三五  
 松永正雄……………一九  
 松長規一郎……………三六  
 松長善熙……………二六  
 松山陽太郎……………九  
 松山爲章……………三九  
 松山常次郎……………二三  
 松本重威……………一一  
 松本忠雄……………六  
 松本福松……………四一  
 松本繁吉……………一二  
 松本市左衛門……………四四  
 松本眞平……………二九  
 松本順吉……………二一  
 松本喜一……………三三  
 松本留吉……………一九  
 松崎了四郎……………四二  
 松崎半三郎……………四  
 松下保次郎……………三九  
 松下勝三郎……………一七  
 松戸左中……………三八  
 松江春次……………七  
 松林桂月……………二八  
 松代松之助……………三七  
 松代安太郎……………三一  
 松瀬勇雄……………四三  
 松前定五郎……………二  
 松坂政治郎……………二〇  
 松 尾 光……………四四  
 松尾喜七……………二七  
 松尾吉士……………一五  
 松尾小三郎……………六

松木幹一郎……………二二  
 松木才二……………三五  
 松田福一郎……………二七  
 松田三徳……………二六  
 松田源治……………一五  
 松田四郎……………二〇  
 松田登三郎……………二三  
 松岡俊三……………一  
 松岡均平……………一七  
 摩壽意善太郎……………八  
 榎 武……………一三  
 榎 哲……………一六  
 益岡章太郎……………四四  
 益 田 孝……………三四  
 益田太三郎……………二六  
 益田貫一……………三二  
 益田信吉……………二九  
 益田太郎……………四二  
 益田信世……………八  
 益谷太助……………一五  
 増田正雄……………四九  
 増田善兵衛……………一六  
 増田義一……………四五  
 増田 侃……………一三  
 増田次郎……………一八  
 増山外次郎……………三六  
 増山金次郎……………四二  
 馬渡俊雄……………三七  
 馬越恭平……………二一  
 馬淵鋭太郎……………四三  
 牧野與吉……………三九  
 牧 田 環……………二二  
 眞木平一郎……………五  
 眞崎 誠……………三〇  
 眞崎甚三郎……………三  
 眞殿理吉……………三〇  
 的場覺藏……………八  
 丸山健治……………三四  
 丸山五郎……………九  
 丸瀬虎雄……………一三  
 丸茂平兵衛……………二四  
 又木周夫……………二一  
 前川一郎……………四四  
 前田利定……………四  
 前 田 一……………三三  
 前田青莎……………四四  
 前田利爲……………二三  
 前田利功……………一八  
 前田一樓……………一六  
 前田珍男子……………二二  
 前田米藏……………三二  
 前 島 彌……………三〇  
 町田忠治……………二四  
 町田唯介……………三五  
 町田咲吉……………九  
 町田傳七……………二四  
 町田豊千代……………二七  
 榎谷音之松……………七  
 升本喜龍……………五  
 升 作 平……………四  
 升田定次……………四  
 政岡徳兵衛……………五  
 正木直彦……………三三  
 萬田策郎……………三  
 萬年九平……………三  
 間淵榮一郎……………二九  
 榎 武……………一三  
 榎 哲……………一六  
 益岡章太郎……………四四  
 益 田 孝……………三四  
 益田太三郎……………二六  
 益田貫一……………三二  
 益田信吉……………二九  
 益田太郎……………四二  
 益田信世……………八  
 益谷太助……………一五  
 増田正雄……………四九  
 増田善兵衛……………一六  
 増田義一……………四五  
 増田 侃……………一三  
 増田次郎……………一八  
 増山外次郎……………三六  
 増山金次郎……………四二  
 馬渡俊雄……………三七  
 馬越恭平……………二一  
 馬淵鋭太郎……………四三  
 牧野與吉……………三九  
 牧 田 環……………二二  
 眞木平一郎……………五  
 眞崎 誠……………三〇  
 眞崎甚三郎……………三  
 眞殿理吉……………三〇  
 的場覺藏……………八  
 丸山健治……………三四  
 丸山五郎……………九  
 丸瀬虎雄……………一三  
 丸茂平兵衛……………二四  
 又木周夫……………二一  
 前川一郎……………四四  
 前田利定……………四  
 前 田 一……………三三  
 前田青莎……………四四  
 前田利爲……………二三  
 前田利功……………一八  
 前田一樓……………一六  
 前田珍男子……………二二  
 前田米藏……………三二  
 前 島 彌……………三〇  
 町田忠治……………二四  
 町田唯介……………三五  
 町田咲吉……………九  
 町田傳七……………二四  
 町田豊千代……………二七  
 榎谷音之松……………七  
 升本喜龍……………五  
 升 作 平……………四  
 升田定次……………四  
 政岡徳兵衛……………五  
 正木直彦……………三三  
 萬田策郎……………三  
 萬年九平……………三  
 間淵榮一郎……………二九

第十六章 ふの部

藤 田 讓……………三二  
 藤田好三郎……………四四  
 藤田平太郎……………六  
 藤田包助……………七  
 藤田義保……………四一  
 藤田謙一……………三一  
 藤田茂一郎……………三〇  
 榎谷音之松……………七  
 升本喜龍……………五  
 升 作 平……………四  
 升田定次……………四  
 政岡徳兵衛……………五  
 正木直彦……………三三  
 萬田策郎……………三  
 萬年九平……………三  
 間淵榮一郎……………二九  
 藤 田 讓……………三二  
 藤田好三郎……………四四  
 藤田平太郎……………六  
 藤田包助……………七  
 藤田義保……………四一  
 藤田謙一……………三一  
 藤田茂一郎……………三〇

藤田政輔……………三三  
 藤田徳次郎……………二七  
 藤原喜代藏……………二七  
 藤原銀次郎……………二八  
 藤岡茂太郎……………三九  
 藤岡玄徳……………四〇  
 藤井宏基……………二八  
 藤井靖夫……………四四  
 藤井善助……………一  
 藤井林右衛門……………三六  
 藤井眞信……………四一  
 藤井卯之助……………八  
 藤山雷太……………二五  
 藤山常一……………二六  
 藤正純……………三六  
 藤沼庄平……………二五  
 藤瀬新一郎……………三九  
 藤瀬政治郎……………七  
 藤木清太郎……………三七

ふの之部  
 藤島範平……………五  
 藤平兼吉……………一三  
 藤平謙一郎……………一七  
 藤浪 鑑……………二五  
 藤村義苗……………九  
 藤村義郎……………七  
 藤崎三郎助……………二五  
 福原録二郎……………二一  
 福原俊丸……………九  
 福原八郎……………三  
 福島眞澄……………一五  
 福島行信……………一〇  
 福島禎藏……………三二  
 福島儉三……………一一  
 福永文之助……………二  
 福岡秀猪……………二二  
 福岡喜久治……………三一  
 福本常太郎……………三三  
 福井策三……………二九

福井源次郎……………四二  
 福井菊三郎……………一一  
 福田繼治郎……………三一  
 福田五郎……………三七  
 福田敬藏……………三二  
 福田喜一郎……………三七  
 福田俊夫……………三三  
 福喜多靖之助……………四一  
 福澤一太郎……………三二  
 福澤駒吉……………八  
 福澤桃介……………九  
 深井英五……………一三  
 深井 功……………五  
 深見太郎右衛門……………一〇  
 深川喜次郎……………二二  
 深川伍一……………一〇  
 深尾隆太郎……………二六  
 古谷三四郎……………三  
 古河虎之助……………二四

古河久太夫……………一九  
 古川義天……………二九  
 古川長四郎……………二九  
 古橋久三……………一五  
 古屋儀近……………四〇  
 古屋徳兵衛……………一四  
 古井由之……………二三  
 古田眞道……………三六  
 古田慶三……………三一  
 古田俊之助……………三五  
 古田醇治郎……………一四  
 古田宗二郎……………四三  
 古澤文作……………一四  
 古武彌四郎……………二二  
 二神駿吉……………三  
 二見甚郷……………四三  
 二木謙三……………二〇  
 二荒芳徳……………二二  
 二上兵治……………二三

船津敬太郎……………一五  
 船津貞三……………一九  
 船尾榮太郎……………一七  
 舟越楫四郎……………一八  
 布施現之助……………二八  
 布施慶助……………一  
 降旗元太郎……………二  
 降矢芳郎……………一五  
 能美輝一……………二〇  
 能見愛太郎……………一六  
 野原今朝平……………三九  
 野村禮讓……………三  
 野村 健……………一七  
 野村徳七……………二〇  
 村野大五郎……………三五  
 野村雪江……………六  
 野村慶二……………三八  
 野村治三郎……………二一  
 野村三五郎……………三八

野村嘉六……………四  
 野村清臣……………三四  
 野村龍太郎……………一一  
 野村元五郎……………三八  
 野村益三……………二四  
 野村 徳……………二三  
 野木三吉……………三四  
 野間清治……………四  
 野間五造……………二七  
 野口修三……………三五  
 野口長次郎……………一  
 野口雅雄……………四〇  
 野口彌三……………三二  
 野尻清彦……………四二  
 野津鎮之助……………二七  
 野並龜治……………四三  
 野呂駿三……………一三  
 野上啓治……………四四  
 野上菊太郎……………二一

野中寅助……………一八  
 野崎廣助……………三四  
 野崎新太郎……………八  
 野崎信一郎……………四三  
 野々村金五郎……………二二  
 野田俊作……………三〇  
 野田啓太郎……………一六  
 野田正一……………二  
 登坂秀興……………一九

第十七章 こえ之部  
 小林恒一郎……………二  
 小林嘉平治……………二三  
 小林正直……………二四  
 小林増作……………三三  
 小林榮吉……………一五  
 小林武次郎……………一一  
 小林武……………四〇

小林 暢……………二四  
 小林福太郎……………五〇  
 小林幸太郎……………三一  
 小林富藏……………九  
 小林又七郎……………四五  
 小林洋之助……………五  
 小林一三……………五一  
 小林逸作……………二六  
 小林房次郎……………四六  
 小林武彦……………八  
 小林久七……………一〇  
 小松傳一郎……………四八  
 小松重就……………三三  
 小松 茂……………四八  
 小松留太……………四一  
 小松輝久……………二五  
 小西文次郎……………四〇  
 小西幸助……………八  
 小西榮三郎……………二七

- 小西新右衛門……………一七
- 小池忠一……………四九
- 小池義一……………三七
- 小池厚之助……………六
- 小池靖一……………二四
- 小布施新三郎……………四五
- 小池利久八……………一五
- 小久保時之助……………四四
- 小山榮達……………二〇
- 小山忠明……………四三
- 小山松壽……………四
- 小山五郎……………四六
- 小山忠太郎……………一四
- 小柴大輔……………三〇
- 小柴卯之七……………二九
- 小出收……………二三
- 小出範治郎……………五
- 小屋良吉……………三七
- 小平浪平……………四二
- 小平三郎……………九
- 小島利助……………三〇
- 小島周次郎……………五〇
- 小島七郎……………一六
- 小城徳太郎……………三八
- 小鹽八郎右衛門……………二六
- 小橋一太……………一九
- 小宮次郎……………四三
- 小室翠雲……………一
- 小室利吉……………一五
- 小間千代松……………三二
- 小久保喜七……………一八
- 小坂靈明……………三八
- 小坂順造……………二二
- 小谷節夫……………三八
- 小泉又次郎……………二三
- 小泉策太郎……………三二
- 小谷野傳藏……………三九
- 小高長三郎……………一三
- 小長谷憲孝……………三五
- 小日向定次郎……………一六
- 小神野道風……………四九
- 小風亥真穂……………一八
- 幸塚善五郎……………三七
- 古西爲之助……………一四
- 古在由直……………六
- 古賀勘四郎……………二二
- 古賀善兵衛……………八
- 近藤履吉……………四六
- 近藤文麿……………三
- 近藤末一……………三四
- 近藤友次郎……………二一
- 近藤榮助……………三四
- 近藤三郎……………二七
- 近藤賢二……………一四
- 近藤進一郎……………四一
- 近藤達兒……………二五
- 近藤明道……………四七
- 近伊左衛門……………九
- 木槍三四郎……………一一
- 木場貞一郎……………四四
- 木場貞長……………二三
- 後藤信治……………二七
- 後藤清郎……………四八
- 後藤五作……………二一
- 後藤仙太郎……………三五
- 後藤市藏……………二七
- 後藤正堯……………五〇
- 後藤武夫……………四
- 郷古潔……………四七
- 郷誠之助……………四
- 郷朔雄……………四〇
- 兒玉右二……………二五
- 兒玉一造……………五一
- 兒玉秀雄……………二二
- 兒玉豊紀……………四四
- 兒玉謙次……………二八

- 兒島富雄……………二二
- 五島駿吉……………一二
- 鴻田秀一……………四五
- 鴻池善右衛門……………一
- 神津藤平……………二〇
- 榎本初五郎……………三〇
- 榎原龜次……………二六
- 江木翼……………二一
- 江口理三郎……………一七
- 江口駒之助……………四二
- 江口熊一……………七
- 江森増太郎……………五一
- 江島廉太郎……………六
- 江藤玄三……………四一
- 江藤甚三郎……………二六
- 江角泰助……………一
- 江波戸善次郎……………一六
- 江草重忠……………五一
- 江澤金五郎……………七
- 戎野喜太郎……………一三
- 永瀧久吉……………一〇
- 遠藤讓輔……………二九
- 遠藤吉次郎……………二五
- 遠藤五一郎……………二一
- 遠藤嘉右衛門……………一八
- 海老原直太……………三二
- 海老原介太郎……………二〇
- 海老名禪正……………一九
- 第十八章あて之部
- 有島健助……………一八
- 有住榮之助……………五〇
- 有馬頼寧……………一七
- 有馬淺雄……………四
- 有馬純文……………二
- 有吉忠一……………九
- 有賀長博……………三九
- 有賀光豊……………一
- 秋本喜七……………三
- 秋本岩吉……………二六
- 秋山正八……………八
- 秋山高……………五四
- 秋山襄……………一九
- 秋場喜造……………一七
- 秋場達人……………一五
- 秋田直吉……………二五
- 秋田清……………一八
- 秋田源七……………三五
- 秋保安治……………二六
- 秋元正一郎……………四五
- 秋元政司……………三五
- 青木徹二……………二八
- 青木清太郎……………五二
- 青木知四郎……………一
- 青木享……………二一
- 青木周太郎……………四〇
- 青木辰喜……………一二
- 青木鏡太郎……………三九
- 青六信光……………五
- 青木平次郎……………三〇
- 青木一男……………四六
- 青木才次郎……………二六
- 青木鐵太郎……………二五
- 青山惣吉……………二二
- 青山嶽次郎……………四八
- 青山録郎……………一五
- 青柳一太郎……………九
- 安達謙藏……………一
- 安達堅造……………四四
- 安東龍吾……………一三
- 安東藤太郎……………八
- 安藤正純……………三一
- 安藤浩……………三八
- 安藤忠助……………三二
- 安藤則光……………三三

- 安藤廣太郎……………二〇
- 安藤榮藏……………二五
- 安久津庄七……………二
- 安樂榮治……………三一
- 安部幸之助……………五
- 阿南惟一……………三六
- 阿南常一……………三八
- 阿部壽準……………一四
- 阿曾菊藏……………四九
- 阿部秀太郎……………一二
- 阿部良夫……………四七
- 阿部正直……………二九
- 阿部梧一……………五二
- 阿部八代太郎……………三三
- 阿部房次郎……………二七
- 阿部政次郎……………三六
- 阿部克太郎……………六
- 阿由葉勝作……………二六
- 阿曾沼均……………四一
- 浅野鐵二……………七
- 浅野泰治郎……………一六
- 浅野總一郎……………五〇
- 浅野富三郎……………二七
- 浅野一男……………四〇
- 浅野良三……………五二
- 浅羽義夫……………四八
- 浅石惠八……………四二
- 浅木兵一……………四三
- 麻生義一郎……………八
- 麻生二郎……………三
- 麻井武雄……………三一
- 麻田駒之助……………一一
- 朝日奈貞英……………四七
- 朝倉文夫……………三
- 朝吹常吉……………一七
- 赤羽克巳……………一九
- 赤石完藏……………三七
- 赤石右一……………四二
- 赤間周吉……………二〇
- 赤間嘉之吉……………一六
- 赤池濃……………三〇
- 赤星鐵馬……………七
- 赤松範一……………三四
- 蟻川五郎作……………六
- 栗田繁次郎……………四七
- 綾井忠彦……………二
- 鮎川義介……………三一
- 鮎澤巖……………三五
- 渥美育郎……………三二
- 新井源水……………三六
- 新井龜太郎……………一七
- 新井猪太郎……………四三
- 新井泰……………五〇
- 姉崎正治……………三二
- 相羽金松……………四六
- 相生由太郎……………二九
- 相川義太郎……………三四
- 東武……………二八
- 足立靖……………四五
- 足立莊……………二三
- 天野保二郎……………二四
- 天野源七……………四一
- 天野犀治郎……………三八
- 天野七三郎……………二一
- 天井國太郎……………五一
- 天江勘兵衛……………二七
- 天生目藤四郎……………四〇
- 天宅敬吉……………一七
- 穴水熊雄……………二一
- 愛甲勇吉……………一二
- 明智瀧朗……………四九
- 明石總一郎……………八
- 明石照男……………九
- 荒川新吾……………四二
- 荒川文六……………一〇
- 荒木貞夫……………七

- 荒木文平……………五一
- 荒木寅三郎……………一九
- 荒木東一郎……………五三
- 荒木悌二郎……………六
- 兩宮量七郎……………一〇
- 兩宮信一郎……………三〇
- 縣忍……………三三
- 縣左吉……………三〇
- 手島重雄……………五三
- 手代木隆吉……………一一
- 手塚猛昌……………一〇
- 手塚文藝……………一九
- 寺田忠三郎……………二七
- 寺田市正……………二二
- 寺田富右衛門……………二九
- 寺田淳平……………四九
- 寺田榮……………二二
- 寺田寅彦……………一四
- 寺田春雄……………五〇

- 寺田省歸……………二四
- 寺田喜平治……………四
- 寺田啓二……………五
- 寺西定次郎……………二七
- 寺島誠一郎……………二七
- 寺島敏三……………三三
- 寺島權藏……………二一
- 寺島成信……………二一
- 寺井四郎兵衛……………二八
- 寺内秀吉……………二九
- 田健治郎……………二三
- 田昌……………四
- 出淵勝次……………二三
- 齋藤和太郎……………五
- 齋藤金吾……………一六
- 齋藤園守……………二六
- 齋藤藤次郎……………三一
- 齋藤松太郎……………二五
- 齋藤安雄……………一九
- 齋藤勇……………二九
- 齋藤義太郎……………二二
- 齋藤軍平……………三二
- 齋藤大吉……………二七
- 齋藤巖……………三一
- 齋藤虎五郎……………六
- 齋藤太郎……………三一
- 齋藤恒三……………二三
- 齋藤眞徹……………二二
- 齋藤恂……………二五
- 齋藤善八……………一八
- 齋田文四郎……………三
- 崎川才四郎……………二六
- 櫻澤鶴吉……………二九
- 櫻井伊兵衛……………一三
- 櫻井寅之助……………六
- 櫻井源一郎……………三〇
- 櫻井信四郎……………二七
- 櫻井小太郎……………一一
- 嵯峨次郎……………三四
- 佐々木仙一……………二四
- 佐々木秀司……………四
- 佐々木重兵衛……………二三
- 佐々木恒太郎……………三四
- 佐々木耕雲……………一四
- 佐々木謙一郎……………三三
- 佐々木勇之助……………二三
- 佐々木和三郎……………三三
- 佐々木隆興……………一〇
- 佐々木長治……………一七
- 佐々木嘉太郎……………二一
- 佐々木惟朝……………二一

第十九章 さ之部

西郷從德……………二〇

第二十章きゆ之部

- 佐々木平次郎……………三三
- 佐々木文一……………一
- 佐藤五百巖……………二四
- 佐藤實……………八
- 佐藤達次郎……………一
- 佐藤源治……………一八
- 佐藤鋼次郎……………二〇
- 佐藤三郎……………一三
- 佐藤英夫……………七
- 佐藤昌介……………一八
- 佐藤榮五郎……………二六
- 佐野善作……………四
- 佐野利器……………八
- 佐野正次……………三二
- 佐野會輔……………七
- 佐野理八……………二四
- 佐野新平……………二四
- 佐納利一……………二一
- 佐竹義春……………二五
- 佐竹義準……………二四
- 佐竹三吾……………一九
- 佐雙定雄……………一九
- 佐久間國三……………三三
- 佐久間俊一……………一五
- 佐久間德三郎……………三四
- 左右田喜一郎……………二二
- 左右田棟一……………一〇
- 澤田敬義……………五
- 澤田半之助……………三三
- 澤田利吉……………二〇
- 澤野寅三郎……………三〇
- 澤野定七……………七
- 澤全雄……………一六
- 澤井要一……………四
- 山東誠三郎……………一五
- 笹山三樹雄……………二八
- 笹山恒太郎……………二八
- 笹本菊太郎……………三五
- 笹川種郎……………一三
- 柵瀬軍之佐……………一四
- 最所文二……………二六
- 實吉純郎……………九
- 相良亮吉……………二九
- 酒井忠正……………一〇
- 酒井猪太郎……………一
- 坂本作平……………一
- 坂本陶一……………二
- 坂口末男……………二八
- 坂口昂……………二
- 坂倉吉兵衛……………五一
- 坂梨哲……………二七
- 坂仲輔……………九
- 坂井英太郎……………二二
- 坂田藤藏……………三
- 西園寺公望……………二二
- 西園寺八郎……………三
- 西園寺龜治郎……………三〇
- 北村重太郎……………一〇
- 北村令司……………二六
- 北村重昌……………七
- 北村政治郎……………二九
- 北村西望……………七
- 北村榮三郎……………二五
- 北村長吉……………二〇
- 北郷資雄……………二二
- 北岡晴次郎……………九
- 北島精一……………一一
- 北島貴孝……………八
- 北田久右衛門……………一七
- 北初太郎……………二二
- 北豐吉……………二四
- 北川源次郎……………二三

- 北川幸吉……………一一
- 北小路三郎……………三三
- 北大路實信……………一
- 木村德衛……………一六
- 木村惠吉郎……………一九
- 木村小左衛門……………二
- 木村雄次……………五
- 木村清三郎……………二
- 木村清四郎……………三
- 木村清五郎……………六
- 木村武山……………三
- 木村權右衛門……………一五
- 木村秀興……………一〇
- 木村德兵衛……………三三
- 木村篤太郎……………三三
- 木村重治……………一九
- 木村清志……………二六
- 木村清治……………二二
- 木村政次郎……………四
- 木村正義……………二五
- 木村桂七郎……………一九
- 木村尙達……………一〇
- 木村庫之助……………二一
- 木村作次郎……………一
- 木間武三郎……………二八
- 木下正中……………二二
- 木下正道……………二五
- 木下武一……………三二
- 木下謙次郎……………一一
- 木下鶴吉……………三〇
- 木原清……………一九
- 木原唯一郎……………一八
- 木原猷胤……………六
- 木水隆吉……………二四
- 木邊孝慈……………二〇
- 木崎宏……………二七
- 木崎幸八……………一六
- 岸本鑑之助……………三四
- 岸本兼太郎……………三三
- 岸本正清……………三三
- 岸本五兵衛……………三四
- 岸本重任……………三二
- 城戸新石……………九
- 城戸四郎……………一〇
- 城戸元亮……………二
- 城戸崎廣三……………一三
- 岸禰一……………三三
- 岸清一……………九
- 岸義男……………一七
- 岸井壽郎……………二四
- 岸井辰雄……………一三
- 岸高武……………三二
- 貴志米吉……………一六
- 菊池政……………二九
- 菊池宇和司……………一五
- 菊澤秀麿……………三一
- 菊池慶次郎……………一五
- 菊池長之……………一八
- 菊池八次郎……………二二
- 菊池寛實……………一七
- 菊池恭三……………八
- 吉光寺錫……………三〇
- 清瀬一郎……………五
- 清末長輝……………二七
- 清岡長言……………二
- 桐島像一……………二一
- 桐島友一……………三一
- 桐原捨三……………三
- 喜多孝治……………二八
- 喜多又藏……………一四
- 金田一國士……………三四
- 金原巳三郎……………一八
- 結城豊太郎……………一
- 結城安次……………一六
- 弓家慎吾……………四
- 弓削和三……………一四

弓削田千吉……………一	三輪信太郎……………一	三上參次……………四七	三宅幸太郎……………一三
湯川寛吉……………一三	三輪徳寛……………二二	三上治三郎……………二三	三宅川百太郎……………六
湯川玄洋……………六	三輪市太郎……………三三	三ツ矢勝治郎……………四一	三宅川保一……………三一
湯原元一……………一八	三輪田輪三……………二〇	三島眞藏……………八	三浦大五郎……………二八
湯淺武孫……………三三	三井守之助……………三	三矢宮松……………四二	三浦覺玄……………五
湯淺七左衛門……………八	三井源右衛門……………一一	三島彌吉……………三一	三浦覺一……………三八
湯地幸平……………一七	三井壽太郎……………九	三島海雲……………六	三浦新兵衛……………一七
湯淺倉平……………一五	三井米松……………三〇	三好海三郎……………二九	三浦良次……………三六
湯口好四郎……………七	三井高篤……………四〇	三好學……………一二	三浦新七……………三六
湯山壽介……………八	三井元之助……………四	三好重道……………二一	三浦良幹……………三四
由谷義治……………五	三井高精……………七	三好泉……………三四	三浦孝造……………三五
	三井高達……………四七	三好三也……………三九	三浦逸平……………三六
	三井八郎右衛門……………一四	三好一……………一六	三澤善哉……………二四
	三井金甫……………二	三善清之……………二三	三苦寛一郎……………三三
	三井清一郎……………三三	三宅米吉……………四五	三谷一二……………一〇
	三井辨藏……………三一	三宅重也……………三六	三谷覺莊……………三三
	三井助作……………三〇	三宅速……………二〇	三谷芳松……………三三
	三上英雄……………一八	三宅信太郎……………一五	三谷了介……………三四
	三上於菟吉……………二二		

第二十一章 みめ之部

三士忠造……………七	三木武吉……………一三	宮島一樹……………一九	宮本清三郎……………三一
三倉 滋……………一五	三樹退三……………三六	宮島保衛……………四九	宮本政次郎……………三一
三瓶勇佐……………三三	宮下武一郎……………二	宮嶋清次郎……………一二	壬生基義……………三九
三村 保……………四六	宮 下 巖……………三九	宮島幹之助……………二五	參木録郎……………二八
三村 章……………二二	宮下正一……………一三	宮崎茂吉……………四五	目崎政吉……………四八
三村準平……………五二	宮原 敏……………二八	宮崎峯太郎……………二七	目黒甚七……………一六
三村軍藏……………三四	宮口竹雄……………九	宮崎松次郎……………八	目黒文平……………一九
三村稱平……………四四	宮田哲雄……………二五	宮崎好文……………二九	御厨規三……………二三
三山喜三郎……………二	宮田光雄……………一六	宮崎三之助……………四	御子柴朔朗……………三七
三雲敬一郎……………四	宮田貞吉……………五一	宮寺清一……………四三	御木本幸吉……………四三
三崎芳之助……………三五	宮田重治……………二五	宮坂作衛……………七	御木本隆三……………四四
三野有造……………一六	宮内國太郎……………一八	宮坂平助……………四六	御法川直三郎……………四九
三鴉舜太郎……………三二	宮内敏直……………二〇	宮澤高義……………三三	峯村教平……………四九
三尾邦三……………一九	宮川敏樹……………四八	宮澤直治……………二五	峯岸慶藏……………二八
三角愛三……………三七	宮川久一郎……………二二	宮澤胤男……………二九	峰岸教三郎……………一四
三原美男……………一七	宮川宗徳……………四一	宮地茂秋……………五四	溝淵進馬……………三五
三原庄太……………三〇	宮川米次……………二七	宮 莊 七……………五	溝手保太郎……………一五
三木雄藏……………一三	宮部光利……………五〇	宮 尾 麟……………二七	水上熊吉……………四五
三木與吉郎……………四二	宮原秀一……………二四	宮林彦九郎……………六	溝口直亮……………八



水上泰生	五三	水木常太郎	三八
水江林吉	二六	光山百川	五〇
水谷鹿次郎	一九	光永星郎	二
水谷景長	三二	滿谷國四郎	五
水谷當起	五二	淡嘉平次	四
水谷重兵衛	三五	南文藏	三七
水谷清三頁	三五	南壽	三七
水口勇三郎	一五	南大曹	三八
水野博徳	四〇	南次郎	一
水野秀吉	三八	南新吾	二六
水野薫	五一	美土路昌一	一一
水野利八	一一	美濃部俊吉	九
水野猿	二七	皆川泉	四二
水野廣徳	四一	皆川芳造	九
水野專之助	一〇	皆川廣量	五〇
水野豊	二九	皆川應助	一〇
水野鍊太郎	三	箕浦多一	二四
水野俱吉	三八	箕輪半藏	一
水埜與兵衛	三七		
		清水義彰	三三
		清水茂三郎	一九
		清水有國	八〇
		清水與七郎	一一
		清水	八七
		清水留三郎	五六
		清水亥三郎	一五
		清水文之輔	五〇
		清水留吉	一四
		清水太治郎	八七
		清水近太郎	三二
		清水釘吉	一三
		清水靜馬	六七
		清水竹次郎	五三
		清水柳平	三九
		清水市兵衛	五一
		下郷寅太郎	三
		下郷市次郎	七一
		下郷傳平	二
		下郷豊彦	七一
		下郷健三	七〇
		下河原友吉	一〇
		下河原武夫	一一
		下村	三二
		下村齊次郎	三八
		下村耕次郎	一九
		下村正之助	三三
		下村晴三郎	三四
		下平文柳	七二
		下條康麿	五九
		下田伊三郎	一九
		下野直太郎	三九
		下元鹿之助	五六
		品川章	七三
		鹽田園平	一
		鹽田清一	一六

第二十二章 しひ之部

鹽田環	一一	四宮茂	七八	柴原國松	七	白根竹介	三六
鹽田世綱	二六	四宮久吉	七六	柴讓	七七	白井五郎	四五
鹽田廣重	四三	柴山雄三	三五	柴仁三郎	五九	白井松次郎	二八
鹽田爲五郎	二五	柴田愛藏	二一	柴岡喜一郎	四二	白井博之	一一
鹽谷又策	八六	柴田常吉	七九	芝原豊二	八	白井龍一郎	四三
鹽谷宇平	二六	柴田忠次郎	五六	芝染太郎	二四	白井勝治	四六
鹽谷良吉	六一	柴田畦作	一五	芝義太郎	六六	白井清行	八五
鹽海徳太郎	一七	柴田武	七六	芝辻正晴	八一	白鳥徳之助	二三
鹽尻級長雄	二一	柴田英三	一五	芝川榮助	一三	白鳥保五郎	三一
鹽崎集成	四四	柴田勝雄	四	芝川又四郎	八	白石元治郎	三一
鹽川一郎	六	柴田凌雲	六九	次小路豊俊	四一	白石禎美	二四
鹽川三四郎	四三	柴田増次郎	二六	篠原三千郎	六四	白石多士頁	四八
鹽川賢三	二〇	柴田享一	二〇	篠原藏司	三〇	白田謙四郎	五
鹽澤虎之助	四六	柴田定吉	八六	篠原武	五〇	白崎仁三郎	二九
鹽釜伊兵衛	六	柴田極人	四二	篠田次助	二	白山茂次郎	三四
鹽野吉兵衛	四七	柴田源七	四	篠崎友三	六四	白川資長	四九
沙見儀兵衛	六六	柴田武治	四二	篠崎又兵衛	八二	白木周次郎	六二
四條隆愛	五七	柴崎雪次郎	一八	松風嘉定	四四	白勢量作	八八
四條隆英	六八	柴山昌生	四〇	白根松介	三五	白波瀨秀次郎	四六

白塚大三郎……二九  
 斯波貞吉……三〇  
 斯波孝四郎……八八  
 斯波忠三郎……二九  
 志村源太郎……三〇  
 志村保一……五九  
 志村清右衛門……七  
 志水源兵衛……二八  
 志田順……四  
 志田勝民……七七  
 志田御太郎……五七  
 志波安一郎……九  
 志賀淳信……七四  
 志賀和多利……三六  
 志村作兵衛……四一  
 志茂成保……四〇  
 島崎新太郎……二六  
 島村正平……七一  
 島村友三郎……五二

島居幸雄……三二  
 島本正一……六七  
 島田竹三郎……五一  
 島田七郎右衛門……三八  
 島田佐太郎……八四  
 島田平右衛門……五三  
 島田邦平……七六  
 島田新助……五一  
 島田宏……八八  
 島田勇次……五四  
 島津雷吉……二一  
 島津長丸……四八  
 島定治郎……二二  
 島芳藏……六五  
 島博三……一一  
 島連太郎……五一  
 島德藏……四八  
 島安次郎……六三  
 澁澤義一……三一

澁澤正雄……七五  
 澁澤武之助……六八  
 澁澤篤二……六九  
 澁谷德三郎……三六  
 澁谷米太郎……五二  
 澁谷芳太郎……二四  
 澁谷權之助……五一  
 新保德壽……一三  
 新藤英松……六七  
 新開新太郎……一一  
 新川元右衛門……九  
 勝田主計……二八  
 繁田武平……五四  
 鎮目泰甫……四四  
 正田貞一郎……二七  
 椎葉紮義……五八  
 椎橋德次郎……六〇  
 後川文藏……一  
 重松養二……三八

重城敬……五五  
 上甲信弘……九  
 信保利平……五八  
 信太儀右衛門……五五  
 東海林力藏……七  
 宿田久一……一七  
 神藤利政……六〇  
 庄司信吾……二五  
 庄司乙吉……六一  
 庄司廉……六三  
 庄司兵藏……六一  
 庄晋太郎……四七  
 尙順……七三  
 尙琳……七二  
 定塚門次郎……二七  
 進藤信義……一九  
 進藤嘉三郎……八三  
 進藤紫朗……六三  
 眞藤慎太郎……六八

幣原喜重郎……八五  
 廣瀬清兵衛……四五  
 廣部達三……八二  
 廣瀬德藏……三四  
 廣瀬誠太郎……五八  
 廣瀬直幹……七五  
 廣瀬庄太郎……八  
 廣瀬久彦……四二  
 廣瀬德次郎……二二  
 廣瀬實光……三四  
 廣瀬慶之助……四三  
 廣幡忠隆……七八  
 廣岡宇一郎……二一  
 廣岡久右衛門……五一  
 廣岡惠三……三三  
 廣岡助五郎……五八  
 廣岡伊兵衛……四二  
 廣川長八……五二  
 廣川貞吉……六四

廣川周造……三六  
 廣田弘毅……二〇  
 廣田精一……三三  
 廣田乙吉……四〇  
 廣田理太郎……一  
 廣海惣太郎……三七  
 廣井一……一〇  
 廣木八郎……五九  
 廣會正雄……三八  
 廣末恒太郎……一四  
 廣橋彌太郎……六〇  
 廣谷新太郎……五九  
 東久世秀雄……二二  
 東久世通敏……五五  
 東野修……七一  
 東坊城政長……九  
 東三條實敏……四一  
 平山毅……一四  
 平山爲之助……四

平山又三郎……五六  
 平山清次……二五  
 平山午介……六三  
 平山信……二五  
 平野裕然……四八  
 平野長祥……二〇  
 平野與次左衛門……四九  
 平野長藏……一九  
 平野復男……六六  
 平野猷太郎……六二  
 平野亮平……八六  
 平野勇作……四九  
 平野忠太郎……三〇  
 平野豪……四七  
 平野光雄……六四  
 平野平兵衛……二六  
 平野哲五郎……四七  
 平澤權次郎……一六  
 平澤越郎……一一

平熊友明……八四  
 平田甚之助……六五  
 平田學……二三  
 平田榮二……六二  
 平田保太郎……一八  
 平田吉郎……四八  
 平塚運吉……八八  
 平塚廣義……二二  
 平塚喜市郎……八一  
 平塚嘉右衛門……一七  
 平塚直治……一五  
 平島定次……七〇  
 平岡通也……二  
 平岡正次郎……六六  
 平岡傳章……七四  
 平岡權八郎……六六  
 平沼騏一郎……一八  
 平沼亮三……二七  
 平沼彌太郎……四四

平林仲次郎……四四  
 平林秀吉……六〇  
 平林淺次郎……七五  
 平林斧吉……四四  
 平福百穂……一七  
 平泉平右衛門……六〇  
 平泉喜八……六四  
 平原庄兵衛……四三  
 平井 操……八七  
 平井 清……三二  
 平井文三……六一  
 平井信四郎……七六  
 平井權七……六三  
 平井準輔……四五  
 平尾貞二……八五  
 平尾贊平……六一  
 平尾喜三郎……二九  
 平尾雅次郎……四六  
 平口太兵衛……一六  
 平松藤太郎……五三  
 平川松太郎……二一  
 平川孫兵衛……三一  
 平間彌五郎……五一  
 飛田野武彦……四章の二五  
 比佐昌平……六  
 比企 忠……一六  
 弘田龍太郎……八四  
 弘内 一海……六七  
 弘世助太郎……四一  
 土方久敬……七八  
 土方久敬……三  
 一柳仲次郎……五七  
 久田益太郎……五四  
 久永勇吉……八三  
 久野春之助……五八  
 兵 須 久……三  
 兵庫徳治……六九  
 兵頭正道……四六  
 兵藤榮作……八〇  
 樋口達兵衛……五二  
 樋口長市……五  
 樋口鏡藏……七五  
 樋口誠康……五〇  
 樋口繁次……五四  
 樋口茂太郎……一三  
 日高直次……五〇  
 日比野幸一……七七  
 日比野 寛……三五  
 日比谷孝太郎……七〇  
 日野信次……五六  
 菱沼平治……一五  
 姫沼久藏……五五  
 匹田鋭吉……三三  
 宏 達 彌……四六  
 人見吉彦……四〇  
 氷見谷久四郎……五七  
 肥田金一郎……五六  
 肥田七郎……五四  
 肥田誠三……五二  
 第二十三章もせ之部  
 森 六 郎……二四  
 森 格……一一  
 森下嘉作……四〇  
 森下 博……二九  
 森下龜太郎……一六  
 森下松衛……三二  
 森寺喜兵衛……四〇  
 森垣龜一郎……二  
 森川桑三郎……三八  
 森川静雄……四一  
 森川準之助……一三  
 森川正成……三七  
 森本厚吉……三  
 森本新太郎……二九

森本千吉……四一  
 森島收六……三四  
 森岡寅四郎……二五  
 森岡三八……四四  
 森岡常藏……二五  
 森岡忠尙……四二  
 森岡保善……一七  
 森岡平右衛門……三四  
 森岡守成……四  
 森岡二郎……二八  
 森原嘉逸……四一  
 森村開作……九  
 森村堯太……六  
 森永善吉……二三  
 森永太一郎……六  
 森田繁男……一三  
 森田又一郎……四七  
 森田泰次郎……二九  
 森田國太郎……一六  
 森田政義……五  
 森田惠三郎……四三  
 森田一雄……三一  
 森田政太郎……二六  
 森田佐吉……一五  
 森田三郎右衛門……一九  
 森田三郎……一三  
 森田福市……七  
 森田 茂……二八  
 森田寅次郎……二一  
 森 正太郎……二六  
 森 卷 吉……三九  
 森 直 郷……三八  
 森五郎兵衛……三八  
 森 榮 藏……二四  
 森 盛 一 郎……三〇  
 森 榮 七……二五  
 森 平 兵 衛……一三  
 森 蘆 利……四七  
 森 喜 内……三五  
 森 伊 三 次……一九  
 森 民 三 郎……三一  
 森 正 則……一九  
 森 辨 治 郎……三〇  
 森 環……二一  
 森 八 郎 助……三七  
 森 彦 兵 衛……二六  
 森 達 三……三九  
 森 彦 三……六  
 森 正 次 郎……四〇  
 森 廣 三 郎……九  
 森 貞 範……三六  
 森 廣 藏……一〇  
 森 外 三 郎……三六  
 森 俊 六 郎……一八  
 森 政 美……一五  
 森山松之助……三二  
 茂木惣兵衛……七  
 茂木房五郎……八  
 茂木長一……二七  
 茂木佐平治……八  
 茂木鋼之……一七  
 茂木七左衛門……一一  
 茂木森藏……二八  
 茂木龜三郎……三四  
 茂庭忠次郎……三三  
 望月圭介……三  
 望月軍四郎……三五  
 望月乙彦……二九  
 望月利八郎……二三  
 望月六郎……四〇  
 百井正明……二  
 最上國藏……三一  
 最上謙吉……六  
 盛田久左衛門……二七  
 盛田喜平治……一四  
 盛家龜次郎……三三

諸井四郎……………一四  
 諸戸北郎……………一六  
 諸戸清六……………二二  
 諸新平……………三  
 元田肇……………一  
 元田傳……………一八  
 元田敏夫……………三五  
 持田巽……………八  
 持永善市……………一五  
 守屋荒美雄……………五  
 守屋此助……………七  
 守屋榮夫……………三一  
 守屋善兵衛……………五  
 守安瀧次郎……………二三  
 守田勘彌……………一四  
 守田保太郎……………二三  
 守岡功……………四四  
 守岡多一郎……………二九  
 物部長徳……………三七

榎山半三郎……………二六  
 榎山英次……………三九  
 本川藤三郎……………二二  
 本野精吾……………一〇  
 本野亨……………九  
 本重和助……………三八  
 泉二新熊……………四  
 關屋忠正……………三〇  
 關屋貞三郎……………二七  
 關屋龍吉……………四五  
 關屋正雄……………四六  
 關矢孫一……………一九  
 關谷與助……………三五  
 關谷守男……………一七  
 關谷兵助……………三〇  
 關口玉之輔……………二〇  
 關口信次……………四二  
 關口志行……………三六  
 關口壽……………四六

關口伊太郎……………二四  
 關澤金造……………三七  
 關島卯三郎……………一〇  
 關塚惣吉……………三九  
 關戸守彦……………二一  
 關尾喜一郎……………三六  
 關根豐作……………四五  
 關根繁藏……………四六  
 關根要八……………二〇  
 關野長……………三四  
 關本英作……………一八  
 關義壽……………三一  
 關義孝……………三八  
 關守造……………三八  
 關直彦……………一一  
 關彌三郎……………三六  
 關守戸……………四  
 關毅……………三二

關和知……………二  
 關秀次郎……………三五  
 關重兵衛……………一五  
 膳桂之助……………四三  
 清古平吉……………二六  
 芹澤多根……………一  
 千田嘉平……………三一  
 千田勢平……………四三  
 千家尊統……………二五  
 千賀千太郎……………九  
 仙石政敬……………二八  
 瀨川昌世……………一三  
 瀨川德太郎……………三三  
 瀨川勝平……………三六  
 瀨川秀雄……………八  
 瀨下清……………二〇  
 瀨古孝之助……………四七  
 瀨尾喜一郎……………三三  
 瀨木博尚……………三二

瀨崎初三郎……………三四  
 瀨島猪之丞……………二一  
 世木澤藤三郎……………四〇

第二十四章 寸之部

鈴木正平……………三九  
 鈴木富士彌……………一  
 鈴木市之助……………一四  
 鈴木島吉……………五六  
 鈴木茂兵衛……………五七  
 鈴木誠作……………四八  
 鈴木恒三郎……………二六  
 鈴木章之……………九  
 鈴木奎三郎……………一三  
 鈴木圭三……………一三  
 鈴木圭二……………六  
 鈴木喜三郎……………一  
 鈴木莊六……………二

鈴木貫太郎……………三八  
 鈴木俊一郎……………三〇  
 鈴木敬策……………四六  
 鈴木庄治郎……………二六  
 鈴木秀三郎……………五五  
 鈴木紋次郎……………一六  
 鈴木茂雄……………二八  
 鈴木仙治……………五五  
 鈴木茂吉……………四八  
 鈴木松太郎……………四七  
 鈴木達治……………二七  
 鈴木德次郎……………四九  
 鈴木喜三郎……………五一  
 鈴木隆晴……………一七  
 鈴木清之輔……………四三  
 鈴木孫彦……………四  
 鈴木磯一郎……………四三  
 鈴木政吉……………五四  
 鈴木三郎……………四七

鈴木辰五郎……………四七  
 鈴木岩藏……………二八  
 鈴木重兵衛……………三〇  
 鈴木正美……………五四  
 鈴木愛作……………一七  
 鈴木英次……………五六  
 鈴木信太郎……………三五  
 鈴木寅彦……………二九  
 鈴木孝與……………五二  
 鈴木喜兵衛……………三八  
 鈴木威……………二六  
 鈴木憲太郎……………五三  
 鈴木善助……………三六  
 鈴木忠兵衛……………四二  
 鈴木慶三……………四六  
 鈴木德男……………一〇  
 鈴木康太郎……………一三  
 鈴木孝三……………四四  
 鈴木三郎助……………五五

鈴木寧……………五  
 鈴木長三郎……………二七  
 鈴木一郎……………三三  
 鈴木武志……………五一  
 鈴木文治……………四八  
 鈴木惣兵衛……………二四  
 鈴木榮助……………一四  
 鈴木穆……………三九  
 鈴木巖……………五二  
 鈴木周三郎……………九  
 鈴木清助……………一〇  
 鈴木久次郎……………五〇  
 鈴木孝之助……………三一  
 鈴木孝雄……………三五  
 鈴木榮……………五一  
 鈴木直次郎……………四七  
 鈴木隆……………八  
 鈴木喜左衛門……………二九  
 鈴木鶴治……………二四

鈴鹿昌一……………四七  
 鈴木安太郎……………四三  
 鈴木永吉……………三七  
 鈴木久兵衛……………四六  
 鈴木虎之助……………一九  
 鈴木伊十……………四二  
 鈴木儀助……………三五  
 鈴木元美……………四九  
 鈴木富太郎……………八  
 鈴木竹麿……………四  
 鈴木要三郎……………二  
 鈴木育仙……………五三  
 鈴木常松……………一一  
 鈴木楨之助……………三一  
 鈴木辨吉……………四二  
 鈴木忠右衛門……………二六  
 鈴木太郎……………一九  
 鈴木徳治……………四六  
 鈴木梅太郎……………七  
 鈴木重慶……………三九  
 鈴木梅五郎……………五三  
 鈴木静美……………一九  
 鈴木梅四郎……………一〇  
 杉田駿……………二五  
 杉田安靜……………三一  
 杉田富……………五〇  
 杉田直樹……………一一  
 杉田善右衛門……………三〇  
 杉浦重吉……………四五  
 杉浦香次郎……………三六  
 杉浦真鐵……………二三  
 杉浦寛威……………四三  
 杉浦儉一……………二二  
 杉浦宗三郎……………三〇  
 杉浦文一……………二〇  
 杉山虎雄……………四九  
 杉山幹……………五〇  
 杉山魯九郎……………四一  
 杉山謙造……………四  
 杉山作次郎……………四二  
 杉山金之助……………三  
 杉山正造……………四五  
 杉山茂太……………一一  
 杉山房治郎……………四二  
 杉山左門治……………五  
 杉山義雄……………六  
 杉本九八郎……………三七  
 杉本東造……………二一  
 杉本鶴五郎……………二七  
 杉本重吉……………四六  
 杉本新左衛門……………二  
 杉本正幸……………五七  
 杉本敏治……………二一  
 杉野喜精……………二九  
 杉野民之助……………一  
 杉野文彌……………四五  
 杉村七太郎……………一八  
 杉村虎四郎……………二三  
 杉村博通……………二一  
 杉村友次郎……………四九  
 杉村幹……………七  
 杉村甚三郎……………四〇  
 杉谷泰山……………四  
 杉宜陳……………三  
 杉敏介……………三六  
 杉梅之治……………二二  
 杉琢磨……………一四  
 杉榮三郎……………三二  
 杉崎治三郎……………五七  
 杉崎静夫……………一六  
 杉溪言長……………三六  
 杉生幸三郎……………四六  
 杉下正命……………一七  
 杉原榮三郎……………五〇  
 杉原惟敬……………三  
 杉林健次郎……………三九

首藤正壽……………三八  
 水津信治……………四一  
 吹田順助……………三九  
 菅原通敬……………三二  
 菅原大太郎……………一五  
 菅原英伍……………二二  
 菅原義雄……………三四  
 菅野源太郎……………五六  
 菅野傳右衛門……………三三  
 菅野修藏……………一八  
 菅野善右衛門……………五一  
 菅野尙一……………三三  
 菅野盛次郎……………九  
 菅野二郎……………三二  
 菅波角之助……………二二  
 菅昌之助……………四五  
 菅榮一……………四八  
 菅禮之助……………三四  
 菅音次郎……………二一  
 菅沼市藏……………四〇  
 菅谷駒之助……………三七  
 菅井良助……………四五  
 菅井角之介……………一九  
 菅井與左衛門……………四一  
 須藤憲三……………四四  
 須賀喜三郎……………三三  
 須田國雄……………二〇  
 須田信次……………六  
 須田萬右衛門……………一七  
 須田宣……………一五  
 須田馬太郎……………一六  
 須藤恭平……………三八  
 須川多助……………四四  
 栖原啓藏……………一九  
 栖原豊太郎……………二八  
 砂田重政……………八  
 諏訪方季……………八  
 諏訪忠元……………二五  
 末繁彌次郎……………一八  
 末永壽……………一五  
 末永一三……………四一  
 末松偕一郎……………三四  
 末松佐吉……………三三  
 末松清一……………四〇  
 末廣恭二……………二八  
 末廣要……………三三  
 末正久左衛門……………四〇  
 角彌太郎……………二〇  
 角達助……………七  
 住田正一……………五三  
 住田藤三郎……………四一  
 住田正雄……………五  
 住田多造……………四七  
 周布兼造……………一五  
 洲崎隆一……………三六  
 隅田伊賀彦……………三七

### 一 木喜徳郎君

法學博士 從二位勳一等

宮内大臣

當家は静岡縣磐田郡袋井町川井の舊家にして、君は前文部大臣故男爵岡田良平君の令弟にして、第一銀行監査役竹山純平君の令兄に當り、慶應三年四月を以つて生る。

明治二十年東京帝國大學法科大學政治科を卒業するや同二十三年職を官界に奉じ、内務書記官に任ぜられしが間もなく休職し、自費を以つて留學し同二十六年滙審を究めて歸朝復職し、後ち東京帝國大學法科大學教授に任じ同時に内務書記官を兼ね、同三十一年兼官を罷めて更に内務參事官を兼ねたり。

尋いで内務省參與官に任じ、同三十二年法學博士の學位を授與せられ、翌年貴族院議員に勅選せらる。更に明治三十九年法制局長官兼恩給局長に任じ、東京帝國大學教授を兼ね同四十一年七月内務次官に任ぜらる。

斯くて大正三年大隈内閣の成立を見る

や臺閣に列して其の文部大臣に親任し、更に内務大臣に轉じ同六年樞密顧問官に任ぜられ、次いで樞密院副議長に推され宮内省御用掛を兼ねしが、大正十四年四月牧野伯の後を享けて宮内大臣に親任し以つて現在に及ぶ。

夫人さへ子は養父喜三司君の長女たり

現に其の邸宅を東京市本郷區曙町五番地に有し電話小石川七七七番たり。

### 糸山文吾君

佐世保勸業貯金株式會社社長

佐世保に於ける義人として世人に其の徳を慕はれつゝあるを我が糸山文吾君となす。君は佐賀縣の人糸山武八君の二男にして、明治十年一月を以つて生れ後ち先代スエ子の養嗣子となる。

夙に實業界に投じ先代よりの吳服商を

繼承して益々隆盛ならしめ、今や佐世保に於ける斯界の第一位を以つて目せられ尙ほ佐世保勸業貯金株式會社を興し、邦

家百年の計を慮り専心産業の奨励、勤儉

貯蓄の宣傳に日夜寢食を忘れて盡瘁し、且つ株式會社米山銀行取締役として當地金融の圓滑を圖る等其の功績顯著なるものあり。

夫人カツ子は同縣の人永野茂平君の養女にして其の間に法藏君、見親君あり、現に長崎縣佐世保市相生町に住す。

### 犬塚勝太郎君

正三位勳一等

貴族院議員

君は舊庄内藩士犬塚盛親君の長男にして、明治元年三月を以つて生る。明治二十二年東京帝國大學法科大學を卒業するや直ちに内務省試補となり、翌年内務大臣秘書官に任ぜられ傍ら中央大學の前身たる東京法學院の參事官となり貴族院書記官を兼任せり。

尋いで逓信省鐵道局長、内務省土木局長、青森、長崎、大阪各府縣知事等を歴任し後ち逓信農商務兩省の各次官に任せ

られ大正九年貴族院議員に勅選せらる。

曩に國際労働理事會開催せらるゝや帝國政府を代表して渡歐し、尙ほ錦鷄間祇侯仰せ付けられ其の他大禮使參與官、臨時産業調査會部長、鐵道會監事、道路會議員、臨時國民經濟調査會監事等に擧げられ且つ諸種の評議員、委員長、委員等に擧げられ君が國家に貢献すること尠少ならず。

斯くて萬國道路會議及び國際労働會議等に帝國代表として出席すること數回、留學又は御用仰せ付けられて歐米各國に差遣せられたること屢々、曩に衆議院議員たりしことあり。

夫人しづ子は故貴族院議員津田出君の五女たり、現に神奈川縣鎌倉町字淨明寺六六番地に住し電話三一六番たり。

### 一力健治郎君

河北新報社長

君は宮城縣の人鈴木作兵衛君の三男にして、文久三年九月を以つて生れ、後ち

先代松治郎君の養嗣子となる。夙に郷里

の中學校を経て第二高等學校に進み、同校を卒業するや明治三十年一月河北新報を創刊して自ら社長に就任して能く内外の社務を執掌し、河北新報の今日の如く隆々たる聲名あらしむるは偏へに君の盡力の賜と謂ふべきなり。

夫人くまちは宮城縣士族鈴木春山君の長女にして君との間に次郎君、五郎君及びなほ子、たけ子等あり、現に仙臺市東一番町八十二番地に住し電話二六二番たり。

### 井上仁吉君

正四位勳三等

東北帝國大學教授

我が國應用化學の泰斗として斯界に令名ある井上仁吉君は、京都府の人井上康平君の叔父君にして、明治戊辰十一月を以つて京都市下京區狩野町に生る。

明治二十九年東京帝國大學工科大学應用化學科を卒業するや、直ちに横濱瓦斯

局技師に選任せられ、本邦瓦斯事業に關

する研鑽淺からず斯界に貢献すること甚大なりしが、同三十三年七月東京帝國大學工科大学助教授に任じ、翌年四月瓦斯事業監督官を命ぜらる。

然して明治三十六年八月自費を以つて獨英兩國に留學し、實地に視察見學して歸朝するや、東北帝國大學工科大学教授に任じ、同四十年八月博士會の推薦に依り工學博士の學位を授與せられ現に應用化學擔當教授として聲名あり。

夫人よし子との間に眞一君及び富喜子等あり、現に仙臺市片平町に住す。

### 入澤達吉君

醫學博士 從三位勳二等

侍醫頭

當家は代々新潟縣に住し庄屋を勤めたる家柄なりしが、先代恭平君夙に大志を抱いて長崎に至り、和蘭人に就いて醫術を修め歸朝するや藩侯溝口家に召されて歳百十餘石を食む。

### 犬養毅君

正三位勳一等

政治家

君は岡山縣の人犬養源左衛門君の二男にして、安政二年四月を以つて備中國に生る。五六歳の頃より自學自習孜孜として素讀を始めしが、たま／＼年齒十四歳の時不幸父君の逝去に遭ひ、爾來逆境の人となり十五歳にして縣廳の寫字生となりしが、青雲の志に燃ゆる君は永く小職に甘んずるを欲せず、即ち二十一歳の春寢を負ふて上京し慶應義塾に學ぶ。

偶々西南の役に際會せしかば君は新聞記者として従軍し、時に谷將軍に軍人を志願して戒めらる。而して城山陥落せしかば止むなく歸郷し、後ち東上して東海經濟新聞、報知新聞、民報等の記者となり又東洋經濟雜誌を發刊す。

其の間東京府會議員に選ばれ同常置委員に擧げられ、後ち統計權少書記官となり、明治三十一年大隈内閣成るや其の文部大臣となり、大正十二年第二次山本内

閣の逓信大臣に親任し、原内閣の時外交調査委員會委員仰せ付けられ特に國務大臣の禮遇を賜はる。

爾來衆議院議員に當選する事十五回に及ぶ。君亦書を能くし、氣骨稜々、故大隈侯の寵兒として尾崎翁と共に天才を認められ、自ら國民黨を率ひて以つて多數黨を牽制し、三派協調以つて特權内閣を倒壊し、加藤内閣成るに及び再び臺閣に列して逓信大臣に親任せらる。

君又普選問題、貴院改革、軍備縮少論等を高調して遂に其の目的を貫徹し、時の政友會總裁高橋是清君と意氣投合遂に其の黨員を率ひて之と合同し、田中總裁代りて政友會總裁となるに及び、君亦遂に其の職を抛つて逓信大臣の椅子を去り同時に其の黨籍を脱するに至れり。斯くて君は政友會の最高顧問として政友會を援け、産業立國主義を高唱して全國を遊説すること切なり、眞に國家の功勞者と云ふべきなり。

現に東京市四谷區南町八八番地に住し

君は恭平君の長男にして慶應元年一月を以つて生る。明治二十一年東京帝國大學醫科大學を卒業するや直ちに選ばれて

同大學助教授に任じ、同二十三年獨逸に留學し斯學の研鑽を積みて歸朝し、明治二十八年東京帝國大學醫科大學教授に任じ、同三十年東京市養育院長並に駒込病院長を兼任し、斯くて同三十二年醫學博士の學位を授與せらる。

爾來東大醫科に於て臨床學の講座を擔任し、大正十年四月同大學醫學部長に補せられ侍醫頭を兼任し、同十三年大學教授を罷め侍醫頭專任となり、同十四年東大名譽教授の稱號を受け以つて今日に及ぶ。

夫人常子は子爵中牟田武信君の叔母君に當り、華族女學校の卒業にして君との間に民政君、文明君、和平君、博愛君及び五十子等あり、現に東京市小石川區鶴籠町二二六番地に住し電話小石川三〇四七番なり。

電話四谷六〇〇番、三〇〇番なり。

### 一戸兵衛君

陸軍大將 正三位勳一等功二級  
官幣大社明治神宮々々司

君は青森縣士族一戸範貞君の長男にして、安政二年六月を以つて生る。明治十年戸山學校に入り後ち西南の役に從軍し同年少尉に任ぜられ、爾來累進して明治四十年には陸軍中將に陞進し、更に大正四年陸軍大將に親任せられ同十四年官幣大社明治神宮々々司に任命せらる。

其の間第五師團參謀、近衛歩兵第四聯隊長、第六師團參謀長、歩兵第六旅團長第一、第十七各師團長を歴任し、彼の日清の役には第二十一聯隊長、第五師團副官、第四師團參謀長等に轉動し、明治三十七八年日露の役には第三軍參謀長より歩兵第一旅團長に轉じ、偉勳に依り勳二等に陞叙せられ功二級金鷄勳章を賜ふ、曩に軍事參議官に親任し、又學習院々長たりしことあり。

夫人さだ子は青森縣士族伊藤正其君の長女にして長女くに子に子爵大關増輝君の大叔父君寛君を迎へて養嗣子となす、現に東京府豊多摩郡澁谷町上澁谷一三五番地に住し電話青山四〇一番たり。

### 岩田一君

醫學博士 從四位勳二等功五級  
陸軍々々醫總監

君は愛知縣の人岩田士景君の長男にして、明治六年五月三十日を以つて同縣丹羽郡丹陽村に生る。明治三十二年東京帝國大學醫科大學を卒業し、更に大學院に入り耳鼻咽喉科を専攻す。

明治三十二年陸軍二等軍醫に任じ、累進して大正十二年陸軍々々醫總監に陞進せり其の間陸軍々々醫學校教官、近衛師團軍醫部長、東京第一衛戍病院長、關東軍々々醫部長、第一師團軍醫部長、陸軍々々醫學校長等を歴任し、大正十四年五月豫備役仰せ付けられ、目下閑地にありて悠々自適たり。

夫人妙子は子爵大島久直君の二女にして女子學習院を卒業し、君との間に誠一君及び長子、富士子、好子、榮子等あり現に東京府豊多摩郡澁谷町柏木四三六番地に住し電話四谷二四二番たり。

### 今井清吉君

愛知電氣鐵道會社監査役  
名古屋市會議員

君は愛知縣の人今井清兵衛君の長男にして、明治十一年五月一日を以つて生る夙に實業界に志し奮闘大いに努め、現に愛知電氣鐵道株式會社監査役として名古屋財界に重きをなすのみならず、名古屋市會議員及び都市計劃、愛知地方委員等の公職にあり。

曩に名古屋株式取引所監査役、名古屋瓦斯株式會社監査役として令名を馳せ、尙ほ愛知縣多額納稅者として現に直接國稅二千三百八十餘圓を納むるを以つて知らる。夫人れい子は愛知縣の人白木松兵衛君

の長女にして君との間に清之助君、銀次郎君、眞三君、四郎君及びゆき子等あり現に名古屋市中區橋町六ノ一番地に住し電話一四二四番たり。

### 井上勝之助君

侯爵 從二位勳一等  
宮内省式部長官

維新の志士として防長の歴史を飾り、はた又國家の元勳として長くも 明治大帝の御信任厚く、老軀尙ほ國家を憂ひて一身を省みず、更に 大正天皇の御代となりて一層精勵し、特に厚き優遇を辱ふせる故從一位大勳位侯爵井上馨君の相續者侯爵井上勝之助君は故井上侯の令兄五郎三郎君の二男にして、公爵伊藤博邦君の令兄に當り文久元年七月十一日を以つて生る。

幼にして穎悟、長ずるに及び益々才幹群を抜き、明治四年海外留學生として歐洲に留まり、研鑽すること九ヶ年造詣を深くして明治十二年目出度く歸朝するや

直ちに大藏省に出仕し、後ち日本銀行總裁として其の才腕を縦横に振ひ、尋いで外務省權少書記官、外務書記官等を歴任し、明治三十一年特命全權公使として獨逸に駐在し白耳義國兼勳を命ぜらる。

大正二年時の英國大使加藤伯が外務大臣に任じ、歸朝するに及んで君其の後を享けて、英國特命全權大使に任せられ、大正三年事件の功に依り金三千五百圓を賜ふ。而して大正五年七月辭して歸朝し現に樞密顧問官、宮内省式部長官の顯職にあり。

顧みるに君が獨逸より英國に轉勤せしは恰も歐洲大戦亂勃發の約一年前にして英國就任幾ばくもなくして歐洲の天地は戰亂の巷と化し、君は即ち我が同盟國たる英國にありて、能く帝國を代表して外交的最も卓越せる才量を發揮して之が衝に當り、終始我が當局をして遺憾なからしめたるは、單に君が榮譽たるのみならず、又以つて國民齊しく欣幸措く能はざる所のものなり。

夫人末子は山口縣士族小澤正路君の三女たり、現に東京市麻布區宮村町四十二番地に住し電話青山五四七三番たり。

### 井上準之助君

正四位勳二等  
大藏大臣

君は大分縣の人井上清君の五男にして明治二年三月を以つて生れ、明治十一年八月先代井上簡一君の養嗣子となる。幼にして穎悟加ふるに頭腦明晰早くも群童に秀づ、夙に郷校を卒業するや笈を負ふて東上し、明治二十九年東京帝國大學法科大學を卒業して直ちに實業界に投ず。

然して日本銀行に入り後ち鶴更定吉君に抜擢せられて特に土方久徵君と共に英國に留學し、ハウスバンクに於て銀行事務を實習し、歸朝するや同行大阪、京都各支店に勤務し、日露の役に際しては國債募集の事務に従事し其の功勞顯著なるの故を以つて勳五等に叙せらる。

斯くて明治三十七年大阪支店長に進み



後ち本店營業局長に任じ、明治四十年社命を帯びて渡米し紐育代理店を監督し、在米二ヶ年にして同四十四年三月歸朝するや、直ちに横濱正金銀行取締役に擧げられ六月副頭取に推薦せられ進んで頭取となり、横濱商業會議所議員たりしが後ち日本銀行總裁に榮進し、大正十二年清浦内閣成るに及び臺閣に列して大藏大臣に親任し、後ち辭して野にありしが昭和二年四月田中内閣の成立を見るや再び日本銀行總裁仰せ付られ以つて現在に及ぶ夫人チヨ子との間に益雄君、四郎君、五郎君及び春子、壽美子、比奈子等あり現に東京市麻布區三河臺町三一番地に住し電話青山三四四〇番なり。

### 伊藤忠兵衛君

伊藤忠商事株式会社社長  
三光紡績株式会社取締役

君は滋賀縣の人先代忠兵衛君の長男にして、明治十九年六月を以つて生れ前名精一を改稱す。夙に實業界に投じ現に伊

藤忠名會社代表社員たる外伊藤忠商事株式會社社長にして且つ三光紡績、丸江商事各株式會社取締役として知らる。

夫人を千代子と稱し奈良縣の人永田藤兵衛君の令姉にして其の間に恭一君、廣二君及び美代子、絹子、妙子等あり、現に大阪市東區安土町二ノ五番地に住し電話本局四一五〇番たり。

### 井上保三郎君

高崎板紙株式会社社長  
信州運輸株式会社常務取締役

君は群馬縣の人井上平次郎君の二男にして、明治元年十月を以つて生れ後ち先代盛三郎君の養嗣子となる。

夙に地方實業界に投じ現に高崎板紙株式會社社長たる外信州運輸、龍榮社製紙所、上州絹糸紡績、上毛木材、上州石材、高崎製帽、高陽織物各株式會社常務取締役にして且つ上州銀行、上信電氣鐵道各株式會社取締役として知らる。尙ほ高崎商業會議所常議員にして且つ

群馬縣多額納稅者として直稅六千八十餘圓を納め當地財界の重鎮たるを失はず。

夫人ゆき子は群馬縣の人細谷宇平治君の令姉にして君との間に房一郎君、正三郎君及びゲン子、津留子、津彌子、登代子等あり、現に高崎市八島町四番地に住し電話一四一番たり。

### 石井柏亭君

洋畫家

今や東洋畫壇の重鎮として名聲噴々たるを石井柏亭君となす。君は東京府の人石井重賢君の令息にして、明治十五年三月を以つて東京市下谷區仲御徒町に生る嚴父重賢君は鼎湖と號し日本畫の大家たりき。

君幼にして畫才衆に秀で夙に父君に就き日本畫を習ひ、後ち淺井忠師に就きて洋畫を學び、技大いに上達し明治二十八年より三十七年に至るまで印刷局に奉職し、次いで中央新聞社の挿畫を擔當したりしも、眼疾の爲め畫筆を抛つこと一年

有半、快癒するや明治四十三年歐洲留學の途につき大正元年歸朝す。

爾來第一回より六回に至る文展に出品して褒狀を受くること數回、更に第七回の文展に「滯船」を出品して二等賞を得たり。大正三年同志と二科會を興し畫界の爲め盡瘁すること甚大、曾つて大正博覽會、平和博覽會等の洋畫部審査委員となり又無聲會の新日本畫運動に参加する外、國民美術協會、日本水彩畫會、大平洋畫會等の會員として斯界に貢献する所尠からず、君の名聲今や斯界に高し。

夫人を加代子と呼び大阪梅花女學校の出身にして君との間に四女あり、現に東京府下日暮里町一〇三五番地に住し電話下谷六二〇三番たり。

### 伊勢本一郎君

日本陶器會社取締役兼支配人

君は東京府士族先代佐之八君の長男にして、明治三年五月を以つて生る。夙に郷校を卒ふるや笈を負ふて東上し、研鑽

の功空しからず、明治三十四年東京商科大学の前身たる東京高等商業學校を卒業し直ちに森村組に入りしが、後ち辭して現に日本陶器株式會社取締役支配人たり夫人かま子は静岡縣の人山田道之助君の長女にして君との間に隆一君、朝次君、忠三君及び喜代子、弘子、和嘉子、米子等あり、現に名古屋市東區撞木町二番地に住す。

### 一條實孝君

公爵 從四位勳三等功五級  
貴族院議員

當家は内大臣藤原鎌足の後裔、九條關白道家の三男實經より出づ、内基の代繼子なく後ち陽成院第九皇子昭義を請うて繼承せしめ其の裔今日に至る。

君は侯爵大炊御門經輝の從兄君にして明治十三年三月十三日を以つて生れ後ち一條家に入り、大正十三年先代他界により襲爵仰せ付けらる。明治三十二年海軍兵學校を卒業し、同三十五年海軍少尉に

任じ、累進して大正九年海軍大佐に陞任と共に大使館附武官として佛國在勤兼ねて造船造兵監督官たりき。其の間日進砲術長、横須賀鎮守府參謀兼望樓監督官、金剛砲術長、海軍々令部參謀、横須賀鎮守府附等を歴補す。夫人經子は養父實輝君の二女にして華族女學校を卒業し君との間に實文君及び正子、重子等あり、東京市牛込區鷹匠町一番地に現住し電話牛込一〇四番たり。

### 今井環君

醫學博士

君は明治廿三年二月を以つて鹿兒島縣出水郡中出水村莊に生る。夙に大志あり笈を負ふて東上し、大正四年東京帝國大學醫科大學を卒業するや、更に研究科に入りて木下、盤瀬、林の諸教授並に眞鍋講師の下に研鑽を積む。

然して後ち順天堂病院に入りて産科婦人科を擔當し、大正十年醫學博士の學位を授けられ、後ち更に歐洲に遊學しエー

ヤマン教授、フビヤ教授、ブム教授等の教室に於て斯學の蘊蓄を究め、歸朝後引續き同院に在勤し本邦醫學界の泰斗として知らる。

君は常に學理の實際化に努め、總ての生活は一面此の趨勢を有せざるべからずと力説する程の新人なり、旅行、自動車運轉等に趣味を有し、殊に寫眞撮影には極めて堪能なるが如し。

夫人をさわ子と呼ぶ、現に東京府下下澁谷町六一九ノ四五號に住す。

### 巖谷 秀雄 君

(小波)

著作家

お伽噺の先生……巖谷の叔父さん……として且つ又久しく博文館編輯局の重鎮として、明治大正昭和の日本文壇に一異彩を放つを我が巖谷秀雄君となす。君は明治書壇の泰斗一六居士巖谷修君の三男にして明治三年六月六日を以つて生る。夙に學に志し訓蒙學舎を経て獨逸協會

學校に學び、且つ川田剛師、杉浦重剛師等の家塾に入りて和漢洋の學を修め學識至らざるなく、後ち尾崎紅葉、川上眉山石橋思案君等と共に硯友社を興し「我樂多文庫」「江戸むらさき」等を發刊して盛んに文學を鼓吹せり。

曾つて京都日出新聞社に入りて君が靈筆を揮ひ、明治三十三年日本語の講師として獨逸柏林大學東洋語學部に招聘せられ、在勤二ヶ年にして歸朝後「洋行土産」を著し同三十八年早稻田大學の講師として學徒の教養に任じ、明治四十二年澁澤子爵を始め本邦實業團の渡米するや君亦行を共にして歐米各國を歴遊し、歸朝後「新洋行土産」の著書を公にし、同十四年には文藝院委員、通俗教育調査委員として少年少女の通俗教育に貢献すること甚大、後ち博文館に入りて少年少女各雜誌の編輯を擔任し令名今や東西に噴々たり。

世界お伽噺、日本お伽噺其他著名の著書多く就中お伽文學の如きは世界各國の

少年少女に愛讀せられて好評を博し、又淡林派の俳諧に通じ樂天居士小波の號あり、尙ほ其の出生の千支に因みて馬の玩具を蒐むることを趣味となし、爲めに一屋を建て、千里閣と稱す。君の一門には學者秀才輩出し彼の有名なる老書家日下部鳴鶴君、令兄工學博士日下部辨二郎君等は其の一例にして、實に一門一家の榮達他の羨望に價するものあり。

夫人ゆう子は滋賀縣の人山村徳次郎君の令妹にして君との間に三一君、榮二君平三君、大四君及び三四子、三八子、きのえ子等あり、東京市芝區高輪南町五三番地に現住し電話高輪三二五番たり。

### 伊勢久治郎 君

廣瀬電力會社取締役

仙臺市會議員

君は宮城縣の人伊勢庄助君の長男にして、慶應二年十一月を以つて生る。夙に縣下財界に活躍して君が天稟の才腕を縦横に振ひ、現に廣瀬電力、仙臺市街自動

車各株式會社の重役にして且つ仙臺市會議員として令名あり。

夫人をゆき子と稱し宮城縣の人笠松儀右衛門君の令妹にして君との間に孝太郎君、久雄君、武君、重久君、男久君等あり、仙臺市南材木町二七番地に現住す。

### 伊吹 平助 君

伊吹合名會社代表社員

京都府多額納稅者

君は京都府の人先代平助君の長男にして、明治元年五月を以つて生れ前名彦太郎を改めて襲名す。夙に京都財界に投じ洋服太物類の販賣に従事するのみならず伊吹合名會社を興して自ら其の代表社員として活躍し、尙ほ京都府多額納稅者として直税二千九百七十余圓を納め京都財界に重きをなす。

夫人とわ子は京都府の人池村久兵衛君の三女にして君との間に健太郎君及びしづ子、キョウ子等あり、現に京都市下京區烏丸通綾小路下ルに住し電話下京三五

五八番たり。

### 伊藤 文吉 君

男爵 從四位勳四等 貴族院議員

滿洲紡績株式會社社長

君は山口縣の人木田幾三郎君の長男にして、明治十八年十二月十五日を以つて生れ、後ち故大勳位公爵伊藤博文公の養嗣子となり、明治二十二年十一月現公爵博邦君より分籍して一家を創立し、故公爵の偉勳により特に男爵を授けらる。

明治四十一年東京帝國大學法科大學英法科を抜群の成績を以つて卒業するや、直ちに官界に投じ農商務省に入り同年文官高等試験に登第し、翌四十二年山林事務官兼農商務省書記官に任ぜられしが、同四十三年辭して英國に航し、倫敦に遊ぶこと二ヶ年、更に獨逸伯林等に遊び大正元年歸朝す。

然して同年内閣總理大臣秘書官に任ぜられしが、翌年特許局事務官兼農商務省參事官に轉じ、大正六年財政經濟特派委

### 池田 長康 君

男爵 從四位

貴族院議員

當家は代々岡山藩の國老として二萬五千石を領し、先々代無適齋に至る。先代長準君其の後を承けて明治三十三年特旨を以つて華族に列し男爵を授けらる。

君實は故貴族院議員千坂高雅君の六男にして、同高節君、同智次郎君等の令弟に當り明治十六年七月を以つて生れ、先代長準君の養嗣子となり大正二年襲爵仰せ付けらる。

明治四十四年京都帝國大學法政大學政治科を卒業し、大正七年貴族院議員に互選せられ以つて現在に及ぶ、趣味として圍碁、將棋あり又堪能なりといふ。

夫人榮子は池田佐與君の令姉にして日本女子大學家政科を卒業す、現に東京市赤坂區青山北町六丁目四十二番地に住し電話青山四一〇番たり。

### 今泉 定介君

日比谷大神宮奉齋會長  
國學院大學皇典研究所理事  
社會教化聯合會理事

抑々社會教化の事業たるや蓋し難事の中の難事に屬するものにして、社會人心是れ危く世道人心萎微せるの季に方り、能く青年後進を率ひて我が國體を説き、常に純朴にして剛健なる美風を興さしめんと日夜全力を傾注して、よく其の功を奏して功勞顯著なる我が今泉定介君こそは眞に邦國の恩人にして、吾人は廣く其の徳を頌せざるべからず。

君は舊白石藩士今泉傳君の三男にして文久三年三月九日を以つて生る。天資英明才幹群を抜き、長ずるに及んで藩儒飯田師の塾に入りて古典學を研究し、次いで丸山作樂師に就いて學び、更に明治十二年上京して神道大教院に入りて國學を修得し、同十五年東京帝國大學古典科に入りて、切磋琢磨、學術優等の故を以つて給費生となり、明治十九年同科を卒業す。

然して直ちに學士會院の聘に應じて古事類苑の編纂に従ひ在職三年にして之を辭し、斯くて専心育英の道に盡瘁せんとの大志を抱き、私立城北中學校を麹町に創設して自ら其の經營の衝に當り、苦心慘愴、基礎漸やくなるに及び明治三十一年同校を東京府に寄附す。

是れ即ち今日の府立第四中學校にして既に同校が府立となるや君校長に任せられ、愈々日に月に隆盛に赴き復憂ふることなきに至りしかば君其の職を辭す、洵に終始一貫の士と言ふべきなり。而して

### 井内 勇君

朝鮮銀行理事

正六位井内勇君は佐賀縣士族井内備一君の長男にして、明治十二年三月九日を以つて生る。明治三十八年東京帝國大學法科大學を卒業するや、直ちに官界に投じ、大藏省に入り累進して國債整理局第

二課長、稅務監督官、函館稅關長等を歴任す。

然して後ち官を辭して朝鮮銀行に轉じ同行調査局長、検査局長等を歴任し現に同行理事として知らる、趣味として讀書旅行等あり。

夫人泰子は男爵小池正晃君の令妹にして東京府立第二高等女學校を卒業し、君との間に一男一女ありて與一君及び綾子と稱す、朝鮮京城旭町二丁目に現住す。

### 伊東 祐弘君

子爵 正四位勳三等  
貴族院議員

當家の祖先は藤原鎌足公の男不比等より出づ、其の子武智麿より十代を経て駿河守時任に至り、伊豆伊東の莊に住するを以つて伊東と稱す、後ち左衛門尉祐經を経て其子祐時日向の地頭となり、後ち十一代を経て祐兵豊臣大閣より日向國飢肥の城主に任せられ、徳川時代に至り封邑五萬七千石を領す。

後ち國學院の創設に盡力し、推されて學監となり更に明治三十三年弘文館に入りて編輯に従ひ、尙ほ國書刊行會を興して國史、國文の保存並に普及を計り、同館をして之等の刊行に當らしむ。

就中勅語衍義、日本歴史、古實叢書、中學史、百家説林、平家物語講義録等は其の著名の著書たり。號を竹廬舎主人又は西江釣徒と稱し、現に前記の諸職にありて其の令名噴々たり、又一日の閑を詩歌書に耽究すといふ、以つて其の人と爲りを知るべきなり、現に東京市芝區三田綱町九番地に住し電話高輪二〇五五番たり。

君は祐兵十一代の孫祐歸君の長男にして明治十三年三月を以つて生れ、同二十七年襲爵仰せ付けらる。夙に學習院高等科を経て東京帝國大學に學び、政治經濟學を専攻し明治四十年同校を卒業するや更に同四十二年歐米に漫遊し同四十四年歸朝す。

曩に伊東水力電氣株式會社々長として同社の事業一切を統轄し令名ありしが、現時は貴族院議員として廣く國政に參與し華胄界の敏腕家として知らる。

夫人經子は子爵松平康民君の四女にして其の間に一男一女ありて祐淳君及び綾子と呼ぶ、現に東京市赤坂區一ツ木町八〇番地に住し電話青山五八三二番なり。

### 伊藤 庄吉君

内外毛織物販賣會社取締役  
仙臺商業會議所議員

君は宮城縣の人先代伊藤喜之助君の二男にして明治三年十一月を以つて生る。夙に實業界に活躍し大阪屋と號して洋服

商を營み、尙ほ傍ら内外毛織物販賣株式會社取締役にして、且つ仙臺商業會議所議員として知らる。

現に仙臺市國分町一六四番地に住し電話一〇八番なり。

### 伊丹彌太郎君

榮銀行頭取  
九州電燈鐵道株式會社社長

君は佐賀縣屈指の大地主として、將又當縣第一の多額納稅者として令名高き、伊丹文右衛門君の長男にして、慶應二年十二月十五日を以つて生る。夙に實業界に投じ會つて起業銀行、眞宗信徒生命保險、九州鐵道、帝國水産、廣瀧水力電氣、久留米電燈、東京醬油、肥前漁業各株式會社の重役及び佐賀商業會議所議員たりしことあり。

現時は株式會社榮銀行頭取たる外九州電燈鐵道株式會社々長にして且つ佐賀縣農工銀行、佐賀貯蓄銀行、九州電氣製鋼佐賀セメント、筑紫電氣軌道、ラサ島燐

礦、九州電化工業、大阪晒粉各株式會社の重役として令名あり。

夫人をふさ子と呼び、佐賀縣の人田上源太郎君の令姉にして君との間に八男四女あり、現に佐賀市本庄町に住す。

### 井上孝哉君

從三位勳三等

衆議院議員

君は岐阜縣の人井上昌治君の長男にして、明治三年十月を以つて生る。夙に郷校を卒ふるや笈を負ふて東上し、明治三十年東京帝國大學法科大學を卒業するや直ちに官界に投じ、熊本縣參事官を振出しに滋賀縣警察部長、佐賀縣、富山縣、神奈川縣、大阪府各知事を歴任す。

曾つて内務次官として令名を馳せ且つ東洋拓殖株式會社理事として財界に活躍し、尙ほ代議士に當選すること二回現に中央政界に重きをなす。

夫人をやゑ子と呼び其の間に濱介君、鮮二君、正三君及び千代子、美恵子、豊

子等あり、現に東京市外代々幡町幡ヶ谷七四九番地に住す。

### 飯田精太郎君

男爵 從四位

鐵道局技師

當家は先代俊助君より家名を擧ぐ、俊助君は夙に軍籍に入り第二師團參謀、歩兵第十五聯隊長、第十一旅團長等を歴任し累進して陸軍中將に陞り、彼の日露戰役の功により特旨を以つて華族に列し男爵を授けらる。

君は其の長男にして明治十七年九月を以つて生れ大正三年襲爵仰せ付けらる。

明治四十年京都帝國大學理工科大學電氣學科を優秀の成績を以つて卒業するや、直ちに官界に投じ臺灣總督府臨時土木部に入り、明治四十二年鐵道技師となり大正九年歐米に出張を命せられ以つて現在に及ぶ。

夫人タツ子は新潟縣の人川岡守三君の養女にして熊本市立高等女學校を卒業し

君との間に俊武君及び英子、淑子、和子晴子等あり、現に東京府荏原郡上目黒駒塚七七一番地に住し電話青山八三五番たり。

### 岩城隆徳君

子爵 從四位

貴族院議員

當家は平國香の後裔にして世々磐城の平城に住せしを以つてこれを姓となす、而して夫れより二十二代貞隆羽後龜田に移され封二萬石を領す、後ち十一代を経て隆邦君に至る。

君は其の後を承く、君實は子爵青山幸宜君の五男にして、明治二十三年六月を以つて生れ後ち先代隆邦君の養嗣子となり襲名す。大正三年東京帝國大學理科大學植物科を卒業するや、直ちに帝室林野管理局に入り技師たりしが後ち辭して日東印刷株式會社取締役、内務省社會局囑託等を歴任し大正十四年七月貴族院議員に當選し以つて現在に及ぶ。

夫人フミ子は神奈川縣の人相川文五郎

君の長女にして君との間に隆宜君、隆明君及び順子等あり、現に神奈川縣鎌倉川口片瀬西方二四六〇番地に住す。

### 五百木竹四郎君

株式會社精養軒常務取締役

今や我が株式會社精養軒の聲名内外に普く、邦國各階級の紳士淑女は勿論、外來の王侯貴顯紳士も一度足を我が國に留めんか、必ずや食事調理其の他宿泊萬端を用命し、殊に同軒の歴史に光榮を添へたるは明治十年以來長くも、明治天皇昭憲皇太后、兩陛下行幸啓の榮に浴すること前後二回、且つ至尊の御調度を上納せられたる以つて同軒の如何に聲望隆々たるかを知るべし。

然して同社常務取締役兼全國支店總轄營業部長として、其の經營を双肩に擔ひ最も重き責任を有するを我が五百木竹四郎君となす。君は愛媛縣士族五百木友次郎君の四男にして、明治二十五年五月十

日を以つて同縣北宇和郡宇和島町に生る。夙に實業界に雄飛せんと志し、明治四十年齡二十歳にして同軒に入り、翌年兵役に服し同四十二年除隊して復職す。

爾來誠實事務に精勵せしかば累進して遂に同社取締役兼支配人に擧げられ、君が經營宜しきを得たる結果は業運逐次隆盛に赴き、而して大正十年歐米各國を巡遊して先進諸國の斯業界を視察研究して歸朝せり。

君の經營方針たるや着實にして、而も時勢の進運に遅れず、食卓の設備、裝飾の按配等總て些少の遺憾なく、加ふるに四季に適應し晝夜の氣分に相應する等其の苦心配慮の跡歴然として見るべく、從つて顧客をして仙境にあるの感あらしむ大正十三年擧げられて同社常務取締役兼營業總轄營業部長に就任し、今や全く同社の總司令として内外を總轄支配するに至り、君の令名や愈々噴々として東西に聞ゆるに至れり。

夫人時子は東京府の人鈴木岩吉君の長

女にして其の間に長男一男君及び次男友

彦君あり、現に東京市赤坂區板坂町五番地に住し電話青山三四四三番なり。

### 飯田久恒君

從四位勳二等功四級

豫備海軍中將

君は東京府の人飯田久微君の長男にして、明治二年十月十日を以つて生る。夙に軍人たらんと志し即ち海軍兵學校に入學し、同校を卒業するや海軍少尉に任ぜられ累進して大正十三年二月海軍中將に陞ると共に豫備役に編入せらる。

其の間薩摩艦長、第三艦隊參謀長、英國大使館附武官、第四戰隊司令官等を歴任し、現に閑地にありて悠々自適として風月に親しみ趣味たる讀書、ゴルフに耽るといふ。

夫人たまき子は長野縣の人畑良太郎君の令妹にして華族女學校を卒業し君との間に一男一女あり、東京市牛込區袋町八番地に現住し電話牛込二一七四番たり。

### 伊東二郎丸君

子爵 正四位  
貴族院議員

君は故子爵伊東祐磨君の二男にして、明治十年八月二十九日を以つて生る。先代祐磨君は舊鹿兒島藩士にして勤王の志厚く、維新の際奥州、桑崎、函館各所に轉戦して偉功あり、明治三年海軍少佐に任じ明治十一年海軍中將に陞る。

其の間春日艦副艦長、東海鎮守府司令長官、海軍省軍務局長、海軍兵學校長等を歴任し、同十七年特旨を以つて華族に列し子爵を授けられ、翌年元老院議員に同二十三年貴族院議員に勅選せられ同三十八年二月他界す。

君は其の長男にして先代薨去に依り家督を相續し襲爵仰せ付けらる。明治四十三年東京帝國大學法科大學英法科を卒業するや、直ちに實業界に投じ日本製作所に入社し、大正五年東京貯藏銀行に轉じて同行取締役に擧げられ、大正十四年八月貴族院議員に互選せられ、同十四年八月

月海軍省參與官に任ぜらる。趣味として書畫、骨董、謠曲等あり。

夫人登世子は東京府士族原六郎君の三女にして、學習院女學部を卒業し其の間に英磨君、隆磨君及び敦子等あり、現に東京市芝區車町四二番地に住し電話高輪七九三番たり。

### 井上榮三郎君

合資會社大信商會代表社員

君は東京府の人井上榮次郎君の三男にして、明治十一年十二月十九日を以つて生る。夙に實業界に投じ日本石油株式會社に入りて格勤精勵、累進して同社庶務課長たりしが、大正十年八月旭石油株式會社に轉動し、同社支配人として活躍大いに努め同社の發展に盡瘁すること甚大なりき。

偶々彼の未曾有の關東大震災に遭遇するや、愈々獨立の機運熟せりとなし敢然起つて獨立を宣し、京橋區築地一ノ十六番地に大信商會を開設して石油類の販

賣に従事し以つて今日に至る。

夫人ぬい子は東京府士族金塚龜太郎君の令妹にして明治女學校高等文學科を卒業し君との間に龍友君、揚藏君、萬壽男君等あり、現に東京府荏原郡世田ヶ谷池尻三六九番地に住し電話青山五七一番たり。

### 猪俣安造君

後志漁業商會株式會社社長  
北海道銀行取締役

君は北海道の人猪俣榮吉君の長男にして、明治十八年八月を以つて生る。現に後志漁業商會株式會社社長たる外北海道銀行、板谷商船各株式會社監査役にして且つ北海道多額納稅者として直稅二千三百三十余圓を納むといふ。

夫人たつ子は北海道の人板谷宮吉君の令妹にして君との間に安之丞君及び美恵子等あり、現に北海道余市に住す。

### 伊藤博邦君

公爵 從二位勳二等  
貴族院議員

當家は先代大勳位博文公より顯はる。先代は舊山口藩士にして、明治年間の元勳として知られ、畏くも明治大帝の御信任厚く、内閣を組織して總理大臣たること前後四回、其の他樞密院議長、貴族院議長、朝鮮總督等の顯職を歴任し明治四十年公爵を賜ふ。

君は其の後を承け明治四十二年襲爵仰せ付けらる。君實は山口縣士族井上五郎三郎君の四男にして、明治三年二月二日を以つて生る。幼名を勇吉と呼び侯爵井上勝之助君の令弟に當り、故侯爵井上馨君の甥君にして且つ男爵伊藤文吉君の養兄君たり。

夙に學習院を卒業するや、獨逸に留學し歸朝後宮内省に職を奉じて式部官主事心得、有栖川宮別當心得、式部官主事、式部次長等を歴任し、大正十年主馬頭に任せられ、現に貴族院議員として議政府

に列し國政に盡瘁すること甚大なり。

夫人たま子は神奈川縣士族高島嘉右衛門君の長女にして東京女學館を卒業し其の間に博精君、博春君、博通君、博臣君、博則君、博經君、博孝君、博英君及び愛子、十四子等あり、因に博春君は故男爵清水資治君の養嗣子となれり。東京市麻布區新龍土町十二番地に現住し電話青山三〇〇番なり。

### 伊藤幸次郎君

日本鋼管株式會社取締役支配人  
中央製鐵株式會社取締役

君は東京府の人伊藤眞之助君の長男にして、慶應元年七月十二日を以つて生る。明治二十九年東京帝國大學法科大學英法科を卒業するや、直ちに實業界に投じ東洋汽船株式會社に入りて格勤精勵、累進して同社支配人に擧げられ同社發展に盡瘁すること蓋し甚大なりき。

然して明治四十二年同社を辭して滿洲に渡り、滿洲日々新聞社に入りて同社々

長に就任し、大いに啓蒙開發に力を致し

後再び實業界に入り、現に前記の外日本レール、瓦斯管販賣、日支炭礦汽船各株式會社の重役として知らる。

夫人せい子は東京府の人木村齊次君の長女にして、東京女子高等師範學校を卒業し君との間に尙雄君、甲子次郎君及びハル子等あり、現に東京府荏原郡平塚中延さいから坂に住し電話高輪一〇九二番なり。

### 井上篤太郎君

京王電氣軌道會社事務取締役  
玉川電氣鐵道株式會社取締役

勳四等實業家井上篤太郎君は神奈川縣の人井上松羅君の長男にして、安政六年六月を以つて相模の國愛甲郡三田村に生る。

夙に學を好み帝都に出でて獨逸學を研究し、未だ終らざるに嚴父の逝去に會し一旦學を廢して歸郷せるも後再び上京し、研鑽空しからず遂に明治法律學校を

卒業す。時恰も世を擧げて自由民権の論議盛にして、君また政界に投じて南船北馬し、神奈川縣自由黨の牛耳を握り縣郡村の各名譽職を始め蠶糸業郡部取締所重役、中央部會議員等に擧げられ明治二十三年始めて議會開設せらるゝや中島信行君を推して其當選を見、君は政界を辭して奮然として實業界に走りぬ。

爾來橫濱鐵工、日本絹紡績各株式會社の理事又は支配人となり、たゞく明治三十四年財界の重鎮故和田豊治君の知るところとなり、富士瓦斯紡績株式會社に入社して同社工場長、商務部長等の要職を占め、明治三十七年清國に、同四十四年より五年に亘り英領印度に航し専ら蠶糸、絹織物、棉花、絹綿糸布等の對外貿易に關し視察研究して歸朝し、斯界に貢獻すること甚大なりき。

君また發明的才量豊かにして、我が國蠶糸紡績業の爲め有益なる發明をなし、特許を得たるもの拾數件の多きに達すと云ふ。斯くて大正三年先輩知友に推され

て再び政界の人となり、敢然立候補を宣するや、發表後僅かに旬日にして大多數の得票を以つて當選の榮譽を擔ひ、中央政界に謳はれしが現時は前記の諸職にある外上毛然糸株式會社顧問たり。

夫人トヨ子は神奈川縣の人高井岡三君の三女にして其の間に正幹君、黨君、孝治君、三郎君、弘君及び愛子等あり、現に東京市外代々幡町代々木初臺五九四番地に住し電話四谷一三九六番たり。

### 飯泉金次郎君

實業家

君は神奈川縣の人飯泉金次郎君の二男にして、明治十一年三月を以つて生れ、後ち前名樂之助を改めて襲名す。

當家は神奈川縣下に於ける當地有數の資産家として知られ、且つ神奈川縣多額納税者にして現時直接國稅千六十餘圓を納むといふ。

夫人サハ子は神奈川縣の人相澤肥宗君の長女にして君との間に辰巳君、秋三郎

君、俊男君、和七郎君、春男君及び百合子、樂子等あり、現に横濱市山下町二七七番地に住し電話二七八三番たり。

### 絲原武太郎君

山陰新報社長  
貴族院議員

君は島根縣の人江角勝太郎君の二男にして、明治十二年十一月を以つて生れ、後ち先代武太郎君の養嗣子となり前名徳太郎を改めて襲名す。當家は山陰地方屈指の大富豪にして、先代より砂鐵採取及び製鐵事業を經營して本邦製鐵界に貢獻すること尠ならず。

夙に學業を卒ふるや直ちに實業界に投じ、祖業を繼承して君が敏腕を振つて能く家名を恥かしめず、業況益々發展の域に達せしめ尙ほ傍ら山陰新報社長として地方啓蒙開發に盡瘁する外松江銀行、山陰道産業、松江製紙、出雲館製紙所各株式會社の重役として地方財界に重きをなし、且つ島根縣多額納税者にして大正十

二年九月には多數縣民の輿望を擔つて貴族院議員に當選し、議政府に列して國政に參與し以つて現在に及ぶ。

夫人律子は島根縣の人木佐徳三郎君の五女にして君との間に義隆君及び道子、壽子、吉子、幸子等あり、現に島根縣仁多郡八川村に住す。

### 井上勝純君

子爵 從四位勳四等

當家は先代勝君の時代より其の家名を擧ぐ、同君は舊山口藩士にして明治初年以來職を官界に奉じ、特に我が國鐵道事業の經營に參畫して其の貢獻すること甚大、明治二十年特旨を以つて華族に列し子爵を授けらる。

君は即ち其の養嗣子にして、實は伯爵松浦厚君、子爵本多正復君、侯爵大隈信常君等の令弟に當り明治十七年七月を以つて生れ、後ち先代勝君の養嗣子となり同四十三年八月家督を相續して襲爵仰せ付けらる。夙に海軍に志し累進して海軍

中佐に陞り、會つて伊勢分隊長たりしことあり。

夫人千八重子は養父勝君の二女にして其の間に勝英君及び正子、加彌子等あり東京市赤坂區榎坂町に現住し電話青山四五六番たり。

### 伊澤平左衛門君

鹽釜、五城各銀行頭取  
仙臺瓦斯株式會社社長  
貴族院議員

地方實業界の重鎮伊澤平左衛門君は、宮城縣の人伊澤平藏君の長男にして、文久二年十一月を以つて生る。

當家は縣下屈指の富豪として知られ父祖傳來酒造業を營み、現に斯業に精勵する傍ら前記の諸職にあるのみならず尙ほ仙臺燒酎株式會社社長、伊澤合資會社代表社員にして且つ宮城植林、七十七銀行、仙臺平機業、仙臺電氣工業、仙臺軌道、宮城貯蓄銀行、第八銀行、宮城倉庫各株式會社取締役及び櫻護謨、仙臺染織、若

生本店、秋保石材軌道各株式會社監査役として我が財界に重きをなす。

現に仙臺商業會議所會頭にして曩に仙臺市會議員、同市參事會員、衆議院議員たりしことあり、縣下屈指の多額納税者として直稅實に壹萬七千餘圓を納め、大正十四年九月貴族院議員に當選し現に其の榮職にあり、君は又宗教の把持者にして佛教を奉じ、其の信心深きこと切なるものあり。

夫人との間に平馬君、平四郎君、平之丞君、平悟君、平和君及び友代子、ます子、けい子等あり、宮城縣仙臺市上杉山通一七番地に現住し電話二一六番たり。

### 伊東三郎君

東京電燈株式會社常任監査役

當家は嚴父伯爵伊東巳代治君より其の家名を擧ぐ、同君は長崎縣の人伊東善平君の三男にして、明治初年時の縣令伊藤博文君の知遇を得て内務一等屬に任ぜられ、爾來官界に遊泳すること久しく、明

治三十一年農商務大臣に親任せられ、同三十二年樞密顧問官となり、現に其の顯職にある外議定官帝室制度審議會總裁を兼ねて令名あり。

君は其の三男にして明治十九年三月を以つて生る。夙に早稻田大學政治經濟科を卒業するや直ちに實業界に投じ、爾來東京築地活版所取締役、大和毛織株式會社監査役等を歴任し、現に東京電燈株式會社常任監査役として我が財界に重きをなす。

夫人ミネ子は新潟縣の入市島徳厚君の令妹たり、現に東京市本郷區駒込林町三十一番地に住し電話小石川四三九〇番たり。

### 飯尾 一二君

合同紡績株式會社取締役  
小松島水力電氣會社監査役

君は大阪府士族飯尾明央君の長男にして、明治四年五月を以つて生る。明治二十年大阪高等商業學校を卒業するや、直

ちに實業界に投じ現に合同紡績、同興紡績、小松島水力電氣各株式會社の重役として地方財界に令名あり。

夫人イヲ子は奈良縣士族青木政一郎君の長女たり、現に奈良縣生駒郡郡山に住す。

### 岩倉 具光君

國際運送株式會社社長  
内國運送株式會社取締役

君は贈太政大臣岩倉具視君の第三子たる子爵岩倉具經君の三男にして、明治十九年九月を以つて生る。夙に東京商科大學の前身たる東京高等商業學校を卒業するや身を官界に投じ、大藏大臣秘書官に任ぜられしが明治四十四年歐米に航して彼の地の經濟界を視察研究すること數年大正二年造詣を深くして歸朝す。

偶々大阪市に於ける才賀電氣商會整理の爲めに日本興業株式會社の設立を見るや、君聘せられて同社に入り、爾來四ヶ年の間其の整理の任に當り、大正六年東

洋製鐵株式會社の設立の議起るや其の創立に參畫し、同社の設立を見るや東京本社支配人に推され、後同社が八幡製鐵所に委任經營せらるゝに及んで退社す。

然して大正十年歐米訪問實業團の一行と共に再び外遊の途に上り、具さに各國の經濟狀況を實地に就き視察見學して歸り、同十三年六月國際運送株式會社事務取締役に就任して活腕を振ひ現に同社々長たる外内國運送、東京實用自動車、大北火災海上運送保險、泰平洋行、櫻セメント各株式會社取締役に於て且つ日本レール、阪神急行電鐵各株式會社監査役として我が財界に重きをなす。

趣味極めて廣く、就中俳句に至りては頗ぶる堪能にして素人の域を脱すと云ふ日本興業俱樂部、日本俱樂部、ロータリー俱樂部等の會員たり。

夫人花子は岩下清周君の長女にして女子學習院の卒業なり、現に東京市牛込區筑土八幡町二十二番地に住し電話牛込四七四八番たり。

### 池田 仲博君

侯爵 從三位勳三等  
貴族院議員

當家は清和源氏の裔紀伊守田信紀の後裔なり。中興の祖輝政徳川家康に屬し播州姫路の城主となり五十二萬石を領す。忠嗣に至り一家を成し元和年中因伯二州を賜ひしかば此の地に移り鳥取三十一萬石を領す。維新後先代輝知君に至り華族に列し侯爵を授けらる。

當主は故公爵徳川慶喜君の五男にして明治十年八月二十八日を以つて生れ、先代輝知君の養嗣子となり、明治二十二年襲爵仰せ付けらる。明治三十二年陸軍士官學校を卒業して陸軍歩兵少尉に任じ同三十四年陸軍歩兵中尉に進み、從三位勳三等に叙せられしが同四十五年病氣の故を以つて退役す。

明治三十五年以來貴族院議員として議政府に列し、尙ほ東京府多額納稅者にして現時直稅七千七百十餘圓を納む、趣味廣く銃獵、寫眞、謠曲等に堪能なりとい

ふ。君に三男三女ありて徳眞君、博久君、博正君及び謙子、静子、温子と呼ぶ、現に東京市外千駄ヶ谷町原宿二四九番地に住し電話青山二八二番たり。

### 泉 光藏君

小倉鐵道株式會社事務取締役

君は福岡縣の人泉治平君の長男にして明治二年九月を以つて生る。夙に普通教育を修むるや九州鐵道界に投じ其の盡瘁すること甚大、現に小倉鐵道株式會社事務取締役に於て知らる。

曾つては日田鐵道株式會社支配人たりしことあり、夫人をゆき子と稱し福岡縣の人沖永學三君の長女にして君との間に四男四女あり、現に福岡縣企救郡足立に住す。

### 伊藤 由太郎君

東海倉庫株式會社取締役  
愛知縣多額納稅者

君は愛知縣の人伊藤忠左衛門君の長男

にして、明治五年四月を以つて生る。夙に實業界に活躍して君が敏腕を振ひ、現に東京倉庫、四日市倉庫各株式會社の重役として地方財界に重きをなす。

然して當地有數の大地主にして且つ愛知縣多額納稅者として直稅五千五百餘圓を納むるを以つて知らる。

### 伊藤 佐平君

伊藤殖産合名會社代表社員

君は愛知縣の人山田寅之助君の令弟にして、明治元年五月を以つて生れ後ち先代佐平君の養嗣子となり前名時四郎を改めて襲名す。

夙に實業界に投じ現に伊藤殖産合名會社代表社員にして、且つ愛知縣多額納稅者として直稅二千餘圓を納め當地財界

に重きをなす。

夫人りやう子は養父佐平君の長女にして君との間に一女ありてよね子と稱す、現に名古屋市西區東方町二ノ十番地に住す。

### 井上匡四郎君

子爵 正三位勳二等  
工學博士 貴族院議員

當家は先代毅君より顯はる。毅君は舊熊本藩士にして、明治三年東京に出でて大學小舎長となり、後ち司法卿江藤新平君に隨行して歐洲に航し、歸朝後諸顯職を歴任し、曩に文部大臣に親任せられ明治二十八年勳功に依り特旨を以つて華族に列し子爵を授けらる。

君實は熊本縣士族岡松斐谷君の四男にして、法學博士岡松參太郎君の令弟に當り、夙に先代毅君の養嗣子となる。明治三十二年東京帝國大學工科學を卒業し同三十四年獨米に留學し、歸朝後東京帝國大學工科學助教授、大阪高等工業學

校教授、京都帝國大學工科學教授、東京帝國大學工科學教授等を歴任し、大

正十四年八月海軍政務次官に任じ翌年六月若槻内閣に入りて鐵道大臣に親任し現時は貴族院議員たり。

夫人富士子は養父毅君の長女たり、現に東京市芝區高輪南町二十八番地に住し電話高輪三四八番たり。

### 井上十吉君

英學者 井上通信英語學校長  
株式會社井上辭典刊行會社長

本邦學界に於ける三大英學者の一人として故神田、和田兩博士と相並び斯界に名あるを從四位勳三等井上十吉君となす、君は舊德島藩士井上高格君の二男にして、文久二年十月二十八日を以つて徳島市に生る。

夙に西洋文物の研鑽に志し明治初年笈を負ふて東上し、直ちに慶應義塾に入りて斯學を修得せんと欲せしも、固より君の所志は層々たる内地にありて殊に不備

不完全極まる當時の教育機關を以つてしては、到底満足なる講究をなす能はざる

を慨し、此處に敢然海外に學ばんと決心し遂に明治六年三月英國に航し、ベースウオーターカレッジネートスクール、ラグビー公立學校、キングス大學等に學び後ち官立鑛山學校に入りて冶金學を専攻し同十五年優秀の成績を以つて卒業す。

斯くて君が海外に留まりて研鑽すること十余年、其の間専門學研究の餘暇を利用して専心英語英文の研鑽に努め、時々君の著作を公にしては外人をして驚嘆激賞せしめ、明治十六年錦を衣て歸朝するや、間もなく聘せられて東京帝國大學及び同豫備門の講師に任じ、後ち推されて第一高等學校教授たりしが明治二十六年教職を辭し、聘に應じてジャバングセツト新聞社に入りて記者となり、君が濫著を傾注して其の健筆を縦横に揮ひぬ。

明治二十八年十二月外務省に入りて翻譯官に任じ、同三十一年公使館二等書記官に榮轉して白耳義公使館に勤務し、更

に同三十三年華盛頓府に轉動し同三十四年歸朝し、同四十年公使館一等書記官に榮進し大正七年一月官を辭す。

爾來專心著述に力を致し名著頗る多く就中新譯和英辭典、英譯忠臣藏、英文東京家庭生活、井上英和大辭典、同中辭典、井上和英大辭典、同中辭典、ハンデイ英和大辭典等は廣く人口に膾炙せられ、君が我が國英學界に貢獻すること甚大なりと謂ふべし、東京市外中野町大字中野一―二四番地に現住す。

### 伊藤欣二君

博文館印刷所取締役  
東信電氣株式會社取締役

君は東京府の人田澤等君の二男にして明治十七年一月を以つて生れ後ち先代幹一君の養嗣子となる。夙に實業界に投じ現に前記の外大橋本店、目黒蒲田電鐵各株式會社の重役にして且つ茨城無煙炭礦株式會社相談役たり。

夫人文字は東京府の人大橋新太郎君の

三女にして君との間に光一君及び徳子、廣子等あり、現に東京市麴町區下二番町四二番地に住し電話四谷三九九〇番たり

### 磯村豊太郎君

北海道炭礦汽船株式會社事務取締役  
夕張鐵道株式會社長

君は大分縣士族磯村篤二君の長男にして明治元年十一月を以つて生る。夙に郷校を卒ふるや笈を負ふて東上し、明治二十二年慶應義塾大學を卒業するや、直ちに官界に投じ遞信省に職を奉じ、後藤子の遞信大臣たるに及んで同秘書官に擧げられ後ち、感ずるところありて官を辭し直ちに時事新報記者として操觚界に活躍して其の靈筆を揮ひぬ。

明治二十七年日本銀行に入り更に三井物産株式會社に轉じて君が敏腕を縦横に振ひしかば累進して同社倫敦支店長に擧げられ、後ち北海道炭礦汽船株式會社の實權三井家の手に歸するや、君推されて同社事務取締役に拔擢せられ現に其の職

にある外夕張鐵道株式會社々長にして傍ら日本製鋼所、山東鑛業各株式會社の重役として我が財界に名あり。

君尙ほ幾多の公共事業に參與し、現に帝國經濟會議員、日本工業俱樂部、日本經濟聯盟會、日本貿易協會、石炭聯合會、鑛山懇話會、港灣協會、恩賜財團濟生會社團法人同潤會各理事にして、且つ内務省社會局委員たり。

夫人よね子は分縣士族磯村眞五郎君の長女たり、東京市芝區高輪南町三〇番地に現住し電話高輪一二四九番なり。

### 伊丹一郎君

麒麟麥酒株式會社長

君は東京府の人伊丹重賢君の二男にして、男爵伊丹重雄君の叔父君に當り、文久三年十一月を以つて生る。夙に實業界に志し、日本郵船株式會社に入社して敏腕を振ひしかば、漸次昇進して神戸支店長に擧げられ後ち同社を辭して各種事業會社に關係し、畫策大いに努めしかば遂



に今日の大を成すに至る。

現時は前掲會社の社長たるのみならず又白山水力電氣、大同電力、東邦電力各株式會社の重役として我が財界に録々の名あり。

夫人つたへ子は兵庫縣士族鈴木清君の二女にして君との間に勝君及びかえ子、壽枝子等あり、現に東京市麻布區材木町五九番地に住し電話青山六三七八番なり

### 井上憲一君

王子製紙會社取締役販賣課長  
北海工業株式會社監査役

君は福岡縣の人故井上誠造君の長男にして、明治十四年一月十八日を以つて生る。明治三十三年下關商業學校を卒業するや、大志を抱いて東上し直ちに東都實業界に投ず。

然して三井物産株式會社に入社して同社本店及び各地支店を轉勤して精勵すること十余年、同社の爲め貢獻すること甚大、明治四十四年十二月辭して株式會社

有恒社取締役に擧げられしが間もなく辭

し、現に王子製紙株式會社取締役兼販賣課長として社の内外に重きをなすのみならず、傍ら北海工業株式會社監査役にし

て且つ共同バルブ、丸王商店各株式會社取締役として知らる。趣味多様に於て忙中の閑を利用しては讀書、圍碁、將棋、玉突等に耽るとか。夫人との間に三男あり、現に東京市小石川區小日向臺町二ノ二十九番地に住し電話小石川二四一四番たり。

### 伊藤末之助君

武藏野銀行常務取締役  
福島銀行監査役

君は福島縣の人伊藤新右衛門君の令弟にして、明治十八年六月を以つて生る。

夙に銀行界に投じ、現に武藏野銀行常務取締役たる外福島銀行監査役たり。夫人きく子は東京府の人梅田英太郎君の令妹たり、東京市牛込區市ヶ谷田町二ノ三九番地に住し電話牛込二九六番なり

### 井上源之丞君

凸版印刷株式會社會長  
精版印刷株式會社取締役

現今我が實業界に活躍して漸次其の地歩を占め、隆々として發展する當代立志傳中の第一人者井上源之丞君は、東京府の人井上源三郎君の長男にして明治十二年十一月を以つて生る。

當家は先代より東都有數の和洋紙類の製造販賣商を以つて知られ、君又祖業を繼ぎて益々盛大の域に達せしめ、事業愈々擴大して今や同業に關係深き印刷事業にも相當の地歩を占め、曩に凸版印刷株式會社創立せらるゝや推されて同社取締役支配人となり、現に同社取締役會長として内外の社務を執掌し同社の發展に盡瘁して逐期好成績を擧げしめ、其の今日の大を成す蓋し君が非凡なる才腕の致すところにして、君は尙ほ傍ら精版印刷、尾澤藥舖各株式會社の重役として其の令名今や我が財界に噴々たり。君や賦性穎悟にして頭腦明晰、加ふる

に商機を見る極めて敏、年齒未だ春秋に富める君の前途や蓋し多望且つ多端なりと謂ふべし。

夫人貞子は廣島縣の人三宅幹造君の長女にして内助の聞え高く其の間に茂子、愛子等あり、現に東京市麴町區土手三番町一四番地に住し電話四谷二二九五番たり。

### 井田清三君

麒麟麥酒株式會社事務取締役  
日本硝子工業株式會社取締役

當家は播州姫路藩主酒井家譜代の臣にして、世々大目附を勤めし名家なり。君は兵庫縣士族先代井田佐君の長男にして元治元年六月を以つて生る。

夙に郷校を卒ふるや笈を負ふて東上し研鑽琢磨、明治十八年慶應義塾大學を優秀の成績を以つて卒業し直ちに實業界に投じ、聘に應じて山陽鐵道株式會社に入りて精勵大いに勤めしかば漸次重用せられて同社會計課長に就任せり。

偶々明治四十年同鐵道が國有に歸するや辭して麒麟麥酒株式會社に轉じ、君が才幹を縦横に振ひて社運の振展に盡瘁し今や同社事務取締役として、内外の社務を執掌する傍ら日本硝子工業株式會社取締役及び日本エレクトラッドオート株式會社監査役として我が財界に令名あり。

夫人ときえ子は兵庫縣士族町田茂雄君の令妹にして君との間に二男五女ありて房雄君、秀雄君及びまさ子、てい子、りう子、かな子、つね子と呼ぶ、現に神奈川縣橋樹郡鶴見町に住す。

### 犬塚力君

正七位 宮内事務官  
北白川宮御用掛

君は山形縣士族犬塚定衛君の長男にして、明治四年九月二十六日を以つて生る夙に學業を卒ふるや宮内省に職を奉じ、現に宮内省事務官事務取扱北白川宮御用掛の要職にあり。

夫人梅江子は池田寛治君の長女にして

君との間に晃君、武君及び定子等あり、現に東京市芝區高輪南町十七番地北白川宮官舎内に住す。

### 井上周君

東洋製紙株式會社社長  
細セメント株式會社監査役

君は東京府の人今村繁三君の令弟にして明治十二年四月を以つて生れ、後ち先代保次郎君の養嗣子となる。夙に歐洲に留學しベルジュニウム商科大學に學び、研鑽を積みて歸朝す。

然して歸朝するや直ちに關西實業界に投じ現に前記の外大正製酒、日本簡易火災保險、亞鉛乾鑛、三營組、關東産業、山陽中央水電、國東鐵道各株式會社の取締役にし且つ網島土地、兩江拓林鐵道各株式會社監査役として關西財界に重きをなす。

趣味多様なる中にも長唄、清元等は其の最もなるものにして頗る堪能なるが如し。夫人キミ子は養父保次郎君の長女に

して君との間に二女ありて芳子、美代子と稱す、現に大阪市北區中野町二丁目五十九番地に住し電話東二一番たり。

### 井上雅二君

海外興業株式会社社長  
株式會社南洋公司常務取締役

其の始め海軍たらんとの大志を抱き、後ち感ずるありて海外に飛躍し、今や南洋及び南米の寶庫を開拓して日本の「セシルローズ」を以つて目せらる、況や現今の如き我が日本の國狀より鑑みて、海外の發展一日も緩ふすべからざるの季に當り、我が井上雅二君の使命たる實に重且つ大なるあるを忘るべからず。

君は兵庫縣の人足立多兵衛君の二男にして明治九年六月二十三日を以つて生れ後ち井上藤兵衛君の養嗣子となる。夙に篠山鳳鳴義塾に學び後ち上京して攻玉社に入り、明治二十五年海軍兵學校に轉ず偶々日清戰役に際會し志を東邦時局に抱き、退學して陸軍通譯官として臺灣に渡

り、平和克復後支那を漫遊し歸朝するや再び上京して早稻田大學英語政治科に學び、在學中已に支那滿洲樺太等を視察見學して大いに見聞を廣め、同三十二年優秀の成績を以つて卒業せり。

然して東亞同文會の幹事となり、再び支那に渡り上海にあること年余、明治三十四年渡歐して維也納及び柏林大學に殖民及び經濟學を專攻すること三ヶ年、此間屢々中央亞細亞、波斯、土耳其、露西亞、巴爾幹諸邦に漫遊を試み同三十六年十月歸朝するや身を官界に投じ、遞信省の囑託を受けて渡鮮し京城に駐在して特別任務に服し、同三十八年七月韓國政府財務官となり、同國財政の整理に盡すこと甚大、同四十年日韓合併に際し伊藤公爵に拔擢せられて宮内府書記官となり、宮中の改革に參與すること二ヶ年、同四

十三年官を辭して世界各國殖民地視察の途に上り歐米、亞細亞、阿佛利加の四大洲に跨り其の道程實に六萬餘哩、足跡殆んど全世界に遍す。

此に於て哉歸朝するや直ちに南洋開拓に着眼し、森村男に謀りジョホール國に土地を租借して半島に護謨の栽培事業を興し、爾來銳意事業の經營發展に努力し現に株式會社南洋公司常務取締役として其の敏腕を振ひ、更に南米ブラジルの寶庫を開拓して我が移民を入れ、ブラジルの天地をして日本の一大發展地たらしむべく海外興業株式會社を創立し、君自ら同社々長として内外の社務を執掌し以つて現在に及ぶ。

尙ほ傍ら農林省囑託、東亞同文會幹事南洋協會理事、東亞協會評議員等の要職に參與し、君が海外發展を畫策して我が帝國發揚に貢獻すること蓋し甚大、而も其の企畫するところ一として可ならざるはなく、今や君の前途益々多事且つ多端なりと謂ふべし。

夫人秀子は我が國女流教育家として令名高く、現に日本女子大學家政科長、文部省試験檢定臨時委員、櫻楓會幹事長等の要職にあり、其の間に陽一君、支那子

委幽子等あり、現に東京市外高田二五四七番地に邸宅を有し電話牛込二八六五番たり。

### 井上禧之助君

旅順工科大学長

從三位勳三等理學博士井上禧之助君は山口縣士族井上信厚君の三男にして、明治六年十二月四日を以つて生る。

明治二十九年東京帝國大學理科大學を卒業するや更に研究科に學び、斯學の研鑽を積みて後ち官界に職を奉じ、拓殖局技手、臺灣總督府技師、農商務省技師兼製鐵所技師、農商務省鑛山局地質調査所長等を歴任し、大正六年七月理學博士の學位を授けらる。

曩に明治三十六年オーストラリア國萬國地質會議に、同四十年瑞典萬國地質會議、更に大正二年には加奈陀萬國地質會議に差遣せらる、大正十三年調査所長を辭し同十四年旅順工科大学々長に任じ以つて現在に及び、傍ら震災豫防調査會委

員、學術研究會議員、復興局囑託たり。

夫人たみ子は宮城縣の人四倉源藏君の四女にして東京府立高等女學校の卒業なり、現に其の住宅を東京市芝區白金今里町九六番地に有し電話高輪七七八番なり

### 井上寅次郎君

兵庫縣多額納稅者  
神戸商業會議所職員

君は兵庫縣の人井上源四郎君の長男にして、明治三年十一月を以つて生る。夙に神戸實業界に投じ肥料商として知られ現に傍ら東洋輸出木材、日華工業原料各株式會社の重役たり。

尙ほ神戸商業會議所職員にして且つ兵庫縣多額納稅者として現時直接國稅四千百九十余圓を納むといふ。

夫人くに子は兵庫縣の人柴野周太郎君の長女にして君との間に徳太郎君、岩地君、福松君及び春枝子、きぬ子等あり、現に神戸市須磨太平町に住す。

### 石黒源次郎君

龜岡堂印刷所主

男兒一度志を立て、郷關を出づ、所志若し成らずんば死すとも歸らず——を徒らに豪語し、花の大東京を夢みて來り迷ふ者、日に幾百千人あるを計り知るべからず。

波瀾重疊限りなき生存競争の眞只中に投じて、事の成敗を試むるはこれ男兒の一快事たるを失はざれども、而も其の成功を贏ち得、錦を衣て故郷に飾り得るもの果して幾人ぞある。

純朴哉盲目哉……地方人士の徒らに己が天稟の才能を過信して漫然訪れたるその大東京は如何に、凡ゆる誘惑の魔の手は身邊を圍繞し、一朝浮華驕奢の風に狎るゝや從來の克己と勤勉、奮闘豪語の其の一大決心は何れへか飛び去り、辛酸に耐へず、艱苦に忍びず、遂に落伍者となりてあたり人生の花を富川町の巷に散らし、或は白面を晒して田舎へ落ち行く者又幾百千人ぞ數へけん。

噫！何んぞ薄志弱行の徒の多き人生よ  
然りと雖も近代我が印刷界に隆々たる  
聲價を博し、其の前途多望なる龜齡堂の  
經營者石黒源次郎君その人こそは同じく  
大東京を夢見て上京したるもの、一人な  
らんも、遂に其の初志を貫徹して今日の  
大を成したる勇士にして、吾等は其の非  
凡の才幹と不撓不屈の奮闘的精神とが、  
如何に現代人士の龜鑑たるかを力説する  
に奮ならざるものなり。

君は新潟縣の人小林喜藤治君の二男に  
して、明治五年八月十三日を以つて同縣  
刈羽郡柏崎町に生れ幼にして石黒家に入  
りて其の姓を冒す。資性闊達而腦明晰夙  
に郷校を卒ふるや大志を抱いて上京し、  
具さに辛酸を嘗めつゝ印刷出版界の將來  
有望なるに着眼し、早くも斯業を以つて  
名を成さんと決心し、爾來各所に印刷職  
工として實際の技術を練磨すること九ヶ  
年、大いに斯業に精通す。  
斯くて愈々素志を貫徹しべき機運熟す  
るや、敢然起つて獨力龜齡堂印刷所を開

設し、爾來日夜奮闘精勵せしかば漸次斯  
界の信望を博し遂に今日の盛況を見るに  
至り、今や百五十余坪の工場と精巧なる  
機械十數臺を有しオフセット印刷、アル  
ミ版、石版其他一般印刷を一手に引き請  
け其の獨特の妙技は他の追従を許さず、  
實に帝都同業界に令名を馳せ其の前途益  
々多望なるものあり。

夫人をなか子と呼び内助の聞え高く其  
の間に一司君、北郎君、九一君及び知恵  
子、延代子、幸子、みね子、龜代子等あ  
り。

現に東京市小石川區戸崎町九五番地に  
住し電話小石川一四八六番なり。

### 井上正國君

子爵 從四位

當家は源經基の四代井上頼季の裔に  
して同正徳君の次男正長君の後裔たり、  
正長君は嚴父の所領を分與せられ常州下  
妻藩主として一萬石を領す。夫れより十  
二代を経て先代正巳君に至る、正巳君其

の封を繼ぎ明治二年藩籍を奉還し下妻藩  
知事に任じ、同十七年子爵を授けらる。  
君は其の長男にして明治十四年十一月  
を以つて生れ後ち家督を相續し襲爵仰せ  
付けらる、明治三十四年學習院中等科を  
卒業す。愛知縣東春日井瀬戸に現住す。

### 井上嘉都治君

醫學博士 從四位勳三等  
東北帝國大學教授

君は京都府士族井上善助君の三男にし  
て、明治九年五月を以つて生る。明治三  
十四年東京帝國大學醫科大學を卒業する  
や教育界に投じ、京都帝國大學醫科大學  
助手、同助教授、東北帝國大學醫學專門  
部教授等を歴任し、曾つては醫學研究  
の爲め瑞佛各國に留學し、現時は東北  
帝國大學醫學部教授として知らる。

夫人カエ子は東京府士族小室三吉君の  
令妹にして君との間に剛君、榮君及び壽  
美子等あり、現に仙臺市北五番町一二九  
番地に住す。

### 岩岡兼次郎君

東亞キネマ株式會社顧問役

君は長崎縣の人岩岡治郎三郎君の二男  
にして、明治元年十一月六日を以つて同  
縣南安曇郡倭村に生る。夙に長野縣立松  
本中學校を卒業するや青雲の志を抱いて  
上京し、直ちに實業界に投ず。

然して川崎銀行本店に入りて格助する  
こと三年有半にして天活活動寫眞株式會  
社に轉じ、後ち同社を辭して渡米し具さ  
に彼の地のキネマ事業を視察研究するこ  
と有五年、斯業に關する造詣を深くして  
歸朝するや獨力以つて岩岡商會を設立し  
君が濫藩を傾倒して専心我が國キネマ界  
に一大飛躍を試むるに至る。

大正十二年同商會を株式組織に變更し  
て東亞キネマ株式會社と改稱せらるゝや  
君推されて同社東京支社長の要職に就任  
して愈々其の敏腕を振ひ、更に大正十五  
年七月辭して同社顧問役となり、引續き  
内外の社務を執掌し傍ら全日本映畫業組  
合副組長、全日本活動寫眞組合副組長と

して知らる。

君や資性濃厚篤實にして人に接する極  
めて懇切、而も其の温容なる風貌や會談  
自らにして快感と畏敬の念を抱かしむ、  
君の今日の大を成す又當然なりと謂ふべ  
し、趣味として書畫、骨董あり。

夫人よの子は長野縣の人小木會品司君  
の長女にして松本高等女學校を卒業し、  
君との間に三男二女ありて武博君、巽君  
千里君及び知津子、とし子等なり、現に  
東京市下谷區上根岸町四十一番地に住し  
電話下谷五二九二番たり。

### 今井秀吉君

千住製氷株式會社社長  
東京商業會議所議員

君は東京府の人今井喜八君の長男にし  
て、明治十九年三月一日を以つて生る。  
嚴父喜八君は夙に實業界に活躍して東都  
財界に令名高く、君亦父君に劣らざる機  
畧縦横の士たり。

夙に實業界に名を成さんと志し、奮闘

大いに努めしかば社會の信望漸次加はり  
今や千住製氷株式會社々長たる外千歳座  
を經營して能く内外の社務を執掌し、共  
に今日の大を成す又以つて君の奮闘の賜  
と謂ふべく真に偉大なりと云ふべし。曩  
に東京商業會議所議員に選ばれ現に其の  
職にあり。

夫人ふじ子は千葉縣の人茂木林景君の  
二女にして淑徳の聞え高く、其の間に喜  
一郎君、善次郎君、巳之助君及び登久子  
南彌子等あり、現に其の邸宅を東京市淺  
草區橋場町三十七番地に有し電話淺草三  
九六六番たり。

### 井上七衛門君

京都府多額納稅者  
井上大丸吳服店主

君は京都府の人清水益之助君の長男に  
して、明治十六年八月を以つて生れ、明  
治二十一年五月先代七右衛門君の養嗣子  
となる。

夙に先代よりの井上大丸吳服店を踏襲

して經營し、君が奮闘に加ふるに經營方針の當を得たる結果は益々業勢を擧げ、今や京都有数の呉服店として知らるゝのみならず、尙ほ京都府多額納税者として直税二千九百八十餘圓を納む。  
夫人ナカ子は京都府の人勝田甚吉君の長女たり、現に京都市下京區新五條下ル一番地に住し電話下京二二〇番なり。

### 飯田 次郎君

☆回漕店主

東京復興清業組合長

東都斯界に活躍して其の敏腕を振ひ、今や本店を東京市京橋區上柳原町九番地に有し、出張所を横濱市青木瀧下町三五(四一番地)に有する我が(イグタニ)回漕店經營者飯田次郎君は、東京府士族佐伯義次郎君の二男にして、明治二十年五月六日を以つて東京市牛込區柳町に生れ後ち飯田李治君の養嗣子となる。  
夙に學に厚く才幹群を抜き、東京府立第四中學校を優秀の成績を以つて卒業す

るや、直ちに實業界に志し明治四十年獨力以つて笹回漕店を開設して、奮闘大いに努めしかば業勢漸次加はり、斯界の信用月に年に厚く、今や新日本財界の第一線に立つて躍進し其の前途愈々多望且つ多端、尙ほ傍ら東京復興清業組合長の要職にあり。

君や其の身養嗣子たりと雖も、世の所謂養子氣質の遺産を以つて虚名をなす類とは同日の論にあらずして、其の今日の大を成すこれ全く君の終始一貫奮闘の賜にして、過去より現在に及ぶ奮闘の跡たる真に社會の龜鑑とするに足るべく、現代立志傳中の人として推賞するに尙ほ餘りありと謂ふべし。

社交厚く米國木材輸入商の團體よりなる米友俱樂部の會員にして、趣味として狩獵あり、閑あれば即ち出掛けて山間廣野を跋涉し、幽邃なる大自然に觸れて其の豪氣果斷の氣を養ふ、以つて其の人と爲りを知るべし。  
夫人愛子は養父飯田李治君の長女、共

立女子職業學校の卒業にして内助の聞え高し、東京市外大井町瀧王子四三八二番地に現住し、電話高輪四二一四番にして本店電話京橋四三四一番、四三四二番及び其の横濱出張所電話本局四二五一番四九六二番たり。

### 五十嵐慎一郎君

總武銀行取締役

千葉縣多額納税者

君は千葉縣の人五十嵐佐一郎君の長男にして、明治十三年六月を以つて生れ後ち先代敬止君の養嗣子となる。夙に地方實業界に活躍して貢獻すること甚大、現に總武銀行取締役に於て且つ千葉縣多額納税者として直税千七百七十餘圓を納むといふ。

夫人イチ子は法學博士添田壽一君の長女にして君との間に篤君、全二君、靖君及び靜子、定子等あり、現に千葉縣香取郡多古町に住す。

### 池田 茂君

安田商事株式會社取締役支配人

第三銀行取締役

今や本邦金融機關の最大權威として名聲内外に聞ゆる、我が安田銀行及び其の關係諸事業に關與し、隨所に其の才幹を發揮して令名あるを池田茂君となす。

君は愛媛縣の人池田三義君の長男にして、明治七年六月を以つて生る。夙に實業界に雄飛せんと志し、郷校を卒ふるや直ちに安田銀行に入りて格勳精勵、累進して福島、宇都宮各支店長を経て大正十一年十一月拔擢せられて同行本店支配人に就任す。

然して後ち安田系統たる第三銀行に轉じて同行取締役の要職に就き、君が天與の才量を發揮すること數年、大正十五年二月安田商事株式會社取締役兼支配人に擧げられ、爾來益々其の敏腕を縦横に振展して同社の發展に盡瘁し以つて現在に及ぶ。

曩に關西銀行專務取締役として内外の

社務を執掌して關西財界に令名を轟はれたり。夫人ヤエ子は愛媛縣士族越智通博君の三女にして其の間に三男二女ありて進午君、武彌君、茂美君及び芳子、安喜子と呼ぶ、東京市本郷區眞砂町三十三番地に現住し電話小石川六九五〇番たり。

### 伊藤米治郎君

日本帽子株式會社取締役

大阪府多額納税者

君は大阪府の人伊藤友吉君の二男にして、明治十年五月を以つて生れ後ち先代ヒサ子の養嗣子となる。夙に關西財界に活躍し、現に日本帽子株式會社取締役に於て且つ大阪府多額納税者として直税一萬百七十餘圓を納め、關西實業界に令名あり。

夫人よし子は兵庫縣の人齊藤繁吉君の令姪にして君との間に米藏君、彦次郎君及び隆子、里子等あり、現に大阪市東區備後町四ノ十二番地に住し電話本三〇三九番たり。

### 石綿金太郎君

土木建築請負業

石綿組々長

抑々成功の字義たるそれ廣汎なりと雖も自ら二途あり、一は即ち順風揚帆的天與の好機會に遭遇して着々成功の彼岸に到達する、その二は即ちあらゆる人生の苦難と闘ひ苦心慘憺、七轉八倒而も尙ほ其の鐵石の如き固き決心は是等の上に超然として倦まず、撓まず、遂に燦たる成功の榮冠を獲得する是れなり。然して吾人一度兩者の價値の優劣を秤らんか、實に後者の前者に比して其の最も優れたるを痛感するものなり。

奮闘の勝利者、凡ゆる難關を突破して世に成功者、立志傳中の第一人者と謳はるゝ我が石綿金太郎君こそは、實に後者を代表する現代稀に見る人物にして、君は文久元年三月十日を以つて東京市日本橋區に生る。

顧みるに嚴父安五郎君夙に土木建築界に活躍して其の將來を囑望せられたりし

も、怨むべきや天の配劑、君が僅かに八歳の時不幸病を得て卒す。

是れより處世の難關は君の眼前に展開せられ、人生幾多の辛酸を嘗めつゝ慈母の膝下に成育し、年齒僅かに十五歳にして根本元吉君の下に走り、其の指導を受けつゝ孜々として勤め、此處に暗磨たる前途の障害を排しつゝ研鑽琢磨十餘年、後ち横濱税關に入りて勤務すること數年其の間専心蓄財に努め而して素地成り機運熟するや明治三十年愈々敢然として獨立の旗幟を翻し、現在の場所をトして土木建築界に飛躍するに至る。

爾來風雨幾春秋君が絶倫の精力と不撓不屈の奮闘とは、相俟つて忽ち斯界に令名を馳せ、其の業績の見るべきもの月に年に加はり、遂に今日の大を成す又故なきにあらざるべし。

今や同組の總司令として斯界に重きをなし、其の事務の一切を養嗣子一君に任して悠々自適、ありし日の苦闘の跡を偲びつゝ茶道、謠曲、書道に専念たり。因

に一君は埼玉縣の人中村忠次郎君の二男にして大正元年築地工手學校出の才物、能く養父の意志を繼承して恥ぢざる機才縱横の新進實業家として又將來を嘱望せらる。東京市芝區愛宕下町四丁目一番地に現住し電話銀座五〇九一番たり。

### 伊東平兵衛君

京都府多額納稅者

君は京都府の人伊東幸之助君の長男にして、明治十八年四月を以つて生れ後ち先々代平兵衛君の養嗣子となり前名平三郎を改稱す。

夙に祖父の遺業を繼承して銅真鍮商を營み、君の時代に至りて愈々盛大に、今や京都府多額納稅者にして現に其の直税二千四百二十余圓なりといふ。

夫人サク子は京都府の人辻卯之助君の長女にして君との間に平二君及び貞子、幸枝子、美代子等あり、現に京都市下京區上穀馬場下寺東入ルに住し電話五五四

番たり。

### 岩崎龜次郎君

境南銀行事務取締役

岩崎醬油株式会社取締役

當家は代々栃木縣下都賀郡藤岡に住せる舊家として知られ、米穀肥料商及び醬油醸造業を營み當地財界に重きをなす。

君は東都財界の重鎮岩崎清七君の令弟にして、慶應三年八月を以つて生る。夙に現在の地居をトして轉住し、米穀肥料商を以つて家業となせしに端を發せるものにして、爾來堅實なる營業方針に加ふるに奮闘努力の結果は家運漸次擧り、今や傍ら前記諸要職にある外岩崎清七商店錢屋米穀、小野辰貿易、古河蘭糸市場各株式會社の重役にして且つ茨城縣多額納稅者として令名あり。

夫人アイ子は栃木縣の人橋本觀治郎君の長女にして内助の聞え高し、茨城縣猿島郡古河に現住す。

### 石井權藏君

土木建築購買業

石井組々長

本邦土木建築界に其の聲名噴々として聞え、今や復興途上にある我が帝都斯業界に貢獻して錚々の名あるを我が石井組の經營者石井權藏君となす。君は東京府の人久我庄吉君の四男にして、明治十七年十一月を以つて生れ明治三十二年八月先代權藏君の養嗣子となる。

先代權藏君は千葉縣の産にして、夙に大志を抱いて上京し、土木建築界に活躍して其の大膽と仁俠とは能く數多の部下を率ひて心服せしめ、所謂我が國古有の親分乾分の力強き關係を以つて萬事に當りしかば、行くとして可ならざるはなく業績頗に擧り、遂に今日の隆盛を致すの基礎を造るに至れり。

然して當代權藏君は先代の遺業を繼承して其の名を恥かしめざる人物にして、其の資性や豪毅にして仁俠に富み、其の識見や博大にして周密周到、而も部下を

統率すること父君に譲らず、業運益々隆盛の域に達せしめ、社會の信望年と共に加はり今や新進實業家として斯界に令名を謳はるゝに至る。

斯くて關東全土は勿論、遠く關西東北地方にまで其の勢力を波及し、我が石井組の聲價をして東西に喧傳たらしめ、前途益々多望且つ多端なる蓋し君の奮闘の賜と謂ふべきにあらざるか否哉

夫人マキ子は東京府の人米津松造君の令妹たり、現に東京市神田區三崎町三丁目一番地に住し電話四谷二八八番、三七六二番たり。

### 井口誠一君

井口印刷合名會社社長

日本加工紙株式会社常務取締役

君は徳島縣の人井口源三郎君の長男にして、明治十八年三月二十四日を以つて生る。明治四十一年早稻田大學商科を卒業するや、君の慧眼は早くも我が財界に雄飛せんとの大望を抱き、初め竹内鑛業

株式會社に入りて精勵克く努め上長の囑望厚かりしが、明治四十四年同社を辭し敢然起つて獨力出版事業を興し尙山堂と稱して斯界に活躍するに至る。

其の間風雨幾春秋、君が熱誠と不撓不屈の奮闘努力とは相俟つて漸次斯界に其の地歩を占め、大正六年二月日本加工紙株式會社の創立せらるゝや、君推されて同社常務取締役に就任して其の經營發展に盡瘁し、更に同年東京紙器株式會社の設立を見るや、同社取締役に擧げられ君が蘊蓄を傾注し、尙ほ大正十三年四月井口印刷合名會社を創立して其の代表社員となり、今や斯界の重鎮を以つて目せらるゝに至る。

夫人富貴子は東京府の人井上源三郎君の三女にして即ち方今我が實業界に名聲噴々たる井上源之丞君の令妹に當り、東京府立第二高等女學校の出身たり、現に東京市牛込區長延寺町七番地に住し電話牛込五九八番なり。

### 入江 爲守 君

子爵 正三位勳二等

侍從次長

君は伯爵冷泉爲紀君の令弟にして、明治元年四月を以つて京都に生れ、明治七年入江家の養嗣子となり、明治十六年殿掌を仰せ付けられ翌年子爵を授けらる。

當家は内大臣藤原鎌足十二代權大納言長家の裔、權中納言爲條の二男相尙君の後にして、相尙君一家を創立して入江と稱し代々歌道の家元を以つて知られ數世を経て養父爲福君に至る。

君また歌學に精通し和歌に堪能なるの故を以つて多年御歌所參候し後ち大正三年四月東宮侍從長に任せられ長くも今上陛下東宮にあらせらるゝ間其の重職にありしが現時は侍從次長たり。

曩に貴族院議員たること三回、研究會の常務委員として多年同會の牛耳を握り三島子 牧野男 吉川男等の間を往來して政治的團體の幹部として永く議政府に列し、我が國政に參與して貢獻するとこ

ろ甚大なりき。

君亦漢籍に造詣深く三島博士の高弟たり、其の他有識故實に精通し、文藝美術の鑑賞高く、溫雅にして氣品高く、趣味として繪畫、和歌あり、時に臨んで彩筆を揮つて優雅なる畫を作すと云ふ。

夫人信子は柳原伯爵の令妹にして其の間に爲常君、相政君及び朔子、邦子等あり、現に東京市牛込區余丁町七十八番地に住し電話四谷三〇五五番たり。

### 伊東 要藏 君

濱松委託株式會社社長

濱松鐵道株式會社社長

勳四等實業家伊東要藏君は静岡縣の人山田喜平君の令弟にして、元治元年三月十七日を以つて生れ、明治十六年四月先代磯平治君の養嗣子となる。

夙に慶應義塾大學を卒業するや教育界に身を投じ、同塾及び大阪商業講習所等に教鞭を執りしが擧げられて大阪商業講習所の教頭に任じ、後ち轉じて實業界に

入り三十五銀行、濱松信用銀行各頭取となり、又郡會議員、縣會議員等に推されて地方自治に盡瘁すること甚大、曾つては同縣郡部より選ばれて衆議院議員に當選する事二回、大正三四年事件の功に依り勳四等に叙し瑞寶章を賜る。

曩に濱松瓦斯株式會社々長たりし外濱松帝國銀行、静岡縣農工銀行各株式會社取締役として地方財界に名を馳せ、尙ほ縣下の大地主として知られ且つ静岡縣多額納稅者にして現時直接國稅二千百九十餘圓を納む。

尙ほ前記諸會社の社長たる外濱松瓦斯帝國銀行、第一火災海上保險、富士瓦斯紡績各株式會社の重役にして當代實業界の巨將と目せらる。夫人をエイ子と呼び大分縣の人黒屋直房君の令妹たり、現に静岡市引佐町中川に住す。

### 伊藤 竹之助 君

伊藤忠商事株式會社事務取締役

君は福井縣の人逸見勘兵衛君の二男に

して、明治十六年七月を以つて生れ、後ち伊藤とき子の養嗣子となる。現に伊藤忠商事株式會社事務取締役として令名あり。

夫人ふき子は社長伊藤忠次郎君の長女にして君との間に英吉君、須吉君あり、大阪市東區本町二ノ二八番地に現住す。

### 今枝 直規 君

男爵 從四位

貴族院議員

當家は金澤藩の國老として一万二千石を領し、先代直邦君に至る。君は其の長男にして明治三年七月二十一日を以つて生る。

明治二十六年東京帝國大學農科林學乙科を卒業するや、官界に投じて營林主事に任じ盛岡小林區署長に任せられ、後ち宮城縣栗駒小林區署長に轉勤し、同三十一年石川縣勸業事務を囑託せられ、石川地方森林會議員、農商務省山林技師等を歴任し大正十四年七月貴族院議員に當選

し以つて現在に及べり。

夫人淑子は石川縣士族長連篤君の長女にして、君との間に直一君、外二君、眞三君及び敏子等あり、東京府豊多摩郡大久保町西大久保四一一番地に現住す。

### 入江 貫一 君

正四位勳三等

帝室會計審査局長官

君は子爵野村靖君の二男にして、明治十二年三月六日を以つて生れ、同十三年入江家の養嗣子となる。明治三十七年東京帝國大學法科大學獨法科を卒業するや直ちに官界に投じ、神奈川縣屬を拜命し、同年文官高等試験に應じて首尾よく登第し、忽ちにして君が俊才を謳はれ其の將來を囑望せらるゝに至りぬ。

斯くて明治四十年山梨縣事務官に任せられ翌年樞密院書記官兼樞密院議長秘書官に榮進し、大正十年内閣恩給局長に拔擢せられ同十二年内大臣秘書官兼宮内省參事官、法制局參事官、樞密院書記官

等に任せられ大正十三年内藏頭を兼任し大正十五年一月帝室會計審査局長官に任ぜられ以つて現在に及ぶ。

夫人登喜子は山口縣士族妻木絹介君の三女にして山口高等女學校を卒業し、君との間に弘君、遠君、毅君、明君及び美代子等あり、東京市外戸塚上ノ臺七四二番地に現住し電話牛込六六六〇番なり。

### 井上 虎治 君

瀨尾セルロイド工業株式會社社長

君は兵庫縣の人川上右衛門君の三男にして、明治九年六月兵庫縣に生れ後ち先代路一郎君の養子となる。初め官界に志し遞信省通信書記、姫路郵便局電信課長等を歴任す。

然して後ち實業界に轉じ合資會社商船臺灣組支配人、大阪商船株式會社助役、合資會社富島組代表社員等を歴任し、現に浪速セルロイド工業株式會社代表たる外櫻島土地、東洋フェルト各株式會社の取締役、網島土地、極東硝子各株式會社

の監査役として知らる。

夫人をとし子と呼び其の間に二男ありて路治君、雄三君と呼ぶ、現に大阪市南区天王寺松ヶ鼻町五四七〇番地に住し電話南二五七七番なり。

### 稲畑勝太郎君

毛斯粉紡績株式會社社長  
稲畑商店經營者

正六位勳三等稲畑勝太郎君は、京都府の人稲畑利助君の長男にして、文久二年十月三十日を以つて生る。明治十年京都府立師範學校に在學中、時の府知事横村氏に其の英才を認められ、京都府より選ばれて佛國に留學し、佛國里昂工藝學校及び里昂大學に學び、更に英佛伊白和瑞各國の化學工業工場を具さに視察研學して同十八年造詣を深くして歸朝す。

然して直ちに京都府御用掛を拜命し、其の間和蘭アムステルダム府に於て萬國博覽會開催せらるゝや、京都府出品者總代に推されて渡航し、明治十九年京都染

織講習所開設せらるゝや同教授に任ぜられ、同二十一年官を辭して京都織物株式會社に入りて同社技師長となり、同二十八年稲畑工場を設立して軍隊用カーキ色染を創業し、陸軍被服染色業者中の第一人者を以つて目さるゝに至り後ち功に依り賞勳局總裁より褒狀を賜はる。

現時は前記の外稲畑染工場合資會社の代表社員にして、傍ら日本染料製造、大阪ホテル、島津製作所各株式會社の重役にして尙ほ大阪商業會議所會頭として令名高し、現に大阪市南区順慶通二ノ五十一番地に住す。

者として直税五千二百七十余圓を納め京都財界に重きをなす。

夫人をウタ子と稱し京都府の人稲垣藤兵衛君の長女たり、現に京都市上京區室町御池下ルに住し電話中三七二五、一七五〇、四〇〇四、四〇〇五番たり。

### 石川成秀君

子爵 正四位勳四等  
貴族院議員

曾つては宮中に奉仕して、式部官の顯職を辱めず、態度悠然、才幹人物共に卓抜して華胄界に令名あるを石川成秀君となす。君は舊勢州龜山藩主石川盛徳君の長男にして、明治十九年七月を以つて生れ同三十一年襲爵仰せ付けらる。

夙に學習院に學び明治四十一年三月同院高等科を卒業し、更に同四十三年佛語研究の爲め佛國に航し、研鑽すること數年後ち歐洲各地を歴遊し具さに彼の地の人情風俗を視察見學して歸朝す。然して明治四十五年主筆官に任じ大正

### 稻垣庄三郎君

稻垣合名會社代表社員  
京都府多額納稅者

君は京都府の人中林喜三郎君の二男にして、明治十二年一月を以つて生れ後ち先代エイ子の養嗣子となる。

夙に京都財界に投じ、現に稻垣合名會社代表社員にして、且つ京都府多額納稅

十年一月宮内省式部官兼主筆官に補せられ、後ち官を辭し大正十四年九月貴族院議員に當選し以つて現在に及ぶ。

趣味として運動、狩獵等あり、閑あれば即ち銃獵を提して幽遠淡雅なる山林廣野を跋渉するを常となす。

夫人を尙子と呼び君との間に成道君及び忠子、篤子、教子、晴子等あり、東京府豊多摩郡中野大塚一六八二番地に現住し電話四谷二六四番たり。

### 稻山彌三郎君

愛知縣多額納稅者

君は愛知縣の人稻山市兵衛君の長男にして、明治十三年十一月を以つて生る。夙に實業界に投じ洋品雜貨問屋を營み、孜孜として奮闘怠たらざりしかば遂に今日の大をなすに至り、現に愛知縣多額納稅者として直税二千二百六十余圓を納め當地方財界に重きをなす。

夫人ちやう子は愛知縣の人中原梅吉君の長女にして其の間に一男一女あり、現

に名古屋市中區鐵砲町三二二番地に住し電話長一七六九番たり。

### 井上正夫君

新派俳優

實に近代劇創設の第一人者として、將又最近米國の活動寫眞界を視察して歸朝し、從來の我が國民劇の歸趨に一新生面を打開せんとして、斯界の視聽を聳動せしめつゝある君は伊豫の國砥部村の人小坂春吉君の長男にして、明治十五年十一月を以つて生る。

當家は代々陶器仲買業をなし嚴父又祖業を承け、其の間幾多の新事業を畫策せしも不幸業績の發展を見ず、家産次第に蕩盡したるを以つて君は年齒漸やく十一才にして某雜貨店に一介の丁稚として雇はれ、後ち大志を抱いて大阪に出で祖業の挽回を志して陶器店に入りしが、豁然感ずる處ありて劇壇に名をなさんと志し當時松山に巡演中なりし敷島劇團に走りぬ、是れ即ち君が脂粉の人たる濫觴にし

て、時に明治三十年君が十七歳の交なりき。

爾來幾多の艱難と闘ひ、波瀾重疊たる所謂旅役者の生活を送りしと雖も、君は自重自愛ひたすら技藝の練磨に寧日なく或は立役に或は女形にあらゆる扮裝に天稟の妙技を發揮して、隨所に褒賞の標的となり、後ち岩尾一座に入りて大阪天満座に浪花劇壇の花形として謳はれしが、間もなく上京し眞砂座に出演して萬都の子女をして紅涙に咽ばしめし、「女夫波」の主人公秀夫の役に扮して神妙なる技を演じたりしかば名聲頓に擧りぬ。

斯くて帝都の大劇場に出演して新派劇の中堅たりしが、君は常に時代の趨勢と思想界の進歩に顧念し、此處に新時代劇協會を設立して斯界の進展を企圖する等枚舉に遑あらず、大正九年五月國際活映株式會社の依頼に依り渡米せし以來數度に亘り歐米劇界を視察して歸朝す。

現に京都市日本橋區觸燈町二ノ一五番地に住し電話浪花七二三二番たり。

### 飯田 新七君

高島屋飯田合名會社社長  
高島屋飯田株式會社社長

正六位勳六等實業家飯田新七君は京都府の人先々代飯田新七君の二男にして、安政六年十月を以つて生れ、明治二十一年三月家督を相續し先代の名を襲ぎ舊名鐵三郎を改む。

其の祖新七君は天保七年江州高島より出でて吳服商を營み、高島屋と稱して當時の同業界に知られ、君は其の四代目にして夙に祖業を繼ぎて益々業務を擴張し東京を始めとして大阪、横濱、神戸、支那天津、佛國里昂、英國倫敦等に各支店出張所を設け内外國博覽會、共進會等に出品して受賞の數枚擧に違あらず。

明治二十一年以來海防費獻納及び實業に精勵の廉を以つて藍綬褒章、綠綬褒章等を賜ひ同三十五年勳六等瑞寶章を授けられ、更に大正十三年には正六位に叙せらる。其の他公共事業に盡瘁し國家社會に貢獻すること甚大、曩に擧げられて京

都商業會議所議員となり現に前記の外株式會社高島屋吳服店の相談役たり、尙ほ京都府多額納稅者にして直稅二千三百三十余圓を納む。

夫人フミ子は京都府の人吉岡吉右衛門君の四女にして長男新太郎君は現に高島屋吳服店の専務取締役たり、京都市下京區本町二十二目烏丸通高辻下ルに現住し電話下京一四一一番なり。

### 井上 剛一君

辯護士 特許辨理士  
遠州軌道株式會社取締役

君は和歌山縣の人水木重左衛門君の二男にして、明治元年四月を以つて生れ後ち先代又左衛門君の養嗣子となる。

夙に和歌山縣師範學校を卒業するや直ちに上京して中央大學の前身たる英吉利法律學校に學び、後ち辯護士登用試験に登第して身を官界に投じ、静岡地方裁判所屬に任じ、傍ら辯護士事務所を同所に設けて同地方人の依頼に應じ普く信頼を

博するに至る、斯くて濱松市會議員、静岡縣々會議員等に推選せられ、又大正九年には衆議院議員に當選して中央政界に鳴らす。

夫人なみ子との間に啓一郎君、洋之助君、民三君、利夫君、裕君及びあき子、しげ子等あり、現に静岡縣濱松市後道に住す。

### 井上 達一君

醫學博士 從六位  
井上眼科醫院長

君は東京府の人井上達也君の長男にして、井上眼科病院長醫學博士井上達二君の令兄に當り、明治十二年七月を以つて生る。

夙に醫學界に雄飛せんと志し、明治四十年東京帝國大學醫學科大學を卒業するや更に眼科研究の爲め獨逸に留學し、其の蘊蓄を極めて歸朝し、東北帝國大學教授を始めとして各學校に教鞭を取り、我が學界に貢獻する所尠からざりしが現時は

井上眼科醫院長として東都刀圭界に令名あり。

大正四年醫學博士の學位を受く、夫人静子は東京府の人首藤諒君の四女にして學習院女學部の卒業たり、現に東京市外巢鴨上駒込四三五番地に住し電話小石川一四一七番なり。

### 伊藤 利三郎君

朝鮮鐵道株式會社常務取締役

君は滋賀縣の人伊藤利平君の四男にして、明治十五年三月十八日を以つて滋賀縣犬上郡彦根町に生る。明治三十八年東京商科大學の前身たる東京高等商業學校を卒業するや、直ちに實業界に投ず。

斯くて大阪商船株式會社、日本製銅株式會社、硫酸肥料株式會社等を轉動し、明治四十二年日糖事件後は藤山雷太君と共に大日本製糖株式會社に入りて同社計算係及び倉庫係主任、庶務課長、上海出張所長等を歴任す。

偶々大正九年朝鮮産業鐵道株式會社の

創立に際し、これに參畫して同社の設立を見るや推されて同社取締役理事に就任し、大正十二年合併して朝鮮鐵道株式會社成立以來引續き同社常務取締役として内外の社務を執掌し以つて現在に及ぶ。尙ほ朝鮮鐵道協會理事、朝鮮協會評議員、京城銀行集會所、如水會等の各會員たり、趣味として園藝、謠曲、テニス等あり。

夫人かつ子は東京府士族竹村第二君の令妹にして東京府立第一高等女學校の卒業たり、朝鮮京城南米澤町二八一番地に現住し電話本局三九五七番なり。

### 岩岡 武博君

東洋拓殖株式會社上海支店長

君は長野縣の人現東亞キネマ株式會社顧問役として斯界に令名高き岩岡兼次郎君の長男にして、明治二十九年四月を以つて長野縣南安曇郡倭村に生る。

幼にして穎明學業順を追ふて進み夙に長野縣立松本中學校を卒ふるや、進んで

第三高等學校に入り同校を経て東京帝國大學工科大学土木科に學び、大正六年優秀の成績を以つて同科を卒業するや直ちに實業界に投じ、東洋拓殖株式會社に入社して同社京城支店土木課に勤務すること數年、間もなく拔擢せられて同社上海支店長に榮轉し以つて現在に及ぶ。

夫人みわ子は和歌山縣の人花岡宗太郎君の長女にして東京女子大學家政科を卒業せる才媛にして君との間に二男ありて長男を順君、二男を康君と呼ぶ、現に同社上海支店社宅に住す。

### 今村 太平次君

今村製菓株式會社社長

本邦製菓界の重鎮今村太平次君は熊本縣の人今村卯平君の二男にして、明治七年四月を以つて生る。父祖代々製飴を業となし同市の舊家として知られたり。

夙に學業を卒ふるや家業に精勵し一意専心家政の整理に當り、業務の繁榮を計り傍ら社會公共の爲めに盡す所ありしか



ば郷黨の間に重きをなし、年齒三十八才にして市會議員に擧げられ市政に貢献すること甚大なりき。

雖然固より大望ある君は眼前の境遇に安んずる事能はず、斷然公職を抛ち家業の全部を擧げて令弟に譲り、夫人を伴ひ奮然上京して製菓事業に着手し、爾來、風雨幾春秋幾多の苦難と闘ひて、不屈不撓奮闘努力の結果は漸やく品質の優良なるを世人に認められ、遂に今日の大を成すに至る。

大正十年從來の個人經營を資本金壹百萬圓の株式組織に変更し、之を今村製菓株式會社と改稱して自ら社長となり、本社工場の外更に市外下澁谷に第二工場を設けて大いに發展擴張し、尙ほ大正十三年四月同君の經營たる朝日製麵株式會社「資本金五十萬圓」を併合して同社中野工場を第三工場となし、且つ關西方面に擴張の爲め大阪に出張所を設け、着々として業勢を全國に張り、今や我が國製菓王として其の令名斯界に高し。

### 伊澤良立君

大日本製糖株式會社常務取締役

君は舊山城淀藩の師範役たりし、一刀流劍道の達人故伊澤一鶴君の二男にして慶應三年一月二十三日を以つて京都に生れ、後ち出でて同縣伊澤良作君の養嗣子となる。

夙に青雲の志を抱いて東上し、慶應義塾理財科に學び、明治二十年優秀の成績を以つて卒業するや、直ちに時事新報社に入り政治經濟記者として其の卓越せる識見を傾倒したりしが、たま／＼故中上川彦次郎君に其の材幹を認められ、即ち筆を捨て、三井銀行に入る。

爾來小樽、長崎各支店長、本社調査課長、大阪支店長等を歴任し尋いで住友銀行に轉じて同行副支配人に擧げられ、明治四十二年大日本製糖株式會社破綻して危機に瀕するや、藤山雷太君、高山長幸君等と其の整理の難關に當り、着々として實績を擧げ整理漸やく成ると共に推されて同社常務取締役に就任し君が非凡の

### 井上平左衛門君

京王電氣株式會社監査役

君は東京府の人井上平左衛門君の長男にして、明治十七年十月を以つて生れ後ち家督を相続すると共に前名平治を改めて襲名す。

夙に實業界に投じ祖父よりの遺業たる醬油醸造業を營み現に其の傍ら京王電氣軌道株式會社監査役として知らる。夫人マズ子は神奈川縣の人長谷川新四郎君の令妹にして君との間に欣一君、悦男君及び多賀子、澄子、幸枝子等あり、現に東京府北豊多摩郡調布に住す。

### 稻茂登三郎君

勳四等 東京商業會議所副會頭

帝國火災保險株式會社常務取締役

君は群馬縣の人木檜武太夫君の令弟にして、慶應二年二月同縣伊香保町に生れ同三十一年稻茂登一郎君の養嗣子となる。夙に海軍に志し共立學校を卒業して攻玉社に學び後ち英人に就きて語學を研究し、更に簿記學の必要を痛感して之が研鑽を積み、而して財界に投じ、海國生命保險株式會社常務取締役及び倉庫銀行、伊香保軌道、東上鐵道、朝鮮煙草、日本電線、日本印刷各株式會社の重役に推され以つて現職に及ぶ。

曩に東京市より推されて衆議院議員に選出せられしこと前後二回、更に東京市會議員、東京市參事會員、神田區會議長等に擧げられ君が公共的事業に盡瘁すること甚大、大正十四年四月多數の要望を入れて東京商業會議所副會頭の要職に就き現に其の任にあり。現に東京府豊多摩郡澁谷町中澁谷七七

〇番地に住し電話青山四六五四番なり。

### 井田耕治君

帝國地方行政學會常務取締役

今や我が印刷出版界に於ける帝國地方行政學會の名聲斯界に高し、而して同社長大谷仁兵衛君を援けて内外の社務を執掌する、同社常務取締役井田耕治君は福井縣士族井田謙治君の長男にして明治十五年十二月十三日を以つて生る。

夙に郷校を卒ふるや實業界に雄飛せんと志し、燃ゆる決心を抱いて東上し、帝國印刷株式會社に入りて敏腕を振ひしかば漸次累進して出版部主任、總務課長、理事等を歴任し、大正十四年四月同社が組織變更に依りて前掲會社及び株式會社行政學會印刷所に分たるゝや一躍擧げられて兩社の重役となり以つて現在に及ぶ。君や資性温厚篤學の士にして今や我が實業界一方の重鎮として令名あり、謠曲に趣味を有し素人の域を脱すといふ。

夫人たね子は京都府の人太谷仁兵衛君

才腕を發揮するに至る。

現に前記會社の常務取締役として内外の社務を執掌する傍ら東京會館、東邦炭礦、北海道兩龍鐵道各株式會社の重役として我が財界に令名高し。

夫人トヨ子は大阪府士族堀内謙吉君の令妹にして其の間に龍太郎君、三郎君及び操子、恒子、小菊子、彌生子、千代子等あり、現に東京市麻布區宮村町七一番地に住し電話高輪五七七八番なり。

### 磯崎精一君

大阪府多額納税者

君は大分縣の人磯崎徳三郎君の令弟にして明治十二年三月を以つて生る。夙に關西實業界に投じ現に大阪米穀取引所取引員にして、且つ大阪府多額納税者として直税四千七百六十余圓を納むるを以つて知らる。

夫人をアイ子と呼び大阪府の人福井辰藏君の三女たり、大阪市北區堂島濱通一ノ九四番地に現住し電話北一七二番たり

の長女にして京都府立第一高等女學校の卒業なり、東京市外下澁谷町常盤松二八〇番地に現住し電話青山七九六番たり。

### 池見辰次郎君

大日本製酒株式會社社長  
九州興産株式會社常務取締役

君は福岡縣の人池見茂吉君の長男にして、明治七年二月を以つて生る。現に前記の外九州蠶種、福岡印刷、博多國技館各株式會社の重役として九州財界に重きをなす。

尙ほ福岡縣多額納稅者の一人にして現時直稅一千八百三十余圓を納むるを以つて知らる、夫人をヤイ子と稱す、福岡縣筑紫住吉に現住す。

### 井上達二君

醫學博士  
井上眼科病院長

君は本邦眼科の泰斗故井上達也君の二男にして、井上眼科醫院長醫學博士井上

達一君の令弟に當り、明治十四年二月を以つて生る。明治三十八年東京帝國大學眼科を卒業し、更に獨英佛に留學して、研鑽琢磨、歸朝するや井上眼科病院を開設し以つて現在に及ぶ。

現に東京市神田區駿河臺に高壯なる私設病院を有し患者常に踵を接するの盛況にあり、曩に學界に裨益したるの功に依り醫學博士の學位を授與せらる。

夫人愛子は東京府の人角倉賀道君の長女にして其の間に正澄君、英二君及び千代子、その子、菊子等あり、東京市神田區駿河臺東紅梅町一番地に現住し電話神田一〇〇九番なり。

### 池田成彬君

三井銀行常務取締役

當家は舊米澤藩の家老職を勤めたる名家にして、先代池田成章君は嘗つては沖繩縣書記官たりしが後ち官を辭して實業界に走り、兩羽銀行頭取たりき。

君は其の長男にして慶應三年七月を以

つて生れ、明治二十一年慶應義塾を卒業し、同二十三年渡米してハーバート大學に入り卒業するやパチエラー、オブ、アーツの學位を授與せられ、明治二十八年目出度く歸朝す。

然して直ちに時報社に入りて同社記者たりしが、同年十一月三井銀行に走り足利支店長に任じ、同三十一年現下の經濟狀況實地視察の爲め歐米先進國の巡遊を命せられ、同三十四年歸朝して本店詰となり營業部次長、同部長等を歴任し明治四十二年同行が株式會社に組織變更せらるゝや推されて其の常務取締役に就任し以つて現在に及ぶ。

尙ほ傍ら三井系諸會社の重役にして且つ銀行集會所副會長、東京手形交換所委員たり、夫人を艶子と呼び東京府士族中上川次郎吉君の令姉なり、東京市麻布區永坂町一番地に住し電話青山六三八八番なり。

### 今泉嘉一郎君

工學博士 從四位勳三等  
日本鋼管株式會社取締役

君は群馬縣の人今泉常子の長男にして慶應三年六月を以つて生る。明治二十五年東大工科を卒業するや獨逸フライブルグ鑛山大學及び伯林鑛山大學に學び造詣を深くして歸朝するや、農商務省技師に任じ製鐵所工務部長、鋼材部長等を歴勤し、其の間製鐵學理及び實地研究の爲め歐米を視察すること六回、大正四年工學博士の學位を授與せらる。

然して後ち官を辭して民間製鐵事業の開發に盡瘁し、現に前記の外日本エナメル株式會社監査役にして且つ帝國經濟會議員、工業品規格統一會委員等にして、曩に衆議院議員に當選し尙ほ埃國維也納に開催せられたる第十九回萬國議員總會に帝國議會代表派出席議員團長に選ばれ、又臨時財政經濟調査會委員、度量衡改正委員、ルクセンブルグ大公國名譽總領事たりしことあり。

夫人をマリーと稱しプロセスル、フツク氏の三女たり、東京市芝區高輪南町四十七番地に住し電話高輪六二六番たり。

### 伊東米治郎君

シヤンタイムス社長  
日清汽船株式會社取締役

君は愛媛縣の人伊東喜白君の二男にして、文久元年十二月を以つて生る。夙に郷校を卒ふるや大志を抱いて東上し、後ち東都實業界に身を投す。

斯くて日清汽船株式會社に入りて活躍大いに努めしかば漸次昇進して横濱、上海、倫敦各支店長を歴任し、遂に推されて同社専務取締役兼營業部長の要職に就任し、尋いで同社長に推戴せられしが大正十三年同社を辭して平取締役となり現にシヤンタイムス社長として令名あり、尙ほ東京商業會議所特別議員たり。夫人けい子は愛媛縣士族伊東貞明君の叔母君にして君との間に二男三女ありて英夫君、武夫君及び美代子、薰子、千枝

子と呼ぶ、現に東京市外大井町宇原塚四七七五番地に住す。

### 磯村年君

正四位勳二等功三級  
陸軍中將

君は滋賀縣士族平田啓君の二男にして明治五年九月を以つて生れ、後ち先代惟亮君の養嗣子となる。明治二十七年陸軍歩兵少尉に任ぜられ、大正十一年陸軍中將に陞進す。

其の間陸軍士官學校教官、參謀本部々員、陸軍大學校教官、第三軍參謀、野砲兵第十二聯隊長、野砲兵第十六聯隊長、第十八師團參謀長、廣島灣要塞司令官、野砲兵第三旅團長、野戰砲兵射擊學校長、浦鹽派遣軍參謀長、陸軍砲工學校長、第十二師團長等を歴補せり。夫人薰子は養父惟亮君の二女にして其の間に武亮君及び俊子等あり。

### 岩崎久彌君

男爵 從三位勳一等  
三菱銀行取締役

當家は先代彌太郎君より其の家名を揚げたる家柄なり、故彌太郎君は令弟彌之助君と共に夙に航海業の有利なるに着眼し、三菱會社を創立して専心事業の發展に努め、後ち各種事業に關係して巨萬の富を蓄積し其の令名海外に轟き渡りぬ。

君は其の長男にして岩崎正彌君の令兄に當り、慶應元年八月二十五日を以つて生れ明治十八年二月家督を相續し、同十九年先代彌太郎君の勳功に依り華族に列し男爵を授けらる。夙に三菱商業學校に學び更に米國ペンシルベニヤ大學に入り、明治二十四年同校を卒業してパチエラー、オブ、サイエンスの學位を受け、後ち歐米諸國を巡遊し彼の地の經濟狀況を視察見學して歸朝す。

斯くて直ちに先代の事業を繼承して三菱合資會社長の要職にあること多年、其の間鑛山業、造船業、東京倉庫各株式會

社の創立に盡瘁し、大正六年三菱合資會社内部の組織變更せらるゝや社長を辭し現に三菱銀行取締役たり。

尙ほ東京府多額納稅者にして現時直接國稅實に四萬八千九百余圓を納む。夫人寧子は子爵保科正照君の令姉にして其の間に彦彌君、隆彌君、恒彌君及び美喜子澄子、綾子等あり、現に東京市本郷區湯島切通町一番地に住し電話淺草六三四五番たり。

### 石田理七郎君

株式會社石田商店事務取締役

君は京都府の人石田五兵衛君の叔父君にして、明治十年四月を以つて生る。夙に地方實業界に活躍して聲名を馳せ、現に株式會社石田商店事務取締役にして且つ京都府多額納稅者として現時直稅二千八百二十余圓を納むるを以つて知らる。現に京都市上京區新島丸通二條上ルに住し電話上京一九六四番たり。

### 池邊龍一君

東洋拓殖株式會社理事  
南洋興發株式會社監査役

從五位勳四等池邊龍一君は長崎縣の人池邊政五郎君の三男にして、明治十四年一月一日を以つて生る。明治三十七年東京高等商業學校專攻科を卒業するや外交官領事官試験に合格し、同四十年領事官補となり理事廳副理事官兼統監府書記官に任せられ、同四十三年朝鮮總督府書記官に任せられ、同四十二年同秘書官に同五年内閣總理大臣秘書官に任せらる。

然して大正七年朝鮮銀行東京支店に轉じたりしが、後ち銀行業視察の爲め歐洲に派遣せられ歸朝後東洋拓殖株式會社に入社して同社理事に推され、現に其の要職にある傍ら海外興業株式會社取締役及び南洋興發株式會社監査役にして且つ中央朝鮮協會理事たり。

夫人とさ子は工學博士山田文太郎君の養妹にして御茶の水高等女學校の卒業たり、現に東京市赤坂區福吉町一番地に住

し電話青山四三二九番なり。

### 伊藤茂七郎君

共立物産株式會社取締役  
沖繩炭礦株式會社監査役

君は奈良縣の人當麻辰藏君の令弟にして、明治三年十月を以つて生れ、後ち先代茂兵衛君の養嗣子となり前名東七を改稱す。

夙に實業界に志し入りて活躍大いに努め、現に前記諸會社の重役たる外三星工業、日本農藝肥料、東洋曹達、程土ヶ谷曹達工場各株式會社の監査役として知られ傍ら砂糖商を營み斯界に令名あり。

夫人多い子は養父茂兵衛君の長女にして其の間に一男六女あり、現に大阪市東區南本町二ノ一五番地に住し電話長東四六〇番たり。

### 石井健吾君

第一銀行常務取締役

君は神奈川縣の人桃井宣之君の五男に

して、明治七年六月十六日を以つて東京市に生れ、明治三十一年一月石井家に入りて其の家督を相續す。

明治二十八年東京高等商業學校を卒業するや、直ちに實業界に投じ第一銀行に入り、爾來累進して取締役より常務取締役の要職に就任し以つて現在に至る、銀行俱樂部、如水會等の會員たり。

夫人はつる子は養父政兵衛君の長女にして跡見高等女學校の出身、現に東京市牛込區鷹匠町五番地に住し電話牛込二八〇九番なり。

### 伊東久米藏君

工學博士 勳六等  
伊東工業事務所長

君は福岡縣士族伊東鼎君の長男にして明治六年三月を以つて生る。明治三十一年東京帝國大學工學科機械工學科を卒業し、大正四年二月工學博士の學位を授與せらる。

曩に三菱長崎造船所技師、三菱神戸造

船所副長、三菱造船株式會社内燃機製造所長、三菱内燃機株式會社常務取締役たりしが明治四十四年より大正七年迄造船機業視察、ディーゼル機關研究、ニチムタービン研究、潜水艦及び飛行機製造研究等の爲め前後四回に亘り渡歐し三菱内燃機株式會社の創立に盡瘁すること甚大なりき。

斯くて大正十一年三月同社を辭して獨力にて東京丸の内東九號館に伊東工業事務所を開設し、専ら蒸氣タービン機關、内燃機關其他機械工業一般の設計鑑定、工事監督等の業務に従事し尙ほ東京衛機製造所合資會社代表社員たる外日本光學日本光學工業各株式會社の重役にして更に大同電力株式會社技術顧問、商工省工業品規格統一調査委員、名古屋下水道課囑託、財團法人海防議會、飛行機發動機設計調査員、造船協會員、機械學會員として知らる。

夫人トキ子は佐賀縣の人深川伍一君の令妹たり、現に東京府北豊島郡巢鴨町九

十七番地に住す。

### 石川貞次郎君

木更津電燈株式會社社長  
千葉縣多額納稅者

君は千葉縣の人先代吉右衛門君の二男にして、慶應二年六月を以つて生る。夙に地方財界に投じ、現に木更津電燈株式會社々長たる外木更津酒造、木更津土地證券各株式會社の重役として知らる。

尙ほ千葉縣多額納稅者にして現時直稅千三百四十余圓を納むといふ。  
夫人をちよ子と稱し千葉縣の人廣部五郎右衛門君の長女たり、千葉縣君澤木更津に現住す。

### 岩崎小彌太君

男爵 正四位勳三等  
三菱合資會社社長

當家は先代彌之助君より顯はる。先代彌之助君は令兄岩崎彌太郎君を援け、土佐邊南の地より出で航海業に志して三菱

會社を興し、更に鐵道及び鑛山事業等を經營して巨萬の富を蓄積し、三井家と相並んで本邦無比の富豪となり、爾來貴族院議員、日本銀行總裁等に擧げられ、明治二十九年特旨を以つて華族に列し男爵を授けらる。

君は其の嫡男にして男爵岩崎久彌君の從弟君に當り明治十二年八月三日を以つて生る。夙に第一高等學校を卒業するや英國に渡り劍橋大學に學び、更に歐米諸國を巡遊し各國の制度文物經濟界の實狀等を視察見學して明治四十二年歸朝す。たま／＼岳父の病歿に際會したりしかば君家督を相續し襲爵仰せ付けられ正五位に叙せらる。

斯くて始め三菱合資會社銀行副部長となり、大正六年同社内部の組織變更せらるゝや同社々長に推され、現に其の業務擔當社員たる外三菱銀行、橫濱正金銀行、三菱海上火災保險、旭硝子各株式會社の重役として本邦實業界に令名高し。  
夫人孝子は男爵島津壯之助君の令妹たり

り、現に東京市麻布區飯倉片町二八番地に住し電話青山二六三六番、五〇九二番なり。

### 井原文吉君

信陽銀行常務取締役  
長野實業銀行取締役

君は長野縣上水内郡古牧村の産井原重左衛門君の二男にして、慶應元年八月を以つて生れ、後ち先代與吉君の養嗣子となる。

當家は同地方に於ける素封家として知られ、巨萬の富を有し君は其の總財産を有利に運轉する稀代の敏腕家として同業者中稀に見る所の逸物と稱せられ、尙ほ同地方に於ける名望家たり。

現に株式會社信陽銀行常務取締役たる外長野實業銀行、吉田倉庫各株式會社の重役にして、今や地方財界の重鎮として令名あり。夫人をきん子と呼び其の間に三男一女あり、長野縣上水内郡古牧村に現住す。

### 井上文藏君

醫學博士  
東京帝國大學醫學部教授

夫れ醫は仁なり、濟生の靈法なり、而も尙ほ世は益々醫術の發達を乞ひ願ひ、醫家の輩出を待つ、然りと雖も徒らに凡庸敷醫的如何はしき醫者？湧出して眞に仁術を施す者又少きを如何せん。

此間に立ちて學術 仁兼ね備はり名醫を以つて知らるゝ我が井上文藏君は、明治十五年三月を以つて但馬に生る。

夙に醫家たらんと志して東上し、東京帝國大學醫科大學に學び、明治四十年優秀の成績を以つて同科を卒業するや更に青山博士の下に専心研鑽すること三ヶ年、尙ほ明治四十四年獨逸、伊太利、オーストラリヤ、スペイン等を歴遊して斯界の視察見學をなし、たま／＼オーストラリヤに滞在中歐洲の天地は戰亂の巷と化し去り悠々研鑽するを許さず、遂に危険を冒しシベリアを経て大正六年春歸朝す。  
爾來我が醫學界に貢献すること甚大、

大正八年功に依り大日本内科醫學會より恩賜紀念章を授けられ、同九年醫學博士の學位を授與せられ、現に東京帝國大學醫學部教授たる外東京鐵道病院囑託、淺草觀音病院長、特許局顧問として令名あり。趣味に長唄、繪畫等の嗜みあり何れも素人の域を脱すとか。

夫人を正子と呼ぶ、現に東京市牛込區筑土町二九番地に住し電話牛込二九二一番なり。

### 石橋泰一君

北海道製糖株式會社取締役  
北海道多額納稅者

君は横山安忍君の長男にして、明治九年一月を以つて生れ後ち滋賀縣の人石橋彦三郎君の養嗣子となる。

夙に地方實業界に投じ先代よりの醬油釀造業を踏襲して益々盛大ならしめ、現に其の傍ら北海道製糖、大正證券各株式會社の重役を兼ね且つ北海道多額納稅者として直稅三千六百四十余圓を納む。

### 岩倉道俱君

男爵 正四位勳三等  
貴族院議員

夫人千代子は養父彦三郎君の長女にして君との間に廣次郎君、元三郎君及び芳子、幸子、和子等あり、北海道小樽市奥澤町二ノ二五番地に現住し電話二八〇九番たり。

當家は村上天皇の皇子具平親王の末裔岩倉公爵家の分家たり。君は明治十四年五月二十九日を以つて生れ、同二十九年分家して一家を創立し特旨を以つて華族に列し男爵を授けらる。

夙に學習院を経て東京帝國大學文科大學を卒業し、後ち歐米に留學し濫著を積みて歸朝するや貴族院議員に擧げられ、爾來議政府に列して國政に參與し尙ほ傍ら福徳生命、土乃護謨各株式會社の重役として我が財界に知らる。

夫人裕子は澤宜元君の養女にして滋賀縣立彦根高等女學校を卒業し、其の間に

三男二女ありて泰俱君、守君、貞俱君及び嘉子、直子と呼ぶ、現に東京市牛込區市ヶ谷仲之町二十四番地に住し電話牛込二四八〇番たり。

### 石井 徹君

實業家

我が國海運界に貢献して功勞顯著なるを我が石井徹君となす、君は靜岡縣士族石井廣正君の長男にして明治三年二月を以つて生る。

夙に郷校を出づるや笈を負ふて東上し明治二十九年東京帝國大學法科大學政治科を卒業し、直ちに身を實業界に投じ、日本郵船株式會社に入社して本社貨物課勤務となり格勳精勵、大いに努めしかば漸次上長に認められ、拔擢せられて明治三十九年十二月倫敦支店助役となり、尋いで同四十四年神戸支店助役に任じ同年十二月上海支店長に、大正五年三月同社參事となり後ち倫敦支店長に榮進せり。斯くて大正七年六月神戸支店長に就任

### 伊藤 治作君

東京市深川區長

君は山口藩士矢野亥平君の二男にして明治二年十二月十五日を以つて同縣阿武郡萩字河添村に生れ、明治四十二年七月伊藤家を繼ぎて其の姓を改稱す。

君や天資穎明才幹群を抜き、夙に學業を卒ふるや直ちに山口縣収稅部備を拜命し、明治二十一年十一月徳山學校教員兼同校舎監に任じ、明治二十七年轉じて周陽學舎教員兼舎監書記を囑託し、地方教育界にありて學徒の薰陶に盡瘁すること甚大なりき。

然して明治三十年七月大志を抱いて東上し、直ちに職を東京市役所に奉じて同水道改良事務所臨時雇となり、忠誠以つて精勵せしかば上長の信任特に厚く、累進して東京市事務員を拜命し、明治三十八年十一月東京市深川區書記に任ぜられ爾來給水事務統合準備委員、深川區主事兼稅務掛長等を歴任し、大正十五年十一

### 岩崎 清七君

岩城セメント株式會社社長

東京瓦斯株式會社副社長

君は栃木縣の人先代清七君の長男にして、元治元年十二月を以つて生れ後ち幼名清吉を改稱す。

嚴父清七君は夙に米穀仲買業を開設して専心斯業の發展に盡瘁せしかば漸次事業擴大して其の基礎堅固となり、君が其の遺業を繼ぐや愈々熱心經營に努力する處ありしかば業運益々擧り、家運次第に繁盛に赴き遂に今日の大を成すに至る。

現に前記諸會社の社長及び副社長たるのみならず七尾セメント、東京コークス販賣各株式會社社長にして且つ野田電氣東京カーボン、日清紡績、滿洲製粉、臺南製糖、東海製鋼、東京アルカリ工業、南洋殖産、王子煉瓦、岩崎醬油、岩崎商事、千島興業、大正商船、日華窯業、大和商會、東京醸造、日本信託各株式會社の取締役にして且つ千代田工業、東京紡績、東京商船、横濱骸炭酸素製造、臺灣

### 井上 歡二君

北海道銀行取締役

月拔擢せられて同區長に擧げられ、同時に東京市方面參事員を命ぜられ以つて現在に及ぶ。

夫人とら子は山口縣士族兼重成一君の長女にして内助の聞え高し、現に東京市麴町區下六番町四十九番地に住す。

君は徳島縣の人井内幸七君の長男にして、明治四年六月を以つて生る。夙に實業界に投じて精勵し、現に前記會社の重役たる外旭川商事株式會社代表社員にして且つ旭川木工、東洋酒精醸造各株式會社取締役たり、會つて衆議院議員として中央政界に謳はれしことあり。

夫人をカヨ子と呼び其の間に謹二君、正敏君、正恭君及び喜美子、ソノ子、敏子、壽美子、田鶴子、美智子等あり、現に北海道旭川市條通に住す。

### 伊東 祐忠君

東洋汽船株式會社取締役

沖繩電氣株式會社取締役

君は三重縣士族伊東祐賢君の長男にして、明治三年九月を以つて生る。明治十七年東京帝國大學法科大學法律科を卒業するや直ちに官界に投じ、高等海員審判所理事官兼船舶檢官、商船學校教官兼海軍々事務局事務官等を歴任し、明治三十八年及び同四十二年白耳義國ブラッセル府開催の萬國海法會議に帝國政府委員として參列せしことあり。

現時は前記各會社の重役たる外日本電池株式會社の重役として知らる。

夫人ます子との間に祐之君、敦君、孝君等あり、現に東京府豊多摩郡大久保百人町南通二八番地に住し電話四谷六八〇番なり。

### 井上哲次郎君

文學博士 正三位勳一等  
東京帝國大學名譽教授

君は福岡縣の人富田俊達君の三男にして、安政十二年十二月を以つて生れ後ち先代鐵英君の養嗣子となる。夙に佐野文同君 飯田俊雄君 香川愷經君 中村周平君等に就いて詩文經史算數の學を修め後ち叔父井上鐵馬君の博多にあるを訪ひ入りて同君に仕へ後ち同君の繼嗣養子となる。

明治四年長州廣連館に學び、同八年上京して開成學校に入り進んで東京帝國大學文科大學に入り、哲學政治學を兼修し明治十三年同校を卒業するや直ちに文部省御用掛として出仕す。

斯くて明治十五年東京帝國大學助教

に任じ哲學史を講じて好評を博し、同十七年獨逸に留學を命ぜられハイデルベルヒ、ライプチヒ、ベルリン、ハリス、マレーデトフラス等の大學に學び在學中萬國東洋學會の會員に擧げらる。業終つてベルリン東洋學會の教授に擧げられ名聲俄に歐洲の學界に聞え、歸朝するや東大文科大學教授に任せられ後ち文學博士の學位を授與せらる。

明治二十八年學士會員に推薦せられ同三十年帝大文科大學長に任せられ、同年萬國東洋學會參列の爲め佛國へ差遣せられ、現に東京帝國大學名譽教授にして帝國學士會院第一部長たり、現に東京市小石川區表町一〇九番地に住し電話小石川九六六番なり。

### 石井孫治郎君

帝國種苗殖産株式會社取締役

君は東京府の人石井孫治郎君の二男にして、先代孫治郎君の令弟に當り慶應三年八月を以つて生れ後ち前名兼三郎を改

火の如き敏腕を以つて突撃奮進するを常となす。  
果せる哉其の投機の中して萬金の富を獲得し、一躍斯界に頭角を現はし、今や前記の公職にある外日本冷蔵會社株式會社社長にして且つ和歌山水力電氣、南洋護謨拓殖各株式會社の重役、大阪三品取引仲買人等として關西財界に令名あり。  
現に大阪市東區高麗橋通り一ノ八番地に住し電話長本局一二五番なり。

### 今井正太郎君

滿蒙毛織株式會社東京事務所長

潑刺たる希望を抱き前途の光明を確認しつつ、今や新興日本財界の一線に立ちて奮進する新進實業家を我が今井正太郎君となす、君は明治廿五年一月十三日を以つて京都市に生る。

夙に郷校を卒ふるや青雲の志は燃えて烈火の如く、即ち笈を負ふて東上し直ちに東京商科大學の前身たる東京高等商業學校に入り、大正三年優秀の成績を以つ

稱す。

夙に實業界に投じ醬油醸造業を營み傍ら帝國種苗殖産株式會社取締役たり、夫人をせん子と稱し東京府の人石井小兵衛君の長女たり、現に東京府下王子町豊島二三六二番地に住し電話小石川九八七番なり。

### 井上徳三郎君

大阪商業會議所議員  
大阪株式取引所取引員

君は和歌山縣の人井上庄助君の二男にして、慶應二年十一月を以つて生れ、明治二十五年父君の没後家督を相續す。初め大阪三品市場仲買人となり後ち大阪株式取引所仲買人となる。

君や資性極めて闊達にして、其の人と交るや毫も境壁を設けず一見して忽ち舊知の如く、而も疑視を以つて他人に接する事なく、而して君一度出でて成敗を市場に決せんとするや周密周到にして悠悠迫らず、斯くて一度決するや即ち電光石

て同校を卒業するや、聘に應じて茂木合名會社に入社し、大いに其の才腕を發揮したりしも後ち同社を辭して滿蒙毛織株式會社に轉じ、同社東京事務所長の要職に就任し以つて現在に及ぶ。

其の間支那羊毛視察の爲め中北部支那に渡り、支那内地の實狀を具さに視察研究して歸朝し、君が同社の爲め盡瘁するどころ蓋し甚大なりと謂ふべし。現に東京市小石川區大塚窪町廿四番地に住し電話小石川七四〇一番なり。

### 石原平左衛門君

愛知縣多額納稅者

君は愛知縣の人先代石原平左衛門君の長男にして、明治八年一月五日を以つて生れ後ち前名悦太郎を改稱す。

夙に先代よりの當地方有名なる鍛冶職にして後ち金物問屋を兼營し、現に同地有數の資産家にして且つ愛知縣多額納稅者として直税四千八百余圓を納む。  
夫人のうちは愛知縣の人福田卯助君の

令妹にして君との間に三男四女あり、現に名古屋市西區押切町二ノ十二番地に住し電話本局一九一三番たり。

### 伊東亮一君

小田原急行鐵道會社事務取締役

その昔官界に游泳しては異數の才幹を振つて隨所に令名を馳せ、一度野に下り實業界に飛躍するや噴々たる名聲を斯界に轟かす、我が伊東亮一君は東京府の人伊東正夫君の長男にして、明治二十一年一月八日を以つて生る。

夙に學に厚く學業順を追ふて進み、大正二年東京帝國大學法學部佛法科を卒業するや、直ちに文官高等試験に應じて首尾よく登第し、後ち職を官界に奉じて大藏省に出仕し司稅官に任せられ、次いで外務省に轉じて外務事務官に任じ傍ら上智大學に於て博學を傾注して後進學徒の薰陶に盡瘁し、後ち更に内閣に轉じ法制局參事官に任せられ忠誠よく事務を執掌しその前途を嚮望せらる。

斯くて大正九年感ずるところありて官

途を辭し、實業界に投じ關東水力電氣株式會社に入りて其の常務取締役となり兼ねて小田原急行鐵道株式會社取締役理事に就任し、爾來會社經營の任に衝り多年の蘊蓄を傾倒して縦横の才腕を振ひ以つて現現在に及ぶ。

夫人靜江子は財界の巨星利光鶴松君の長女にしてお茶ノ水高等女學校の卒業たり、現に東京府下上大崎三五一番地に住し電話高輪二四五九番なり。

### 石井國次君

正五位勳四等

學醫院教授

君は茨城縣士族石井延次君の令弟にして、明治七年十一月を以つて生る。明治三十二年東京高等師範學校文科を卒業するや、直ちに學醫院教授に任じ、現に同教授を兼ねて初等科長たり、曩に東宮御學問所御用掛仰せ付けられ又大正九年歐米に出張し、彼の地の教育狀況を視察研

究して歸朝す。

夫人とも子は茨城縣の人岩本惠藏君の三女にして君との間に一男三女あり、東京市四谷區仲町三ノ四七番地に住す。

### 伊藤一郎君

男爵 從四位

大阪製鍊所長

當家は先代圭介君より其の家名を揚ぐ圭介君は舊名古屋藩士西山玄通君の令息にして、夙に蘭學を修め長するに及び植物業の採集に努め安政五年名古屋に一大藥園たる旭園を開設し、翌六年藩の洋學教授を命ぜられ遂に幕府に召されて番書取調所掛となり、明治元年大學に出仕して理學部教授に同十四年東京帝國大學教授に任ぜられ理學博士の學位を受け、明治三十四年特旨を以つて華族に列し男爵を授けらる。

君實は東京府の人伊藤恭四郎君の二男にして、明治二十一年三月を以つて生れ明治三十四年一月先代圭介君の養嗣子と

なり襲爵仰せ付けらる。大正二年東京帝國大學工科大學冶金科を卒業するや直ちに實業界に投じ三菱合資會社に入社し、初め生野銀山に勤めたりしが後同社大阪製鍊所副長となり、次いで同所長に進み以つて現現在に及べり。

夫人久米子は神奈川縣の人陸軍砲兵大佐小野田健二郎君の長女にして其の間に圭一君、誠君あり、現に大阪市北區天滿橋筋三ノ一〇番地に住し電話北三六七八番なり。

### 石川貞吉君

醫學博士

巢鴨病院院長

君は山形縣の人石川養貞君の長男にして、藤井健次郎君の令兄に當り明治二十二年二月を以つて生る。明治十九年東京帝國大學醫科大學を卒業し、同四十五年醫學博士の學位を授けらる。現時は巢鴨病院院長にして本邦刀圭界の第一人者として知らる。

### 伊藤平藏君

書畫骨董商

平山堂主

帝都書畫骨董界の重鎮伊藤平藏君は、埼玉縣の人井上萬吉君の令弟にして、慶應元年三月を以つて生れ先代平藏君の養嗣子となり前名金藏を改めて襲名す。

現に平山堂と稱し東都著名の書畫骨董商にして、其の鑑識力の明敏なると其の藏する珍品の豊富なるとは何れも斯界に令聞あり。

夫人をかね子と呼び其の間に一男ありて善吉君と呼ぶ、東京市四谷區尾張町一番地に現住し電話四谷三〇〇番たり。

### 石川茂兵衛君

重要物産信託株式會社社長

兵庫縣多額納稅者

當家は舊幕時代より舊稱兵庫津に於て米穀肥料商を營みたる老舗石川家の分家たり、君は先代茂兵衛君の四男にして、明治十九年八月を以つて生れ、同四十三

夫人繁惠子は山形縣士族相馬繁君の令妹にして君との間に吉次郎君、東吾君、養治君及び貞子、睦子、準子等あり、現に東京市外瀧野川町田端六三三番地に住し電話小石川四二七番なり。

### 岩田鏝三君

弘益商會主

東京株式取引員

君は岐阜縣の人岩田甚三郎君の長男にして、明治元年十月を以つて生る。夙に實業界に雄飛せんとの大望を抱き、單身東京に出でて活躍し明治三十五年聘に應じて成田鐵道株式會社の整理事務に當り君の鋭利なる頭腦と卓越せる敏腕とは幾許もなく該事務を處理して信望を博す。

然して後ち東京株式界の重鎮片岡辰次郎商店に入り、精勵勤勉、大いに業務に従ひしかば間もなく其の支配人に擧げられ、斯界の表裏に活躍すること十有余年片岡商店をして今日あらしめたるは實に君の力に依る處蓋し大なりと謂ふべし。

年家督を相續すると共に前名英一を改めて襲名す。

明治四十一年神戸高等商業學校を卒業するや、直ちに實業界に入りて家業を繼ぎ米穀肥料商を營み尙ほ傍ら石川合名會社、石川茂兵衛商店合資會社代表社員、淺野石川商會合名會社員、大正汽船、日本石綿製造、日本製鐵各株式會社の重役として神戸財界に令名高く、且つ兵庫縣多額納稅者たり。

曩に神戸商業會議所議員、同市會議員等として公共の爲めに盡瘁し且つ日本糸紡績、日本絹綿各株式會社監査役たりしことあり、趣味として謠曲を能くす。

夫人を末枝子と呼び兵庫縣の人小西茂十郎君の五女たり、現に兵庫縣神戸市市江川町四九番地に住す。

### 岩崎俊彌君

旭硝子株式會社社長

君は男爵岩崎小彌太君の令弟にして、明治十四年一月を以つて生る。夙に英國

に渡りケンブリッヂ大學に學び、専ら農藝化學を修得して歸朝す。

明治四十年九月旭硝子株式會社を創立し、爾來同社々長として専心斯業の發展に盡力する傍ら昌光硝子株式會社取締役として財界に令名あり。

夫人八穂子は東京府士族高盧朗君の六女にして其の間に八重子、淑子、温子等あり、現に東京市赤坂區青山高樹町一八番地に住し電話青山二〇〇番、五六〇番なり。

### 井坂孝君

横濱火災海上運送信用保險會社社長

我が海運界に於ける三大會社の一として一時隆盛を極めたる東洋汽船株式會社の功勞者として井坂孝君あるを忘るべからず。君は舊水戸藩士井坂直幹君の令弟にして、明治二年十二月を以つて生る。

夙に學を好み水戸中學を卒業するや直ちに東上し、第一高等學校を経て同二十九年東京帝國大學法科大學を卒業し、後

ち大學の推薦に依りて當時創業中なりし東洋汽船株式會社に入社し、熱心事務を執りしかば君の才腕は早くも上長の認むる所となり、同三十二年桑港支店長を命ぜらる。

斯くて在米四ヶ年、店務を執掌して大いに成績を擧げて歸朝するや、横濱出張所主任に任せらる、此に於てか君は愈々其の溫善を傾注して業務に専念し、慧眼機を見るに敏なる君は益々社運を展開し後ち擧げられて同社取締役に推され、大正二年十月本社の横濱に移さるゝや營業部長を兼ね同社の柱石として内外に重望視せられしが、大正四年二月同社を退き幾許もなく横濱火災海上保險會社に入社して同社専務取締役の要職に就き、現に同社々長たる外十數會社の重役として我が國實業界一方の重鎮として知らる。

君は人と爲り剛直、頭腦極めて明晰にして些々たる小事に拘泥せず、能く大局に處して過たず、其の壯年時代には斗酒尙ほ辭せざるの酒豪たりしが後ち斷然杯

を捨て、以來深く園藝に趣味を有し、其の庭園には四時花卉絶ゆるなしと云ふ。

夫人せつ子との間に一男二女ありて富士雄君及び富美子、喜美子と呼ぶ、現に東京市麻布區富士見町一七番地に住し電話高輪五五六二番なり。

### 五十嵐直三君

横濱正金銀行取締役

君は静岡縣の人五十嵐重兵衛君の二男にして、明治三十二年東京商科大学の前身たる東京高等商業學校を卒業するや、直ちに實業界に投じ、横濱正金銀行に入りて格勤精勵、累進して同行各地支店長を轉勤し、推されて同行取締役に擧げられ以つて現在に及ぶ。

夫人をカヘ子と稱し君との間に一女ありて幸子と稱す、現に東京市牛込區納戸町二六番地に住し電話牛込三四五一番なり。

### 飯田延太郎君

有隣生命保險會社社長

君は福岡縣の人飯田久助君の長男にして、明治六年五月を以つて同縣嘉穂郡桂川村に生る。夙に法學に志し笈を負ふて東上し、中央大學に入りて専ら法律經濟學を研究し、明治三十三年同校を卒業し同三十七年辯護士試験に合格するや、田中内閣の司法大臣法學博士原嘉道君の事務所に入り、博士を授けて訴訟事務に従事するに至る。

然るに後ち感ずるところありて斷然辯護士稼業を廢して鑛山業を始め、先づ北海道夕張登川鑛山を買収して石炭採掘に従事し、事業漸く緒に就き成績頗る良好なるを見るや、三井物産株式會社は切に君に讓渡を懇請せしかば君は遂に之を讓り、茲に鑛山業を廢して明治四十四年有隣生命保險株式會社に入りて同社々長に就任し、熱心經營に努めしかば遂に同社をして今日の大を成さしめたり。

尙ほ南滿洲大興合名會社代表社員たる

### 井上角五郎君

矢作水力電氣株式會社社長

外萬朝報社長にして、近時我が財界の一異彩として令名あり、夫人千代子との間に二男ありて久一郎君、延二郎君と呼ぶ東京市麴町區上六番町一〇番地に現住し電話四谷二二九七番なり。

勳三等實業家井上角五郎君は、廣島縣の人井上忠五郎君の令弟にして、安政六年十月を以つて生る。夙に碩儒小室汲古先生に師事し、後ち藩校誠光館に入りて英學を修め、業成るや數度に亘り韓國に往來して韓國政府の顧問となり、更に米國に航して移民事業に盡瘁し、明治二十三年帝國議會開設せらるゝや推されて衆議院議員に選出せられ、爾來當選すること十數回に及び我が憲政史上特筆すべき政治家として令名あり。

先是大正三年六月衆議院開設以來憲政の爲めに盡瘁したる功に依り特に勳三等に陞叙し、更に大正三四年事件の功に依



り旭日中綬章を授けられ、其の後特に綬章を賜はる。

曾つて北海道炭礦汽船株式會社專務取締役たりしが現時は前記會社の社長たるのみならず、東洋林業、新瀉瓦斯、木會川電力、日本瓦斯、品川銀行各株式會社の重役として我が財界に令名高し。

夫人わか子は東京府の人山田惣三郎君の長女にして嗣子昇君は正七位工學士にして京都帝國大學助教として知らる。

現に東京市本郷區駒込西片町一〇番地に住し電話小石川三一四〇番なり。

### 石井竹三郎君

大正農具株式會社社長

君は大阪府の人石井尙祐君の二男にして、明治二十年十二月を以つて生る。現に大阪株式取引所一般取引員にして、且つ大正農具株式會社社長たる外株式會社石井竹三郎商店の重役たり。尙ほ大阪府多額納稅者として方今直接國稅九千三百七十餘圓を納め、少壯實業

家として令名あり。

夫人ふく子は大阪府の人藪田忠次郎君の長女にして其の間に清君、敬造君及び俊子、あい子等あり、現に大阪市東區今橋町二ノ二九番地に住し電話特長本局三五三〇番たり。

### 犬丸鐵太郎君

從六位 巴チエラー、オブ、アーツ

中國藥學株式會社社長

大安煙草株式會社社長

君は舊岡山藩士犬丸石雄君の長男にして、明治七年四月二十九日を以つて生る。先代石雄君は刀槍に長じ戊辰の役に偉功あり、後清國に遊學し造詣を深くして歸朝するや、我が國産業の發展に盡瘁し、岡山藩養蠶所頭取となり大いに蠶業を鼓吹獎勵し縣下斯業中興の祖と稱せらる。

君は曩に農商務省海外留學生として歐米に留學を命ぜられ、歸朝後内國博覽會審査官、聖路易博覽會審査官、農商務省

商品陳列館技師等を歴任し、たま／＼明治三十九年澁澤氏の知遇を得て斷然官を辭して實業界に走る。

斯くて東京人造肥料株式會社專務取締役に推され、後東京米穀商品取引所專務理事に轉じ、更に大正五年東京菓子株式會社を創立して其の專務取締役たりしが、現時は前記諸會社社長たる外亞細亞煙草會社專務取締役として知らる。

夙に輸出貿易の隆興に意を注ぎ斯界に關する調査研究の著書多く、就中「麥稈眞田及び經木眞田」と題する大冊は本邦斯業の指針たり、又米國に留學中大學卒業論文に「米國綿業史論」を提出して令名を馳せしことあり、趣味頗る廣く漢詩和歌、園藝等何れも妙なりと。

夫人恒子は舊津山藩大參事贈從四位較懸寅次郎君の令孫にして法學士江原萬里君の令姉に當り岡山市立女學校の出身たり、現に東京市芝區三田小山町七番地に住し電話高輪四〇六〇番なり。

### 岩崎次郎吉君

服部製作所取締役

横濱商業會議所議員

君は神奈川縣の人鈴木仙太郎君の令弟にして、明治二年三月を以つて生れ、後ち先代次郎吉君の養嗣子となる。

現に前記の外岩崎レール商會を經營統轄し、尙ほ神奈川縣多額納稅者として直稅千二百十餘圓を納め横濱財界に知らる夫人をタヨ子と稱す、横濱市青木町三一九番地に現住す。

### 一色信一君

日本興業銀行參事

君は愛媛縣の人一色耕平君の長男にして、明治十四年六月二十三日を以つて同縣周桑郡に生る。夙に郷校を卒ふるや青雲の志を抱いて東上し、直ちに慶應義塾大學理財科に學び、明治四十一年優秀の成績を以つて卒業す。

斯くて懇請するに委せて中外商業新報社に入りしも、居ること一年有半にして

時事新報社に轉じ、同社經濟部編纂主任として其の活腕を縦横に振ひしが、幾何もなく聘せられて日本興業銀行に入り、同行調査部副部長に任じ、漸次昇進して參事兼調査部長に擧げられ愈々君が異数の才量を發揮し以つて現在に及ぶ。

君未だ春秋に富み、加ふるに資性温厚にしてよく人を容るゝの膽量豊かなり、蓋し其の前途や多望且つ多端なりと謂ふべし、讀書を愛好するのみならず多種多様の趣味を有すといふ。

夫人忠子は東京府の人日比房雄君の令妹にして其の間に洋一君、達二君及びコト子等あり、現に東京市芝區三田小山町一七番地に住す。

君は曩に農商務省海外留學生として歐米に留學を命ぜられ、歸朝後内國博覽會審査官、聖路易博覽會審査官、農商務省

君は曩に農商務省海外留學生として歐米に留學を命ぜられ、歸朝後内國博覽會審査官、聖路易博覽會審査官、農商務省

君は曩に農商務省海外留學生として歐米に留學を命ぜられ、歸朝後内國博覽會審査官、聖路易博覽會審査官、農商務省

君は曩に農商務省海外留學生として歐米に留學を命ぜられ、歸朝後内國博覽會審査官、聖路易博覽會審査官、農商務省

君は曩に農商務省海外留學生として歐米に留學を命ぜられ、歸朝後内國博覽會審査官、聖路易博覽會審査官、農商務省

君は曩に農商務省海外留學生として歐米に留學を命ぜられ、歸朝後内國博覽會審査官、聖路易博覽會審査官、農商務省

君は曩に農商務省海外留學生として歐米に留學を命ぜられ、歸朝後内國博覽會審査官、聖路易博覽會審査官、農商務省

君は曩に農商務省海外留學生として歐米に留學を命ぜられ、歸朝後内國博覽會審査官、聖路易博覽會審査官、農商務省

君は曩に農商務省海外留學生として歐米に留學を命ぜられ、歸朝後内國博覽會審査官、聖路易博覽會審査官、農商務省

君は曩に農商務省海外留學生として歐米に留學を命ぜられ、歸朝後内國博覽會審査官、聖路易博覽會審査官、農商務省

君は曩に農商務省海外留學生として歐米に留學を命ぜられ、歸朝後内國博覽會審査官、聖路易博覽會審査官、農商務省

君は曩に農商務省海外留學生として歐米に留學を命ぜられ、歸朝後内國博覽會審査官、聖路易博覽會審査官、農商務省

君は曩に農商務省海外留學生として歐米に留學を命ぜられ、歸朝後内國博覽會審査官、聖路易博覽會審査官、農商務省

て奮闘を試み、専ら海産物の商取引に力を注ぎ終始一貫して業運の發展に努めしかば遂に今日の大を成し、現に前記の外函館陶器株式会社取締役にして今や同地財界に重きをなすに至れり。

夫人をキミ子と稱し其の間に一男あり現に函館市東濱町三五番地に住し電話三二五番たり。

### 乾 政彦君

法學博士 辯護士

當家は世々十津川の郷士たり、君は奈良縣士族中垣精悟君の二男にして、明治九年十一月を以つて生れ、同二十二年十月先代榮二郎君の養嗣子となる。

明治三十二年東京帝國大學法科大學を卒業するや、獨逸に留學し柏林大學及びボン大學に學び、民法學を専攻し同三十八年之を卒へて歸朝す。

然して後ち東京高等商業學校教授に任ぜられ且つ東京帝國大學法科大學、慶應義塾、法政大學、明治大學、専修大學等

に於て民法を講じたりしが、後ち之を辭して現時は辯護士を開業し大正三年法學博士の學位を授與せらる。

夫人龍子は故醫學博士理學博士大澤岳太郎君の長女にして内助に厚く、現に事務所を東京市麴町區永樂町丸の内ビルディング内に有し、電話丸の内四五四番にして東京市本郷區駒込曙町一五番地に現住し電話小石川一二四〇番たり。

### 市來 乙彦君

正四位勳一等

貴族院議員

君は鹿兒島縣士族市來平太君の三男にして、明治五年四月十三日を以つて同縣大島郡の孤島に生る。明治二十九年東京帝國大學法科大學政治科を優秀の成績を以つて卒業するや、直ちに文官高等試験に應じて首尾よく登第す。

斯くて職を官界に奉じ司稅官那覇稅務管理局長を振り出しに稅關事務官、大藏書記官、大藏省主計局長、大藏次官等を

歴補し、大正七年貴族院議員に勅選せられ後ち官を辭して野に下り實業界に轉じ推されて日露實業株式會社取締役社長に就任し、大いに彼此兩國間の貿易振興に盡力すること甚大なりき。

偶々大正十一年加藤友三郎内閣成立するや、擧げられて一躍大藏大臣の榮職に親任せられ、同十二年九月日本銀行總裁に任せられ昭和二年四月田中政友會内閣出現と共に辭して野に下る。

夫人よね子は鹿兒島縣の人故平田喜右衛門君の長女にして君との間に二男一女を擧げ政雄君、政安君及び靜子と呼ぶ、現に東京市麻布區本村町一六番地に住し電話高輪七〇〇八番なり。

### 石河 幹明君

時事新報名譽主筆

君は舊水戸藩士石河竹之助君の三男にして、安政六年十月を以つて生る。明治十六年慶應義塾大學を卒業するや、直ちに時事新報社に入りて主筆に任じ、君が

穩健着實にして且つ博大なる靈筆を揮つて啓蒙開發に盡瘁し、今や時事新報名譽主筆として令名高く、曾つては歐米各國を視察研究して歸朝し、又曩に慶應義塾大學理事、徳川公爵家評議員等を勤めたることあり。

夫人さとしは茨城縣士族關野君の長女にして君との間に明夫君及びきみ子、豊子、くに子、ミツ子、フジ子等あり、東京市麻布區富士見町九番地に現住し電話高輪六〇七一番たり。

### 猪野 毛利榮君

實業家 衆議院議員

君は福井縣の人猪野毛利右衛門君の長男にして、明治十九年一月五日を以つて生る。夙に大志を抱き笈を負ふて東上し明治四十四年日本大學英法科を卒業するや、二六新報社に入りて經濟方面に活躍せしが、後ち辭して獨力雜誌「浪人」を發刊して操觚界に活躍す。

然るに期するありて實業界に乗り出し

其の敏腕を振ひしかばトントン／＼拍子に成功し、現に日本シート株式會社社長たる外日本拓殖、永田商會各株式會社の重役として知らる。

大正十三年郷里福井縣大野郡より推されて衆議院議員に當選し、現に中央政界に令名ある傍ら日本大學評議員を勤む、運動、旅行、哲學研究等に深き趣味を有すと謂ふ。

夫人トミ子は福井縣の人長谷川喜平太君の二女にして福井縣立高等女學校の出身たり、現に東京市外北豊島郡巢鴨町宮仲二四二八番地に住し電話小石川一〇一五番なり。

### 石塚 英藏君

從四位勳一等

貴族院議員

君は福島縣士族福島和三郎君の長男にして、慶應二年七月を以つて生る。明治二十三年東京帝國大學政治科を卒業するや、直ちに官界に職を奉じ法制局參事官

に任ぜらる。

爾來捕獲審檢所評定官、韓國議政府顧問官、臺灣總督府參事官長、關東洲民政長官、朝鮮總督府農工商部長官等を歴任し、大正五年十月東洋拓殖株式會社總裁に任ぜられ、同時に貴族院議員に勅選せられ現に貴族院議員として議政府に列し國政に參與して功勞顯著なり。

夫人シノフ子は青森縣士族山川徳治君の長女にして君との間に照雄君、武男君及び文子、和子、恵子等あり、現に東京市牛込區原町二ノ七一番地に住し電話牛込二八〇〇番たり。

### 磯野 七平君

博多土居銀行取締役

筑豊電氣軌道會社取締役

君は福岡縣の人磯野七十郎君の三男にして、明治十五年五月を以つて生る。夙に地方實業界に活躍して聲名を馳せ、現に前記の外大日本製酒、許斐工業各株式會社の重役として知らる。

尚ほ福岡縣多額納税者にして、現時直税八千六百六十余圓を納め福岡財界に令名高し、夫人をツネ子と稱し福岡縣の人野村久左衛門君の二女にして其の間に四男二女あり。  
現に福岡市上土居町四十五番地に住す

### 岩田宙造君

法學博士 辯護士

東西法曹界の巨星法學博士岩田宙造君は樋口嘉七君の令弟にして、明治八年四月七日を以つて生れ先々代岩田金藏君の養嗣子となる。

明治三十一年東京帝國大學法科大學英法科を卒業し、明治三十五年辯護士事務所を開設し爾來辯護士として東西法曹界に其の令名を誦はれ、大正五年法學博士の學位を授與せらる。

曩に中央大學法學部、東京帝國大學農科大學等の講師たりしが現時は専ら法曹界に活躍し尚ほ傍ら東洋海上保險、久原礦業、東京サルヴェール各株式會社の監

査役たり、趣味として蘭の培養極めて巧妙にして素人の域を脱せりと。

夫人ヤエ子は岩田金右衛門君の令妹にして其の間に永俊君、健次郎君あり、現に東京市赤坂區青山高樹町一二番地に住し電話青山四〇三番たり。

### 磯野正登君

京濱商興株式會社長

文華印刷株式會社專務取締役

現時我が財界に着々として其の地歩を占めつゝある新進實業家を磯野正登君となす。君は先代磯野徳太郎君の長男にして明治十二年九月十九日を以つて生る。

夙に東京帝國大學理科大學數學科及び同大學法科大學獨法科を卒業するや直ちに實業界に投じ、曩に中央生命保險株式會社創立に際しこれに參畫し、大正二年法律事務所を開設して一般法律事務を取扱ひ、翌三年内國生命保險株式會社官選辯護人に任命せらる。  
大正七年横濱生命保險株式會社に轉じ

て同社總支配人となり、傍ら前記諸會社の社長又は專務取締役として知らる、趣味頗る多様にして讀書、觀劇、音曲、將棋、圍碁等あり。

夫人千代子は東京府の人大井俊太郎君の長女にして三輪田高等女學校を卒業し君との間に正知君及び正典君あり、現に横濱市本牧町二五〇番地に住す。

### 井上敬次郎君

多摩川水力電氣株式會社長

君は熊本藩士井上彌三郎君の長男にして文久元年八月を以つて生る。身を貧より起して幾多の辛酸を嘗めつくして、百折屈せず、千挫撓まず、遂に今日の成功を贏ち得たる君をしも眞に現代立志傳中の人と謂ふべし。

曩に廣澤參議を暗殺せる中村六藏君について英和漢の學を修め、後ち新聞條例違反を以つて獄舎の客となり、獄中たゞ故星亨君と相知りて意氣投合し、爾來僚友の交を結びて自由黨に入り政界に

活躍すること久し。

明治二十九年移民會社を興して着々成功の域に達せしめ、後ち兩宮敬二郎君の市街鐵道會社を設立するや、君之に參畫して功あり、遂に同社專務取締役に推され、後ち同社が東京電車株式會社と合併せられて東京鐵道株式會社となるや、更に同社專務取締役に推選せられ斯くて電車市有に歸するや君は電氣局電車部長に擧げらる。

其の後ち電氣局理事、電氣局長事務取扱となり、更に東京市參事、電氣局長等を歴任せしが現時は前記多摩川水力電氣株式會社社長として令名高し。

夫人をハナ子と呼び其の間に四男二女ありて多輪君、毅三君、謙介君、良一君及び甫子、英子と呼ぶ、現に東京市外代々幡町代々木富ヶ谷一四六三番地に住し電話四谷三〇五番なり。

### 泉岡宗助君

實業家

大阪府多額納税者

君は大阪府の人泉岡宗伯君の長男にして、明治九年一月を以つて生れ前名宗平を改稱す。曩に泉岡商會を興し莫大小商を營みて斯界に重きをなし、而も資産家として威勢を張り、尚ほ多額納税者として權勢を振ふ、又以つて多幸な御方と謂ふべし。

夫人をムメノ子と稱し奈良縣士族三木與二君の二女にして君との間に宗三君、宏信君及びチヨ子、タツ子等あり、大阪府住吉天王寺二〇二一番地に現住し電話南九六五番たり。

### 井手徳一君

東邦證券株式會社專務取締役

君は佐賀縣士族井手平吉君の長男にして、明治二十年二月二日を以つて生る。夙に郷校を卒ふるや笈を負ふて東上し、明治四十二年早稻田大學商科を卒業する

や直ちに實業界に投す。

斯くて廣瀬水力電氣株式會社に入社し同年九月同社が九州電氣株式會社と合併するに及んで君又入りて其の會計課長に就任し、更に大正二年十月九州電燈鐵道株式會社と合併成るや其の會計課長に任じ、同十一年六月關西電氣株式會社と合併せらるゝに際し、同社經理部次長に擧げられ同時に理事に任ぜらる。

曩に早川電力株式會社監査役たりしが大正十四年三月之を辭し、現に東邦證券株式會社專務取締役として知らる、廣汎なる趣味の所有者にして運動、園藝、音樂、寫眞、圍碁、撞球等何れも達人なりといふ。

夫人をミネ子と呼ぶ、現に東京府豊多摩郡下落合町三六七番地に住し電話牛込三七五〇番なり。

### 入澤重鷹君

朝鮮鐵道株式會社副社長

從四位勳三等法學士入澤重鷹君は北海

道士族入澤義温君の長男にして、明治八年六月を以つて生る。明治三十四年東京帝國大學法科大學を卒業し、同三十六年文官高等試験に合格す。

爾來關東洲民政署事務官、同秘書官、朝鮮總督府書記官、同鐵道事務官、青島守備軍民政部事務官兼民政部鐵道事務官民政部總務部長、民政部鐵道部長等を歴任し數度歐米各國に差遣せらる。退官後は朝鮮鐵道株式會社に入りて同社副社長に就任し以つて現在に及ぶ。

夫人ヤスノ子は山口縣の人内野仙一君の令妹にして山口高等女學校を卒業し、其の間に一男二女ありて重彦君及び露子由美子と呼ぶ、現に朝鮮京城旭町二一九番地に住し電話本局三四〇二番なり。

### 石坂泰三君

第一生命保險會社取締役支配人

君は埼玉縣の人石坂義雄君の三男にして、明治十九年六月を以つて生る。夙に東京帝國大學法科大學獨法科に學び、明

治四十四年優秀の成績を以つて同科を卒業し、同時に文官高等試験に應じて首尾よく合格し更に大學院に入りて財政學を專攻す。

然して職を官界に選び逓信省爲替貯金局振替貯金課長、貯金課長等を歴任し後ち官を辭して實業界に走り、大正四年第一生命保險相互株式會社に聘せられ、翌年同社より保險業視察の目的を以つて歐米に派遣せられ、歸朝後同社支配人に推され現に同社取締役兼支配人として令名あり。

夫人雪子は愛知縣の人織田一君の長女にして女子學習院の卒業なり、現に東京府豊多摩郡中野町千光前三〇七一番地に住し電話四谷七〇一番たり。

### 今井茂次君

姫路銀行取締役

姫路水力電氣會社取締役

君は兵庫縣の人今井直次郎君の長男にして、明治十年二月を以つて生る。夙に

關西實業界に活躍し、現に前記の外姫路倉庫株式會社取締役にして且つ兵庫縣多額納稅者たり。

現に姫路市材木町三五番地に住す。

### 池田五六君

三ツ引商事株式會社常務取締役

曾つては米國操帆界に活躍して令名を馳せ、今や我が財界にありて聲名あるを我が池田五六君となす。君は山梨縣の人池田宇右衛門君の四男にして、明治八年十一月二十五日を以つて生る。

夙に山梨縣師範學校を卒業するや暫らく郷里の教育界にありしが、大望ある君は斷然教職を擲ちて渡米し、コロンビヤ大學に入りて同校を卒業し、彼の地に留まり在米日本人會幹事を努め、傍ら前後十三ヶ年に亘り桑港新世界新聞社を經營し同社々長として畫策大いに努めしが大正八年歸國して日本讀書協會主任となり更に大正十二年十二月三ツ引商事株式會社の聘に應じて入社し、其の常務取締役

に就任し今や我が財界に令名噴々たり。

趣味廣く園芸、撞球、旅行、讀書等其の最もなるものにして社交に厚く交詢社電氣俱樂部、コロンビヤ俱樂部、日米俱樂部、日米協會等の會員たり、現に東京市四谷區笹塚町五十七番地に住し電話四谷三六九一番たり。

### 今村繁三君

今村銀行頭取

第一生命保險相互會社取締役

東京府の人今村清之助君の二男にして、明治十年一月を以つて生る。明治三十六年東京高等師範學校附屬中學校を卒業するや英國に留學し、ケンブリッヂ大學、リーススクール、トリニチーカレッジ等に於て研鑽を積み、パチエラー、オブ、アーツの學位を得て歸朝す。

斯くて直ちに實業界に投じ幾多銀行會社に關係し、現に今村銀行頭取たる外第一生命保險相互、汽車製造、東洋織布、

東京合金製造、熱帯産業各株式會社の重役にして、且つ東京商業貿易株式會社の相談役として令名高し。

尙ほ東京府多額納稅者にして現時直接國稅實に一萬一千二百余圓を納む、趣味として旅行、運動競技等あり、銀行俱樂部、東京俱樂部、交詢社、帝國鐵道協會、永樂俱樂部等の各會員たり。

夫人とし子は男爵新田忠純君の長女にして東京女學館の卒業、現に東京市芝區田町七ノ六番地に住し電話高輪一三一〇番なり。

### 生島五郎兵衛君

實業家

君は兵庫縣の人上西文右衛門君の二男にして、明治元年四月を以つて生れ、後ち先代五郎兵衛君の養嗣子となる。先代よりの資産家を以つて知られ、尙ほ兵庫縣多額納稅者にして直税一萬二千百十圓を納め兵庫縣下財界に令名あり。

現に神戸市榮町二ノ七十二番地に住し

電話三宮二一七八番たり。

### 今岡純一郎君

工學博士 從四位勳三等

浦賀船渠株式會社社長

君は北海道士族今岡清君の長男にして明治七年二月十六日を以つて岸和田市に生る。明治三十一年東京帝國大學工科大學造船科を卒業するや、直ちに船舶司檢所司檢補に任せられ、翌三十三年逓信省技師兼管船局船舶課勤務となり、同三十六年英獨二ヶ國に留學を命ぜられ更に翌年米國に差遣せらる。

然して造詣を深くして歸朝するや帝國鐵道廳技師、海軍局技師等を経て逓信省管理局技師兼管船局船舶課長に補せられ同四十五年高等海員審判所審判官を兼任し、大正四年二月工學博士の學位を授けらる。

後ち官を辭して實業界に走り、東海海運株式會社監査役たりしが現時は浦賀船渠株式會社取締役社長の重任にあり、工

學士會、日本工學俱樂部、日本俱樂部、ロータリー俱樂部等の各會員たり、趣味に園藝あり頗る妙なるが如し。

夫人なほ子は東京府の人設樂勇雄君の令妹たり、東京市赤坂區青山南町五ノ四五番地に現住し電話青山八〇九番なり。

### 磯部 保次君

衆議院議員

香妻川電力株式會社專務取締役

君は茨城縣士族磯部吉保君の長男にして、明治元年七月を以つて生る。夙に郷校を卒ふるや出でて慶應義塾に學び、明治二十四年同塾理財科を卒業するや直ちに身を實業界に投ず。

最初播州播但鐵道會社に入り其の會計課長として敏腕を振ひ、後ち東京馬車鐵道社長牟田元學君の下に其の會計を勤め後ち電氣鐵道視察の爲め歐米各國を巡遊して歸朝するや千代田瓦斯會社に入りて其の常務取締役を勤め爾來東京瓦斯會社常務取締役、小倉鐵道、京王電氣、三ツ

引商事各株式會社の重役を歴任す。

現時は前記株式會社の常務取締役として活躍する外旭工業、ボルネオ殖産、日本曹達各株式會社の重役たり、現に茨城縣選出衆議院議員として政界に知られ、趣味として旅行あり。

夫人とき子は勝田權右衛門君の長女にして長男英一郎君又父君に劣らざる才物にして現に少壯實業家の名斯界に高し、東京市芝區車町三十五番地に現住し電話高輪一〇三三番たり。

### 泉 喜之介君

兵庫縣多額納稅者

君は兵庫縣の人泉仙介君の叔父君にして、明治十二年五月を以つて生る。夙に酒造業を營みて當地實業界に知られ、尙ほ兵庫縣多額納稅者にして直稅四千五百九十餘圓を納むるを以つて名あり。

夫人テイ子は大阪府の人田中貞治郎君の長女にして君との間に順造君、正男君、八十八君及びりゆう子、せい子と呼ぶ、

現時は兵庫縣武庫郡御影濱本東五五番地に住す。

### 生野 鼎君

横濱船渠株式會社常務取締役

君は佐賀縣士族生野孝俊君の三男にして、明治十四年四月十日を以つて生る。夙に東上し明治三十八年東京高等商業學校に入學し、優秀の成績を以つて同校を卒業するや直ちに東都財界に投ず。

然して日本郵船株式會社に入社し同社副參事、統計課長、船客課長等を歴任し大正七年十二月同社營業部長に昇進し尋いで大正十二年歐米の船舶業、造船業等の視察をして歸朝するや、同社を辭して横濱船渠株式會社に入りて其の常務取締役に任じ以つて現在に及ぶ。

尙ほ傍ら横濱新倉庫株式會社監査役たり、運動を好み就中乗馬の技は頗る妙なりとか、如水會、日本工業俱樂部等の各會員たり。

夫人スエ子は佐賀縣士族山崎景則君の

三女にして實踐女學校を卒業し、君との間に三男あり、現に東京府荏原郡入新井町新井宿二六七四番地に住し電話大森七六九番たり。

### 犬山 善助君

神奈川縣多額納稅者

君は明治九年九月の出産にして、先代嘉助君の養嗣子となる。現に當地方に於ける大地主として知らるゝのみならず、縣下多額納稅者として令名あり。

夫人はな子との間に三男五女あり、現に横濱市青木町六十八番地に住し電話二四二九番たり。

### 井上 宜文君

勳六等 實業家

藥種貿易業

我が國藥種貿易業界の重鎮井上宜文君は京都府士族井上武敬君の長男にして、明治元年十一月を以つて生る。幼より穎才の聞え高く、夙に京都府立中學校を卒

### 池田 嘉六君

從五位勳六等

東京建設事務所長

君は東京府の人池田萬藏君の六男にして、明治十五年五月五日を以つて生る。明治三十九年東京帝國大學工科大学土木科を卒業す。

斯くて、職を官途に奉じ鐵道省作業局に入りて富山縣出張所に勤務し、同四十二年技師に任ぜられ翌年五月鹿兒島縣建設事務所技師となり、更に大正八年十月鐵道省に轉じ同省建設局に勤務し、同十二年六月歐米各國に出張を命ぜられ、歸朝するや東京建設事務所長に擧げられ以つて現在に及ぶ。

夫人そと子は石川縣の人安原信義君の三女にして金澤第一高等女學校を卒業し君との間に英雄君、俊雄君及び美代子等あり、現に東京市芝區芝公園四號地に住し電話青山三〇五九番たり。

### 一色 忠雄君

株式会社一色活版所社長  
株式會社審美書院取締役

帝都活版印刷界の重鎮一色忠雄君は舊鳥取藩士一色忠秀君の二男にして、慶應元年五月を以つて生る。

夙に活版界に雄飛せんとの大志を抱き續文社及び慶應義塾附屬出版社等を歴動して幾多の經驗を積みしかば、明治十五年十二月敢然起つて獨力印刷事業を開設し、爾來、風雨幾春秋幾多の波瀾は重疊し、後ち事業の大擴張を期して米國に渡り、彼の地のパットラヒツンヤ印刷所及び數多の印刷會社に入りて研鑽すること前後十年蕙蓄を積みて歸朝す。

斯くて、再び一色活版所を開設し、其の嶄新の機械に加ふるに技術の精巧と印刷の鮮明とは忽ちにして我が印刷界に令名を馳せ、殊に在留歐米人の信認厚く、社會の信望月に年に加はり、今や我が一色活版所の聲價東都に喧傳せらるゝは蓋し君多年の奮闘努力の結果たらざるはあ

るべからず。

現に同社代表取締役社長たる外尙ほ株式會社審美書院取締役として知らる、現に東京府下千駄ヶ谷町原宿一九六番地に住し電話青山一二五四番たり。

### 岩田 靖一君

資産家  
愛知縣多額納稅者

君は愛知縣士族岩田義徳君の長男にして、慶應元年八月を以つて生る。現に同地方の有數なる資産家且つ多額納稅者として令名あり。

現に名古屋市中區下屋茶二二八番地に住し電話南一五八四番たり。

### 池田 寅二郎君

法學博士 正四位勳三等  
司法省民事局長

君は佐賀縣士族池田專助君の二男にして、明治十二年一月を以つて生る。明治三十六年東京帝國大學法科大學英法科を

卒業するや司法官試補を拜命し、同三十八年四月判事に任じ東京地方裁判所判事に補せらる。

爾來、同地方裁判所部長、司法省參事官兼檢事等を歴任し、大正二年歐米各國に出張を命せられ歸朝するや司法省參事官、檢事、大審院檢事等を経て大正十年司法省民事局長に任せられ以つて現在に及ぶ。

夫人貞子は兵庫縣士族田邊輝實君の三女にして君との間に專一郎君、正亮君、弘君及び倫子、專津子等あり、現に東京市赤坂區丹後町一番地に住し電話青山五九〇六番なり。

### 石川 岩吉君

從五位勳五等功七級  
高松宮附宮内事務官兼別當

君は廣島藩士石川完治君の二男にして明治八年二月二十二日を以つて廣島市に生る。夙に郷校を卒業するや青雲の志を抱き笈を負ふて東上し、明治二十八年國學

院大學を卒業するや直ちに教育界に投じ同三十四年更に和佛法律學校に入りて法律學を専攻し、優秀の成績を以つて同校を卒業す。

然して同年聘せられ國學院大學講師に任じ、兼ねて教育時論社に關係して君が健筆を縱横に揮ひ、明治三十七八年戰役には從軍して滿洲の野に轉戦し功七級金鷄勳章を賜ひ、同四十年國學院大學主事兼講師に陞進し、大正四年皇子傳育官を拜命し、現に高松宮附宮内事務官兼別當心得の顯職にあり。

夫人ツワ子は廣島縣士族三田村良夫君の二女にして君との間に照彦君、久雄君、誠君、勉君及び幸子、しづ子、すみ子等あり、現に東京府北豊島郡高田一六四三番地に住し電話牛込一二番たり。

### 今北 策之助君

從四位勳三等  
大藏省專賣局長

君は大阪府の人今北眞三郎君の長男に

して、明治十年六月を以つて生る。明治三十六年東京帝國大學法科大學政治科を卒業し、更に文官高等試験に應じて首尾よく合格するや職を官途に奉ず。

斯くて大藏省に入りて專賣局屬となり爾來、專賣局事務官、同參事官兼大藏書記官、稅務監督局長、專賣局部長、事業部長兼中央研究所長等を歴任し、大正十二年專賣局長官に擧げられ以つて現在に及ぶ。

夫人をげん子と稱し大阪市相愛高等女學校の卒業にして君との間に忠夫君、孝次君、仁三君、義夫君及びツユ子、ヤク子等あり、現に東京市牛込區南榎町五十番地に住し電話牛込三〇三六番なり。

### 稻田 三之助君

從四位勳三等  
逓信省工務局長

君は愛知縣の人稻田見龍君の三男にして、醫學博士稻田龍吉君の令弟に當り、

明治九年五月二日を以つて名古屋市中に生

る。

夙に郷校を卒業するや青雲の志を抱いて東上し、明治三十三年東京帝國大學工科大学電氣工學科を卒業するや直ちに官界に投じ、逓信省に入りて通信技師となり次いで逓信技師に任せられ後ち新潟郵便局工務課長を命ぜらる。明治四十一年には英米へ翌四十二年には佛獨へ留學し斯學の研鑽を積みて歸朝す。

斯くて、大正二年逓信局技師より累進して同局工務課長に擧げられ、大正十四年五月同局工務局長に榮轉し以つて現在に及ぶ。此の間大正十年七月無線技術委員會會議列席の爲め佛國巴里へ出張を命ぜられ引續きワシントン會議隨員として同會へ列席せり。

趣味に謠曲、讀書等あり、時に専門雜誌に寄稿し且つ名著抄からず。現に東京市芝區神谷町十八番地に住し電話青山六九二〇番たり。

### 今村恭太郎君

正四位勳二等  
東京地方裁判所長

君は故大審院判事今村信行君の長男にして、明治二年五月を以つて生る。明治二十三年明治法律學校を卒業し、同二十六年判検事登用試験に合格して司法官試験を命ぜられ、同二十九年判事に任ず。

爾來、東京區裁判所判事、同地方裁判所判事、同部長、東京控訴院判事、同部長、神戸地方裁判所長、横濱地方裁判所長等を歴任し以つて現在に及ぶ。

夫人を菊子と呼び東京府士族伍堂卓雄君の令妹たり、現に東京市小石川區水道端町二ノ五一番地に住し電話小石川一〇二六番なり。

### 市田彌三郎君

合名社市田商店代表者  
株式会社市田商店取締役

君は京都府の人太田友吉君の令弟にして、明治五年一月を以つて生れ、後ち先

代しげ子の入夫となる。

夙に京都財界に活躍して令名を馳せ現に前記各會社の重役として斯界に重きをなす、夫人はつ子は滋賀縣の人市田彌惣八君の三女たり。

現に京都市上京區本洞院三條上ルに住し電話本局六一二番たり。

### 稻垣兵太郎君

正四位勳二等 鐵道技師  
東京第二改良事務所長

君は東京府の人稻垣新左衛門君の長男にして、明治二年十二月を以つて生れ、後ち先代庄兵衛君の養嗣子となる。明治二十六年東京帝國大學工科大学を卒業するや直ちに職を官途に奉ず。

爾來、臨時臺灣鐵道敷設部技師、臺灣總督府鐵道部技師、鐵道院技師、北海道建設事務所長等を歴任し、後ち東京第二改良事務所長に轉じ以つて現在に及ぶ。曩に明治二十九年には歐米各國に差遣せられしことあり。

現に東京府在原郡池上徳持九一五番地に住し電話高輪二二一八番たり。

### 市村慶三君

福井縣知事

君は京都府の人古川專太郎君の三男にして、明治十七年二月二十八日を以つて生れ後ち市村貞藏君の養嗣子となる。明治四十三年東京帝國大學法科大学を卒業するや直ちに文官高等試験に登第す。

斯くて、職を官途に奉じ、爾來、北海道廳警視、神奈川縣橋樹郡長、千葉縣理事官、奈良縣警察部長、宮内省皇宮警察部長、神奈川縣内務部長、警視廳書記官等を歴任し以つて現在に及ぶ。

夫人を惠美子と稱し京都平安女學院高等科の出身にして、君との間に啓一君、禮二君、良三君及び道子、淑子、千代子等あり、現に同縣知事官舎に住す。

### 石光眞臣君

正四位勳一等功四級  
豫備陸軍中將

君は舊熊本藩主細川家に仕へて食祿百石を賜はりし石光眞民君の三男にして、明治三年五月九日を以つて生る。明治二十四年陸軍砲兵少尉に任官し、同三十年陸軍大學校を卒業、爾來、累進して陸軍中將に陞進す。

然して、其の間參謀本部員、基隆要塞參謀、下關要塞參謀、野砲兵第八聯隊長第十師團參謀長、參謀本部課長、天津駐屯軍司令官、憲兵司令官、馬政局長官、第一師團長等を歴補し、大正十四年五月豫備役仰せ付けらる。

曩に獨國に留學を命ぜられ、且つ日清の役には近衛野戰砲兵聯隊長として出征し、尙ほ日露の役には野砲兵第十聯隊大隊長、旅順要塞參謀、同戰時指揮官參謀等として勳功あり功四級を賜はる。

夫人をツル子と稱し君との間に三男三女あり、現に東京府在原郡駒澤町上馬引

澤七五番地に住す。

### 今井貞次郎君

京都府多額納稅者

君は京都府の人今井定七君の長男にして、明治十五年十二月を以つて生る。夙に書畫骨董界に活躍して、君が鑑識力の優秀なるを以つて斯界に知られ、尙ほ京都府多額納稅者として京都財界に令名あり。

夫人を久榮子と稱す、現に京都市下京區四條通寺町西入に住し電話中二二八五番たり。

### 池田永吉君

池田工業株式會社專務取締役  
須賀川石材株式會社監査役

君は廣島縣士族池田房高君の二男にして、明治三年十月二十六日を以つて生る。明治二十四年攻玉社中學校を卒業するや直ちに海軍建築部に勤務せり。

然して明治二十八年横濱船渠株式會社

に轉じ、同三十三年大倉組土木部に移り更に明治三十五年朝鮮釜山埋築株式會社技師に聘せられ、同港埋築事業を完成して名聲を博せり。

斯くて、明治四十二年十一月獨力池田工業事務所を開設して土木建築設計監督請負業に従事し、大正八年三月池田工業株式會社を創立して同社專務取締役に就任し、現に其の任にありて能く内外の社務を執掌し、帝都復興事業に貢献すること甚大なり。尙ほ傍ら須賀川石材株式會社監査役たり。現に東京府在原郡駒澤町上馬引澤二二六番地に住す。

### 井内豊次君

上川倉庫株式會社監査役  
北海道多額納稅者

君は徳島縣の人井内隆三君の叔父君にして、明治六年九月を以つて生る。現に上川倉庫會社監査役に就き且つ北海道多額納稅者として知らる。

北海道旭川一條通九十三番地に住す。

### 岩波六郎君

極東煉乳株式會社取締役技師

君は北海道の人佐藤元永君の二男にして、明治八年十月十日を以つて生れ、後ち先代岩波常景君の養嗣子となる。明治三十四年北海道農科大學を卒業す。

然して、大正八年北海道札幌なる極東煉乳株式會社常務取締役となり、現に同社取締役兼技師長たり。

夫人しづ子は養父常景君の長女にして日本女子大學の出身にして、君との間に三男二女あり、現に東京府豊多摩郡上戸塚町清水川一六七番地に住し電話牛込三〇六一番なり。

### 市川忠兵衛君

東海紙料株式會社取締役

新高製糖株式會社監査役

君は先代市川瀧藏君の二男にして、明治廿四年六月七日を以つて静岡縣沼津に生る。明治四十二年中央商業學校を卒業するや直ちに財界に飛び出し、大倉組に

入りて格勤すること年あり、現時は前掲會社の重役として知らる。

夫人を末子と呼び東京府の人加藤繁夫君の二女たり、現に東京市赤坂區臺町六九番地に住し電話青山六三三二番なり。

### 石原修君

醫學博士 正六位

九州帝國大學教授

我が醫學界の恩人石原修君は石原亮君の三男にして、明治十八年十月十一日を以つて生る。

明治四十一年九州帝國大學醫學科大學を卒業するや、更に東京帝國大學衛生學研究室に在りて研究すること七ヶ年、後ち農商務省に入りて鑛業監督官となり、轉じて社會局技師たりしが、現に九州帝國大學醫學科大學教授として知らる。

夫人清子は日本女子大學家政科の卒業にして、曩に婦人顧問として萬國労働會議に參列せし程の名人なり、現に東京市本郷區西片町一〇番地に住し電話小石川

一九九八番なり。

### 稻葉信吉君

合資會社稻葉商會代表社員

君は山形縣士族先代通德君の長男にして、明治九年四月八日を以つて同縣鶴岡市に生る。夙に朝洋中學校電信學校等を卒業するや、山形通信局及び酒田電信局等に勤務す。

然して明治三十九年實業界に投じ、現に前掲諸會社の代表者たる外東京木材株式會社社長にして、且つ野花南炭礦、大東電熱、壽製紙各株式會社の重役たり。夫人とよ子は山形縣の人華園方道君の令妹にして君との間に一男一女あり、現に東京市赤坂區田町二ノ七番地に住し電話青山五三〇六番なり。

### 石井良一君

東洋海上保險株式會社取締役支那人

君は新潟縣の人石井信藏君の長男にして、明治九年十月廿六日を以つて生る。

明治三十六年東京商科大學の前身たる東京高等商業學校を卒業す。

斯くて直ちに財界に投じ、東京海上保險株式會社に入りて格勤精勵、其の間歐米先進國の保險界を視察見學して歸朝し漸次累進して同社營業部主任等を経て以つて現在に及ぶ。

夫人祐子は東京府の人宮部文臣君の三女にして、女子美術學校日本畫科の卒業にして閨秀畫家の聞へ高し。現に東京市小石川區丸山町一九番地に住し電話小石川一〇四四番たり。

### 伊丹松雄君

從四位勳二等功四級

陸軍中將

君は岡山縣士族伊丹親恒君の長男にして、明治八年九月を以つて生る。夙に陸軍に志し、陸軍士官學校及び陸軍大學校を卒業し累進して陸軍中將に陞る。

然して其の間參謀本部々員、軍事參議官副官、元帥副官、陸軍大學校兵學教官

ブラジル公使館、米國大使館、英國大使館附各武官、參謀本部第二部長兼陸軍大學校兵學教官、第九師團長等を歴任す。

夫人を小夜子と呼び君との間に親雄君及び智子等あり、現に東京府荏原郡世田ヶ谷町池尻三六六番地に住し電話青山六二四番なり。

### 池田宏君

從四位勳三等

神奈川縣知事

君は静岡縣士族池田忠一君の長男にして、明治十四年七月を以つて生る。明治三十八年京都帝國大學法科大學を卒業するや、直ちに身を官界に投ず。

爾來、内務屬、神奈川縣第二部長、同縣事務官、三重縣警察部長、内務省土木局書記官、同參事官、内務監察官、内務省社會局長官、東京市社會局長、京都府知事等を歴任し、昭和二年四月田中政友會内閣成るや神奈川縣知事に任せられ以つて現在に及ぶ。

現に東京市外千駄ヶ谷町原宿一七一番地に住し電話青山一六四二番たり。

### 伊藤萬太郎君

第一生命保險會社主任監査役

君は愛知縣の人佐藤伍兵衛君の長男にして、明治三年六月二十三日を以つて生れ、同二十一年先代伊藤さき子の養嗣子となる。

明治三十一年東京帝國大學理科大學物理科を卒業するや職を官途に奉じ、農商務省に入り、而して明治三十九年には韓國に同四十二年五月嶼國に差遣せられ、大正六年農商務技師兼爲替貯金局技師、同職時保險局技師となり、同時に商工局保險課長を命ぜられ、尙ほ其の間遞信技師兼簡易保險局技師等を歴任す。

然して後ち身を實業界に投じ、現に第一生命保險株式會社監査役として知らる。夫人くめ子は長野縣の人柳田茂十郎君の三女にして君との間に元君、伍郎君及び信子、智子等あり、現に東京市牛込區



### 池田敬八君

正四位勳三等

内閣印刷局長

君は東京府の人赤坂敬二君の三男にして、明治七年七月三日を以つて生れ、後ち先代池田房明君の養嗣子となる。明治三十四年東京帝國大學法科大学佛法科を卒業す。

然して翌年文官高等試験に應じて首尾よく登第するや、直ちに職を官途に奉じ爾來、專賣局事務官、同參事として長官官房、收納部煙草收納課長、官房監理課長等を歴補し、後ち内閣印刷局長に擧げられ以つて現在に及ぶ。曩に歐米各國を歴遊し斯界の視察見學をして歸朝す。

夫人をけい子と呼び君との間に一女あり、現に東京市小石川區御籠町二一番地に住し電話小石川七〇七九番なり。

### 井伊直方君

子爵 從四位

當家は藤原鎌足の末裔、兵部少輔井伊

直政卿の長男直勝の後なり。直勝三萬石を領し上州安中城に在り、更に越後與板に移り後ち十一代を経て直安君に至る。

直安君は大老井伊直弼の三男にして、先々代直充君の養嗣子となり、明治十七年子爵を授けられ、同二十九年以來貴族院議員に當選する事五回に及ぶ。

君は其の長男にして、伯爵井伊直忠君の從兄君に當り、明治六年二月を以つて生る。夙に學習院高等科を卒業し後ち東京帝國大學法科大学政治科に學ぶ。趣味多き人柄にして就中寫眞、繪畫、盆栽等に巧妙なるが如し。

夫人清子は子爵本莊宗久君の叔母君たり、現に東京府豊多摩郡淀橋町柏木三五六番地に住し電話四谷四三四番たり。

### 井伊直忠君

伯爵 從三位

當家は藤原鎌足の後裔にして、井伊直孝君に至り彦根藩主として三十萬石を領せし家柄なり。

君は九代左近衛中將直弼君の令孫にして、先代伯爵直憲君の二男に當り、明治十四年五月廿九日を以つて生る。現に東京市麴町區一番町二一番地に住し電話四谷五九二一番なり。

### 磯田正朝君

大正生命保險會社東京支店長

君は大分縣の人磯田陸藏君の長男にして、明治十七年六月一日を以つて生る。

夙に青雲の志を抱いて東上し、研鑽を積むこと年あり、識見大いに高むるや直ちに東都財界に投ず。

然して本邦生命保險界に活躍して君が敏腕を振ひ、現に大正生命保險株式會社東京支店長として知らる。

夫人福子は茨城縣の人田中文五郎君の長女たり、現に東京府豊多摩郡上落合町五三四番地に住し電話牛込三二二二番たり。

### 今村信吉君

東京商業貿易株式會社事務取締役

君は東京府の人今村繁三君の令弟にして、明治十七年八月十八日を以つて生る。明治四十三年東京帝國大學法科大学獨法科を卒業す。

斯くて直ちに實業界に投じ、曩に三井銀行にありしが間もなく之を辭し、現に東京商業貿易株式會社事務取締役に任じ且つ今村銀行重役たり。

夫人歳子は東京府の人堀越善重郎君の二女にして學習院女學部を卒業し君との間に隆郎君、知雄君及び和子等あり、現に東京府荏原郡上大崎町四四四番地に住し電話高輪一五八二番なり。

### 池田豁二君

東京藥品株式會社社長

君は静岡縣の人鈴木西二君の二男にして、明治十四年十月十六日を以つて生る。明治四十年東京帝國大學工科大学應用化學科を卒業す。

然して後ち實業界に走り、日本醤油株式會社、高山商會等を歴勤し、現に東京藥品株式會社社長たる外株式會社荒川製作所取締役たり、曩に大連株式商品取引所監査役たりし事あり。

夫人きく子は東京府の人高田慎藏君の三女たり、東京市本郷區湯島三組町三〇番地に現住し電話淺草六三四四番たり。

### 岩田謙三郎君

北海曹達株式會社社長

三井鑛山株式會社取締役

君は千葉縣の人岩田藤兵衛君の三男にして、慶應三年九月七日を以つて生る。明治二十年東京商科大学の前身たる東京高等商業學校を卒業す。

斯くて大藏省に入り三池鑛山局勤務を仰せ付けられ、同廿二年同鑛山三井の經營に移りて後も依然として同鑛山に在りて倉庫課長、庶務課長、運輸課長等を歴勤し、大正二年三池炭鑛次長となり、且つ曾つては松島炭鑛株式會社監査役たり

しことあり。

然して現時は前記の外神岡水電、大平洋炭鑛、大源鑛業、釜石鑛山各株式會社の重役として我が財界に令名あり。

夫人カクヨ子は長崎縣士族杉野長十郎君の令妹にして君との間に藤樹君、欽也君、吉人君、勝吾君及びマナ子、喜代子和香子、三喜子、百世子等あり、現に東京市牛込區矢來町三番地に住し電話牛込三〇六九番なり。

### 石橋新次郎君

日本精機株式會社事務取締役

武蔵野自動車株式會社相談役

君は東京府の人故石橋謙二君の長男にして、明治十三年一月十日を以つて生る。夙に學業を卒ふるや直ちに實業界に投じ、曩に寶田時計製造株式會社工場長として敏腕を振ひ、後ち獨力以つて計器製作販賣業を營み、現に其の傍ら前記諸會社の要職に在り。

夫人とし子は千葉縣の人近藤松太郎君

の二女にして君との間に圭二君あり、東京府北豊島郡西巢鴨町上新田に現住す。

### 岩崎恒二郎君

帝國海上運送火災保險會社常務取締役

君は東京府士族岩崎守正君の二男にして、明治四年十二月二十五日を以つて生る。明治卅年東京商科大学の前身たる東京高等商業學校を卒業す。

斯くて直ちに實業界に投じ、帝國海上運送火災保險株式會社に入りて格勳精勵同社營業部長等を経て現に同社常務取締役として知らる。

夫人をタミ子と呼び君との間に登喜雄君、武一郎君等あり、現に東京市本郷區森川町一宮裏三九八番地に住し電話小石川六五四三番なり。

### 池田善四郎君

水田メリヤス機械會社取締役

旭紡織株式會社取締役

君は埼玉縣の人池田萬藏君の四男にして、

て、明治八年十二月二十八日を以つて生る。明治二十八年東京高等工業學校を卒業す。

然して獨立にて絹糸紡績業を營み、明治卅三年高田商會に入りて會社部主任となり、次いで大正七年機械部長に轉じ同十四年五月同商會を退き獨立して機械輸入販賣業を營み、現に其の傍ら前記諸會社の重役として知らる。

夫人セイ子は群馬縣の人吉田淺次郎君の二女にして君との間に賢太郎君、英三郎君及び富美子、喜美子、惠美子等あり現に東京市本郷區駒込神明町三四〇番地に住し電話小石川三二四七番たり。

### 石川正作君

東京書籍株式會社常務取締役

日本製紙株式會社常任監査役

君は三重縣の人石川八郎右衛門君の二男にして、慶應元年三月十一日を以つて生る。明治十九年東京高等師範學校を卒へて教職にありしが、幾何もなくして實

業界に投ず。斯くて君の敏腕を縦横に振ひ、現に前記の外東洋印刷株式會社重役たり。

夫人よね子は香川縣士族三井光慶君の長女にして東京女子高等師範學校を卒業し君との間に一男一女あり、現に東京市小石川區林町一八番地に住し電話小石川一八九一番なり。

### 今井三吉君

株式會社池田員工所取締役

君は東京府士族今井金平君の三男にして、明治七年四月一日を以つて生る。明治卅年池田員工所に入りて勤続今日及び現に同社取締役たり。

夫人をはな子と呼び君との間に一男一女あり、現に東京府荏原郡大崎町桐ヶ谷向原九〇番地に住し電話高輪三一七八番たり。

### 井上利助君

株式會社美濃利商店社長

君は京都府士族鳥羽重義君の五男にして、明治三年十月を以つて生れ、明治二十年十一月先代利助君の養嗣子となり後ち先代を襲名して六郎を改稱す。

夙に祖業たる呉服商を繼承して益々隆昌ならしめ、而して時代の要求に順應すべく之を株式組織に變更して、自ら同社々長として敏腕を振ひ、現に其の外京都工商、京都火災保險各株式會社の重役として知られ、尙ほ京都府多額納稅者として直税四千二百七十余圓を納む。

夫人フサ子は養父利助君の長女にして君との間に芳次郎君、彦三郎君及びハナ子、ヨシ子、あい子、タカ子等あり、現に京都府下京區六角通新町西入王藏二六番地に住し電話中四七五五番なり。

### 井上正義君

子爵 從四位

當家は源經基の四世河内守源頼信の三

男井上掃部介頼季の末葉にして、三州の住人井上平右衛門小尉清秀の後裔に當り、其の三男正就徳川氏に従ひ遠州横須賀五万六千五百石の城主となり、八代清春の時上總國鶴舞三万石の藩主に封せられ、子孫代々此の地に在り斯くて正生を経て其の長男先代正英君に至り明治十七年子爵を授けらる。

君は子爵井上正國君の令弟に當り、井上正詮君の甥君にして、明治十六年四月を以つて生れ同三十八年學習院高等科を卒業し、翌三十九年先代正英君の養嗣子となり襲爵仰せ付けらる。

夫人孝子は先代正英君の令妹にして君との間に正寛君、正徳君、生壽君、正庸君及び續子等あり、現に東京市芝區二本榎町西一番地に住し電話高輪一二七九番たり。

### 井上武夫君

京都府多額納稅者

君は京都府の人森島照彦君の令弟にし

て、明治十九年十二月を以つて生れ、後ち先代喜太郎君の養嗣子となる。

夙に京都ホテルを經營して斯界に重きをなし、尙ほ京都府多額納稅者として直税七千五十余圓を納むるを以つて知らる。夫人千賀子は養父喜太郎君の長女にして君との間に武一郎君及び花子等あり、現に京都市上京區河原町通二條下ル一之舟入五三七ノ一番地に住し電話上京一七番なり。

### 井上濟美君

帝國電線製造所社長

君は奈良縣の人石田伊藏君の令弟にして、明治十年五月を以つて生れ後ち前名福松を改稱す。

明治卅七年東京帝國大學法科大學を卒業し、後ち大阪商業會議所書記長の職に在ること多年、現に其の傍ら前記會社の社長として知らる。

夫人ミチヨ子は養父節君の長女にして君との間に三男一女あり、現に大阪府市港

區二條通二ノ一八番地に住し電話西二一五七番たり。

井出郷助君

大東ビルブローカー銀行事務取締役  
日本保証信託會社取締役

君は長野縣の人先代浦吉君の二男にして、明治十四年二月を以つて生る。現に東京株式取引所仲買人として斯界に令名ある外前記の諸職にあり、且つ中央證券株式會社監査役たり。

夫人をまんと稱し君との間に達夫君開三君、益世君及び弘子等あり、現に東京市日本橋區青物町一七番地に住し電話大手一五一一番なり。

井上五助君

神奈川縣多額納稅者

君は神奈川縣の人田中重五郎君の二男にして、慶應二年十一月を以つて生れ、後ち先代銀次郎君の養嗣子となる。

夙に森田屋と稱して材木商を營み現に

神奈川縣多額納稅者として直税千二百五十余圓を納むるを以つて令名あり。  
横濱市南吉田町六一一番地に現住す。

伊藤富藏君

日本鑄造株式會社取締役

君は鳥取縣の人吉田清三郎君の三男にして、明治七年一月一日を以つて生れ、大正五年三月廢家伊藤家を再興す。

明治三十一年早稻田大學邦語科を卒業するや直ちに實業界に投じ、曩に浦賀船渠株式會社支配人、浦賀瓦斯製造株式會社取締役及び株式會社由多加商會監査役等の重職にありしが、現時は日本鑄造株式會社取締役として知らる。  
夫人を輝子と呼び君との間に隆文君、和年君及び富喜子等あり、現に東京府在原郡上大崎町三五一番地に住し電話高輪三二一六番たり。

井上牛之助君

實業冷蔵株式會社取締役

君は大阪府の人井上彌兵衛君の令弟にして、明治四年十二月を以つて生る。夙に關西財界に投じて敏腕を鳴らし、曩に大阪北煙草合名會社業務執行社員たりしが現時は前記會社の重役たり。

尙ほ現に大阪府多額納稅者として直税四千八百八十余圓を納む。

夫人ヨシ子は大阪府の人熊田喜久馬君の令妹たり、現に大阪市西立賣堀北通五ノ八番地に住し電話新町七〇三番なり。

岩崎幸治郎君

正五位勳三等 辯護士  
衆議院議員

君は大阪府の人岩崎九郎平君の長男にして、明治七年四月を以つて生る。明治三十一年辯護士登用試験に合格し、後ち英佛に遊びライプツヒ大學を卒業して歸朝す。  
斯くて關西大學講師、横濱地方裁判所

板谷宮吉君

板谷商船株式會社常務取締役  
南洋郵船株式會社監査役

君は北海道の人先代板谷宮吉君の長男にして、明治十八年五月を以つて生れ、大正十三年家督を相続すると共に襲名して前名眞吉を改稱す。

明治四十二年早稻田大學商科を卒業するや直ちに父業を繼ぎて雜穀肥料倉庫業及醬油醸造業を營みて新進の名を馳す。  
現に其の傍ら板谷商船會社常務取締役にして且つ南洋郵船、樺太銀行、屋張時計各株式會社の重役として知らる、尙ほ北海道多額納稅者として直税二万六千九百七十余圓を納む。

夫人イト子は新潟縣の人内藤善太郎君の長女たり、東京市麴町區富士見町五ノ一三番地に住し電話九段二〇四〇番なり

岩船峯次郎君

北海道多額納稅者

君は北海道の人先代峯次郎君の長男に

井上通泰君

醫學博士 從三位勳三等  
宮中顧問官

君は兵庫縣の人松岡操君の三男にして前貴族院書記官長柳田國男君及び海軍大佐松岡靜雄君、畫家同輝夫君(映丘)等の令兄に當り慶應二年十二月を以つて生れ後ち先代碩平君の養嗣子となる。

明治二十三年東京帝國大學醫學科大學を卒業するや、同校眼科助手、兵庫縣立姫路病院長、岡山醫學專門學校眼科教授等を歴任し、退官後上京して開業し現に宮中顧問官たり。

夫人クヤウ子は東京府の人佐藤芳三郎君の二女にして君との間に泰忠君及び桃

東京控訴院各判事、拓殖局總裁秘書官等を歴任し、後ち大阪府民の輿望を擔つて衆議院議員に當選すること數回、曩に司法省參與官たりしことあり。

夫人いく子は兵庫縣の人團野源三郎君の令妹たり、現に東京府豊多摩郡中野町大塚一八三〇番地に住し電話四谷七〇二四番なり。

井上定吉君

神奈川縣多額納稅者

君は神奈川縣の人先代喜右衛門君の二男にして、明治三年十一月を以つて生る夙に生絲商を營み現に神奈川縣多額納稅者として直税二千八百五十余圓を納む。

夫人をシケ子と呼び神奈川縣の人端山橋次郎君の令妹にして、君との間に元一君及びサダ子、タマ子等あり、現に横濱市本町一ノ一一番地に住し電話三〇七番たり。

枝子等あり、東京市赤坂區青山北町七ノ二番地に現住し電話青山四六八番たり。

### 泉 吉次郎君

大阪府多額納税者

君は大阪府の人泉吉平君の長男にして明治七年一月を以つて生る。現に大阪府多額納税者として直税一萬一千五百九十余圓を納む。

夫人ハナ子は大阪府の人木谷市郎兵衛君の二女たり、現に大阪府西淀川區姫島町九〇一番地に住し電話長土佐堀一五八〇番なり。

### 池田 嘉吉君

御本真珠店支配人

君は兵庫縣の人池田康太郎君の二男にして、明治九年十二月十九日を以つて生る。夙に郷校を卒業するや第五高等學校に進み、明治三十六年東京帝國大學法科大學政治科を優秀の成績を以つて卒業す。斯くて直ちに財界に投じ第一銀行にあ

りしが、たま／＼明治四十二年朝鮮銀行創立せらるゝや同行に入り、同四十四年十二月辭して御本真珠店に轉じ、爾來精勵せしかば大正四年同店支配人に擧げられ以つて現在に及ぶ。

曩に歐米を歴遊して具さに彼の地の經濟界を視察見學すること前後三回、今や本邦財界の重鎮を以つて目せらる。

夫人容子は東京府の人御本幸吉君の三女にしてお茶の水高等女學校の出身たり、東京府豊多摩郡中澁谷町大山七二五番地に住し電話青山三七二三番たり。

### 生島 五三郎君

兵庫縣多額納税者

當家は神戸市草分の舊家にして、俗に生島金と稱せらるゝ資産家の分家なり。即ち先代みの子は生島本家先代五郎兵衛君に嫁し、夫君の歿後明治二十七年九月一門生島五三郎君の死跡絶家を再興したるものなり。君實は大阪府辻元松五郎君の令弟にし

て明治元年二月を以つて生れ、同二十七年十月先代みの子の養嗣子となる。現に金融界に於て相當の勢力を有し、尙ほ兵庫縣多額納税者として直税八千三百六十余圓を納む。

夫人さど子は兵庫縣の人安國幸右衛門君の長女たり、現に神戸市元町五ノ一〇九番地に住し電話元町一八八九番なり。

### 池田 萬藏君

東京府多額納税者

君は埼玉縣の人泰慶松五郎君の四男にして、明治十四年六月を以つて生れ、後ち先代萬藏君の養嗣子となる。現に東京府多額納税者にして直税四千五百十圓を納むるを以つて名あり。

夫人亥子は東京府の人石井徳郎君の令妹にして君との間に一男四女あり、現に東京市淺草區高原町二番地に住し電話淺草二九八九番たり。

### 入江 正太郎君

南滿洲鐵道株式會社東京支社長

君は東京府の人入江鷹之助君の長男にして、明治二十年一月二十一日を以つて生る。明治四十四年東京帝國大學法科大學政治科を優秀の成績を以つて卒業す。

斯くて直ちに南滿洲鐵道株式會社に入りて同社經理部用度課に勤め、翌年十月より二ヶ年間海外留學を命せられ普ねく歐米各國の鐵道經營に關する諸般の研究を積みて歸朝するや、同社大石橋、遼陽奉天各地方事務所長を歴任す。

然して大正九年同社を辭して外務省に出仕し、遼陽、安東各領事として俊腕を振ふこと三年有半、再び滿鐵へ復歸、同外事課長、庶務課長、人事課長等の要職を歴勤し、昭和二年十一月山本社長の御信任を恭うし、遂に同社東京支社長に榮轉し以つて現在に及ぶ。

夫人を節子と呼び君との間に三男一女あり、現に東京市麻布區狸穴町同社宅に住し電話青山一五六八番たり。

### 今泉 小源次君

東海工業合資會社代表社員

君は茨城縣の人野口源次郎君の令弟にして、安政三年二月を以つて生れ、後ち今泉信次郎君の養嗣子となる。

夙に大志を抱いて東都に上り、身を實業界に投じて君の敏腕を縦横に振展して東都土木建築界にありて名聲を博し、現に東海工業合資會社代表社員として令名あり。

神奈川縣足柄上郡川村山北十番地に現住し、事務所を東京市芝區神明町二十一番地に有し電話芝六四七番たり。

### 岩崎 恒二郎君

帝國海上火災保險會社常務取締役  
大平火災海上保險會社監査役

我が保險界の重鎮岩崎恒二郎君は東京府士族岩崎守正君の二男にして、明治二十四年十月二十五日を以つて生る。

明治三十年東京商科大學の前身たる東京高等商業學校を優秀の成績を以つて卒

業するや、直ちに東都財界に投じ、帝國海上火災保險株式會社に入社して恪勤精勵、爾來、各部の要職に參劃して其の敏腕を鳴らし、現に同社常務取締役たる外大平火災海上保險株式會社監査役たり。

夫人タミ子は東條頼介君の五女にして實踐高等女學校を卒業し、君との間に一男あり、現に東京市日本橋區濱町三ノ一番地に住し電話浪花四一六八番たり。

伊藤 長次郎君  
正六位勳四等  
日出紡績株式會社社長  
三十八銀行頭取

神戶財界に於ける重鎮正六位勳四等伊藤長次郎君は兵庫縣の人伊藤長次郎君の長男にして、明治六年四月を以つて生れ、後ち前名熊藏を改稱して先代を襲名す。

明治二十六年日本法律學校を卒業するや、直ちに神戶財界に投じ、現に前記の外加古銀行頭取、兵庫縣農工銀行、朝鮮起業、神戸海上運送火災保險、神榮、神

戸土地、山陽中央電氣、共保生命保険、樺太工業各株式會社の重役たり。

夫人をゑい子と呼び香川縣士族大西行禮君の令妹にして君との間に三男一女あり、現に兵庫縣印南郡伊保村に住す。

### 飯田 邦彦君

東洋塩業株式會社取締役  
越後電力株式會社監査役

君は佐賀縣士族古賀寅生君の令弟にして、明治十年七月を以つて生れ、後飯田家の養嗣子となる。

先代義一君は舊山口藩士にして、明治初年より永く三井家に仕事して同家の諸會社銀行の重役を勤め同家の一元老として重きをなせし人柄なり。

君は明治四十三年東京外國語學校支那語科を卒業するや、直ちに東都財界に投じ、現に前記の外南滿鐵業、大安生命保險、滿洲探炭、王子製紙、東亞通商、有恒社、苦小牧輕便鐵道、苦小牧電化工業東海工業各株式會社の重役として知らる

現に東京市麻布區新龍土町十二番地に住し電話青山六〇六七番たり。

### 伊東 太郎君

從四位勳六等 宮内事務官

君は伯爵伊藤已代治君の長男にして、

明治十三年一月を以つて生る。明治四十二年東京帝國大學法科大學政治科を卒業するや職を官途に奉ず。

斯くて宮内省に入りて忠勤、現に宮内事務官主馬寮車馬課長にして同時に内匠寮事務官を兼ね。

夫人をちか子と稱し東京府の人西川忠亮君の令妹たり、現に東京市麴町區永田町一ノ一番地に住し電話銀座二八〇三番なり。

### 伊藤 東兵衛君

愛知縣多額納稅者

君は岐阜縣の人西脇市右衛門君の三男にして、明治十一年一月を以つて生れ、明治三十七年十二月先代東兵衛君の養嗣

子となる。

現に愛知縣多額納稅者として知らる。

夫人をすう子と稱し君との間に一男一女あり、名古屋市中區鐵砲町三ノ一七番地に現住し電話本一八六番たり。

### 伊藤 平三君

京都府多額納稅者  
京都織物株式會社監査役

君は京都府の人若松伊兵衛君の長男にして、慶應二年二月を以つて生れ、明治二十六年七月伊藤家の養嗣子となる。

夙に京都織物界に活躍し、西陣織物商として令名を謳はれ、現に京都織物、京都取引所各株式會社の重役たり、尙ほ京都府多額納稅者にして且つ京都商業會議所議員たり。

夫人を芳枝子と稱す、現に京都市上京區室町通御池上ノに住す。

### 伊藤 勘助君

正五位勳六等  
仙臺鐵道局長

君は山口縣の人伊藤祥助君の令弟にして明治十六年四月廿二日を以て生る。

明治四十二年東京帝國大學法科大學を優秀の成績を以て卒業するや、直ちに文官高等試験に首席を以てパスす。

斯くて職を官途に奉じ、爾來、鐵道院副參事、同參事、鐵道書記官等を歴任、現に仙臺鐵道局長として知らる。

夫人をシヅ子と呼び男爵永山武敏氏の令妹、札幌高等女學校の出身にして其の間に和子あり、現に同官舎に住す。

### 伊藤 金左衛門君

大地主 前中野町長  
東京府會議員

君は東京府の人先代金左衛門氏の二男にして、明治十八年十二月十七日を以て生れ、同十九年家督を相續すると共に先代を襲名す。

現に東京市麻布區新龍土町十二番地に住し電話青山六〇六七番たり。

### 伊東 太郎君

從四位勳六等 宮内事務官

君は伯爵伊藤已代治君の長男にして、

明治十三年一月を以つて生る。明治四十二年東京帝國大學法科大學政治科を卒業するや職を官途に奉ず。

斯くて宮内省に入りて忠勤、現に宮内事務官主馬寮車馬課長にして同時に内匠寮事務官を兼ね。

夫人をちか子と稱し東京府の人西川忠亮君の令妹たり、現に東京市麴町區永田町一ノ一番地に住し電話銀座二八〇三番なり。

### 伊藤 東兵衛君

愛知縣多額納稅者

君は岐阜縣の人西脇市右衛門君の三男にして、明治十一年一月を以つて生れ、明治三十七年十二月先代東兵衛君の養嗣

### 五十嵐 常次郎君

五十嵐自動車商會主  
東京自動車組合評議員

今や東都自動車業界に活躍して聲名あがる我が五十嵐自動車商會主五十嵐常次郎君は富山縣の人五十嵐庄三郎氏の長男にして明治十九年二月十二日を以て生る。

夙に郷校を卒ふるや大志を抱いて東上本邦通運界に活躍すること久しく、爾來國際通運株式會社の前身たる内國、國際明治各通運會社を歴勤し、大正七年加藤商店に轉勤す。

然して大正十三年獨立の機運熟するや獨力以て五十嵐自動車商會を創立し、着々として斯界に勢力を波及し、現に使用車十數臺を有し、使用人數十人を擁して前途益々多望なるものあり。

君尙ほ前記の外全國自動車聯合組合評議員たり。現に東京市神田區三河町二ノ九番地に住す。電話神田一〇六二番

### 井上匡四郎君

子爵 正三位勳二等  
工學博士 貴族院議員

當井上家は先代毅氏より顯はる。毅氏は舊熊本藩士にして、明治三年東京に出て大學小舎長となり、後ち司法卿江藤新平氏に隨行して歐洲に航し、歸朝後諸顯職を歴任し、曩に文部大臣に親任せられ明治二十八年勳功に依り特旨を以て華族に列し子爵を授けらる。

君は熊本縣の碩儒岡松斐々氏の四男にして、明治九年四月を以て出生、法學博士岡松參太郎氏の令弟に當る、夙に先代毅氏の養嗣子となり同二十八年襲爵す。明治三十二年東京帝國大學工科大学を卒業し大學院に入り研鑽惟れ努む、同三十四年獨米に留學し、歸朝後東京帝國大學工科大学助教授、大阪高等工業學校教授、京都帝國大學教授、東京帝國大學工科大学教授等を歴任し、同四十三年貴族院議員に當選し、爾來、研究會の領袖として政界に重きを成し、大正十四年八月

海軍政務次官に任ぜられ、翌年六月若槻内閣に入りて鐵道大臣に親任せられしも昭和二年是れを辭し以て現時に至れり。趣味にゴルフあり。

夫人富士子は養父毅氏の長女たり、現に東京市芝區高輪南町二十八番地に住す。電話高輪三四八番

### 稲田三之助君

從四位勳二等  
逓信省工務局長

君は愛知縣の人稲田見龍氏の三男にして、明治九年五月二日を以て生る。明治三十三年東京帝國大學工科大学電氣工學科を卒業するや直ちに官界に投ず。

斯くて、逓信省通信技師を振り出しに間もなく通信技師に陞進して、新潟郵便局工務課長たりしが明治三十八年十一月本省に歸任し、明治四十一年五月英米留學を拜命主として海底電信に關する研究に専念し、引き續き佛獨に渡り電話及び空氣電送管等に關する研鑽を積み同四

十二年十二月歸朝し翌年三月逓信技師に任ぜらる。尙ほ其の間支那、ロシア、ロシヤ領北バヤ、南ナツプ等に出張を命ぜられしこと數回、大正九年には支那勳章(三等嘉革章)を授與せられ且つ日獨役の功に依り旭日小綬章を賜はる。

然して大正九年同省工務局工務課長に任じ翌年七月には佛國巴里開催の國際通信會議準備技術會議に出席し、更に全年十月には第一回華府會議議員仰せ付けられ、引き續き歐米各國を視察見學して大正十一年九月歸朝し全十三年華府會議の功に依り特に金杯を賜はる。

更に昭和二年に開催の華府國際無線電信會議に列席する等君が邦家の爲めはた本邦通信界に貢獻する蓋し甚大なりと謂ふべし。

夫人を安子と呼び鹿兒島縣士族加納謙氏の四女にして華族女學校の出身、其の間に龍一君、謙二君、三吉君及び富士子等の樂々たる家庭に君の趣味たる謠曲をウナツテは其の家庭的熱情を高調せしめ

尙ほ燈火親しむ候來りなば讀書に研究にいよ／＼専念たるが如し。

現に東京市芝區神谷町二十八番地に住す。電話芝一五〇〇番

### 飯島保作君

片倉製糸紡績會社監査役

君は長野縣上田市の産にして、文久三年九月を以て同市大字上田五〇八番地に生る。

夙に縣下金融界に投じて活躍し、縣下經濟界は勿論本邦財界に貢獻すること甚大、現に前記の職にあり、上田市大字上田五〇八五番地に住す。

### 石原健三君

正三位勳一等  
樞密顧問官

君は岡山縣の人石原庫平氏の三男にして、元治元年一月を以て生る。

明治二十二年東京帝國大學法科大学を卒業するや判事試補に任じ、尋いで司法

省參事官試補となり、裁判所書記長を経て同二十四年判事に任ぜらる。

斯くて明治二十五年茨城縣參事官に轉じ爾來、大阪、香川、岐阜各縣參事官、宮内省參事官、山梨、千葉、高知、静岡各縣知事、北海道廳長官、神奈川縣知事等を歴任大正四年八月宮内次官に任じ、同十一年貴族院議員に勅選せられ尋いで同十五年十一月二十五日に宮内省御用掛恒徳王禮子女王御保育仰せ付けられ以て現在に及ぶ。

夫人静子は芳賀矢一氏の令妹たり。現に東京市外大崎町下大崎七一番地に住す。電話高輪四七番

### 市瀬三五君

市瀬商店主  
東京洋服商工同業組合顧問

君は東京府に原籍を有し、長野縣の人故市瀬信氏の三男にして、明治六年一月十日を以て同縣下伊那郡飯田町に孤々の聲を擧ぐ。

年齒僅かに十六歳にして大志を抱いて上京直ちに東都實業界に投じ始め神田上總屋洋服店に入りて實地に就きて研鑽、後ち太田屋ラシヤ店に轉じ、此處に忠勤すること十有六年に及ぶ。

然して獨立の機運熟するや獨力以つて洋服及ラシヤ商を開業し、大正元年四谷區傳馬町に堂々の陣容を張り着々として斯界に勢力を波及し、今や本店の外丸の内昭和ビルディングに出張所を有し、相呼應して東都同業界に名聲を馳せ、販路又擴大し顧客の信望絶大なり。

昭和三年一月二十六日東京洋服商工同業組合全員の推すところとなり同組合長に擧げられ、現に同組合四谷支部顧問にして且つ同區傳馬町一丁目町會幹事たり趣味多様なる中にも書畫を愛好し旅行を好むといふ、夫人千代子は東京府の人松下健太郎氏の令妹にして内助の聞え高し。

現に東京市四谷區傳馬町一ノ二四番地に住す。電話四谷二四五番

### 磯部 愉一郎君

旭電化工業株式会社支配人

君は岡山縣の人磯部大祐氏の長男にして、明治十四年十一月十一日を以て同縣淺口郡富田村に住る。

夙に郷校を卒ふるや青雲の志を抱き笈を負ふて東上し、研鑽琢磨、明治四十年早稻田大學商科を優秀の成績を以て卒業す。

斯くて身を實業界に投じ、古河合名會社に勤務して敏腕を振ふこと多年、大正十年天龍川水力電氣株式會社支配人に榮轉せしも、越へて同十一年東邦電力株式會社庶務課長に任じ翌十二年再び古河合名會社に歸り、同十五年十二月旭電化工業株式會社支配人に聘せられ以て現在に及ぶ。

現に東京市外濫谷町神泉三三番地に住す。電話青山二七二六番

### 岩崎 久彌君

男爵 正三位勳一等

三菱合資會社業務擔當社員

當家は先代彌太郎氏より家名顯る。同氏は其の令弟彌之助氏と共に夙に本邦海運界の有望なるに着眼して三菱會社を創設して、専心斯業の振展に盡瘁し後ち各種事業會社を興して百萬の富を蓄積し其の名聲海外に喧傳さるゝに至れり。

君は其の長男にして慶應元年八月廿五日を以て生れ、同十八年二月家督を相續し、而して明治二十九年先考彌太郎氏の勳功に依り特に華族に列し男爵を授けらる。

曩に三菱商業學校を卒業するや米國ペンシルバニア大學に學び、明治二十四年同學を優秀の成績を以て卒業しバチエラー・オブ・サイエンスの學位を得たる後歐米各國を巡遊し諸國の實業界を視察見學して歸朝す。

斯くて直に先代の事業を繼承して三菱合資會社々長の要職にあること多年、其

の間鑛山造船其他東京倉庫等各株式會社の創立に盡瘁し、大正六年三菱合資會社の内部の組織變更さるゝや社長を辭して業務擔當社員となり、現時は其の外三菱銀行取締役たり。

東京府多額納稅者の最高位にして、現時直稅四萬八千九百餘圓を納む。

夫人を寧子と呼び子爵保科正昭氏の令妹に當り其の間に彦彌太君、隆彌君、恒彌君及び美喜子、澄子、綾子等あり。

現に東京市本郷區湯島切通町一番地に住す。電話下谷二五六番二〇九番一九二七番たり。

### 井上伊三郎君

松竹キネマ株式會社取締役

阪神運送界の重鎮

君は兵庫縣の人井上久平氏の二男にして、慶應元年七月を以て生る。

夙に關西運送業界に活躍して聲名を馳せ、現時運送業を營む外前記會社の重役たり。

尙ほ兵庫縣多額納稅者たり。現に兵庫縣尼崎市に住す。

### 今泉小源次君

東海工業合資會社長

本邦土木建築界に介在して、錚々の名あるを我が東海工業合資會社となす。而して同社代表社員にして、曾つて斯界は勿論一般實業界に活躍して稀代の敏腕を振ひ、今や其の老軀を神奈川縣足柄上郡川村山北十番地の靜かなる菴に風月を友として悠悠自適たる我が財界の恩人今泉小源次君あるを忘るべからず。

君は茨城縣の人野口源次郎氏の令弟にして、安政三年二月を以て生れ、後ち今泉信次郎氏の養子となる。

夙に實業界に活眼を有し早くも斯界に一大飛躍を試みしかば、君の人格と信望とは着々として斯界に大を成し今や東海工業合資會社代表社員として令名あり。

因に同社は同氏の外に山口勇太郎氏、及川武之進氏、千田勢平氏、野村長次郎

### 石井仙之助君

大森倉庫株式會社取締役

大地主

君は東京府の人先代彌五左衛門氏の長男にして、明治二年九月を以て生る。

夙に實業界に投じ、現に東京に於ける大地主として知らるゝのみならず前記會社の重役たり。

現に東京府荏原郡小山町三二五番地に住す。電話荏原五〇二番

### 石川 淺君

辯護士

君は茨城縣の人石川勘次郎氏の長男に

して、明治二十七年一月二十日を以て生る。

夙に穎才の聞え高く、早くも中等學校教員檢定試験に合格し、斯くて中等學校に教鞭を執りしも固より大志ある君は教育界に終始することを欲せず、本邦法曹界に活躍せんものと即ち明治大學に入り大正九年同大學法學部を優秀の成績を以て卒業するや、同年直ちに辯護士登用試験に登第す。

斯くて、東都法曹界の權威として聲名ある稲田又一法律事務所に入り現に同氏を援けて斯界に敏腕を振ふ、東都法曹界の新進として前途を囑望せらる。

夫人清子は埼玉縣の人辯護士稲田又一氏の長女たり、東京市麴町區飯田町六ノ二十四番地に住す。電話九段三三三五番

### 石川 澤吉君

京濱土地住宅株式會社取締役

原水組(株)監査役

京濱實業界の重鎮石川澤吉君は明治六

年八月十二日を以て生る。

明治廿八年慶應義塾大學理財科を卒業するや直ちに本邦實業界に投じ、横濱船渠株式會社に入り累進して同社監査役に擧げられ、大正八年辭して原木組(株)常務取締役に任ず。

現に前掲諸職にある外カフエーパウリスタ、旭工業、大和印刷、東洋食品各株式會社の重役として令名あり。

夫人りん子は小川豊吉氏の二女にして其の間に光一君、善次君、當三君及びナル子、トシ子、ナミ子等あり、現に横濱市中村町二五番地に住す。電話本局一九八四番

### 石井光次郎君

朝日新聞社(株)取締役

君は福岡縣の人石井兼吉氏の令弟にして、明治二十二年八月を以つて生る。

夙に學業を卒ふるや東都實業界に投じ現時は東京朝日新聞社(株)取締役に任ず。知らる。

夫人久子は東京府の人井邊左門氏の養女にして其の間に公一郎君及び京子、好子等あり、現に東京市外入新井町新井宿二八七九番地に住す。電話大森一〇七番

### 伊東深水君

畫家

君は本名を伊東一と稱し、東京府の人伊東半三郎氏の長男にして、明治卅一年二月四日を以つて生る。

幼にして繪畫を能くし、年齒僅かに十四歳の頃より既に本邦畫壇の明星、錦木清方氏の門下生として研鑽大いに勉め、爾來、院展文展其の他諸展に獨特の美人畫を出品して入選すること屢々、其傑作中棧敷の女、十六の女、指輪、亂捲る家おしろい等は世人を驚嘆せしめし大作今や新聞雜誌の口繪に其の濃艶なる美人畫を揮ひ本邦畫壇の雄として令名あり。趣味に富み、揮毫の傍ら音曲、小唄、清元等に耽るといふ。

夫人好子は永井政治氏の長女にして其

の間に正一君、滿君等あり、現に東京市外大井町南濱川一六二六番地に住す。

### 岩尾太平君

法學士

愛國生命保險株式會社勤務

君は石川縣の人岩尾太吉氏の長男にして、明治三十年四月十五日を以て生る。

大正十四年明治大學法學部英法科を卒業するや直ちに本邦實業界に投じ、愛國生命保險株式會社に入社して本社勤務たりしが昭和三年同社北海道支部に轉じ以つて現在に及ぶ。

夫人ひさ子は富山縣の人角田與七氏の長女にして、石川縣女子師範學校の出身たり。

### 石井孝三郎君

大森合同運送株式會社社長

大森倉庫株式會社事務取締役

勳八等實業家石井孝三郎君は東京府の人石井彌五左衛門氏の三男にして、明治

十五年五月十四日を以つて生る。

夙に實業界に大志を抱き、漢學及び商業學を修得するや東都實業界に投じて活躍大いに努め、爾來、十余年の久しき間獨力以つて雜貨及酒類商を營めり。

然して大正六年有志と相謀り大森倉庫合資會社を創立して、愈々財界の第一線に一大飛躍を試みしかば業運頓に擧り、大正八年組織を變更して株式會社となし同社事務取締役として内外の社務を執掌するに至れり。

斯くて大正十五年四月大森合同運送株式會社を創立して同社社長に任じ、今や東都財界にありて令名高く尙ほ入新井町信用組合評議員、大森耕地整理組合評議員兼會議員、在郷軍人分會名譽會員たり君に勳等あるは曾つて帝國陸軍々人として近衛歩兵聯隊に軍務を果し、後ち、日露の役勃發するや君亦征途に就きて遠く滿洲の野に轉戦してロスケを征服し、斯くて東洋の平和を維持せしめ、功により特に賜はりたる偉勳たり。

夫人をらく子と呼び神奈川縣の人杉崎養三郎氏の令妹にして其の間に彌之助君及び静枝子、光子等あり、現に東京府在原郡入新井町不入斗三三三番地に住す。電話大森八二番、二九二番

### 今村宗太郎君

朝日新聞社(株)取締役

君は京都府の人今村宗七氏の長男にして、明治十年五月を以つて生る。

明治三十六年專修大學理財科を卒業するや本邦實業界に投じ、現時は朝日新聞社(株)取締役に任ず。

夫人愛子は奈良縣士族淺野勇氏の二女にして其の間に功太君、昭君、實君及び貞子、美代子等あり、現に兵庫縣武庫郡精道村に住す。電話芦屋五三七番

### 岩崎彦彌太君

正五位

三菱合資會社出資社員

君は男爵岩崎久彌氏の長男にして、明

治二十八年九月を以つて生る。

夙に學習院を経て大正九年東京帝國大學文學部社會學科を優秀の成績を以つて卒業す。

斯くて大正十一年社會學研究並に實業界視察の爲め英國に留學全十五年三月歸朝し、爾來、三菱合資會社に勤務し新進實業家の聞えあり。

夫人を操子と稱し男爵佐竹義利氏の令妹にして女子學習院の出身たり、現に東京市本郷區龍岡町七番地に住す。電話小石川七一三七番

### 井口重次君

淺野セメント株式會社

深川工場検査課長兼製造課長

君は東京府の人井口氏の四男にして明治廿二年七月廿三日を以つて生る。

大正五年北海道帝國大學農藝化學科を優秀の成績を以つて卒業するや直ちに札幌稅務監督局に職を奉じ監督課技手たりしが數年ならずして官途を辭す。



斯くて、大正七年本邦財界の權威淺野セメント株式會社に入社して敏腕を振ひ爾來、累進して同社内に重きをなし、現に同社深川工場検査課長兼製造課長として知らる。

夫人静悦子は舊家藤山鶴城氏の長女にして山脇高等女學校の出身。其の間に重雄君、雄君及び淑子等あり、現に東京府下澁谷町乘樂三十六番地に住す。電話青山九七一番なり。

### 石川 信君

夕張鐵道株式會社取締役  
北海道炭礦汽船會社監査役

當家は代々武州熊谷に住し始祖以來已に十五代を経たる舊家たり。

君は埼玉縣の人原口金二氏の令弟にして元治元年三月を以つて生れ後先代正一氏の養子となる。

明治二十四年慶應義塾を卒業するや時事新報記者として健筆を揮ひしが、後ち北海道炭礦汽船株式會社に轉じ庶務課長

を経て現に同社監査役にして且つ夕張鐵道會社に取締役たり。  
現に東京市小石川區白山御殿町一三三番地に住す。電話小石川一三三七番

### 石坂 養平君

埼玉縣多額納稅者  
文學士 衆議院議員

君は埼玉縣の人石坂金一郎氏の長男にして、明治十八年十一月廿六日を以つて生る。

大正二年東京帝國大學文科大學哲學科を卒業するや直ちに祖業を繼承し、傍ら縣下の事業會社に關係して重きをなすのみならず社會公共の爲めに盡瘁すること甚大なり。

現時は埼玉縣多額納稅者として知らるゝのみならず武州銀行、武州貯蓄銀行、松本米穀製粉各株式會社の重役にして且つ埼玉縣農會長、同縣太田郡青年團長、少年團埼玉聯盟理事長たり。  
曩に埼玉縣會議員に當選すること數回

同副議長等に選ばれる、然して、昭和三年大日本政黨史上に特筆すべき普選第一回の總選舉に際し、多數縣民に推されて白馬を陣頭に進めしかば大多數の得票を以つて見事當選の榮譽を擔ひ、今や中央議政壇上に令名あり。

君亦評論家として聞え文藝に關する數種の著書あり、書畫を愛好し社交に厚く學士會、農政協會各會員たり。

夫人ふみ子は埼玉縣の人石坂豊人氏の四女にして君との間に金衛君、謹之助君正雄君、昭光君等あり、現に埼玉縣大里郡奈良村大字中奈良に住す。

### 飯田 清三君

野村證券株式會社引受部長

君は鹿兒島縣の人飯田喜八郎氏の長男にして、明治二十七年八月廿二日を以つて生る。

大正八年東京帝國大學法科大學政治科を卒業するや直ちに實業界に投じ、住友銀行に入り、大正十一年二月野村銀行に

轉す。

斯くて同行の證券部獨立して野村證券株式會社創立せらるゝや、君又同社に轉勤、而して昭和二年一月業務部長に擧げられ、更に全三年三月引受部設置と同時に同部長に推され以つて現在に及ぶ。

夫人てる子は鹿兒島縣の人竹下國雄氏の令妹にして鹿兒島縣立高等女學校の才媛、其の間に清道君、稔君及び静子、文子等あり、現に大阪府豊能郡岡町伊丹通リ二丁目に住す。電話岡町二六四番

### 鑄谷 正輔君

北海道鑛業株式會社社長

君は山口縣の人先代鑄谷彌太郎氏の長男にして、明治十三年三月を以つて生れ全二年家督を相續す。

夙に關西財界に活躍して稀代の敏腕を振ひ、現に北海道鑛業株式會社社長として知らるゝ、内外編物株式會社相談役にして關西財界に令名あり。

夫人正子は東京府の人佐藤正藏氏の長

女にして其の間に二女ありて夫佐子、睦子と呼ぶ、現に神戸市山本通り四ノ一番地に住す。電話葎合三一五〇番

### 犬塚 勝之丞君

三井物産株式會社理事

君は東京府の人、正三位勳一等貴族院議員として議政府に參劄して功ある、犬塚勝太郎氏の令弟にして、明治十四年二月二十七日を以つて生る。

明治三十六年東京商科大学の前身たる東京高等商業學校を卒業するや直ちに本邦實業界に投じ、三井物産株式會社に入社し、爾來、全社上海支店、本社會計課三池支店長、シンガポール支店長等を歴任、大正十一年同社參事に擧げられ以つて現在に及ぶ。

夫人フジ子は男爵益田孝氏の養女にして其の間に守勝君、盛信君、盛孝君、悌臣君、長君及び富子等あり、現に東京市外平塚町中延一〇八二番地に住す。電話荏原一二七番

### 飯高 達夫君

清水組工事部副部長

君は千葉縣の人飯高晋氏の長男にして明治二十二年三月二日を以つて生る。

明治四十三年現工科大学の前身たる慶前高等工業學校を卒業するや、大阪辰野片岡建築事務所に入り同現場監督として敏腕を振ひしも、大正三年東西建築界の權威合資會社清水組に轉す。

然して同社大阪本店にありて同じく現場監督として精勵し、昭和二年同社工事部副部長に擧げられ以つて現在に及ぶ。  
夫人タケ子は神奈川縣の人古谷善太郎氏の長女にして其の間に尙君、淳君、秀夫君及び寛子、信子等あり、現に東京府豊多摩郡代々幡町幡ヶ谷十一番地に住す。電話四谷三九三六番

### 池田 福治君

高島洋服店主

東都斯業界にありて信望絶大、錚々の名あるを我が最高級高島洋服店となす。

同店は明治四十二年高島彌次郎氏の創業に係る老舗を現營業主池田福治君の繼承せるものなり。

現店主池田福治君は人も知る徳望高き紳商にして、其の業務に熱誠なること超凡。其の奮闘努力すること終始一貫、誠に當代稀に見るの士たり。

君は茨城縣の出身にして、明治十九年十一月二十日を以つて生る。土地の名望家池田宇四郎氏は實に君の殿父にして君は其の第五子たり。

君今や高島洋服店の經營者として敏腕を振ふ、其の人と爲り能く多數の顧客に絶大の信望を博し、其の天稟の才は能く時代に順應して常に最新型を調製して高評を博し、斯くて方今同店の隆々たる發展は實に同業界を壓せんとし、本店を始めとして芝支店、池袋出張店等何れも顧客の市をなすの盛況にして正に東都業界の白眉を以て目せらる。

夫人とら子は埼玉縣の人故引間清助氏の長女にして、其の間に潤吉君、福三郎

君、英藏君及び素惠子等あり。現に東京市京橋區木挽町二ノ十三番地に住す。電話京橋五〇六二番

### 一 本文 藏君

加田屋經營者  
東京五營業同業組合頭取

東都土木建築界に介在して錚々の名あるを我が一本文藏氏となす。

氏は静岡縣の舊家島田保作氏の三男にして、明治二十八年十月を以つて同縣三島町に生れ、後ち先代文藏氏の養嗣子となり、大正八年家督を相續すると共に前名を襲名す。

大正五年横濱商業學校を卒業するや直ちに實業界に投じ、日本銀行に入りて精勤すること二ヶ年、大正七年先代の遺業を繼承して斯界に活躍せしかば氏の誠實と奮闘とは早くも同業界に赫然頭角を現はし、今や東都同業界に聲名あり、尙ほ前記の外工業品規格統一調査委員として知らる。

夫人をモト子と呼び神奈川縣の人卷田貞四郎氏の長女たり。

現に東京市京橋區南八丁堀三ノ六番地に事務所及び住宅を有す。電話京橋一五二九番

### 今 澤 慈 海 君

東京市日比谷圖書館頭  
日本圖書館協會理事

君は愛媛縣の人今澤清吾氏の四男にして明治十五年三月二十四日を以つて同縣新居郡神戸村に生る。

明治四十年東京帝國大學文科大學哲學科を卒業するや直ちに大學院に入りて研究を積み、後ち外國圖書調査研究の爲め東京市の招聘に應じて同日比谷圖書館に入り爾來、同館頭として勤績今日に及ぶ。斯くて専心日本圖書館事業に従事して市立圖書館は勿論の事全國各圖書館の爲め盡力すること甚大、曩に日本圖書館協會副會長、會長等の要職に就き而して組織變更により同協會理事に任じ以つて現

在に及ぶ。

然して昭和三年十一月御大禮紀念の賀日に當り、文部省より多年圖書館に關する功勞者の故を以て表彰せられ、尙ほ會つては東京府より表彰せられしことあり。著作に興味を有し、哲學並に圖書館に關する著書多數あり。

夫人をタマ子と呼び其の間に一女春代子あり、現に東京府下在原町戸越五八三番地に住す。

### 市 川 繁 彌 君

東京電燈株式會社技師  
兼同社配線課試驗係長

君は長野縣の人故市川四郎氏の二男にして、明治十八年十二月十五日を以つて生る。

大正二年早稻田大學理工科電氣科を優秀の成績を以つて卒業するや選ばれて同大學理工科電氣科助教授たること二ヶ年大正六年實業界に投じ、桂川電力株式會社技師に聘せらる。

斯くて大正十一年同社併合と共に東京電燈株式會社研究所技師に、全十二年には同社監査課試驗係長に擧げられ、然して全十五年同社職制變更と共に技師兼配線課試驗係長として今日に及べり。

趣味に富み旅行、讀書等を好み、亦社交に厚く電氣俱樂部、永樂俱樂部各會員たり。

夫人きよ子は池島三省氏の長女にして日本橋高等女學校の出身、其の間に敦生君を始めとして四女あり、現に東京市牛込區矢來町十一番地に住す。電話牛込一三四四番

### 今 井 五 介 君

長野縣多額納稅者  
貴族院議員  
實業家

君は長野縣の人安政六年十一月十五日を以つて生る。

本邦實業界の巨頭として令名高く、曩に米國に航し歸朝後實見兼太郎氏等と共に

に片倉組を興し、蠶糸事業の經營に當り大正九年株式組織に變更と共に同社副社長に就任、本邦蠶糸界の隆盛の基を築き上げ其の功績甚大なり。

現に片倉生命、日華蠶糸、片倉殖産、信濃鐵道各株式會社社長たる外片倉製糸紡績、中央電氣各株式會社副社長にして、且つ日本ソリヂエット、長崎製糸、滿洲蠶糸各株式會社社長、朝鮮土地改良株式會社取締役會長、日本共立火災保險、帝國蠶糸倉庫、上田蠶糸各株式會社の重役たり。

長野縣下有數の多額納稅者として知られ、大正十四年九月貴族院議員に再選せられ現に議政府に列して國政に參與する外松本商業會議所會頭、人口食糧問題調査會委員、大日本蠶糸會理事、海外協會中央會長、長野縣生糸同業組合聯合會中央會議員、勞資協調會評議員、信濃海外協會顧問、帝國蠶糸組合專務理事、横濱取引所相談役等の要職にあり。

曩に本邦蠶糸業に功勞あるの故を以つ

て縁綬褒章を賜はる。

東京別宅を市外代々幡町代々木初臺六二七番地に有す。電話四谷一八八〇番

### 石川 武美君

株式会社主婦之友社長

君は大分縣の人石川又造氏の二男にして、明治二十年十月十三日を以て生る。

夙に郷校を卒ふるや青雲の志を抱き笈を負ふて東上、研鑽琢磨、後ち本邦出版界に投じて其の稀代の才腕を振ひ、曩に國民新聞社副社長として令名を謳はれしことあり。

然して現時は主婦之友社(株)社長として内外の社務を執筆し、同社發行に係る「主婦之友」は全日本は勿論遠く海外にまで愛讀者を有し、我が國婦人雜誌界の最大權威として知らる。

尙ほ同社は代理部を併置して廣く一般家庭必需製品の販賣に力を致し、以つて愛讀者諸姉に絶大なる便益を計る等同社の前途益々多望なると共に我が國出版界

及び雜誌界の恩人石川武美の名は全日本に錚々たり。

夫人をかつ子と呼び岩手縣の人長谷川甚五郎氏の令妹、其の間に惠美子、富美子等あり。現に東京市外下澁谷羽根澤一七番地に住す。電話青山一〇四六番

### 石橋 忠男君

辯護士 辨理士

東京市四谷區本村町會長

君は東京府に現籍を有し、三重縣の舊家石橋辰藏氏の長男にして、明治六年三月三日の佳日を以つて生る。

夙に日本大學法科を卒業し、明治卅五年文官高等試験に首席を以つて登第、全卅七年には辯護士登用試験に應じて見事登龍門をパスせる程の才物なり。

然して職を官途に奉じ、爾來、農商務省水産局、山林局等を歴勤、後ち山林事務官として秋田、宮城各縣を歴任、大正二年官途を辭す。

斯くて直ちに辯護士を開業して一般法

律事務に従事せしかば、其の稀代の卓見は一躍斯界に令名を馳せ、今や東都法曹界の權威として雷名あり。

君又キリスト教的信念の把持者にして信心の念殊に深く、町民の爲めには懇切町政に盡瘁しては切なるものあり。

現に東京市四谷區本村町十五番地に住す。電話四谷三七〇六番

### 石山 徹雄君

勤七等 海軍下士

合資會社駒込商會代表者

君は北海道の人石山右衛門氏の四男にして、明治二十八年一月五日を以つて同道石狩國厚田郡望木村に生る。

夙に北海道廳立札幌中學校を卒業するや家業に従事せしが、期するところありて海軍に志し横須賀海兵團に入團し、たゞ歐洲大戦亂勃發するや、海防の大任を帯びて従軍し各國に巡遊せり。

然して、大正三年海軍機關部に入り軍務に精勵、大正十年三月滿期除隊するや

直ちに東京自動車學校に入り學理と實地とを習得して同校を卒業し、大正十二年八月株式會社東雲商會を買収して駒込商會と改め自動車業を獨立開業し、昭和三年三月之を合資會社に組織變更して其の代表社員に任じ以つて現在に及ぶ。

先是大正十三年公認東京自動車組合評議員に選ばれ、現に其の任にある外全國自動車聯合組合評議員たり。

夫人イソ子は北海道石狩國厚田郡の人伊藤市太郎氏の二女にして札幌高等女學校の出身たり、犬を愛すること切、又運動に趣味を有すといふ。

現に東京市本郷區駒込吉祥寺一三番地に住す。電話小石川五四八九番

### 石川 元吉君

袖ヶ浦自動車合資會社長

共進自動車部經營者

君は東京府の人松本兼吉氏の二男にして、明治二十九年十二月十日を以つて生れ、後ち石川秀雄氏の養嗣子となる。

夙に中學校を卒ふるや本邦自動車業界に志を抱き、其の學理と技術との研鑽を積むべく東京自動車學校に入學し、第一期卒業生の最優秀者として東都斯業界に送られ、始め國井自動車商會に入りて、實地の習練を積み大正六年首尾よく甲種試験に合格す。

然して、大正七年十月三原自動車商會を設立して同社支配人に任じ、同八年泰平自動車株式會社木挽町出張所長に轉じ越へて大正九年二月ホマレ自動車商會を設立して其の經營の衝に當り、更に大正十三年十月ホマレタクシー自動車株式會社を設立すると同時にホマレ自動車商會を併合して同社常務取締役に就任、内外の社務を執筆し、昭和二年十二月辭す。

斯くて昭和二年十二月千葉縣市原郡八幡町に袖ヶ浦自動車合資會社を設立して同社代表社員に任じ、翌三年五月日本橋に共進タクシー自動車部を開設、現に兩社の經營者として敏腕を振ひ、新進實業家として前途を嚆望せらる。

先是大正十三年第三支部副支部長に就任、現に其の外東京自動車組合理事評議員にして同業界に重きをなす。

趣味は主として自動車の研究にして、尙ほスポーツ、讀書等を好くす、夫人をよね子と呼び東京府の人小串富太郎氏の長女たり。營業所を東京市日本橋區堀越町二ノ十二番地に有し、電話茅場町三二三番なり。

### 井上 五郎君

東邦電力株式會社技師

君は東京府士族本邦財界の重鎮井上角五郎氏の五男にして、明治三十三年八月十六日を以つて生る。

大正十二年東京帝國大學電氣工學科を卒業するや直ちに東邦電力株式會社に入社、爾來、同社電氣課、九州技術部を歴勤す。

斯くて、大正十四年一月社命を帯びて米國に渡航し彼の地の電氣事業を視察研鑽して翌十五年八月歸朝し、現に同社技

師として才腕を振ふのみならず、三河水力電気株式会社主任技術者として同社の爲め盡瘁、前途多望なり。

現に東京市本郷區駒込西片町一〇番地に住す。電話小石川三一四〇番

### 伊藤治郎松君

正八位 在郷陸軍歩兵中尉  
伊藤治郎松商店主

當家は先代治郎松氏より家名を擧ぐ。先代夙に東都通運界に活躍し、其の濃厚にして篤實に加ふるに熱誠と奮闘とを以つて斯界に活躍せしかば業勢頓に加はり遂に今日の盛大をなすの基を築きし人物なり。

然して二代目治郎松君即ち専三君に至り業礎愈々堅く、今や斯業の外砂利の販賣にまで勢力を波及するに至れり。

君は神奈川縣川崎市大師町の出身。明治二十六年一月三十日を以つて生る。

明治四十五年立教中學を卒業するや直ちに先考を援けて業界に活躍し、大正三

年近衛歩兵第一聯隊に一年志願兵として入隊、退營と同時に陸軍歩兵少尉に任官而して昭和二年後備兵役召集に際し陸軍歩兵中尉に陞進す。

大正十二年四月不幸にして嚴父他界するや其の家督を相續すると共に業務一切を引き受けて活腕を振ひ、爾來、終始一貫奮闘を以つて業勢を擧げ、今や東都に於ける海陸運送業界並に砂利採取販賣業界にあつて錚々の名あり、其の取引先は清水組、大倉組、大林組、竹中組等を始めとして多數の有力なる得意を有し、年商高實に五、六十萬圓に達し斯界の白眉を以つて目せらる。

夫人をかつ子と稱し東京府の人鈴木惣七氏の二女にして、其の間に長男行雄君を始めとして二男泰治君及び長女千枝子二女みき子、三女よし子等あり、現に東京市京橋區本材木町三ノ一五番地に住す。電話京橋二四九五番

### 今井眞平君

片倉製糸紡績會社常務取締役  
松本銀行事務取締役

君は長野縣の人今井五介氏の男にして明治十六年七月十五日を以つて生る。夙に本邦實業界に投じ、現に前掲の諸職にある外信濃鐵道株式會社事務取締役美篠商會(株)取締役社長及び松本電燈、中央電氣、富國火災、片倉江津製糸、片倉越後製糸、備作製糸、松本病院各株式會社重役として本邦財界に名あり。

長野縣諏訪平野村に住す。

### 石原正甫君

玉川自動車商會主  
東京自動車組合理事評議員

君は舊細川藩士石原正太氏の長男にして明治十一年十一月十八日を以て生る。明治廿九年米國に渡航し全卅二年歸朝後專修大學法學院に入學、全卅六年同學を卒業す。

斯くて、再び米國に航し直ちに南太平

洋鐵道株式會社に入社せしも後ち之を辭して獨力以つて千代田商會を設立し、雜

貨食料品の販賣に従事せしも、明治卅九年彼の有名なる桑港大震災の危に際會して異郷の地に於ける苦心慘憺の結晶たる全財産は惜くも一朝の夢と消え失せり。

然して、全年七月再興を計るべく歸朝せしが企劃全く失敗に歸し、空しく四十年再度渡米し、斯くてシヤトル市在株式會社アメリカ社長添口信助氏等と共に

日本貿易株式會社を設立、其の設立と共に同社取締役支配人に就任、在職二ヶ年余、能く内外の社務を執掌せしも再び獨立、爾來、農産物仲買業、ホテル業、エ

クイタグ生命保險日本總代理店、牧畜業等幾多事業會社を経営主宰す。斯くて、大正七年歸朝、翌八年職務整理の爲め又々渡米全年歸朝す、斯くして氏が太平洋を横斷せしこと實に十數回、最後に大正八年歸朝の際米國より自動車を買ひ求めて歸り、東都業界に活躍す、必ずや長き体験と豊藏する識見とは年な

らすして斯界に覇をなす期して待つべきなり。

大正九年澁谷町第四區々會議員に擧げられ、自治公共の爲めに盡瘁すること甚大、尙ほ自動車組合第十一區支部長の任にありしが、現時は全理事評議員たり。現に東京府下澁谷町上通り三ノ二番地に營業所を有す。電話青山五四〇〇番

### 市川純一君

三機工業株式會社監査役  
三井物産株式會社調査課長

君は千葉縣の人、明治八年九月九日を以つて同縣市原郡高瀧村に生る。明治二十八年慶應義塾を卒業するや直ちに三井物産株式會社に入社し、累進して現に同社調査課長たる外三機工業株式會社監査役たり。

趣味として美術を愛好し、乗馬に堪能なるが如し、現に東京府下中野町小瀧一五二〇番地に住す。電話四谷四四三九番

### 池田埤吾君

正六位 農學士  
辯護士 特許辨護士  
東京府農藝學校講師

曾つては本邦教育界に盡瘁して斯界に聲名を馳せ、今また東都法曹界に活躍して令名あるを我が池田埤吾君となす。君は廣島縣の人先代池田唯四郎氏の三男にして、明治二十年九月十二日を以つて生る。

當家は代々庄屋を勤めたる舊家にして當地方に於ける素封家を以つて知らる。君は廣島縣師範學校を卒業するや直ちに郷里の小學校に教鞭を執りしも、感ずるところありて東上し、明治四十二年帝國大學駒場農科大學に入り、大正元年同科を卒業するや大分縣師範學校教諭を拜命、而して大正六年再び東上、同大學農學部に入りて同八年卒業と同時に愛知縣立農學校教諭を拜命、爾來、同縣實業學校長、長野縣立更科農學校教頭等を歴勤し、曩に愛知縣在職中人口食糧問題に關

する帝大よりの懸賞論文提出せらるゝや君は之に應じて代用食及び節米等に關する一大論文を送るや、永井、佐伯、額田各醫學博士及び稻垣、横井、澤、吉川各農學博士等の審査の結果見事一等當選の榮譽を擔ひ、而して該論文は直ちに一般社會の賞讃を博し、曾つては東京女子高等師範學校より實地に應用せられて東京北海道、九州等の各博覽會に出品試食せられて一躍我が國人口食料問題に關する大家を以つて謳はれたり。

君尙ほ多數の著書あり、就中、農業教科書、農業科教師用參考書等ありて何れも各中等學校の教科書として使用せられ君の令名本邦教育界及び一般社會に喧々たり。尙ほ余暇を以つて農會雜誌、農業教育、産業組合、家の光、帝國農會、農業世界等の諸雜誌に寄稿するが如し。因に君は常に學徒の訓陶に心を砕き、君の芳志に依りて最高學府を出でし者多く、現に法政大學法科、明治大學政治學部等に通學するものありて後進を導くこ

と切、今や東部法曹界に令名あるのみならず前掲學校講師として知らる。學生當時は柔道、擊劍等の運動に耽り且つ農大當時ポートルヌの名選手として隅田川畔に聞え高かりきと云。夫人をサコ子と稱し廣島縣の人井上昌夫氏の令妹に當り、同縣立高女出身の才媛なり、現に東京市四谷區新宿一ノ八三番地に住し、電話四谷二七五二番なり。

石原義一君

日本銀行營業局勤務

君は正三位勳一等樞密顧問官として知らるゝ石原健三氏(同氏關蓋照)の長男にして、明治二十七年十二月十三日を以つて生る。大正八年慶應義塾大學理財科を優秀の成績を以つて卒業するや直ちに本邦實業界に投じ、日本銀行に入り、現に同行營業局にありて新進實業家の聞えあり。夫人富貴子は實業家大寶正鑒氏の二女にして、東京府立第一高等女學校の出身

石井泰助君

川崎市長

實業家

當家は神奈川縣下に於ける三百年來の舊家にして且つ資産家として聲望ある家柄なり。氏は先代泰助氏の長男にして、慶應元年五月を以つて川崎市に生れ、後ち家督を相續すると共に前名泰次郎を改めて先代を襲名す。夙に學業を卒ふるや川崎町制に盡瘁すること甚大、明治廿八年町民大多數の輿望を擔つて町長に推舉せられ、爾來、三十有余年孜々として、町政の改善發展に貢献すること甚大なり。斯くて大正十三年市制布かるゝや、當市會は全會一致を以つて市長に推し、昭和三年十月市長改選に際し再び推舉せら

れて其榮職を勝ち得て以て現在に及ぶ。曩に多年の功績に依り勅誼を忝し藍綬褒章を賜はる。尙ほ神奈川縣多額納稅者にして現に直接國稅一千九十余圓を納むるを以つて知らる。

夫人スミ子は神奈川縣の人本多庄作氏の令孫たり、現に神奈川縣川崎市東町一ノ一〇番地に住し電話川崎六番なり。

石田義雄君

ドクトル、オプ、フイロンファイ

理化學研究所主任研究員

君は島根縣の人故石田助治郎氏の長男にして、明治二十一年五月九日を以つて生る。夙に島根縣立第二中學校を卒業するや直ちに米國に渡航し、モルガンパークアカデミーに學び更に市俄古大學に入り、何れも優秀の成績を以つて卒業す。斯くて其の結果はバチエラー、オプ、サイエンスの學位を得、後ち同大物理

科の講師に擧げられ、大正五年ドクトルオプ、フイロンファイの學位を授けらる。然して、大正八年英國劍橋大學キャベンディッシュ實驗室に入りて研究すること一ケ年、更に伯林大學及びフランクフルト大學に於て研鑽を積み、大正十二年目出度く歸朝し、現に理化學研究所主任研究員として知らる。

夫人をギヤトルドと呼び獨逸人エマシヨア氏の長女、其の間に義夫君あり。現に東京市本郷區駒込上富士前町理研内に住す。電話小石川一七〇五番

磯部尙君

法學士 辯護士

衆議院議員

君は福井縣士族日比忠彦氏の令弟にして、明治八年十一月を以つて生れ後ち本邦學界の恩人法學博士磯部四郎氏の養嗣子となり其の家督を相續す。明治卅二年東京帝國大學法科大學を優秀の成績を以つて卒業するや直ちに東部

法曹界に投じ、一般法律事務に従事せしかば君の人格と其の博大なる識見とは相俟つて斯界に名聲を博し、今や我が國法曹界にあつて令名あり。君尙ほ斯業の傍ら常に政界に大志を抱き、其の政見亦超凡にして、曾つて大正六年東京市より立候補して白馬を陣頭に進めしかば大多數の得票を以て當選し、然して、大正十二年の總選舉に再び旗幟を宙天に翻へし、栗毛の馬に跨つて力ある政論を提げて對陣、斯くて強敵佐々木安五郎氏を向ふに廻して之を組伏せ、遂に榮ある再選の桂冠を獲得せり。

然して昭和三年日本政黨史上特筆すべき普選第一回の總選舉に同じく三選、今や日比谷政壇に令名高く、法曹界に將又議政府に其の貢獻するところ蓋し甚大、其の前途や計り知るべからず、曩に臨時大都市制度調査委員、特別都市計畫委員等を仰せ付けらる。夫人ツヤ子は養父故法學博士磯部四郎氏の長女にして其の間に秀夫君を始めと

して六女あり、現に東京市麻布區狸穴町四十番地に住す。電話青山一七〇番

### 池田 茂 幸 君

從四位勳四等 法學士  
國際汽船株式會社常任監査役

君は岡山縣土族池田和同氏の二男にして、明治十二年七月を以つて岡山縣高粱町に生る。

夙に第一高等學校を経て、明治三十七年東京帝國大學法科大學政治科を卒へるや、全年文官高等試験に合格し直ちに大藏省に職を奉ず。

爾來、專賣局理事、大阪地方專賣局長等を歴任し、後ち官途を辭して野に下り實業界に投じて敏腕を振ひ、現に國際汽船株式會社常任監査役として新日本財界に令名あり。

夫人壽々子は東京府の人鈴木亦吉氏の長女にして其の間に進君、務君及びみや子、トシ子、ミチ子等あり、現に東京市牛込區市ヶ谷谷町五十五番地に住す。電

話四谷四〇五二番

### 池田 勝 三 郎 君

從五位勳六等  
仙臺鐵道局經理課長

君は新潟縣の人池田虎治郎氏の四男にして、明治十八年十月を以つて生る。

明治四十三年東京帝國大學工科大学機械工學科を卒業するや、後ち更に同大學法科大學に學び、斯くて在學中即ち大正二年文官高等試験に應じて見事登第す。

然して、越えて翌三年同法科大學を卒業するや直ちに身を官途に投じ、爾來、鐵道院副參事、同參事、鐵道書記官等を經て以て現在に及ぶ。

夫人ヤズ子は新潟縣の人二宮順忠氏の七女にして君との間に康平君及びタイ子トシ子等あり、現に同局官舎に住す。

### 飯田 九州 雄 君

從五位勳六等 法學士  
大藏省主税局關稅課長

君は岡山縣の人飯田董氏の二男にして、明治二十年二月三日を以つて全縣眞庭郡落合町に生る。

夙に第二高等學校を経て大正十三年東京帝國大學法科大學を卒業するや官界に投じ、大藏省に入り理財局調査課、主計局等を歴補し全年直ちに文官高等試験に合格す。

然して後ち四國丸龜稅務署長、大阪南稅務署長等を歴任し、横濱稅關總務課長に就任、大正九年歐米各國に視察を命ぜられ、全十年歸朝昭和二年七月本省主稅局事務官、全八月關稅課長に就任し以つて現在に及ぶ。

夫人つや子は御茶ノ水高女專攻科の出身、其の間に長女富士子、二女絹子等あり、現に東京市外落合町下落合二九九番地に住す。電話牛込一四七〇番

### 石川 吉 郎 君

石川商店(株)取締役社長

君は東京府の人吳服太物商界に令名ありし故石川助五郎氏の二男にして、明治三十七年七月二十三日を以つて東京市日本橋區に生る。

夙に慶應義塾普通部を卒業し、更に大學部に入學せんとせしも、生來弱身の故を以つて遺憾ながら、鴻圖を轉じ、祖業たる太物商株式會社石川商店を繼承して同社社長に任じ、現に同社内外の社務を執掌する傍ら東京建物株式會社社員として我が新興財界に活躍、前途有爲の青年實業家として知らる。

趣味多く、就中ゴルフ、音樂、演劇等は其の最もなるものなり、現に東京市麴町區平河町五ノ十六番地に住す、電話九段二七五八番

### 市村 駒 之 助 君

市村寫眞製版印刷所主

君は長野縣の人市村常八氏の二男にして

て、明治廿三年五月十五日を以つて同縣小縣郡別所村に生る。明治卅八年青雲の志を抱いて東上し、初め日本新聞社に精勤せしも、後ち吉田東洋氏に就きて寫眞製版術を研究して蘊奥を極めたり。

斯くて日野製版所技師として聘せられ後ち東洋印刷株式會社に轉じ、同社製版課長たりしが、大正五年三月獨力以つて市村寫眞製版所を創立經營し、着々として斯界に覇を競ひしかば年と共に盛大に赴き、今や東都同業界に令名あり。

夫人茂子は東京府の人島徳四郎氏の長女にして共立女子職業學校を卒業し、其の間に静枝子、淑枝子、道枝子、八重子等あり、現に東京市神田區千代田町十四番地に住す。電話神田二二五三番

### 飯野 稟 雄 君

辯護士

君は群馬縣の名望家飯野峯太郎氏の長男にして、明治廿六年十二月一日を以つて生る。

夙に群馬縣立富岡中學校を卒業するや群馬縣廳に職を奉ずること四年有半、固より大志ある君は現職に甘んぜず、即ち決然辭し箕を負ふて上京す。

斯くて獨立獨行、専心勉學に力をいたし、逓信省經理課に職を奉じて學資の補給をなしつゝ、逓信官吏練習所を卒業、更に中央大學、日本大學各法科に學んで法律學の研鑽を積めり。

然して大正十年辯護士任用試験に應ずるや見事登第の榮譽を擔ひ、全十三年獨力以つて辯護士事務所を開設、今や日本法曹界の新進として令名あり。現に東京市外中野町の閑居に住す。

### 石川 正 七 君

石川合名會社社長  
大和屋シャツ(名)社長

君は神奈川縣の人石川清右衛門氏の長男にして、明治二十一年八月二十八日を以つて生る。

夙に學業を卒ふるや、横濱財界に投じ

て一大飛躍を試み、嚴父を援けて前掲諸  
會社を主宰經營して令名を馳せ、尙ほ傍  
ら相模川砂利工業株式會社取締役に  
新進實業家として知らる。

夫人ハナ子は東京府の人海邊録次郎氏  
の五女にして其の間に清一君、英二君、  
謙三君、四郎君、順吾君及び君子、房子  
俊子等あり、現に横濱市中區根岸町三二  
五七番地に住す。電話本局八二三番

### 石川 一郎君

大日本人造肥料(株)常務取締役  
日本硫酸株式會社常務取締役

君は東京府の人、明治十八年十一月五  
日を以つて生る。

明治四十二年東京帝國大學工科大学を  
卒業するや直ちに同大學助教に選任せ  
られしも、後ち東都實業界に投じ、關東  
酸曹株式會社取締役支配人として活躍し  
同社發展に貢献すること甚大なり。  
現時は前掲諸職の外化學鹽業株式會社  
専務取締役たる外日本硫黃、臺灣肥料。

大日本特許肥料、大正硫黃、硫酸販賣、  
化學陶器、關西硫酸販賣、神島人造肥料  
各株式會社の重役として知らる。

現に東京市外瀧野川町西ヶ原三五七番  
地に住す。電話小石川一七七番 王子  
一六番

### 石川清右衛門君

大和屋シャツ合名會社代表社員  
相模川砂利工業會社監査役

君は神奈川縣の中山治兵衛氏の二男  
にして、安政二年十一月を以つて生れ後  
ち先代清右衛門氏の養子となり、明治二  
十六年家督を相続すると共に前名文太郎  
を改めて襲名す。

夙に實業界に投じて活躍大いに努め、  
現に前記會社の要職にありて横濱財界  
に重きをなす。  
現に横濱市中區根岸町三二五七番地に  
住す。電話本局七一一番

### 磯江泰雄君

從五位勳六等 專賣局參事  
大藏省專賣局製造部管理課長

君は東京府の人、本邦教育界の恩人に  
して現に京華中學、商業、高等女學各學  
校長として令名ある磯江潤氏の長男にし  
て、明治二十三年五月十七日を以て生る

大正三年東京帝國大學法科大学英法科  
を卒業するや直ちに官途に投じ、爾來、  
大藏省專賣局書記官、大藏事務官、專賣  
局參事、大阪專賣支局事業課長、本省銀  
行局事務官、臺灣銀行監理官等を歴任以  
つて現在に及ぶ。

勞働問題並に勞働教育に關する研究家  
にして、趣味に旅行、登山あり。  
夫人武子は前宮内次官河村金五郎氏の  
二女にして女子學習院の出身、其の間に  
一男四女あり、現に東京市外瀧野川町上  
中里六二番地に住す。電話小石川七二八  
七番

### 伊原五郎兵衛君

實業家  
衆議院議員

君は長野縣の人先代伊原五郎兵衛氏の  
三男にして、明治十三年十月を以つて生れ  
後ち家督を相続すると共に前名恒次を改  
稱して襲名す。

明治三十九年東京帝國大學法科大学佛  
法科を卒業するや直ちに財界に投じ、現  
に六十三銀行、百十七銀行、中央電化工  
業、伊那電氣軌道、天龍川電力、蕉梧堂  
ホテル、飯田土地建物、諏訪電氣各株式  
會社の重役として知らる。

然して昭和三年二月日本政黨史上特筆  
すべき普選第一回の總選舉に際し馬を陣  
頭に進め、幾多強敵を打ち破つて見事當  
選し日比谷原頭に令名あり。

現に長野縣下伊那郡飯田町に住す。

### 井上安五郎君

相生無盡株式會社取締役  
越後屋經營者

君は東京府の人井上翠治郎氏の長男に  
して、明治六年六月を以て生る。

夙に東都實業界に投じ、越後屋と稱し  
吳服商を營みて斯界に聲名を馳せ、現に  
其の外前記會社の重役として知らる。  
現に東京市赤坂區青山北町六ノ三八番  
地に住す。

### 伊藤千三君

野村銀行東京支店長代理

君は三重縣の人服部千吉氏の二男にし  
て明治廿九年十月十日を以て生れ後ち同  
縣桑名の人伊藤家の養子となる。

大正八年神戸高等商業學校を卒業する  
や直ちに伊藤忠合名會社に入社し、大正  
十年野村銀行に轉じ、同行總務部長代理  
より全十五年十月神戸支店長代理に進み  
更に昭和三年同行東京支店長代理に榮進  
以て現在に及ぶ。

### 伊藤吉藏君

勳八等 豫備海軍一等機關兵  
マツタ自動車會主

趣味に野球、庭球等あり、社交に厚く  
銀行俱樂部、凌霜會各會員たり。  
夫人千代子は三重縣の人伊藤覺左衛門  
氏の令妹にして名古屋高等女學校の出身  
其の間に彰彦君、榮彦君及び亘子等あり  
東京市牛込區余丁町九二番地に住す。

今や東都自動車業界の恩人にして會つ  
ては帝國海軍として國防に盡瘁せる我が  
伊藤吉藏君は山口縣の産、明治二十一年  
五月十二日を以て吉富新七氏の三男に生  
れ後ち同縣の人伊藤峯次郎氏の養子と  
なる。

夙に郷里の小中學を卒ふるや海國民の  
意氣を示して海事に志し、船員として海  
外航路に二年有半を送り、後ち海軍志願  
兵として入隊、斯くて軍艦生活を送るこ  
と七ヶ年、偶々歐洲の天地戦戈と化し、  
日獨の開戦勃發するや君又征途に就き功

により勤八等を賜はる。

然して除隊するや直ちに上京、東京自動車學校に入りて自動車に關する學理と技術とを習得、後ち平和商會に入社して同社販賣部主任として敏腕を振ふこと二ヶ年、大正十年獨力マツタ自動車商會を設立して貨物自動車の保管並に貨物運輸業を營む傍らガソリンの販賣に専念し、今や東都業界に重きをなし、大正十五年以來引き続き東京自動車組合評議員兼副支部長として斯界に貢献すること甚大なり。

趣味多様にして就中圍碁、撞球に堪能なるが如し。

夫人マサ子は東京府の人伊藤峯次郎氏の長女にして其の間に正雄君あり、現に東京市芝區新錢座町十七番地に住す。電話芝五九五番

### 石川 亮三君

山一證券株式會社取締役

君は東京府の人石川節藏氏の長男にして、

明治二十四年十月二十九日を以て東京に生る。

夙に學業を卒ふるや本邦株式界に投じて活躍大いに努め、大正六年山一合資會社の創立と共に入社し累進して同社理事たりしが、同十五年十月組織變更せられて山一證券株式會社となるや推されて同社取締役擧げられ、現に同社内外に重きをなし新進の聞え高し。

夫人をいそ子と稱し靜岡縣の人島田保作氏の三女たり、東京市赤坂區傳馬町二ノ五番地に現住す。電話青山四〇六五番

### 井上 金作君

旭運自動車商會主

東京自動車組合評議員

君は神奈川県の人井上佐平次氏の二男にして、明治十五年十一月二十日を以て生る。

夙に郷校を卒へ更に東京府八王子市耕餘義塾に入りて漢學を學び、後ち祖業を繼ぎて絹糸貿易商を營めり。

大正十三年東京市牛込區に旭商會を設立經營、専ら貨物自動車運輸に従事せしも後ち改めて旭運輸自動車商會となし、今や東都同業界の白眉を以て目せらる。

先是君が絹糸業界にありし時其の店舗を八王子に置き、横濱斯業界の聲望家と取引をなし、同業界の成功者として目せられしも、彼の日獨戰役の頃不慮の失敗を招きし以來、自動車界に活躍せしものにして君が東都業界に覇を競はんとする蓋し多年の苦心慘憺よく之と戰つて憶せざる不撓不屈の精神と人格の然らしむるところと謂ふべきなり。

夫人シン子との間に三女あり、趣味又豊富、特に書畫を愛好し、義太夫はなか／＼以て奇々妙々なりといふ、現に東京市小石川區新諏訪町二番地に住す。電話小石川二三二二番

### 石澤 愛三君

日本自動車株式會社員

君は舊信州飯田藩の家老石澤鎌吾氏の

二男にして明治十一年八月を以て生る。

明治三十八年早稻田大學政治經濟科を卒業するや直ちに本邦實業界に投じ、活躍大いに努め、後ち八千代護謨株式會社取締役、日本自動車株式會社専務取締役等を歴任以て現在に及ぶ。

夫人美和子は埼玉縣の人松谷正兵衛氏の令孫にして其の間に夏郎君及び若葉子等あり、現に東京市小石川區關口臺町七四番地に住す。電話牛込四〇八六番

### 石井 衛太君

日本新聞聯合社支配人

本邦新聞通信界に活躍して絶えず新進の氣を吐き、其の健筆は常に社會人心を動かし、今や新興日本の健兒として知らるゝを我が石井衛太君其人となす。

君は長野縣の人石井與右衛門氏の長男にして、明治十八年八月二十七日を以て生る。

夙に鴻圖を抱いて上京、早稻田大學を卒業するやライオン齒磨を以て聞ゆる小

林商店に入り、次で神戸に赴きリバーブラザース會社に轉じて敏腕を振ひしも、期するありて再び上京、東京齒科醫學專門學校英語教授に聘せられ學徒の薫陶に當り、後ち本邦新聞通信界の權威帝國通信社に入り西歐の情報、極東の諸問題を彼我の間に速報して一大飛躍を試み、現時はこれを繼承せる日本新聞聯合社支配人の要職にありて、完全なるチャーナリストとして斯界に雷名を鳴らしつゝあり

夫人すみ子との間に三男二女あり、現に東京市外落合文化村通りに住す。電話牛込四八〇八番

### 石川 等君

日本カーボン(株)常務取締役兼技師長

東海蒸業株式會社取締役

君は長野縣の人石川豊助氏の令弟にして、明治十九年二月を以て生る。

明治四十三年東京工科大学の前身たる東京高等工業學校電氣化學科を卒業す。斯くて直ちに本邦實業界に投じ、現に

前掲諸會社の要職にある外大正電氣製煉所(株)取締役たり。

夫人つる子は岐阜縣の人九鬼勝己氏の令妹にして奈良女子高等師範學校の出身たり、現に横濱市神奈川區青木町一一三番地に住す。電話本局二〇九二番

### 石川 敬藏君

相模川砂利工業株式會社員

大和屋シャツ、石川各(合)業務執行社員

君は東京府の人宮崎直吉氏の令弟にして、明治十八年一月二日を以て生れ、同四十五年石川清右衛門氏の養子となる。

明治四十年東京商科大学の前身たる東京高等商業學校を卒業するや住友總本店に勤務せしも、後ち養父を援けて大和屋シャツ、石川各合名會社業務執行社員となり敏腕を振ふに至れり。

現時は前掲の外日本陶管株式會社監査役にして、且つ横濱商業會議所議員、同商業部副部長、日本輸出綿織物同業組合聯合會副組長、社團法人横濱貿易協合理



事、横濱市復興信用組合理事、横濱地方裁判所商事調停委員等の要職を兼任し横濱財界に令名あり。

夫人まさはは養父清右衛門氏の二女にして其の間に武義君、壽美子、由幾子等あり、現に東京市外入新井町新井宿一七八三番地に住す。電話大森一一九〇番

### 井上治兵衛君

三井物産株式會社取締役  
兼同社横濱支店長

君は京都府の人井上治兵衛氏の長男にして、明治六年六月を以て生れ、同十六年家督を相続すると共に襲名す。

明治二十四年京都市立商業學校を卒業するや翌年三井物産株式會社に入社し、爾來、上海、天津、倫敦、漢堡、神戸各支店長等を歴勤し、現に同社取締役兼横濱支店長たり、曩に横濱商業會議所特別議員に擧げらる。

夫人チカ子は大阪府の人田原マツ氏の二女にして其の間に進君及び千代子、千

恵子、治子、泰子等あり、現に横濱市神奈川區青木町一〇五六番地に住す。電話本局二〇七〇番

### 伊藤正徳君

時事新報社(株)取締役  
兼同社編輯次長

君は茨城縣士族伊藤傳氏の長男にして明治二十二年十月を以て生る。

大正二年慶應義塾理財科を卒業するや直ちに時事新報社に入社し、後同社特派員として久しく歐洲に滞在し、各國の政治及び經濟事情を研究報道して貢獻するところ甚大なり。

斯くて歸朝後は拔擢せられて同社の樞要の地位に參じ、現に同社取締役兼編輯次長として令名あり。

夫人あい子は東京府の人池谷善藏氏の三女にして其の間に正繼君あり、現に東京市外大井町金子六二二三番地に住す。電話大森一三二〇番

### 市島亀三郎君

小田製水株式會社取締役  
旭組映畫興業主

「現代人の精神は映畫であり、映畫は現代人の精神なり」と文化批判者は叫ぶげに映畫は現代人に取りて、必要かくべからざる心の糧にあらずして何ぞや。

坐ながらにして西洋文化の凡てに接し或は歴史物語を回顧する事を得、斯くて、映畫の使命たる重大なりと云はざるべからず。

君は旭組映畫興業主として、新宿武藏野館、溜池英館、牛込館等の三大映畫戲場に於て、西洋輸入映畫の高級物を上演しつゝあり、正に其の使命の重大と共に經營の努力、察するに餘りあり。

君は東京府の人市島小右衛門氏の男として、明治十九年六月を以て生れ、大正七年家督を相続す。

夙に旭組と稱し石炭商を營む傍ら、旭組映畫興業主として活躍する外小田製水株式會社取締役、帝都興業株式會社監査

### 井上二郎君

正八位 後備歩兵少尉  
三菱商事株式會社勤務

君は關西屈指の實業家として識らるゝ井上周氏の養嗣子にして明治三十年三月十五日を以て孤々の聲を擧ぐ、平賀敏氏の二男に當り夙に井上家の家籍に入りて其の姓を冒せり。

君は幼にして逸才、小學校を卒へ後ち天王寺中學校を出づるや東上して慶應義塾大學理財科に入學し大正九年之れを卒業せり。

斯くて直ちに三菱王國の人となり當初三菱商事會社本社總務課に勤務せるが次いで一年志願兵として近衛歩兵第二聯隊に入營す、除隊後同社雜貨部に轉じ同十二年同社シドニー支店に赴任、次いで同十四年七月大阪支店勤務となり現に洋毛掛に精勵格勤しつゝあり。

君は運動に趣味あり、就中、ラグビーに堪能にして在學當時より大いに令名を謳はる。

夫人芳子は相愛高等女學校出身の才媛にして其の間に文男君あり、現に大阪市住吉區住吉町九六〇番地に住す。電話戎一四番

### 泉道雄君

文學士 千代田女子專門學校長  
千代田高等女學校長

君は東本願寺派住職曾我道宣氏の二男にして、明治十一年八月十八日を以て山口縣厚邊郡吉田村に生れ後ち親戚に當る下ノ關市の泉含章氏の養子となる。

夙に山口高等學校を経て明治卅六年東京帝國大學文科大學哲學科を卒業するや直ちに芝高輪佛敎大學の教授に任じ、明治三十七年同校廢校となるまで宗教哲學の講義に盡力す。

明治卅八年一年志願兵として入營、除隊後芝中學校教諭となりて明治四十年麴町區中六番町千代田高等女學校の幹事となり、斯くて全校徒弟の敎養に盡力する處多年、大正六年全校々長に就任す。

役たり、曩に新宿武藏野館(株)の監査役たりしことあり。

夫人マツ子との間に敬造君及び靜子、チエ子、典子等あり。

現に東京市外淀橋角筈一番地に住し、電話四谷一八〇番たり。

### 池田靜三君

東京建物(株)貸付課主任

君は舊水戸藩士池田哲太郎氏の三男にして、明治二十六年一月十八日を以て生誕す。

夙に水戸中學校を経て大正八年慶應義塾大學理財科を優秀の成績を以て卒業するや直ちに三菱礦業株式會社に入社し、大正十一年七月東京建物株式會社に轉じ同社支那、漢口各出張所を経て大正十三年本社詰となり、昭和二年二月同社貸付課主任に推され以て現在に及ぶ。

水泳に長じ、社交に智恵の輪俱樂部あり、現に東京市本郷區駒込神明町五八番地に住す。電話小石川五二三八番

先生は人格高潔にして子女の師表として其の圓滿なる徳性を仰がれ、加ふるに「青年佛教講話集」「報恩主義」「日常生活と宗教」「家庭と宗教」「合掌の心」等の著作を以て天下の青年子女に教訓する處甚大、今や先生の教導は是れによつても永劫に不滅である。

大正十三年千代田専門學校の設置されるや全校長に就任し、千代田高等女學校長を兼ねぬ。

昭和四年二月京都高等女學校長淺倉氏大阪相愛高等女學校長大野氏と共に「昭和女子修身」を共著し、先生の斯界に於ける名聲益々高く、今や日本全國女學校約三千校に於て教科書として採用されている、尙ほ同年五月「心の平和」を著し先生の宗教哲學は全く確固である。

先生に趣味を叩けば、たち處に讀書と答ふ、先生の面目又躍如たりである。

夫人千代子は養父泉合章氏の女にして徳山高女の出身、現に麴町區三番町二六番地に住す。電話九段二七五〇番

### 今里情市君

東京鐵道機械製作所主

君は長崎縣土族先考文作氏の長男にして、明治十三年一月五日を以て同縣東彼杵郡早崎村に生誕す。

夙に郷校を卒業するや鴻圖を抱き笈を負ふて東上、明治三十二年築地工手學校の前身たる東京工學院土木科を優秀の成績を以て卒業す。

斯くて直ちに九州鐵道株式會社に入社して同社技師に任じ、明治四十年同社が國有に歸するや帝國鐵道廳職員を拜命、越えて翌四十一年辭して三村工場に轉じ同技師として敏腕を振ふに至れり。

然して大正八年二月獨立の機運熟するや獨力以て東京鐵道機械製作所を創設し専ら鐵道保安設備に關する聯動裝置信號機其の他の鐵道機械器具製作並に其の工事請負業に従事して着々商勢を張り今や東都同業界に重きをなし、鐵道省を始めとして各鐵道局指定工場等の重なる取引先を有し、職員職工百余人、年産高實に

四拾余萬圓に達し前途益々多望なるものあり、帝國鐵道協會會員たり。

夫人つた子は東京府〇人小山田徳治氏の令妹にして其の間に久君、多恵君あり現に麻布區本村町九十五番地に住す。電話高輪五七六四番 工場電話高輪三三三八番

### 飯田耕一君

大成化學工業株式會社事務取締役

君は長州の産、明治十一年十二月二十八日を以て山口縣豐浦郡小月村に於て孤々の聲を擧ぐ、先考故飯田豊氏は舊清末の藩士にして君は其の長男に生る。

夙に學を好み郷校を卒業するや縣立山口中學校に入り明治三十二年之れを出で直ちに笈を負ふて東上、東京高等工業學校に入學し機械科を専攻して同三十五年卒業せり。

斯くて吳海軍工廠造兵部に技師として奉職、同三十九年吉浦清家鑄製作所に轉じ同所工場長たり、次いで同四十二年大

### 飯島徳次君

飯島製作所經營者  
駒澤町會議員

阪本本鐵工株式會社技師となり後ち之れを退き臺灣斗六製糖株式會社に入社、同社工場長となる、次いで臺灣東洋製糖株式會社本社勤務兼斗六製糖所工場長技師に就任せり。

然して大正十四年八月大成化學工業株式會社常務取締役推され、現時同社専務取締役として社務の樞機を執掌し其の人格の敦厚と才腕と相俟つて噴々の令聞あり、君は曩に日露の役に出征、第十二師團に屬して戦功あり、又大正五年製糖事業視察の爲め渡米し同十三年歐米各國に航し具さに斯業界の實情を視察して歸朝す。

趣味に觀世流謠曲あり、夫人ハル子は山口縣の人故乃木精之氏の長女にして縣立山口高等女學校の出身、其の間に嘉雄君及び浪枝子、嘉代子等あり、現に東京市外小松川町四ノ八六番地に住す。電話墨田七八番

自動車修繕並に部分品販賣を營業とし、新時代に適應して益々業界に進出し以て漸次夙志を果さんとする吾が飯島徳次君は、少壯有爲寔に前途曠望するに足るの人、君は埼玉縣の産にして明治二十三年五月十七日を以て同縣比企郡中山村大字中山に於て生る。故飯島恵三郎氏の嫡男にして幼時既に慧敏、郷里の小學校を卒へ縣立川越中學校を経て後ち東上し當初外交官を志して東京外國語學校佛語科に入學、之を卒業後時勢の推移に鑑る

ところありて志面を轉じ更に早稻田大學に入學し、大正五年同大學政治經濟科を出づ。

斯くて君は直ちに東洋汽船株式會社に入社し同社長淺野總一郎氏の秘書役を勤務、同八年該社を退きて米國に航しコロンビヤ大學に入り政治經濟を専攻、同十一年迄其の學窓にありて大いに電勉する

君は前途幾春秋に富む年齒の壯、其の新進の銳氣もて事業に公務に努むるあらは寔に光彩ある將來を展開するに至らん乎刮目して待つべき也、君は平素高田早苗博士に私淑し同氏が提唱の新皇室中心主義に共鳴し之を以て日常の規矩準繩と爲せり、以て其の人と爲りを識るに足る

趣味頗る廣汎にして、就中、庭球を好み又自動車のドライブに巧みなり、夫人をさご子と呼び上野敬吉氏の女、夙に女子英學塾に學び後ちコロンビヤ大學を卒業せる才媛なり、東京市外駒澤町深澤九

番地に住し、工場及び店舗を同町上馬七八一番地に有す。電話世田ヶ谷六一〇番

### 石上林二郎君

富士製紙(株)山林部長

君は兵庫縣の出身たり、明治三十八年東京商科大学の前身たる東京高等商業學校を優秀の成績を以て卒業す。

斯くて直ちに本邦實業界に投じ、三井物産株式會社に入社し、爾來、同社大阪支店、ボンベイ支店、天津支店等の各輸出掛主任を歴任、大正四年富士製紙株式會社に轉じ同社秘書役に任じ、大正八年同社山林部長に擧げられ以て現在に及ぶ趣味多様にして讀書に耽り、園藝に長するが如し、社交に厚く如水會々員たり現に東京市赤坂區青山南町五ノ六十三番地に住す。電話青山一七二四番

### 猪飼宗逸君

大東工業株式會社秘書役

君は東京府の人猪飼宗九郎氏の長男に

して、明治十一年四月十日を以て生る。

夙に郁文館中學を卒業するや明治二十八年大望を抱いて渡米し、桑港に於てハイスクルに學び、尙ほコンマーシャルカレッジの商科を卒業するや、令弟と共に當地に於て貿易商を營めり。

斯くて明治三十七年歸朝し土木建築請負業新見商店に入りて支配人に就任、大正六年同店を辭して雜貨貿易業を獨立開業し、翌七年商品買入の爲め再度渡米翌年歸朝す。

更に大正九年貿易業を閉店し、尙ほ長崎縣南高來郡愛野村埋立事業に従事し傍ら當地に於て島原諫早間の乗合自動車業を經營せり。

大正十二年彼の震災直後上京し、翌十三年東京鋼鐵家具製作所に秘書役として入り、昭和三年二月大東工業株式會社と改稱創立さるゝや引續き秘書役の要職にあり。

趣味としては非常なる愛犬家であり、又徒然に將棋に妙なるが如し。

夫人を高子と呼び香蘭女學校出身にして東京府の人新見七之丞氏の息女、其の間に逸子あり、現に東京市外瀧野川町字瀧野川四二五番地に住す。

### 岩田勇君

旭藥品工業(株)取締役

中央畜産會理事

君は大分縣の産んだ財界の逸足にして大分縣士族岩田智人氏の長男に當り明治九年十月九日を以て生誕す。

夙に學業を卒ふるや本邦畜産業の不振なるに鑑み、これが改善發展に志し、斯業の爲め盡瘁すること久しく、今や中央畜産協會理事たる外旭藥品工業株式會社重役として令名あり、同氣俱樂部會員たり。

夫人ふみ子は大分縣士族故陶山直良氏の二女にして其の間に太郎君、秀君及び綾子、よし江子等あり、現に東京市外杉並高圓寺町二九番地に住す。電話四谷五二七番 事務所東洋ビル内電話銀座二五

### 三五番 四五一九番

### 石井信太郎君

石川島自動車製作所(株)自動車工場

同工作課々長

交通運輸上に現代必須の一大機關たる自動車の供給は本邦未だ之れを多く海外に仰ぐ現状なるが、夙に純國産の製作に着手し現時舶來品に劣らざる優秀車を製出して噴々の好評ある石川島自動車製作所の「スミダ」號も、源を遡れば即ち之吾が石井信太郎君が該博なる蘊蓄を傾倒し以て幾多の技師職工を督して成れる結晶ならざる無し。

君は明治十五年十月三十日横須賀市に於て生る。嚴父は故石井久藏氏にして其の令嗣たり、然して明治廿八年の往時年齒未だ十有余歳の若冠にして横須賀造船所に入り、同三十二年四月其の徒弟の課程を修業せり。

斯くて同年直ちに石川島造船所浦賀分工場に入りしが、同三十四年十二月北米

に派され桑港ユニオン造船所に於て船用機關の製作に就き其の實際的研鑽を積むの傍ら勉學に努むるところあり、主として形而下的修練の琢磨に所謂螢雪の勞苦を経て歸朝せるは同三十九年五月、而して歸來須臾にして徵兵に應じ赤羽工兵第一大隊に入營せり。

次いで除隊後明治四十二年十月再び石川島造船所に復し、同社工場に於て船用機關及び電氣蒸氣兩起重機の製作に従事し大いに在米當時の研鑽を須いて精勵しつゝありしが、偶々同社が國產自動車製作に着手せんとするの機運に會し先づ以て君を歐米に特派せしめたり、時維れ大正七年十二月にして歐洲大亂戰禍の余波未だ盛んなるの時、君は米國を経て歐洲各國に渡りしが主として英國に駐り製鐵並に自動車の各會社工場を巡りて具さに該製作事業を視察して歸朝せり。

斯くて大正九年同社自動車工場の設立成るや其の工作課々長に擧げられ、爾來多年に亘る實際的經驗の豊富なる蘊蓄を

傾倒し以て多數の職工に伍し孜々乎として勉勵せざるの努力を續け然り而して現に其の職にあり、「スミダ」號が頼に其の聲價を博し國産品として優秀なる折紙を附せられて斯界に認識さるゝに至りし所以の寔に石井信太郎君の貢獻に負ふところ多大なりと謂はざるを得ず、君は人物極めて篤厚、加ふるに如上屢説の超凡の技腕あり、蓋し數多の技師職工に令聞噴々として信望ある洵に故なきに非ず。

夫人はる子は横須賀市の人故石綿傳次郎氏の二女にして其の間に英男君、正男君、辰男君及び静子、芳子等あり、現に東京市赤坂區青山南町三ノ六番地に住す 電話青山二六八八番

### 市川準一君

山一證券(株)取締役

君は長野縣の人故市川量造氏の長男にして、明治十七年八月二十日を以て同縣松本市に生る。

夙に實業界に投じ、横濱に於ける金融

界の重鎮七十四銀行に入りて敏腕を振ひ同四十三年同行を辭し、大正三年小池合資會社に入り同六年四月山一合資會社に轉じ、大正十三年理事に進み公債部主任を兼ね同十五年十月山一證券株式會社創立と共に同社取締役に推され以て現在に及ぶ。

趣味に園藝、謠曲あり、何れも素人の域を脱すといふ。

夫人千代子は長野縣の人福澤定治郎氏の三女にして長野縣立高等女學校の出身其の間に興一君及び澄子、かつ子等あり現に東京府荏原郡池上町總持四八六番地に住す。

### 岩佐 祿 郎 君

從五位勳三等功五級 陸軍憲兵大佐  
大阪憲兵隊長

君は明治十二年四月新潟縣中頸城郡新井町に於て生誕す。故岩佐彦十郎氏の六男にして幼時より三軍を叱咤する國家の干城たらんと欲し中學校を卒へるや直ち

に陸軍士官學校に入り師兵の學を修む。

而して明治三十七年同校を卒業し同年騎兵少尉に任官するや間もなく彼の日露戰役に出征、大いに武功ありて功五級を賜はり、凱旋後陸軍騎兵實施學校に入り同校戰術科に學びて之を卒へるや兵科を轉じ大正元年憲兵中尉に任せらる、次いで大正三年憲兵練習所を卒業し後ち累進して同十四年八月憲兵大佐に任官、現時大阪憲兵隊長として令名あり。

此の間大正十年西伯利亞に同十二年サレンに派遣せられて各々視察を爲すところあり、亦同六年及び同十四年憲兵司令部にありて高級副官たりしことあり。

君は讀書に趣味を有す、夫人きよ子は新潟縣の人細貝鐵太郎氏の息女にして高田高等女學校の出身、其の間に憲次君及び縁子、龍子等あり、現に大阪市北區相生町四九番地に住す。電話東五一五番

### 一戸 雄 三 君

法學士  
不動貯金銀行横濱支店長

君は青森縣の人故一戸利三郎氏の二男として、明治十九年十一月十二日を以て同縣弘前市に於て生れ、大正七年分家して一家を創立す。

夙に第二高等學校を経て明治四十四年京都帝國大學法科大學獨法科を卒業するや直ちに樺太廳屬官として奉職せしも、大正三年官を辭し不動貯金銀行に入り、神戸支店副支配人に就任、爾來、佐賀、函館、長崎、神戸各支店長を歴任して現時横濱支店長たり。

趣味として旅行を好み、又園藝も好くすといふ。

夫人をいせ子と呼び小樽女學校の出身にして君との間に龍郎君、龍二君、哲巳君及び禮子あり、横濱市青木町松本一五九二番地に現住す。電話本局五二七七番

### 岩 村 八 郎 君

大日本酒類醸造(株)東京出張所長

君は愛媛縣の人故岩村順作氏の八男にして、明治二十四年十一月二十九日を以て生る。

夙に郷里の中學校を卒へて大正五年鈴木商店下關支店に入り米肥部並に酒類部係となり、大正十年大阪支店及び名古屋支店酒類部主任を兼任す。

斯くて大正十四年同店酒類部の大日本酒類醸造株式會社に併合するや同社名古屋出張所主任に擧げられ、昭和三年四月東京出張所長に拔擢以て現在に及ぶ。

趣味に野球、庭球等あり、夫人を文子と呼び大阪夕陽ヶ丘高女の出身にして其の間に登美子あり、東京府下中野町一六一九番地に現住す。事務所を丸ノ内八重洲ビル内に有す。電話丸ノ内二六三一番

### 井 上 武 一 君

井上護謨製作所長

君は山梨縣南北都留郡に於ける屈指の

素封家として知らるゝ井上武右衛門氏の長男にして、明治十八年三月二十三日を以て生る。

夙に鴻圖を抱いて上京、正則中學校を卒業し、後ち米國に航して滞在すること約三ヶ年、歸朝後英國法人たる生命保險會社日本總支店に入りて同社總務部長として敏腕を振ひぬ。

斯くて大正十年同社を辭して獨力井上護謨製作所を開設し、ルーデサク類及び氷袋、直付乳首、母乳型哺乳器其の他醫療用薄層ゴム製品一式の製造に従事せしかば業運頓に擧り、今や東都斯界に令名あり。

夫人尊子は福島縣の人河野廣中氏の長女たり、現に東京府下南千住町一丁目八十九番地に製作所を有す。電話淺草四七九三番

### 井 本 常 作 君

衆議院議員 司法參事官

君は群馬縣の人井本孫市氏の二男にし

て、明治十三年四月を以て生る。

明治三十五年明治大學法科を卒業す、斯くて司法官候補たりしが後ち退官、辯護士を開業、大正十三年以來衆議院議員として中央政界に重きをなし、昭和四年六月濱口内閣成るや其の司法參事官に任命以て現在に及ぶ。

現に東京市本郷區湯島天神町一ノ十番地に住す。電話下谷二七〇四番

### 今 田 光 信 君

精行社  
護謨工業所主

君は岡山縣の人岡崎賢一氏の男にして明治廿八年一月一日を以て同縣邑久郡太伯村に生誕す。

嚴父賢一氏は夙に特許ゴム下駄製作を創始し、長こくも宮内省より御買上の榮に浴して斯界に令名を馳せし人物にて、君其の事業を繼承して益々盛大ならしめ今や廣大なる工場を擁し、使用男女の數數十人を以て着々として斯界に一大勢力

を波及し、年商高實に二十萬圓に達せんとするの盛況にあり、而も尙ほ最近泥除器の發明をなし、一度是が特許せらるゝに於ては一躍斯界に雷名を鳴らすも又遠からざるべく、君の前途多望なりといふべし。

夫人をサツノ子と呼び寺澤捨吉氏の長女にして其の間に一夫君、隆吉君及び智恵子等あり、現に東京市外下目黒七〇番地に住し、工場を大崎町桐ヶ谷六三〇番地に有す。電話高輪三四四番

### 岩切重雄君

從五位 衆議院議員  
商工參與官

君は鹿兒縣士族岩切仲二氏の長男にして、明治二十一年一月を以て生る。

大正三年東京帝國大學法科大學政治科を卒業す、斯くて官途に投じ、鳥取縣警視、鹿兒島市助役、大藏大臣秘書官等を歴任、大正九年以來衆議院議員として中央政界に鳴らし、昭和四年六月濱口内閣

成るや其の商工參與官に任じ以て現在に及ぶ。

現に東京市麻布區材木町二五番地に住す。電話青山五八六五番

### 今園國貞君

男爵 正四位 文學士  
貴族院議員

當家は舊公卿家にして藤原鎌足の後裔勤修寺光豊の支流芝山國典の二男國映氏の立つる所なり。

國映氏は初め南都興福寺の僧となり同寺中賢聖院の住職たりき、明治元年勅命により復飾し堂上の格を賜ひ姓を今園と稱し、全八年特旨を以て華族に列し同十七年男爵を授けらる。

君は其の長男にして、明治十五年七月を以て生れ、同二十六年襲爵仰せ付けらる。

夙に學習院を経て明治四十五年東京帝國大學文科大學國文科を卒業し、現時貴族院議員として議政府に列し國制に參劃

するの外日本大學教授として令名あり。夫人とき子は東京府の人岩倉直麿氏の息女にして其の間に國光君、國建君及び房子、登由子あり、現に東京市外上落合六七一番地に住す。電話牛込二三五番

### 伊江朝助君

男爵 從四位  
貴族院議員

當家は舊琉球王尚瀨氏の四男朝直氏より出づ、其の子朝永氏後を享け明治十二年特旨を以て華族に列し、同十四年舊稱尙健を改めて伊江朝江と稱し同二十三年男爵を授けらる。

君は先代朝眞氏の長男にして、明治十四年十月を以て生れ後ち襲爵仰せ付けらる、明治四十年早稻田大學政治經濟科を卒業し、曩に沖繩農工銀行取締役、沖繩民報社長、沖繩縣會議長等に擧げられ、大正十四年貴族院議員に當選し現に其の任にあり。

夫人キチ子は大分縣の人加來金升氏の

### 猪股淇清君

法學博士 辯護士  
明治大學講師 東京辯護士會長

君は山梨縣の人猪股清五郎氏の長男にして、明治十六年三月を以て生る。

明治三十六年明治大學法科を卒業するや直ちに辯護士登用試験に登第、法律事務所を開設す。

然して大正十年司法大臣より破産管財人を命ぜられ同年農商務大臣より辨理士會設立委員に選任され、大正十二年法學博士の學位を授けられ昭和二年司法大臣より強制執行並に競賣に關する法律改正調査委員を命ぜらる。

現に東都法曹界に活躍して令名あるのみならず、明治大學講師たり。

夫人高吉子は山梨縣の人向井定七氏の二女にして其の間に清君あり、現に東京市外杉並町高圓寺五四七番地に住す。電話中野二六二番

### 井田亦吉君

天滿織物株式會社事務取締役

君は滋賀縣の人辻亦兵衛氏の長男にして、萬延元年九月を以て生る。

夙に實業界に投じ、現に前記の外大日本鹽業、帝國汽船、東京毛織、南滿洲汽船、日本商業、佐賀紡績、大日本自動車保險各株式會社の重役たり。

現に京都市上京區聖護院東町十六番地に住す。電話上三一八一番

### 生田定之君

昭和銀行頭取

君は高知縣士族生田保之氏の長男にして、明治三年六月廿二日を以て生る。

明治卅二年慶應義塾大學を卒業し、後ち米國に留學し、歸朝後日本銀行に入り同行検査役、調査役、小樽支店長、國庫局長等を歴任す。

然して同行を辭し東京府農工銀行頭取に任じ、更に昭和銀行設立せらるゝや推されて同行頭取に任じ以て現在に及ぶ。

令妹にして其の間に朝健君及び顯子、鶴子、正子等あり、現に東京市小石川區第六天町四十一番地に住す。

### 猪飼九兵衛君

壽生命保險(株)事務取締役  
大阪實業銀行取締役

君は大阪府の人猪飼徳兵衛氏の長男にして、明治十五年四月を以て生れ、後ち先代九兵衛氏の養嗣子となり、同三十五年家督を相続すると共に前名九十郎を改めて襲名す。

夙に實業界に投じ、現時前掲諸要職にある外箕面土地、攝津信託、丸赤醬油、日清火災海上保險、岸本商會、根津貯蓄銀行各株式會社の重役として令名あり。

夫人トク子は大坂府の人豊田治兵衛氏の養妹にして其の間に永太郎君、釣之助君、和夫君及び本子等あり、現に大阪市西區江戸堀北通一ノ三二番地に住す。電話土佐堀一三七六番

東京銀行集會所理事、手形交換所委員にして交詢社、日本俱樂部、東京俱樂部各會員たり。

夫人繁代子は岡山縣士族高吉邦士氏の長女にして大阪梅花高等女學校の出身、其の間に一之君あり、新進經濟學士にして現に三井銀行在勤中なり、現に東京市牛込區加賀町二ノ十四番地に住す。電話牛込一六八九番

### 石塚彦輔君

横濱工業株式會社社長

大正製作所(株)社長

君は新潟縣の人石塚徳兵衛氏の三男にして、慶應三年十二月を以て生る。

夙に實業界に投じ、現に前記の外日本香料株式會社社長にして、且つ横濱帆布株式會社専務取締役、メトロ電球株式會社取締役たり。

夫人ヒロ子は神奈川縣の人佐久間權藏氏の令妹たり、現に神奈川縣青木町一一四〇番地に住す。電話本局九〇五番

### 生田潔君

昭和肥料(株)取締役

東京電燈(株)理事總務次長

君は熊本縣士族生田剛氏の長男にして明治六年六月二日を以て生る。

明治三十四年東京文理科大学の前身たる東京高等師範學校理科を卒業するや千葉縣大多喜中學校教諭に任じ、同三十八年支那湖南省より聘せられて同省高等師範學堂教習となる。

斯くて明治四十一年五月教育界を辭して東京電燈株式會社に入り同社調査係長に任じ、爾來、累進して大正十五年十二月總務部次長に擧げられ現に同社理事總務部次長兼會計課長たる外昭和肥料、吾妻川電力、第二吾妻川電力各株式會社取締役として知らる。

趣味に讀書あり、社交に厚く電氣俱樂部會員たり。現に東京市外中野打越一九六六番地に住す。電話四谷四五三番

### 磯江潤君

京華中學、女學各校長

京華商業學校長

夙に本邦教育界に活躍して、幾多學徒の薰陶に盡瘁し、其の超凡の識見と稀代の仁徳とを以て終始し、今や新興日本教育界の恩人として令名隠れなきを我が磯江潤君となす。

君は鳥取縣の人故磯江清氏の三男にして慶應二年十月を以て生誕す、夙に郷里に於て初等教育を卒へるや京都に出で、有名なる某家塾に入りて漢文及び英語を修得、更に大分縣中津に赴く、明治初年に於ける豊前の地は全國を通じて名高き學術隆昌の國にして就中廣瀬淡窓先生の居住する日田町に尋いで中津の町は同國內に於ける最も學者高儒の多き地なりしが故に全國の志ある青年は競ふて同町に群集せる程にて、現代の傑物清浦圭吾翁の如きも壯年時代は廣瀬先生の門下あり、後年大成の基礎を築きたりといふ。斯くして我が磯江校長も漸やく中津に

### 市川榮一君

三井物産(株)木材部横濱工場長

君は東京府の人先考市川藤兵衛氏の長男にして、明治二十年一月十八日を以て生る。

明治三十八年京華商業學校を卒業するや直ちに三井物産株式會社に入社し、爾來、同社札幌、小樽各出張所等を歴勤し大正十四年本社營業部木材掛主任に擧げられ、更に昭和三年十一月同社木材部横濱工場長に榮轉以て現在に及ぶ。

趣味に寫真藝術、讀書あり、尙ほ謠曲は其の道の達人とまで評せらる。

夫人もと子は京都府の人増井淺七氏の三女にして其の間に貞一君、浩治君及び壽満子あり、現に神奈川縣鳥越一九二四番地に住す。

### 石川誠一君

帝國海上火災保險(株)地方課長

君は東京府の人先考石川直術氏の三男にして、明治二十二年七月七日を以て生

誕す。

夙に學業を卒ふるや東都實業界に投じ明治四十一年帝國海上火災保險株式會社に入社し、爾來、同社貨物課主任、船舶課長等を歴補し、昭和二年五月地方課長に推され以て現在に及ぶ。

趣味に讀書あり、旅行を愛好するが如し、夫人を壽子と呼び其の間に勗君及び千恵子あり、現に神奈川縣鎌倉町大町一一二〇番地に住す。電話四六二番

### 池島三省君

實業家

君は東京府の人鶴森龜藏氏の叔父にして、明治三年八月を以て生れ、後ち先代半藏氏の養子となる。

夙に實業界に投じ、現に日本鑛業、日本鉛板、南千住製作所、東洋黒鉛滿備各株式會社取締役にして、且つ黒板工業所東京電氣製鍊所各株式會社監査役、日本鑛鋼株式會社常任監査役たり。東京市牛込區矢來町十四番地に住す。

於ける修學を終つて帝都に出で、たまたま自由民權論の盛なりし時とて君も又同志と共に政治界、思想界に活躍するところあり、後ち實業事業に志を抱き教育界の研究に専念し、間もなく成立學舎に入りて英語教授となり後ち哲學館(現時の東洋大學)に轉じて英語の教授となり、更に同館の幹事を兼ねたり。

然して明治三十年獨力京華中學校を開設し(京華の二字は清浦翁によつて命名せらる)更に同三十五年京華商業學校、同四十三年京華女學校等を創立して、爾來、全力を我が國教育界に提げて今や校門を出でて實社會に活躍するもの幾萬を算し學窓に親しむ男女の數實に數千人に及ぶ偉觀を示せり。

君は教育に關する著作を能くし、現に應用教育學、教授學、倫理學等の名著あり、現に東京市小石川區原町一四番地に住す。電話小石川三六〇番

### 伊東三郎君

書籍取次業

自強館主

君は長野縣の人伊東萬太郎氏の三男にして、明治二十七年九月四日を以て同縣上伊那郡藤澤村に生誕す。

夙に郷校を卒ふるや鴻志を抱いて笈を東都に負ひ、大倉高等商業學校を卒業するや尙文堂書籍店に勤務せり。

斯くて大正六年獨力自強館を開設して内外書籍の取次販賣業並に圖書出版業を營み、着々として斯界に進出、今や府立第一高女、大倉商業、其他日本勸業銀行、横濱正金銀行及び都下一流銀行會社等を得意先として確固たる地盤を有し、前途益々多望なるものあり。

政治に對して趣味深く、且つ公共的事業に盡瘁して功あり、現時神田區錦町會幹事たり。

夫人その子は星大吉氏の二女にして宮城縣立高女の出身、其の間に敏雄君、和夫君及び孝子あり。現に東京市神田區錦町一ノ一二番地に住す。電話神田四〇三七番

### 伊勢喜之助君

正五位勳三等功五級

日本製鋼所(株)職員

君は宮城縣の人にして明治六年十二月四日を以て同縣仙台市元柳町六十四番地に於て生誕、嚴父は舊仙台藩士故伊勢源吉氏にして其次男に當る。

夙に軍官に志し成城中學校を卒ふるや陸軍士官學校に入學、明治二十七年之れを卒業し後陸軍砲兵少尉に任官す、然して爾來累進して大正五年陸軍砲兵大佐に陞り同八年一月豫備役に編入さる。

斯くて直ちに實業界の人と爲り同年同月株式會社日本製鋼所に入社し室蘭製鋼所に勤務しつゝありしが、同十三年本社に轉じ現に同社に在りて社業進展に盡すところ尠らず。

君は此間日清、日露、日獨の三大戰役に出征して功あり、功五級を賜る、又曩

に軍事視察の爲め陸軍省より派遣されて歐米各國を巡歴せしことあり。

趣味として觀世流及び實生流謠曲を好み、家庭には壽次子夫人あり、同郷の人故鹽澤清廉氏の女にして夙に温淑の聞えあり其の間に靜止君、梅子、律子を擁して清福なる一家を成せり。

現に東京市外世田ヶ谷町代田六四〇番地に住す。電話世田谷三六九番

### 猪野幸吉君

早川ビルブローカー銀行支配人

中央商業(株)監査役

君は茨城縣結城郡山川村の出身、明治十六年一月十五日を以て出生す、嚴父を猪野爲三郎氏となし其二男たり。

夙に郷校を卒ふるや笈を帝都に負ひ慶應義塾大學に學びしも後ち中央大學に轉じ、同學經濟學部を卒業す。

斯くて東海銀行に入り、格勤十有餘年常に樞機に參劃せしも大正九年早川ビルブローカー銀行に轉じ、同行證券部長よ

り支配人に推され、本邦金融界に活躍すること二十有餘年、其の蘊蓄するところ甚大、蓋し君が今日同行支配人として内外に令名高き以所ならん哉。

現に其の外中央商事株式會社監査役たり、趣味に謠曲、魚釣あり。千代子夫人は府立第二高女の出身、其の間に達郎君和郎君及び敬子、敏子、泰子、明子あり。現に牛込區袋町二四番地に住す。電話牛込四六七四番

### 石原晋太郎君

合資會社泉製作所代表社員

君は明治十六年八月四日を以て生る、故石原豐貫氏の男にして、夙に獨逸協會中學校に學び、後ち學習院を経て帝國大學法科大學に入り獨法科を専攻して同四十二年之れを卒業せり。

斯くて直ちに實業界に入り當初富士生命保險株式會社に勤務し次いで日本電燈株式會社に轉せるが、大正五年村井本店鑛業部に入り後ち若松出張所長に推さる

然して大正七年より三益商會支配人を兼務せしが後ち之れを辭して合資會社泉製作所に入り、同社代表社員となり現に其任にありて社務一切を統率し傍ら日本電飾株式會社取締役たり、此間輸出水産株式會社監査役、株式會社山神組取締役に擧げられしことあり。

抑々泉製作所は明治四十四年十一月の設立にして船舶車輛用品製造を其業務目的となし、東京を本工場とし大正十二年名古屋に又昭和四年大阪に各分工場を設けし、鐵道省を始め各私設鐵道會社、車輛會社等全國的に得意先を有せり。

君に社務遂行上の方針を叩けば「製品の優良を期して堅實を本旨と爲す」と、宜なる哉事業は遂次順調に開展し君のこの方針は如實に社績に顯現しつゝあるを君は人と爲り寔に篤厚なりと雖衷心に烈々の氣魄を湛え、現下の混沌たる世態より國を憂ふるの至誠は凝つて君の所謂日本精神主義鼓吹となる蓋し其識見は人格と相俟つて吾人の推服禁せざる所以也

### 猪股謙吉君

山中電氣商會主

君は新潟縣西蒲原縣赤塚村の出身、明治卅一年八月卅一日を以て出生、嚴父を猪股玉三郎氏となし其の長男たり。

夙に郷校を卒ふるや笈を東都に負ひて研鑽大いに努め斯くて電機學校を卒業し大正七年アスベスト株式會社に入り、大正十三年山中電氣商會に轉じて敏腕を振ひ、昭和三年八月全商會を引繼ぎて經營の衝に當り以つて現在に及ぶ。

趣味に寫真藝術、スポーツあり、ちよ子夫人は内助の聞えあり。現に東京市外在原町戸越二九四番地に住す。

### 井上房太郎君

國際通運(株)整理課長

君は東京府の出身にして、明治二十一年十月十日を以て生誕す。夙に學業を卒ふるや實業界に投じ、大正五年國際通運株式會社に入社し、大正八年明治運送株式會社に轉じ、同社神田支店長に任ず。

斯くて大正十三年六月再び國際運送株式會社に轉じて同社整理課長に擧げられ大合同の結果國際通運株式會社設立せらるゝや同社整理課長に推されて現在に及ぶ、曩に「貨物運送に關する」著書を公にせしことあり。

夫人まさ子との間に二男二女あり。現に東京府下蒲田町女塚二二四番地に住す

### 稻垣平太郎君

富士電機製造(株)東京販賣店長

君は岡山縣の人稻垣周吉氏の長男にして、明治二十二年四月四日を以て岡山市に生誕す。

夙に郷校を卒ふるや笈を東都に負ひ、

大正二年慶應義塾大學理財科を優秀の成績を以て卒業するや直ちに古河合名會社

營業部に入り、大正六年視察研究の目的を以つて米、佛、獨、伊各國に出張を命ぜられ滞留三ヶ年にして大正九年造詣を深くして歸朝す。

斯くて大正十二年富士電機製造株式會社創立せらるゝや同社に入り現に同社東京販賣店長として令名あり。

ふみ子夫人は弘前高等女學校の出身、其の間に玄一君、公一君及び妙子あり。現に東京市赤坂區青南町三ノ五五番地に住す。電話青山三五六一番

### 石黒忠篤君

正四位勳三等

農林省獸系局長

君は樞密顧問官陸軍々醫總監子爵石黒忠惠氏の長男にして明治十七年一月九日を以つて生る。

夙に第七高等學校を経て明治四十一年東京帝國大學法科大學獨法科を卒業する

や同年直ちに文官高等試験に合格し、同

四十二年農商務事務官に任じ、爾來山林事務官兼農商務書記官、農商務事務官兼書記官、同參事官等を経て大正八年專任農商務書記官、次で農林書記官に任じ、副業課長、農政課長、小作課長、農林省農務局長に歴任す。

昭和二年五月蠶絲局長に任ぜられ以つて今日に至る。

先是大正三年休職、歐米に旅行を許可せられ同四年歸朝す。

夫人光子は男爵穂積重遠氏の令妹たり現に東京市牛込區揚場町十七番地に住す電話牛込四九一番

### 濱田國松君

勳三等 辯護士

衆議院議員 司法政務次官

君は三重縣の人山村棋香君の二男にして、明治元年三月を以つて宇治山田市に生る。夙に三重縣師範學校を卒業するや直ちに地方教育界に投ぜしが固より一教

職に甘んずる器にあらず、即ち大志を抱いて東上し、中央大學の前身たる東京法學院に學び、研鑽琢磨、同學を卒業するや辯護士試験に登第し、後ち歸郷して辯護士を開業す。

爾來辯護士たる傍ら町會議員、郡會議員に擧げられ公共的事業に貢獻すること甚大、又臨時教育行政調査會委員仰せ付けられ、且つ地方財界にありて專業會社に關係し現に神部瓦斯會社取締役たり。

曾つて歐米及び支那朝鮮を視察し、衆議院議員に當選すること前後七回、曩に衆議院議長に推され、其の政治的生命は常に犬養木堂翁と終始し且つ見識の精確にして卓絶せるにあり、從つて君一度政

界に入るや革新俱樂部にありて首領犬養

木堂翁を佐け、今や犬養翁の隱退により君も去りて政友會に屬し、永く同黨總務の重職を勤め、たま／＼昭和二年四月月中内閣成るや其の司法政務次官に擧げられ以つて現在に及ぶ。

夫人かね子は三重縣の人山本代造君の二女たり、現に本邸を宇治山田市岡本に有し、別邸を東京市芝區西久保町櫻川町四番地に有し電話青山六〇三二番なり。

### 葉住利藏君

群馬縣貯蓄銀行頭取

君は群馬縣の人葉住利右衛門君の長男にして、彼の新田義貞、高山彦九郎等を出だし、吞龍上人を其の地に駐めたる新田郡太田町に生る。幼にして穎悟、夙に郷校を卒ふるや笈を負ふて郷關を飛び出し、横濱商業學校に入り同校を卒業するや直ちに實業界に投ず。

爾來縣會議員、衆議院議員に當選すること數回、而も後進の誘掖に厚く且つ地

方政界の巨星を以つて目せられ、而して銀行經營に獨特の技術を示し、當地金融界に貢獻すること甚大なり。

曾つて利根川流域の水利を開發すべく利根發電會社を起し、後ち東京電燈會社と合併するや入りて取締役となり、又中島飛行機製作所を同地に建設するに方つてこれに盡力し、現に群馬縣銀行協會々長、群馬縣貯蓄銀行頭取、東京電燈、吾妻川水力電氣、東武鐵道、群馬縣農工銀行、上毛實業銀行、上毛擔糸各株式會社の重役として知らる。

大正十一年には私財を投じて金山圖書館を建設し自ら館長として文化に寄與すること甚大、其の設立費拾餘萬圓、藏書實に三萬六千冊に上るといふ、翌年戦後の歐米を視察し歸朝後國粹鼓吹の急先鋒となりて盡瘁せり、曩に國家に功勞大なるの故を以つて特に勳四等に叙せらる。

君は極めて熱情に富み快談縱橫、古禪僧の風格あり、趣味として園芸、生花あり、又堪能なるが如し、現に群馬縣新田



郡太田町に住し、電話太田八番なり。

### 林 市 藏 君

從四位勳四等  
日本信託銀行頭取

曾つては官界にありて隨所に令名を馳せ、一度野に下り實業界に投するや、其の才幹を縦横に揮つて聲名ある君は、熊本縣の人林慎藏君の長男にして明治三年十一月を以つて生る。

夙に郷校を卒ふるや青雲の志を抱いて東上し、明治二十九年東京帝國大學法科大學政治科を卒業し官界に投じて警察監獄學校教授兼内務省參事官、新潟縣事務官、山口縣知事、大阪府知事等を歴任し後ち官を辭して野に下り實業界に入りて君が奇才を發揮し、現に日本信託銀行頭取として關西財界に知らる。

夫人をしげ子と呼び靜岡縣の人市河彦三君の令妹にして其の間に四男四女ありて太郎君、英三郎君、藤郎君、達郎君及び喜恵子、みゑ子、千恵子、多恵子等なり

り、現に大阪市東區北濱町二丁目一番地に住す。

### 土 生 彰 君

福井新聞主筆  
衆議院議員

顧みるに苦節十年、愈々我が憲政の爲め其の晩年を捧げんと、敢然起つて立候補を宣するや、其の徳望と博學に私淑せる縣民は一齊に起つて義侠的運動を開始し、遂に本黨の猛者連を向ふに廻して見事に打ち破り、今や縣下憲政派の大立物として令名あるを我が土生彰君となす。

君は福井縣の人士生忠君の長男にして元治元年二月二十二日を以つて生る。夙に學に厚く、郷里の私塾を卒ふるや更に京都に出で、石津灌園師の家塾に入り、國史國文漢學等を學び、其の造詣を深くして歸郷す。

爾來常に公共の爲めに盡瘁して自己を顧みず、尙ほ縣下後進を導く懇切なりしかば君を見ること慈父の如く、君を敬す

る聖人の如く、曾つては縣會議員として縣政に參與し、今や福井新聞の主筆として君が靈筆を縦横に揮つて社會教化、民衆啓蒙に盡瘁すること甚大、尙ほ衆議院議員として國政に參與する……君の得意や思ふべし、趣味に詩歌、俳句あり又堪能なりといふ。

君に二男四女ありて長男秀穂君は東京帝國大學文科大學を優秀の成績を以つて卒業するや、直ちに福島高等商業學校教授に任ぜられ、後ち文部省より獨逸に留學を命ぜられ、斯學の研鑽を積みて大正十五年二月歸朝し、現に同校教授として知らる。

又二男滋穂君も同じく東大法科を出でて教育界に投じ、高岡高等商業學校教授に任ぜられ、後ち文部省より獨逸に留學を命ぜられ、昭和二年三月歸朝し現に同校新進教授として前途を嚆望せらる、現に福井縣南條郡武生町浪花一七番地に住し電話四六六番なり。

### 林 頼 三 郎 君

法學博士 從四位勳三等

君は舊武州忍藩の儒者三輪禮三君の四男にして明治十年九月を以つて生れ、同三十七年林有章君の養嗣子となる。明治三十年七月中央大學の前身たる東京法學院を卒業し、直ちに判檢事及び辯護士登用試験に應じて首尾よく登第せり。

然して職を官界に奉じ司法官試補に任ぜられ水戸區裁判所詰となり、同三十二年判事に任ぜられ、爾來東京區裁判所判事、宮城控訴院判事、仙臺地方裁判所部長、宮城控訴院部長、東京控訴院判事等を歴任し、明治四十四年十一月檢事に任じ後ち大審院檢事に轉ず。

大正五年十二月高等官二等に叙せられ同八年文官高等試験委員（後同委員たること三回）同年六月司法省刑事局長に進み、同年八月馬政委員會委員を兼ね翌月高等官一等に陞叙せらる。

大正十一年清浦内閣の成立を見るや司法次官に榮進し尋いで加藤内閣成るや司

法事務次官に任じ、昭和二年五月辭して野に下る。

現に東京市牛込區加賀町二ノ九番地に住し電話牛込一四五番たり。

### 橋 本 捨 次 郎 君

松山高等學校長

從四位勳四等橋本捨次郎君は近江國は高島郡今津村の産、明治六年十二月二日を以つて生る。明治二十三年滋賀縣立中學校を卒業するや、第三高等中學校に入り明治三十一年東京帝國大學文科大學史學科を卒業す。

然して教育界に志し明治三十二年石川縣立第一中學校教諭に任じ、同三十三年四月山口縣岩國中學校長に榮任し、更に同三十九年新瀉縣立長岡中學校長に轉動し、明治四十一年五月第八高等學校教授に任じ、同生徒監に補せられ大正九年學習院教授及學生監を兼任せしも、大正十四年四月松山高等學校長に擧げられ以つて現在に及ぶ。

### 林 平 造 君

大和索道株式會社社長

君は奈良縣の人林榮次郎君の令甥にして明治十九年六月を以つて生れ、先代平造君の養嗣子となり前名徳太郎を改稱す夙に實業界に投じ現に大和索道株式會社社長たる外日本藥産、彌宜鑛業、吉野銀行、大和電氣各株式會社の取締役に任じ尙ほ奈良縣多額納税者たり。

夫人壽子は兵庫縣の人米井藤吉君の長女にして君との間に平太郎君及び春子等あり、奈良縣宇智郡五條町に現住す。

### 濱 崎 照 道 君

東印度貿易株式會社社長

君は東京府の人小林照朗君の令弟にして明治十二年十二月を以つて生れ、後ち大阪府の人濱崎健吉君の養弟となる。夙に京都帝國大學法科大學を卒業するや、直ちに實業界に投じ現に東印度貿易株式會社社長たる傍ら南洋護謨拓殖、朝日鑛業各株式會社の取締役及び阪神急行電鐵

株式會社の監査役にして、尙ほ大阪島米穀取引所理事として大阪財界に重きをなす。

夫人エキ子は養父永三郎君の三女にして其の間に初男君、照三君、三郎君、大助君、真一君の諸子あり、現に大阪市北區堂島船大工町三〇番地に住し電話北六七九番なり。

### 濱田 彪君

三菱造船株式會社取締役會長  
三菱内燃機株式會社取締役

勳六等實業家濱田彪君は長崎縣士族一瀬信造君の二男にして、明治三年十一月を以つて生れ、明治二十四年先代サヨ子の養嗣子となる。

夙に郷校を卒ふるや大志を抱き笈を負ふて東上し、明治二十四年東京高等工業學校機械科を優秀の成績を以つて卒業するや、直ちに實業界に投じ三菱會社の聘に應じて入社し、爾來長崎造船所機械工場支配人、同電氣主任技師、同副長、同

所長等を歴任せり。

然して後ち造船業視察の爲め歐米に出張すること前後二回、現に三菱造船株式會社取締役會長たる外三菱内燃機株式會社取締役理事として知らる。

現に東京市麴町區富士見町二ノ三九番地に住し電話九段八二七番なり。

### 林 雅之助君

伯爵 從四位

當家は先代黨君より其の家名を擧ぐ、黨君は舊幕臣林洞海君の三男にして夙に外務省に出仕し爾來特命全權公使、外務次官、特命全權大使、外務大臣等を歴任し、日清戰役の勳功により男爵を授けられ且つ日英、日佛、日露各協商の功により特に伯爵に陞叙せらる。

君は即ち黨君の長男にして明治十年四月を以つて生れ大正二年襲爵仰せ付けらる、現に東洋織布株式會社取締役たり。神奈川縣三浦郡葉山堀内四八一番地に現住す。

### 花井 卓藏君

法學博士 勳三等 辯護士  
貴族院議員

君は廣島縣士族立原四郎右衛門君の五男にして、明治元年六月十二日を以つて生れ、後ち分れて一家を創立し花井姓を稱す。

年齒僅かに十歳にして東都に遊び、漢學を修め十八歳にして東京英語學校及英吉利法律學校を卒業し、次いで中央大學の前身たる東京法學院高等科を卒業し、廿歳にして辯護士試験に登第し直ちに法律事務所を開設す、爾來三十有五年刑事辯護の第一人者として天下に其の名を謳はれ本邦法曹界の泰斗たり。

曾つて東京辯護士會々長、日本辯護士協會評議員兼編輯主事、法理精華法學新報主事、中央大學教授、法律取調委員、臨時法制審議會委員等各種の要職に就き、教育界に法曹界に或は立法上に其の功績尠からず、尙ほ明治三十年以來廣島縣郡部より衆議院議員に選出せらる、事數回

其の間衆議院副議長に擧げらる。

大正十年貴族院議員に勅選せられ議政府に列し以つて現在に及ぶ、夫人ひさ子は鈴木耐介君の令妹たり、現に東京市神田區錦町一ノ二番地に住し電話神田八八〇番二八五二番なり。

### 橋本 長俊君

子爵 從四位勳六等

當家は先代網常君より顯はる、網常君は夙に外國に航し伯林大學に學び、歸朝するや官界に身を投じ、明治十八年陸軍々醫總監に昇進す、其の間陸軍々醫本部長、東京養育醫院長、陸軍省醫務局長等を歴任し、明治二十八年男爵を授けられ更に同四十年子爵に昇陸す。

君は網常君の三男にして明治十五年三月を以つて生れ、同四十二年襲爵仰せ付けらる。夙に陸軍に志し明治三十五年陸軍士官學校を卒業し累進して騎兵中尉に陞る、曾つて軍政研究の爲め佛國に留學せしことあり、現に帝國桐華株式會社々

長として財界に活躍す。

夫人ツム子は東京府の人後藤恕作君の二女にして、東京女學館を卒業し其の間に長久君、長正君、長紀君及び俊子、節子等あり、現に東京府下澁谷町下澁谷廣尾町二九番地に住す。

### 原 邦造君

第百銀行頭取

愛國生命保險株式會社社長

本邦財界の巨星として聲名斯界に高き原六郎君の第二世原邦造君も又父君の名を辱しめざる我が財界の一異彩たるを失はざるべく、今や新興日本財界の明星を以つて目せらる。

君は大阪府の人田中慶造君の令弟にして、明治十六年六月を以つて大阪府三島郡茨木町に生れ、同四十三年原六郎君の養嗣子となる。夙に第三高等學校を経て京都帝國大學に學び、明治四十年同法科大學を優秀の成績を以つて卒業するや直ちに實業界に投ず。

斯くて滿洲鐵道株式會社に入社し、在任中即ち明治四十二年文官高等試験に應じて首尾よく登第す、爾來引き續き財界に活躍して多數の事業會社に關係し、現に前記諸職にある外東京貯藏銀行頭取、高砂商工銀行、橫濱船渠、東武鐵道、明治電氣、熱帶産業、明治製糖、三井生命各株式會社の重役にして且つ日進銀行相談役、日本貿易協合理事等を勤め其の令名噴々たるものあり。

曩に三井生命の前身たる高砂生命保險株式會社創立せらるるや、君推されて之が取締役社長に任じ爾來經營の衝に當つて献身的努力を提げ社務を執掌せし結果社運逐次舉り、三井生命保險會社の今日ある君の力與つて大なりといふべし。

君や機才縱橫其の明快なる決裁力や實に新進實業家として、斯界に重きを爲す又故なきにあらざるべく、而も資性謹直拔群の英才は、應て原六郎君の認むるところとなり、遂に同君の懇請に依りて同家の養嗣子となる、蓋し原家好繼嗣を

得たりと謂ふべきなり、君未だ春秋に富めり、新興日本財界に貢献する又疑ひなかるべし。

趣味多様なるも就中書畫、骨董を愛好し、和歌、俳句、謠曲、撞球、圍碁、將棋等に堪能なるが如し、夫人多幾子は養父六郎君の二女たり、現に東京市外北品川宿御殿山三三五番地に住し電話高輪五四八番なり。

### 林 郁彦君

醫學博士 正五位勳四等  
長崎醫科大學長

君は明治十二年三月を以つて山口縣阿武郡萩町に生る。夙に郷校を卒ふるや明治三十一年山口高等學校に入學し、同三十四年七月同校を卒業し、更に同年九月京都帝國大學醫科大學に入り、同三十八年十一月卒業す。

然して翌年一月京都帝國大學醫科大學副手を囑託せられ、同年九月同醫科大學助手を命ぜられ居ること二ヶ年三ヶ月、

明治四十一年十一月長崎醫學專門學校教授に任せられ、大正三年八月病理學研究の爲め獨逸へ留學を命ぜられ、研鑽すること年餘にして歸朝し、大正五年十一月醫學博士の學位を授けらる。

大正六年十二月長崎醫學專門學校生徒監に補せられ、同十二年四月長崎醫科大學附屬醫學專門部教授に任せられ、更に同十四年七月長崎醫科大學長兼同大學教授を命ぜられ以つて今日に至る。

### 八 田 淵君

山東産業株式會社社長

君は東京府士族八田嘉明君の令弟にして、明治十七年九月二十三日を以つて福岡縣大牟田町に生る。夙に笈を負ふて東上し、東京私立開成中學校に學び同校を卒業するや、第六高等學校を経て東京帝國大學法科大學獨法科に入學し、大正二年卒業するや身を實業界に投ず。

斯くて渡邊治右衛門君の總裁する渡邊保善社に入りて同社理事たりしが、後ち

### 橋本梅太郎君

淺野物産株式會社副社長  
東洋汽船株式會社取締役

淺野系の重鎮にして、且つ本邦代表的實業家として聲名あるを我が橋本梅太郎君となす、君は舊福岡藩士橋本往來君の長男にして、明治七年十二月を以つて福岡市養邊町に生る。

天資英明にして夙に福岡縣立中學校を卒業するや米國に航し、同地公共中學に入りて研鑽大いに努め、同校を出づるや更にジョージタウン大學に入りて政治經濟學を専攻し、明治三十四年優秀の成績を以つて卒業す。

爾後留ること數ヶ年、彼の地の經濟事情及び商況を視察し造詣を深くして明治三十六年歸朝し、直ちに紐育生命保險株式會社福岡支部長に就任せしも、日露戰役に際し同地支部の廢止と共に横濱支店に轉動し、後ちセントルイス博覽會日本出品部賣部主任として渡米し、事務終了と共にバルチモア市クロス、ツラス

トロに入りて縱横の才幹を振ひ、明治三十九年十二月辭して歸朝す。

然して城東電氣軌道株式會社の常務取締役、日本晝夜銀行專務取締役たりしが轉じて淺野系會社に入りて愈々其の利器を發揮して遂に樞機に參畫し後ち再び紐育に赴き淺野造船所並に東洋汽船株式會社を代表し、大正九年伊太利ゼノアに開催せられたる海員労働會議に參加し更に米國に在りしが、たま／＼船鐵交換の議ありしかば君推されて日本船主の代表者となり、米國ワシントン政廳に交渉し大いに其の穎才を揮ひ熱誠以つて重大なる實務を全うし、我が海運界の爲め有利な

る解決を見るに至る。

歸朝後は淺野同族株式會社理事、神奈川コークス、内外石油、淺野造船所、東洋草薺各株式會社の重役たりしが、現に前記の外小倉鐵道株式會社の重役として知らる。

夫人をよめ子と稱し君との間に夏雄君及びゆき子、はる子等あり、現に東京市赤坂區表町四ノ一番地に住し電話青山六五九九番なり。

### 八 田 宗 吉君

正七位勳四等 豫備陸軍大尉  
衆議院議員

彼の猪苗代湖の水を利用して灌漑事業に盡瘁し、土地の恩人として崇敬せられし八田吉多君の長男にして、同じく其の遺志を繼ぎて農村振興に力を盡して令名あるを我が八田宗吉君となす。

君は明治七年十月九日を以つて福島縣河沼郡日橋村八田に生る。夙に福島縣立中學校を卒業するや、直ちに一年志願兵

として入營し、偶々日清兩國の開戦勃發するや君從軍して功を立て、後ち上京して、農政學を専攻して歸郷し専心地方産業開發の爲めに盡瘁し、明治三十七八年日露の役には滿洲の野に轉戦して偉功を立てぬ。

君は常に農村振興に心を砕き、現に帝國農會議員、同評議員にして且つ福島縣農會議員、同評議員たる外二十年以來の日橋村長として盡瘁する等君が地方開發公共事業に貢献すること枚擧に遑あらず曾つては縣會議員として郡制に參與し、今また多數縣民の輿望を擔つて衆議院議員に當選し中央政界に令名あり。

君尙ほ地方に於ける農家として其の改善發達に盡瘁するのみならず、更に各種事業會社に關係し、現に日本化學工業、會津水力電氣各株式會社取締役にして且つ福島縣農工銀行監査役として地方財界の一勢力たるを失はざるべし。

夫人せい子は福島縣士族渡邊行藏君の長女にして仙臺尚綱高等女學校を卒業し

君との間に二男五女ありて武君、貞義君及び喜久子、政子、寛子、安子、明子と呼ぶ、現に福島縣河沼郡日橋村八田一番地に住し電話廣田八番なり。

### 原 夫次郎君

衆議院議員

君は明治八年六月を以つて出雲の國簸川郡檜山村に生る。幼にして穎悟長するに及んで學を好み、特に法律家たらんと志し、即ち上京して和佛法律學校に入り卒業後佛國グルノーブル大學に學び、優秀の成績を以つて卒業し、法學博士の學位を受け、後ち巴里法科大學院を卒業して歸朝す。

然して辯護士たりしが感ずる所ありて辯護士稼業を廢し、官界に入りて廣島地方裁判所判事となり、爾來東京地方裁判所檢事、東京控訴院檢事、法制局參事官司法省參事官、司法大臣秘書官等を歴任して内閣總理大臣秘書官に任ぜられ、傍ら警察官練習所、司獄官練習所及び大學

の各講師となり、會つて衆議院議員に當選すること前後七回、現に其の任にありて我が政界に令名あり。

夫人をカナ子と呼び鳥根縣の人保科昌三郎君の四女にして内助の聞え高し、現に東京市牛込區納戸町四〇番地に住し電話牛込二二七〇番なり。

### 華園 眞淳君

男爵 正五位

眞宗興正寺派管長

當家は我が國眞宗の開祖親鸞上人の後裔にして十一世を経て經豪に至る、經豪日蓮上人と協力して法道の爲めに盡し、夫より十一世を経て攝信君に至る。

攝信君は戌辰の役に際し末寺の僧侶を率ひて王事に勤め、其の功に依りて明治五年三月華族に列し男爵を授けらる。君は其の第六子澤稱君の二男にして明治十七年八月を以つて生れ、前名應稱を改稱し大正元年襲爵仰せ付けらる。明治四十五年京都帝國大學文科大學史

學科を卒業し、現に眞興正寺派管長たり家族は令兄演澄君、令弟信由君、眞巖君稱淳君等あり、京都市下京區醒ヶ井通七條上ル華園町一番地に現住す。

### 橋本 喜造君

橋本汽船株式會社社長

長崎新聞社長 衆議院議員

君は大分縣の人橋本半平君の二男にして、明治五年十月を以つて大分縣中津に生る。夙に長崎商業學校及び外國語學校等を卒業し、更に海外に遊學すること數年、切磋琢磨、造詣を深くして歸朝するや直ちに實業界に志して船舶業を營み、偶々彼の歐洲大戰亂勃發に際し、所有船價の暴騰により一躍巨萬の富を蓄積す。

現に港灣協會理事、日本船主協會理事長崎縣社會事業協會評議員、長崎新聞社長、橋本汽船、佐賀紡績、大阪堂島ビルヂング、日本タイプライター各株式會社々長にして且つ國際汽船株式會社其他諸會社の重役として知らる。

曩に綠綬褒章を下賜せられ、尙ほ佐世保市會議員、長崎縣會議員たりしが、現に衆議院議員にして憲政會に屬し同黨總務たり。

夫人ツル子は長崎縣の人森次吉君の長女にして其の間に喜久雄君、喜雄君及びキミ子、喜勢子、絹子等あり、現に東京市芝區二本榎町二ノ二五番地に住し電話高輪三〇七番なり。

### 橋本 萬右衛門君

郡山橋本銀行頭取

郡山電氣株式會社社長

君は福島縣の人橋本清右衛門君の長男にして、慶應二年六月を以つて生る。當家は先代よりの綿絲商にして地方財界に其の名高し。

現に前記銀行の頭取たる外郡山電氣、只見川水力電氣、双葉電力、川前電氣、郡山電氣工業、郡山紡績、郡山土地建物、郡山製紙各株式會社々長にして且つ郡山銀行、二本松銀行、仙南電氣工業、四倉

電氣、東洋曹達各株式會社取締役及び橋本合名會社代表社員、閑成社代表社員、本宮肥料株式會社相談役として知らる。

夫人モト子は同縣の人永倉左衛門君の長女にして君との間に鐵吉君、清治郎君貞治君、篤四郎君、菊壽君、捷六郎君、晋七郎君、淳吉君及びミチ子、キヨ子等あり、現に福島縣郡山町に住す。

### 畑 仙齡君

畫家

君は本名を經長、學字を子益、別號を萬象堂主人又は半象外史と稱す。禁裏北面の侍肥前守畑綱之君の長男にして、元治元年四月十五日を以つて京都に生る。

幼にして畫を好み鈴木百年師に就きて丹青の道を學び、明治十七年始めて官設繪畫共進會に出品して其の作品賞に入り同二十三年師に從つて上京し、日本畫會を起して其の幹事となり、後ち聘せられて富山美術學校教頭に任じ、學徒の指導誘掖に努めしが、明治三十九年職を辭し

て東上し帝國繪畫協會、日本美術協會等の各委員に推さる。

會つて巴里大博覽會に出品して二等賞を得たる外公私展覽會及び博覽會に出品して賞を受くる事數回、長くも 明治大正兩大帝 御前揮毫の光榮に浴する事數次、就中 大正天皇 御用命の奉作中「陶弘景」金屏風六曲一雙は叙感斜ならざりきと漏れ承はる、明治四十四年南北支那に漫遊して南宗畫を研究し爾來南北合派の一家をなす。

現に日本美術協會委員、日本畫會幹事同審査員たり、夫人やす子は東京府の人村上光保君の長女たり、現に東京市麴町區麴町一丁目一番地に住し電話四谷五一〇三番なり。

### 早瀬 太郎三郎君

九州石炭鑛業株式會社監査役

東北興業株式會社取締役

君は大阪府の人早瀬太郎三郎君の長男にして、明治十七年三月を以つて生れ前